

### 3 出土遺物

狹山池2号窯灰原から出土した遺物の総量は、コンテナ約70箱分である。本項では実測が可能であった遺物をすべて掲載した。以下、各灰原層ごとに出土した須恵器の概要を述べる。なお個別の遺物観察結果については表16～表19の遺物観察表を参照されたい。

#### ①上層灰原出土遺物（図196、図版88、表16）

上層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約19箱分であるが、そのほとんどが細片であるため、図化できるものは非常に少ない。図化した遺物の器種別の個体数は以下の通り。

杯H身4点・杯H蓋7点・高杯2点・壺蓋1点

杯H身の口径平均値は12.7cm、杯H蓋の口径平均値は14.6cmである。杯H身の法量は、図312のような数値分布を示している。杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図315のような数値分布を示している。

高杯はいずれも脚部のみが残存し、13は脚部中位以上を欠損しているようであり、2段3方向に長方形スカシを有している。14はおそらく破断面の直上で杯部に接合するようで、3方向に長方形スカシを有している。

#### ②中層灰原出土遺物（図196～198、図版87～88、表17）

中層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約21箱分である。図化を行った器種別の個体数は以下の通り。

杯H身14点・杯H蓋11点・壺蓋1点・短頸壺2点・高杯1点・短頸壺2点・提瓶1点・壺5点

杯H身の口径平均値は12.2cm、杯H蓋の口径平均値は13.7cmである。杯H身の法量は、図312のような数値分布を示している。杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図315のような数値分

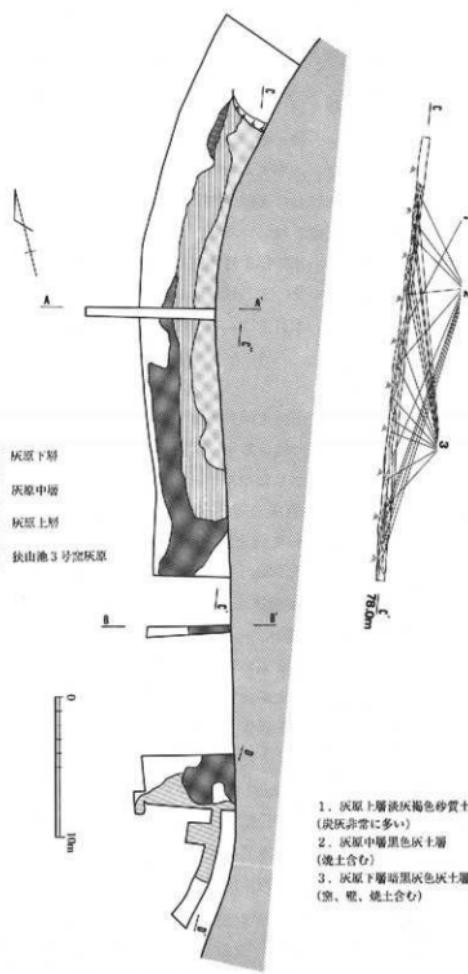


図194 狹山池2号窯灰原平面断面図 (S=1/300)

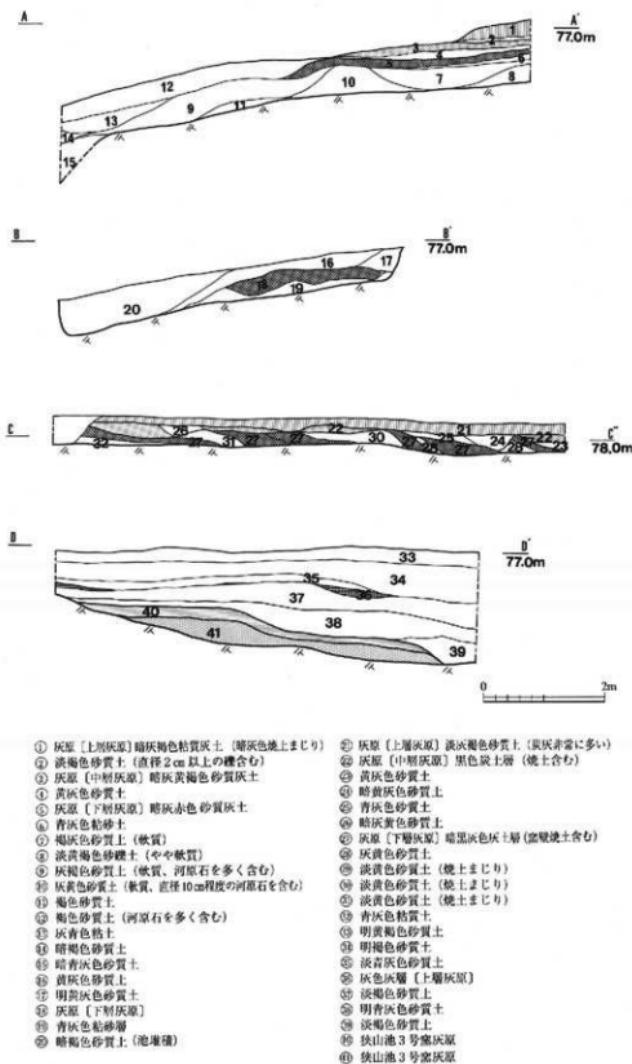


図 195 狹山池 2 号窓灰原土層断面図 (S=1/80)

布を示している。

高杯15は脚部中位以上を欠損しているが、2段3方向に長方形スカシを有するものと思われる。

短頸壺44の体部最大径は16.0cmを計測する。

口頸部が大型の壺82・83は、頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの79・80・81の頸部外面は無文である。

③下層灰原出土遺物(図198~202、図版87~89、表18)

下層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約30箱分である。図化をした器種別の個体数は以下の通り。

杯H身13点・杯H蓋11点・高杯蓋3点・高杯1点・壺1点・壺11点

杯H身の口径平均値は12.2cm、杯H蓋の口径平均値は14.1cmである。杯H身の法量は、図312のような数値分布を示す。杯H身のたちあがり高、たちあがり角度は、図315のような数値分布を示す。

高杯蓋は、69・70が天井部と体部の境界に凹線をめぐらすが、71には凹線はない。3点とも天井部外面中央に、中央部が凹む扁平なつまみを付している。

壺72は口頸部のみの残存で、口径10.0cmを測る。

口頸部が大型の壺85・87・88は、頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの84・86・89・90・91・92・93・94の頸部外面は無文である。

④灰原表面採集遺物出土遺物(図199、図版89、表19)

2号窯の灰原は、ある時期に上層灰原・中層灰原・下層灰原が雑堆状に露出していたものと考えられる。このため、表面採集された須恵器は、各灰原層のものを含んでいる。

表面採集資料として掲載した須恵器は、杯H身3点・杯H蓋2点である。

#### 4 小 結

狭山池2号窯の灰原各層から出土した須恵器には、層の違いにおける型式差は確認できなかった。3章の考察で述べているように、杯H身の法量はTK43集中域においてTG10-I集中域寄りに偏向した分布を示しており、そのたちあがり角度はTK43号窯の杯H身よりも内傾した数値分布を示す。これらのことから、本窯の須恵器の型式はTK209型式の範疇に含まれると考えられる。

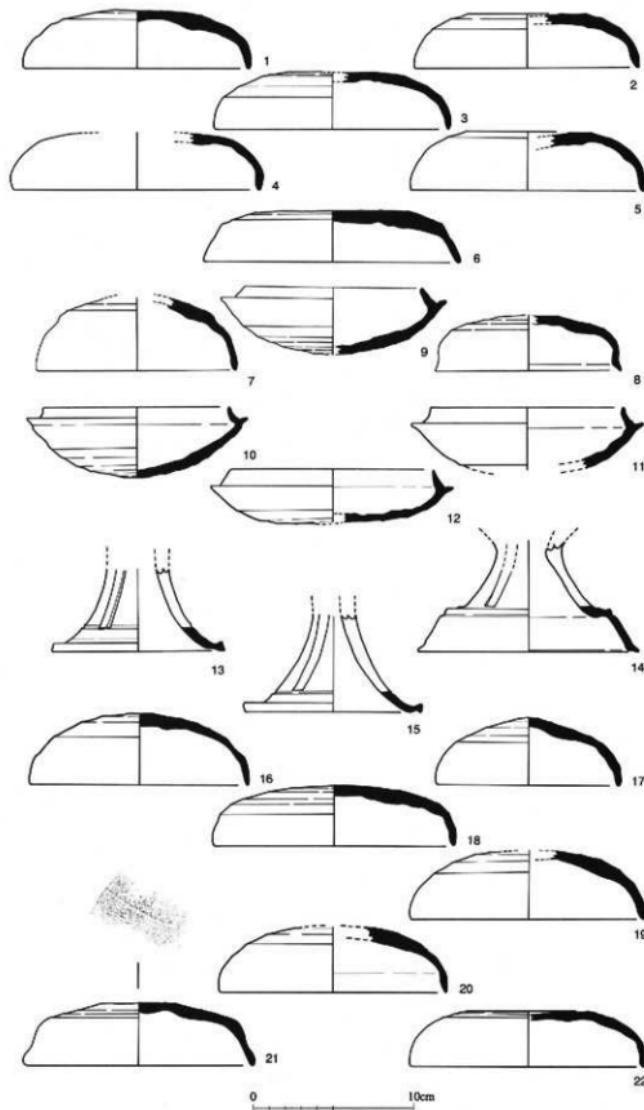


図 196 狹山池 2 号窯灰原出土物 (I) (1~14 : 上層灰原、15~22 : 中層灰原)

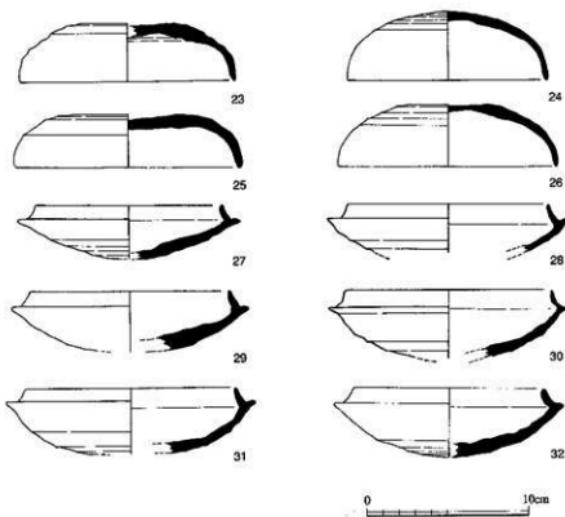


図197 狹山池2号窯灰原出土遺物(2)(23~32:中窯灰原)

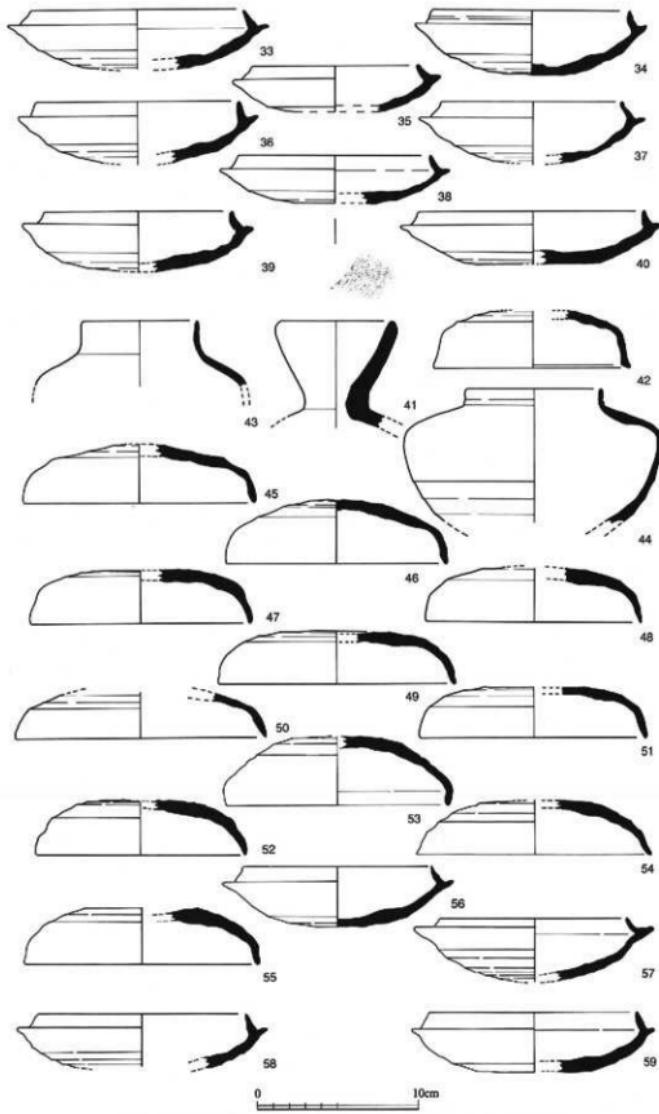


図198 狹山池2号窯灰原出土遺物 ③(33~44:中焼灰原、45~59:下焼灰原)

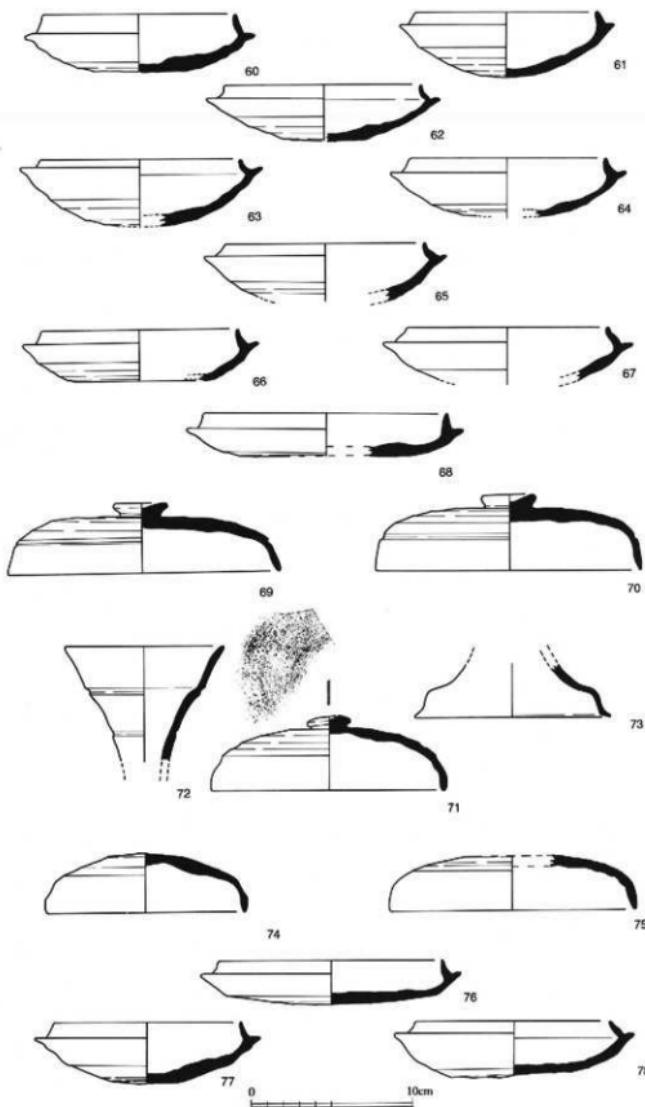
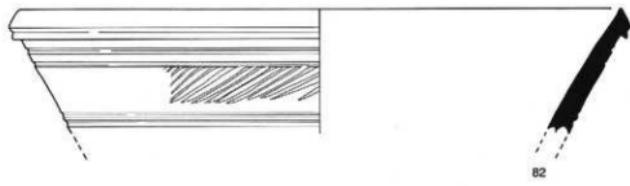
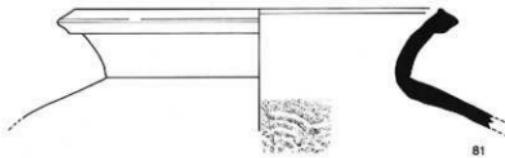
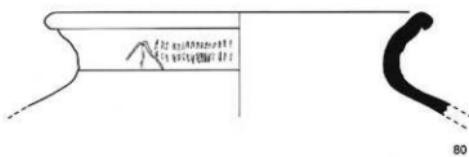
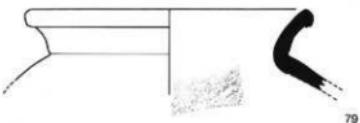
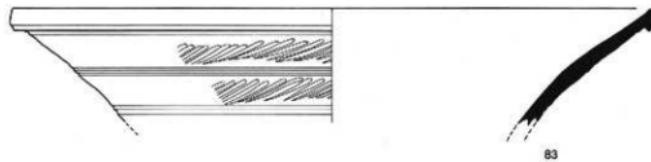


図199 狹山池2号窯灰原出土遺物(4)(60~73:下層灰原、74~78:表面採集)



0 10cm



0 10cm

図 200 狹山池 2 号窯灰原出土遺物 (5) (中層灰原)

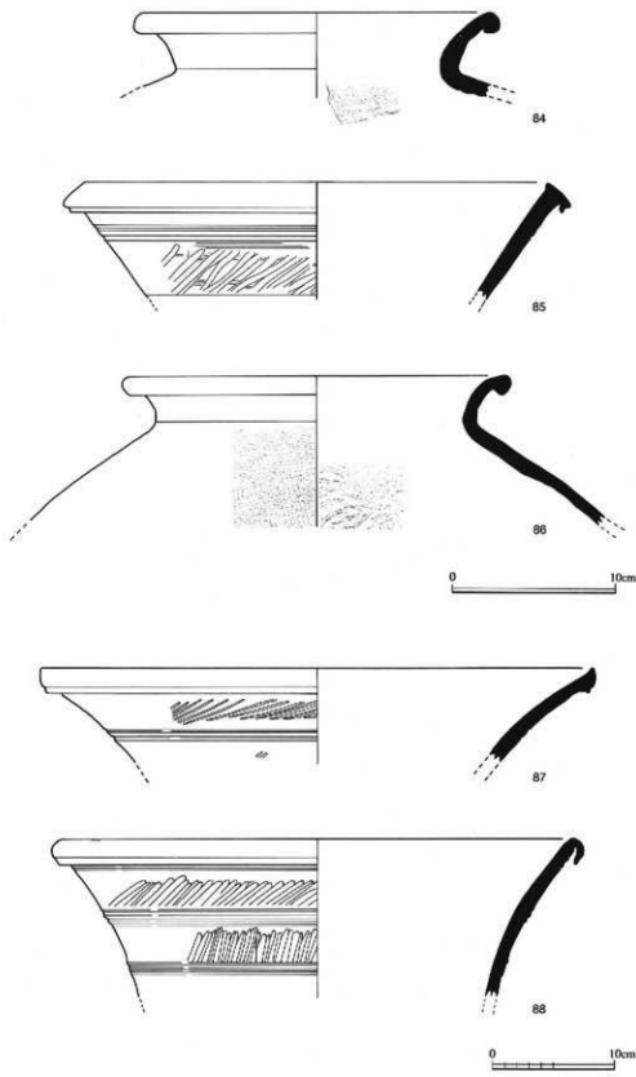


図 201 狹山池 2 号窯灰原出土遺物 (6) (下層灰原)

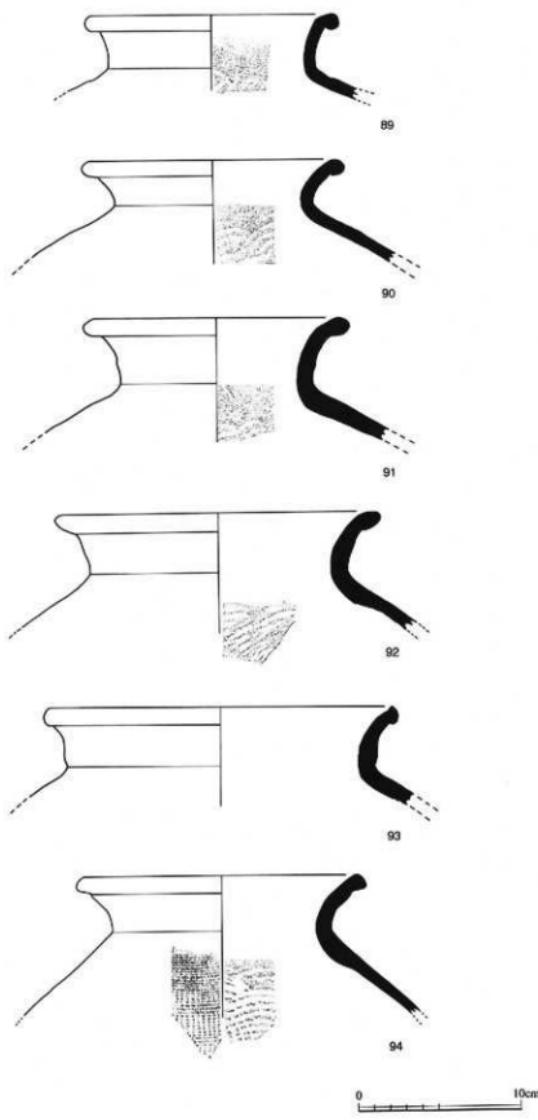


図 202 狸山池 2 号窯灰原出土遺物 (7) (下層灰原)

表 16 狩山池 2 号窓上構成原州上造物観察表

(丁はたちあがりを示す)

器種	表面 模様	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長 蓋	196- 1	口徑14.0 残存高3.5	体部・口縫部はやや下方に下り、端部は丸くおさめる。犬井部は底くややしい。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井部外面2/回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：淡灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
	196- 2	口徑13.8 高さ3.4	体部・口縫部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	196- 3	口徑14.5 高さ3.6	体部・口縫部は内側して下方方に下ったもの、下方に下り、端部は丸くおさめる。犬井部は底く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰青色。外一淡灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	196- 4	口徑15.4 残存高3.6	体部は下方方に下り、口縫部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部は底く半らに近い。犬井部に尖欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井部外面不明。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色。外一淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	196- 5	口徑15.8 高さ3.7	体部・口縫部は下方方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	196- 6	口徑15.8 高さ3.2	体部・口縫部は下方方に直進的に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
長 蓋	196- 7	口徑12.6 残存高4.5	体部口縫部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。犬井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。
合 蓋	196- 8	口徑11.6 高さ3.6	体部・口縫部は内側して下ったもの外反する。端部は内傾する半面を成す。天井部は底く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面6/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
杯 身	196- 9	口徑11.0 受部高14.0 残存高4.3 T 高9.0 T 角度42°30'	たちあがりは内側してのび、端部は丸くおさめる。受部は下方方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面6/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。
	196- 10	口徑11.5 受部高13.8 残存高4.4 T 高9.8 T 角度39°30'	たちあがりは内側したのち、中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は下方方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で底を成す。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面6/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。1~2mmの長石・石英を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
杯 身	196- 11	口徑12.0 受部高14.6 残存高3.8 T 高1.1 T 角度30°45'	たちあがりは内側したのち、端部付近で直立し、端部は丸くおさめる。受部は下方方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でやや深く、底体部はやや浅い。底部火焔。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面6/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
	196- 12	口徑12.8 受部高15.2 残存高3.2 T 高1.1 T 角度33°30'	たちあがりは内側してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は下方方にのびて端部はやや丸くおさめる。たちあがり基部前面で非常に深い底を成す。底体部は浅く、底体部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体部外面6/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一灰青色、外一灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。合軌復元。底体部外面に底突片接着。底体部外面火焔。
高 脚 脚部	196- 13	脚底径10.6 残存高5.2	脚部上方欠損。脚部は下方方に開いて下る。脚部上面はやや内傾する凹面を成して接地。脚部上方に1枚の洗継をめぐらす。2段3方向に方形スカシを打てると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。脚部上面6/6回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	196- 14	脚底径13.8 残存高6.9	脚部上方欠損。脚部は下方方に開いており、脚部上方で段を作成して内側をめぐらし、下方方に下り傾斜付近でやや外反して外下方に下る。脚部上面は内傾する凹面を成して外側で接地する。3方向に方形スカシを育する。	マキアゲ・ミズビキ成形。脚部上面6/6回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：脚部の1/2。反転復元。

\*たちあがり角度は、たちあがり基部外側を中心に前後方向を基としてたちあがり基部外側と口縫端部を前とした内傾までの角度を測定したもの。

表 17 狩山池 2 号窯中層灰原出土遺物観察表

(Tはたあがりを示す)

器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	196-15	口径11.0 残存高6.1	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外方に傾いて下り、端部は外側する平面を成して接地し、底面内面でも一部侵食する。脚部上方に1条の沈線めぐらす。2段3方向に長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一淡灰青色。胎土：密。焼成：良好、堅硬。残存：1/4。反転復元。
高杯	196-16 85-16	口径13.5 器高4.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰色、外一灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。内面：口縁部内面灰青色あり。
高蓋	196-17	LH径11.4 器高4.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
高蓋	196-18	LH径15.0 器高3.7	体部は下外方に下り、口縁部は直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面7/9回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
高蓋	196-19 68-19	口径14.4 残存高4.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰褐色、外一淡灰青色。胎土：密。2mm以下の石英を含む。焼成：良好。残存：1/3。
高蓋	196-20	口径14.2 残存高4.1	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰黄色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。チャコを若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
高蓋	196-21	口径14.2 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面8/9回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。天井部外面に“二”あり。
高蓋	196-22	口径14.4 器高3.5	体部・口縁部は内傾して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く半平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰青色。胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好、堅硬。残存：1/4。反転復元。
高蓋	197-23 87-23	口径13.6 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下ったのち下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
高蓋	197-24	口径12.6 器高4.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。
高蓋	197-25	口径13.8 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下ったのち端部附近で下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面9/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
高蓋	197-26	口径13.5 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下ったのち端部附近で直進する。端部はやや低い。天井部はやや高く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面9/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
身	197-27	口径11.6 受部径13.8 器高3.4 T 高0.9 T 角度30°45'	たちあがりは内傾したのち端部附近ではほぼ直立する。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのり、端部は丸くおさめる。底体部は低く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面9/11回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
身	197-28	口径12.6 受部径15.3 器高3.0 T 高1.0 T 角度33°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのり、端部は丸くおさめる。底体部はやや低い。底体部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
身	197-29	口径12.4 受部径14.8 器高3.7 T 高1.0 T 角度32°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのり、端部は丸くおさめる。底体部はやや低い。底体部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
身	197-30	D1611.0 受部径13.2 器高4.2 T 高1.1 T 角度35°00'	たちあがりは直立したのち中位ではほぼ直立する。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのり、端部はやや低い。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。

杯 身	197- 31	口径13.0 受部径15.5 残存高4.2 T高1.0 T角度35°15'	たちあがりは内傾したのも、端部付近で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。焼成:良好。
	197- 32	口径11.8 受部径14.2 残存高4.4 T高1.0 T角度35°00'	たちあがりは内傾したのも上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はねはね太平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。焼成:良好。
	87- 32	口径11.8 受部径14.2 残存高4.4 T高1.0 T角度35°00'	たちあがりは内傾したのも上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はねはね太平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。焼成:良好。
	198- 33	口径18.2 受部径16.5 残存高3.7 T高1.0 T角度00°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は丸く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡褐色。胎土:密。1mmの長石をわずかに含む。焼成:やや不良。残存:1/4。反転復元。
杯 身	198- 34	口径12.2 受部径14.4 残存高1.1 T高1.0 T角度28°30'	たちあがりは内傾したのも、中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面同軸ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。4mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/6。反転復元。
	198- 35	口径11.5 受部径18.0 残存高2.9 T高0.7 T角度45°00'	たちあがりは内傾したのも、端部でやや太平にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや太平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。1mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/3。合模復元。
	198- 36	口径12.5 受部径14.7 残存高3.8 T高0.9 T角度25°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一端灰色、外一端灰青色。胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
	198- 37	口径11.2 受部径14.0 残存高3.8 T高1.0 T角度39°45'	たちあがりは内傾したのも、端部で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯 身	198- 38	口径12.0 受部径14.4 残存高3.0 T高0.9 T角度36°45'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1mmの長石をわずかに含む。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
	198- 39	口径11.6 受部径14.3 残存高3.7 T高1.0 T角度35°15'	たちあがりは内傾したのも、端部で直立し、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、その上位はやや凸出を成し、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一端灰青色、外一端灰青色。胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:2/3。一部反転復元。
	88- 39	口径11.6 受部径14.3 残存高3.7 T高1.0 T角度35°15'	たちあがりは内傾したのも、端部で直立し、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、その上位はやや凸出を成し、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一端灰青色、外一端灰青色。胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:2/3。一部反転復元。
	198- 40	口径13.9 受部径16.0 残存高3.3 T高0.8 T角度28°15'	たちあがりは内傾したのも、中位でほぼ直立し、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側8/8回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰色。胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
提 瓶	198 41	口径11.0 基部径4.2 残存高6.7	口縁部は上方にのびたのも、やや内側しながら太平にのび、その上位は丸くおさめる。肩部・体部・底部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1mmの長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
	198- 42	口径12.2 残存高3.6	体部はやや下方にのり、口縁部は外反し。端部は内傾する半面で底付し、外側で接地する。大尖部は低く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井外側4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
壺 蓋	198- 43	口径7.0 基部径7.8 残存高4.1	口縁部は基部から内傾して上方にのひたのも、中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。肩部は外下方に強く張り出す。体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:1mmの長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:口縁部・肩部の1/8。反転復元。
	198- 44	口径8.2 基部径8.6 体部最大径16.0 残存高8.2	口縁部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下方に下る。底部はド平を欠損。体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:1~2mmの長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/12。反転復元。内外面一部灰かぶり。
壺 蓋	200 79	口径17.2 基部径14.8 残存高5.2	口縁部はやや外擧して下方にのび、口縁部下で矧く外下方にのび、口縁部で内傾しながら上方にのび、上外方にのび、内上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	色調:内 口縁部は淡灰色、肩部は暗灰色、外一端灰褐色。肩部は暗灰色、肩部は灰色。胎土:密。焼成:良好。残存:口縁部・肩部の1/4。反転復元。外面に自然難付着。

発 芽	200- 80	口径22.8 基部径10.0 残存高5.8	口頭部は外側にして上方にのび、口盤部で短く下方にのび、口盤部で内側ながら上方にのび、内上方にのび、口盤部内面に至る。頭部は外方に下る。頭部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面タタキのち回転ナナ調整。頭部外面タタキ。頭部内面不明。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。施成：良。残存：口頭部1/2以下。反転復元。ヘラ記号：頭部外面向き。ロ頭部内面灰かぶり。ロ頭部外面向自然輪付着。
	200- 81	口径25.6 基部径16.8 残存高7.5	口頭部はやや外側にして上方にのび、口盤部は比較的下でほぼ水平にのびたもの。上方にのび、やや内上方に内側する平面を成す。端部は丸くおさめる。頭部は外下方に下る。頭部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。冒頭外面タタキ。頭部内面同心円タタキ。他は回転ナナ調整。	色調：内・淡灰色。外・淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：口頭部1/3。反転復元。ロ頭部内面灰かぶり。
	200- 82	口径37.4 残存高7.8	口頭部下半以下欠損。口頭部は上方にのび、口盤部で短く外方にのびたもの。凹面を成して上方にのび、上方に内側する平面を成す。端部は丸くおさめる。口盤部下方に2条、頭部中位に2条の縦めぐらし、その間に櫛状斜行沈文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。施成：良。残存：ロ頭部1/6以下。反転復元。ロ頭部内面灰かぶり。
発 芽	200- 83	口径52.4 残存高9.3	口頭部下方1/3以下欠損。口頭部は上方にのび、外方にのび、口盤部で短く外方にのびたもの。凹面を成して上方にのび、上方に内側する平面を成す。端部は丸くおさめる。口盤部下面に1条、頭部中位に2条、頭部下方1/3に2条の縦めぐらし、頭部上方1/3の沈線の上に櫛状斜行沈文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	色調：内・灰色。外・淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：ロ頭部の1/12以下。反転復元。
	198- 45	口径14.2 残存高3.7	体部・口盤部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・淡灰色。外・一灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/5。反転復元。
	198- 46	口径15.6 器高4.0	体部は下方に下り、口盤部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・淡灰色。外・一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	198- 47	口径13.5 器高3.4	体部・口盤部はやや内側して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・淡灰色。外・一灰褐色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。反転復元。
	198- 48	口径13.2 残存高3.4	体部・口盤部は下方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・淡灰色。外・一灰褐色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。反転復元。
	198- 49	口径14.8 器高3.3	体部は下方に下り、口盤部はやや外にする。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・淡灰色。外・一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/6。反転復元。
杯 蓋	198- 50	口径15.6 残存高2.8	体部・口盤部は下方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。施成：良好。残存：1/8。反転復元。
	198- 51	口径13.8 器高3.2	体部・口盤部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・灰褐色。外・明灰青色。胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。反転復元。
	198- 52	口径13.2 器高3.5	体部・口盤部は下方に下ったもの。下方に下る。端部はやや尖り、天井部はやや低く半丸に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。施成：良好。
杯 蓋	198- 53	口径13.8 器高4.4	体部・口盤部は下方に下ったもの。内側し、口盤端部は丸くおさめる。天井部は高く、やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。施成：良好。
	198- 54	口径14.5 器高3.5	体部・口盤部は下方に下ったもの。端部附近でやや下へ下る。口盤部は丸くおさめる。天井部はやや低く半丸に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。施成：良好。
	198- 55	口径14.4 器高3.5	体部・口盤部は下方に下ったもの。端部附近でやや下へ下る。口盤部は丸くおさめる。天井部はやや低く半丸に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。施成：良好。

表 18 狹山池 2 号窯下層原出上遺物観察表

(手はたちあがりを示す)

杯 身	198- 56	口径12.0 受部径14.6 器高3.7 T 高1.0 T 角度39°30'	たちあがりは内傾したもの、端部付近で上方にのび、端部は斜く。受部は外上方にのび、端部はやや深い。底体部はやや浅く、底体部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
	198- 57	口径11.6 受部径14.8 器高4.0 T 高0.7 T 角度43°30'	たちあがりは内傾したもの、やや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、やや浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/10回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
杯 身	198- 58	口径12.8 受部径15.5 器高3.4 T 高1.1 T 角度32°45'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部はやや深い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅い。底体部はやや深く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
	198- 59	口径10.8 受部径10.5 器高3.3 T 高1.1 T 角度30°30'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
杯 身	199- 60	口径12.0 受部径14.2 器高3.6 T 高1.2 T 角度23°45'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/7回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	199- 61	口径11.2 受部径13.2 器高4.1 T 高0.8 T 角度31°15'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底体部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/6回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	199- 62	口径12.2 受部径14.5 器高3.5 T 高0.9 T 角度31°45'	たちあがりは内傾したもの、中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、その上にはわずかに窓を成し、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面に凹段を作成す。底体部は深く、底体部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/7回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰色、外一暗灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	199- 63	口径12.4 受部径15.0 器高4.1 T 高0.8 T 角度43°15'	たちあがりは内傾したもの、中位で上方にのびた端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面に凹段を作成す。底体部はやや深く、底体部はやや浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/6回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	199- 64	口径12.0 受部径14.6 器高3.6 T 高0.9 T 角度30°00'	たちあがりは内傾したものの、端部付近で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底体部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	199- 65	口径12.4 受部径15.0 器高3.6 T 高0.8 T 角度44°30'	たちあがりは内傾したものの、端部上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅い。底体部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/6回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/4以下。反転復元。
杯 身	199- 66	口径12.0 受部径14.6 器高3.2 T 高0.8 T 角度32°00'	たちあがりは内傾して上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底体部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
	199- 67	口径12.4 受部径15.4 器高3.3 T 高1.1 T 角度38°45'	たちあがりは内傾しながら直立したのち、端部で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底体部は丸い。底体部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
杯 身	199- 68	口径15.0 受部径17.1 器高2.6 T 高1.0 T 角度20°00'	たちあがりは基部から直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/7回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	199- 69	口径16.8 つまみ径3.4 器高4.4 つまみ高0.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底に半らになり、天井部外面中央に、中央部が凹む部分をつまみ付す。天井部と体部の境界に凹縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
高 杯 蓋	199- 70	口径16.2 つまみ径3.4 器高4.9 つまみ高0.9	体部・口縁部はやや下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部前面に凹中央に、中央部が凹む部分をつまみ付す。天井部と体部の境界に凹縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1~3mmの長石を含む。1mmの石英を含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。
	199- 71	口径14.5 つまみ径2.6 器高4.7 つまみ高0.9	体部は下外方に下り、口縁部はねじ垂直に下る。端部は丸くおさめる。天井部外側面中央に、中央部が凹む部分をつまみ付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/8回転へラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一淡灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：天井部外側面に「-」あり。

	199- 72	口径10.0 残存高7.2	頭部はやや外側しながら上外方にのび、口縫部は上外方にのびたのも、端部でやや外反する。端部は丸くおさめる。頭部基部付近・肩部・体部・底部欠損。口縫部と頭部の境界に1条の沈線をめぐらし、頭部中央にも1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/4。反転復元。
頭	199- 73	脚底径12.2 残存高3.4	脚部は下外方に下ったのも、外下方に開き、下外方に下り、端部で外側する。端部はやや内傾する凹面を作成。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：脚部1/7以下。反転復元。
脚	201- 84	口径21.6 基部径17.5 残存高5.2	口縫部は外側して上外方にのび、口縫部下で頸く下方にのびたのも、ねばは水平にのび、口縫部で内傾しながら上方にのび、上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキ。肩部内面青海波タクキ。他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一頭部は灰褐色、肩部は灰色。外一頭部は灰褐色。口縫部・肩部は稍灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口縫部1/4。反転復元。口縫部・肩部外側自然剥付脊。口縫部内面灰かぶり。
頭	201- 85	口径28.8 残存高10.2	口縫部下半以下欠損。口縫部は上外方にのび、口縫部下で下方にのびたのも、上方に巻くのが、段を成したのもやや上外方に内傾してのびる。端部は丸くおさまる。口縫部下方に2条、頭部中央に1条以上の浅い沈線をめぐらし、その間に擦接き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頭部外面カキ日調査の一部回転ナデ調整。他の回転ナデ調整。	色調：灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口縫部1/8以下。反転復元。
脚	201- 86	口径23.4 基部径19.8 残存高9.4	口縫部は外側して上外方にのび、口縫部下で下外方にのびたのも、内傾して上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキのちカキ日調査。肩部内面青海波タクキ。他の回転ナデ調整。	色調：内一頭部は灰褐色、肩部は暗灰色、外一口縫部・肩部は灰色。頭部は暗褐色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口縫部1/4。反転復元。口縫部外側・肩部内面自然剥付脊。肩部外側自然剥付脊。口縫部内面灰かぶり。
頭	201- 87	口径45.4 残存高7.9	口縫部下半以下欠損。口縫部は外側して外上方にのび、口縫部下でやや内下方にのびたのも、やや上外方にのび、段を成したのも上外方にのびる。端部は丸くおさまる。頭部上方1/3に2条の沈線をめぐらし、その上に擦接き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調査。(頭部内面にナデ調整時の布か草の使用痕がある)	色調：灰色。胎土：密。2mmの反石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部1/8以下。反転復元。
脚	201- 88	口径42.0 残存高13.0	口縫部下方1/3以下欠損。口縫部は外側して上外方にのび、口縫部下で下外方にのびたのも、上外方にのび、内傾して上外方にのび、口縫部内面に至る。口縫部直ぐに2条、頭部上方1/3に3条の浅い沈線をめぐらし、上方1/3の沈線の上下に擦接き斜行沈線文を行す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調：淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部1/4以下。反転復元。
頭	202- 89	口径15.2 基部径13.0 残存高5.5	口縫部はやや外側して上外方にのび、口縫部下で下外方にのびたのも、外上方にのび、内傾して上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキ。他の回転ナデ調整。(頭部外側にナデ調整時の布か草の使用痕がある)	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部1/3以下。反転復元。
脚	202- 90	口径15.6 基部径12.4 残存高6.4	口縫部は外側して上外方にのび、口縫部はやや下外方にのびたのも、外側して上外方にのび、内傾して上外方にのび、上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキのちカキ日調査。(頭部内面青海波タクキ)。他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口縫部1/9以下。反転復元。肩部内面灰かぶり。
頭	202- 91	口径15.0 基部径12.0 残存高7.7	口縫部は外側して上外方にのび、口縫部はやや内側して外上方にのび、上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキのちカキ日調査。肩部内面青海波タクキ。他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一頭部は淡灰色、肩部は灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部1/8。反転復元。口縫部外側・肩部内面自然剥付脊。口縫部内面灰かぶり。
頭	202- 92	口径19.4 基部径16.0 残存高7.4	口縫部は外側して上外方にのび、口縫部はやや内側して外上方にのび、上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タクキのちカキ日調査。肩部内面青海波タクキ。他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一頭部は淡灰色。胎土：密。6mm以下の長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：口縫部1/8。反転復元。

表 裏	202-93	口径21.6 基部径19.2 残存高6.2	口部は外側して上方にのび、口 縁部下でわずかに下方にのびたの ち、上方方にのび上方にのび上方向 にのびる。端部は丸くおさめる。肩 部は下方に下る。肩部下半以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タキ。肩部内面青海波タ キ。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一 口縁部は淡灰色、肩部は褐色、 外一口縁部・肩部は淡灰色、腹部 は褐色。胎土：密。1~2mm の長石を含む。焼成：良好。残 存：口部1/8、反転復元。外 面自然剥がれ
	202-94	口径16.9 基部径13.7 残存高6.8	口部は外側して上方にのび、口 縁部は外方にのびやや内側して上 方方にのび、口縁部内面に至る。肩 部は下方に下る。肩一部・体部 ・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タキ。肩部内面青海波タ キ。他は回転ナダ調整。	色調：淡灰青色。胎土：密。燒 成：良好。残存：口部1/4、反 転復元。

表 19 狩山池 2 号窯灰原表面採集遺物観察表

(丁はたちあがりを示す)

器種	図版	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	199-74	口径12.2 基部径3.7	体部は下方に下り、口縁部は直面 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部底く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰 褐色。胎土：密。3mm以下の長石 をわずかに含む。焼成：良。残 存：1/4。反転復元。
杯 蓋	199-75	口径15.2 残存高3.4	体部・口縁部は下方に下る。端部 は丸くおさめる。天井部は底く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一 明灰褐色。外一明灰青色。胎土： 密。焼成：やや不良。残存：1/3, 反転復元。
杯 身	199-76	口径14.0 受部径16.1 基部高2.7	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰 色。胎土：密。3mmの長石を若干含 む。焼成：良好。残存：1/3, 反転復元。
杯 身	89-76	T 高0.9 T 角度31°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。受 部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部は浅く、底部は平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰 色。胎土：密。3mmの長石を若干含 む。焼成：良好。残存：1/4, 反転復元。
杯 身	199-77	口径11.7 受部径13.9 基部高3.8 T 高0.9 T 角度27°00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は やや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：暗灰 色。胎土：密。3mmの長石を若干含 む。焼成：良好。残存：1/4, 反転復元。
杯 身	199-78	口径12.4 受部径14.9 基部高3.5 T 高0.9 T 角度45°45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。たちあがり基 部内面で段を成す。底体部は浅く、 底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。 胎土：密。2mmの長石を若干含 む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。

### III 狹山池 3号窯

#### 1 調査の経過

1990年に実施した狹山池2号窯灰原発掘調査の際、その南端部分において、2号窯灰原とは明らかに異なる黒色の灰土層を確認した。この灰土層は、2号窯下層灰原の下層約25cmに所在していた。2号窯灰原が灰土中に砂質土を含むのに対して、この灰土層は砂質土を含まず、分布域もまったく異なることから、2号窯とは別の窯体の操業に伴う灰原であると判断し発掘調査を行うことになった。この新規に確認した須恵器窯を狹山池3号窯と呼称する。発掘調査は1992年1月21日から同年3月4日まで実施した。

狹山池2号窯灰原の発掘調査の際に試掘溝内で確認した狹山池3号窯灰原の規模は、東西約7m、南北約6mであった。この時に出土した須恵器の器種には、杯蓋・杯身・高杯・提瓶・短頸壺・甕等が認められ、狭いトレンチにもかかわらず、その数量はコンテナ12箱分にも及んだ。

灰原の分布状況から、窯体部分が近い場所に遺存する可能性が強いと判断し、灰原の完掘はもとより、窯体部分の検出も念頭において発掘調査を開始した。このため狹山池東堤コンクリート擁壁の除去と堤体盛土の掘削を行い、窯体の遺存が想定される中位段丘崖の検出を試みた。堤体盛土をバックホーで掘削したが、盛土は東側の宅地部分にまで及んでおり、中位段丘崖を検出することはできなかった。灰原から遠くない箇所に窯の構築が可能な段丘崖があり、そこに窯体が遺存する可能性はきわめて高いと想定されるが、住宅などが存在しており、窯体の検出は断念することとなった。また当初の予想よりも東側に中位段丘崖が位置することは、後述する狹山池東岸の微地形の状況から納得できる。以上の通り、窯体部分の検出は果たせなかつたので、調査の目的を灰原の全容を把握することに限定した。

#### 2 遺構と層序

##### ①層序

3号窯灰原は、2号窯灰原に南接して存在し、狹山池東岸に所在する狹山遊園とその北側にある住宅地との境界の西側にある。3号窯灰原の北端の一部は2号窯灰原によって間層を介して被覆される。3号窯灰原は堤体盛土最下層の直下で、堤体西端から約2m東方の地点よりその堆積がみられる。堤体付近では一部露出する箇所が認められるほど浅いところに灰原が遺存するが、池の堆積物と思われる褐色砂質土・青灰色シルト等がみられる箇所では、最深部で地表面から約80cmの深さのところに遺存する。調査区内における灰原上面の標高は76.75m~78.0mを測る。

灰原を最も細かく分層する場合、作業者が運搬した1回分の炭灰を最小単位として検出することが理論的には可能である。しかし、これを断面のみでなく平面および立体的に検出する作業は現実的にはきわめて困難である。今回の調査では、土質の似通った最小単位の灰土層を括する層をもって1層の灰原とみなした。

3号窯灰原は大別して上下2層に明瞭に分層される。上層は暗灰橙色の灰土層で、最も厚い箇所で約20cmを



写真 83 狹山池3号窯灰原断面

測る。これを上層灰原と呼称する。下層は黒色の灰土層で、最も厚い箇所で約40cmの堆積がみられる。これを下層灰原と呼称する。なお、土層断面における灰原の西端は掘り込みによってカットされている。この掘り込みの埋土は近世末期以降の遺物を包含する。なお、下層灰原は地山面に堆積しているのではなく、段丘崖上部より流入したと考えられる灰青色砂質土・淡黄色砂質土の上面に堆積している。<sup>⑥</sup> この崩土層の厚さは堤体直下で約1m、灰原西端直下で約60cmを測る。

この崩土層を削除すると地山面があらわれる。この層が中位段丘疊層である。中位段丘疊層は、堤体直下および灰原西端直下において約1.2mの厚さを有するが、調査区の西側に設定した試掘溝では確認できないことから、調査区東端より西へ約15mの地点で中位段丘疊層は消滅しているものと思われる。

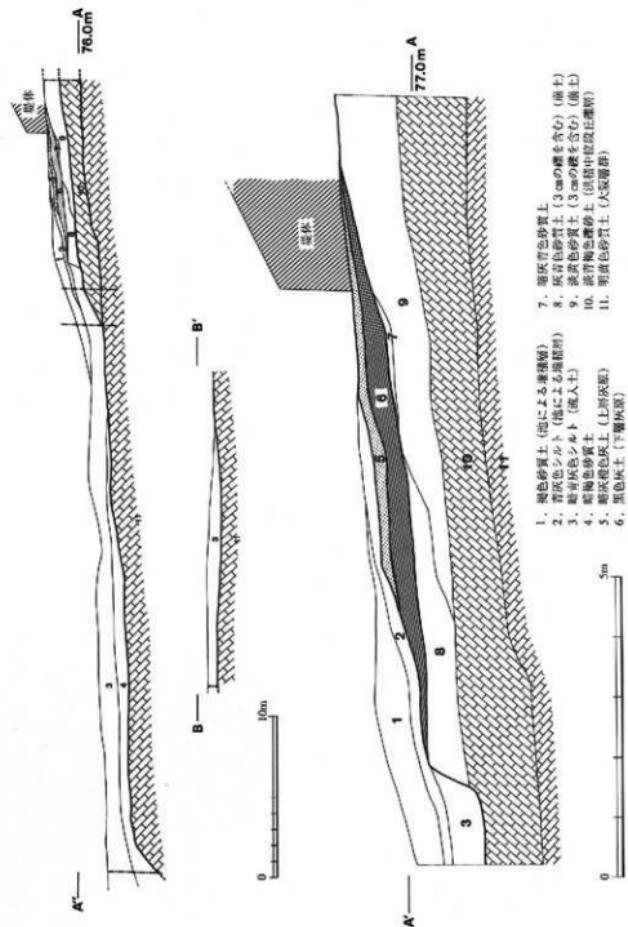


図203 狹山池3号窓灰原上層断面図 (S-1/300・1/80)

さらに、この中位段丘疊層の直下には、極めて堅い明黄色砂質土層が確認された。この層の上面は緩やかに西方へ下っていき、調査区東端で標高 76.0m を測り、調査区東端から 49m 地点で標高 72.0m を測る。49m 地点に傾斜変換点があり、きつい傾斜でさらに西方へ落ち込む。なお、西側試掘溝内において、明黄色砂質土層上面にみられる暗青灰色シルトおよび暗褐色砂質土は、水流や池による堆積土ではなく、何らかの作用によって流入した層であろう。この暗青灰色シルト層は、3号窯灰原をカットする落ち込み内の埋土と同層であり、近世末期以降の流入土である。

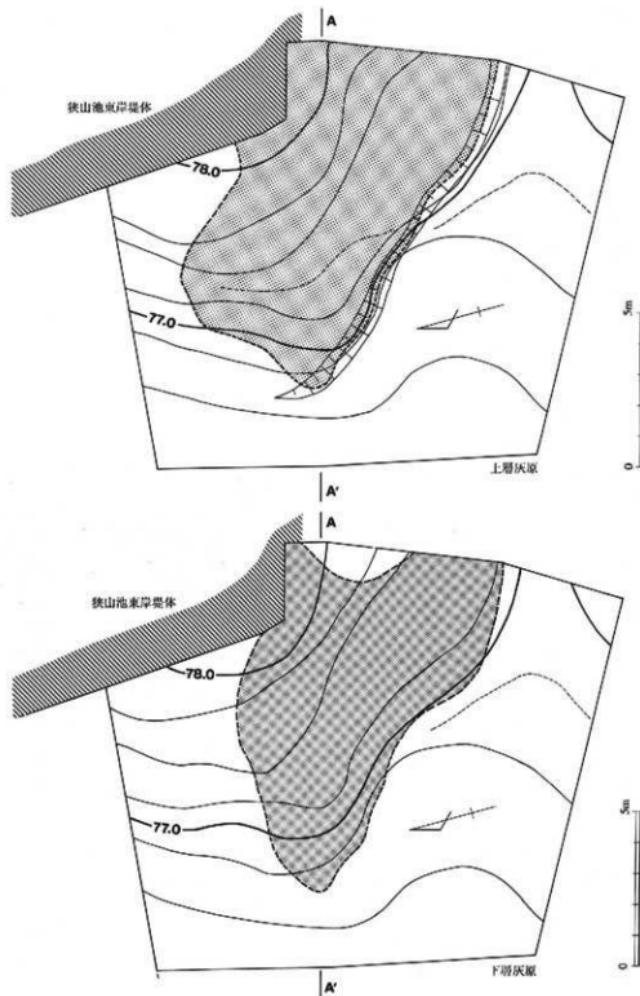


図 204 狹山池 3 号窯灰原平面図 ( $S=1/150$ )

### ②上層灰原

暗灰色灰土より形成される上層灰原は、東西約10.5m、南北約7mの東西方向に長い形状を呈しており、最も厚いところで約20cmの堆積がみられた。しかし、厚さが約20cmに達するのは中央部付近(横断土層図作成箇所より南北に幅3m程度)のみで、その他の箇所での厚さは10cm以下であった。

灰原南端から西端にかけての箇所は、後世の掘り込みによってカットされており、掘り込みの埋土中からは近世末期以降の陶器片等が検出された。3号窯のある狹山池東岸は狹山遊園と宅地の境界を中心緩く東方へえぐれ込んでいるが、昭和初期の狹山池改修以前は、当該地は谷地形であったようで、東側と南側に斜面があり、現在よりもかなり奥まった地形であったようである(図207)。灰原をカットする掘り込みがこの谷地形の北端に相当するのであろうか。また、図207に記されているようなコンターラインであったならば、現在の東堤より西を掘削しても中位段丘崖に届くはずがなく、今回の調査で窯体を確認できないことも当然であろう。

上層灰原の上面では、狹山池2号窯側から続く南北方向のコンターラインが中央部付近で南東方向へ向きを変えている。また、中央部南側でやや平坦な面が形成されている。

包含する須恵器は細片が多く、灰原の中央付近に集中する傾向が認められた。

### ③下層灰原

黒色灰土層からなる下層灰原は、東西約11m、南北長は東側で約7mを西側で3~4mを測り、東西に長く西側でやや狭くなる形状を呈している。厚さは最大約40cmであるが、堤体盛土直下および南側の調査区東端付近では厚さ10cmもなく、やはり上層灰原と同様に、中央部付近が非常に高く堆積している。灰原南端から西端にかけては、上面からの掘り込みによって削平を受けており、窯体操業時の灰原の端をおさえることはできない。

下層灰原の上面では、上層灰原上面でみられた南北方向のコンターラインが中央部付近で南東方向に向きを変える傾向がより強くみられる。これは、中央部付近における灰土の堆積が、南側のそれに比して非常に厚いものであることによるためで、77.0m付近のコンターラインは中央部付近で急角度に屈曲している。またこのことによって、中央部南側ではやや平坦な面が形成されている。

下層灰原を掘削する過程において、本窯操業時の作業者が運搬・廃棄した1回分の炭灰に相当すると思われる灰土の集まりが、その上面および下面に橙色焼土を含むことにより、部分的ながらも確認できた。しかし、この単位を個別に検出する作業を灰原の全域にわたって行うことができなかったため、このため、黒色灰土層を単一層と認識することとした。

包含する須恵器は、上層灰原では細片が多いのに比べて、完形もしくはそれに近い残存を示すものが多く、その出土量も上層灰原と比較して多い。先に述べた灰土塊がいくつか集まって土器溜まりのような出土状態をみせる箇所が、不明確ながらも中央部付近においてみることができた。

### ④灰原形成以前の遺構

下層灰原を完全に掘削すると、灰青色砂質土・淡黄色砂質土からなる土層の上面が現れる。この客土層上面においては、傾斜面は南西に向いている。このため、コンターラインは南東方向へ走っており、調査区北端付近で緩やかに南北方向へ向かう。下層灰原と上層灰原の上面における中央部付近の



写真84 下層灰原遺物出土状況

コンターラインの張り出しが、傾斜面において土層断面軸方向に沿って最も厚く堆積したことによるものである。

標高 77.0m～77.25m 付近は、中央より南側でやや平坦な面を有するが、ここで径約 20cm、深さ 10cm～20cm のピットを 5ヶ所を検出した。ピットの埋土はいずれも下層灰原の黒色灰土であり、これらのピットは灰原が形成される以前の遺構であることが確認できた。遺構に伴う遺物は確認できなかった。ピットは 3つと 2つが斜面に沿って直線的に並んでいる。これらの遺構の上部構造として、柵列のようなものを想定できるが、これが灰原形成直前に機能していたことを考えると窯の操業に伴う何らかの施設であろう。



写真 85 灰原層以前のピット列

### 3 出土遺物

1990年・1991年の調査において、狹山池3号窯灰原から出土した須恵器の総量は、コンテナ約90箱に達した。本項には、実測が可能であった遺物をすべて掲載した。

以下、各灰原層ごとに出土した須恵器の概要を述べる。なお、各個別の遺物観察結果については表20～22の遺物観察表を参照されたい。

#### ①上層灰原出土遺物（図208・216～217、図版91、表20）

上層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は20点である。図化をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯H身 6点・杯H蓋 4点・提瓶 2点・甕 8点

杯H身の口径平均値は 11.8cm、杯H蓋の口径平均値は 13.5cm である。杯H身の法量は、図313のような数値分布を示している。

提瓶12は肩部に下方へ屈曲する一対の把手を付す。

口頸部が大型の甕、121・122・123は頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施す。口頸部が小型のもの 116・117・118・119・120 の頸部外面は無文である。

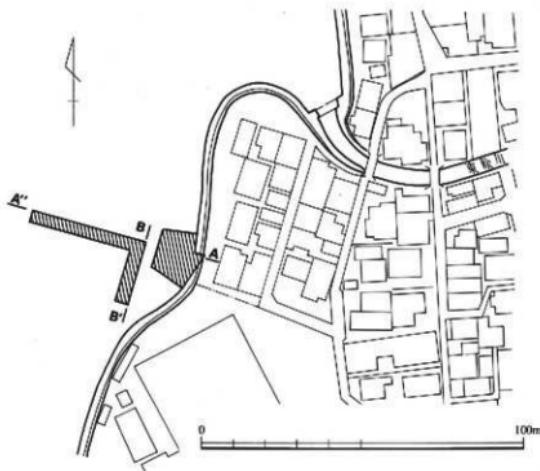
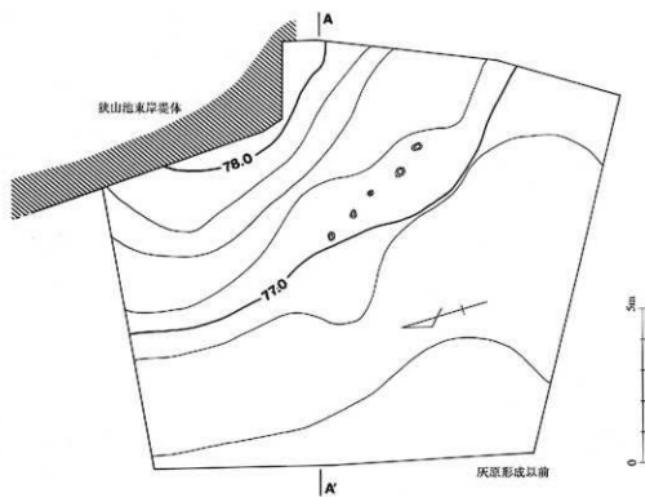
#### ②下層灰原出土遺物（図208・212・217～226、図版89～99、表21）

下層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は126点を数える。図化をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯H身 12点・杯H蓋 22点・短脚有蓋高杯 1点・有蓋高杯蓋 1点・長脚無蓋高杯 1点・長脚無蓋高杯(脚部のみ) 4点・短頸甕 8点・広口壺 2点・壺 1点・長頸壺蓋 1点・提瓶 4点・提瓶(口頸部のみ) 2点・甕 1点・甕 38点

杯H身の口径平均値は 12.6cm、杯H蓋の口径平均値は 14.2cm である。杯H身の法量は、図313のような数値分布を示している。口径は 11.0cm～14.0cm の範囲に、器高は 3.5cm～4.5cm の範囲に集中しているが、口径が 11.0cm 未満のものと 14.5cm 以上のものを含んでおり、上層灰原のそれがこの分布範囲を超えた数値を示す個体を含んでいないとの対照的である。杯H身のたちあがり高・たちあがり角度は、図315のような数値分布を示している。

長脚無蓋高杯は、47・58・59・60 が脚部に 2段 2 方向の長方形スカシを、48 が脚部に 2段 3 方向の長方形スカシを有している。



短頸壺は50・51・63の体部最大径は13.6cmと小ぶりで、53・54・64・65の体部最大径は17.2cm～21.0cmとやや大きい。

広口壺55は頸部外面にカキ目調整を施し、66は肩部と体部外面にカキ目調整を施している。

提瓶は、肩部が遺存している67・69・72には、下方に屈曲する左右一対の把手が付されている。

口頸部が大型の壺、125・144・145・146・149・150・151は頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施す。口頸部が小型のもの126・127・128・129・130・131・132・133・134・135・136・137・141・142・143・147・148・152・153・154・155・157・158・159・161・162の頸部外面は無文である。

138は頸部外面に2条の鈍い沈線をめぐらす。

156は頸部外面に櫛描き

斜行沈線文を施す。

口頸部が直口の139・140

の頸部外面は無文である。大壺160は頸部外面の沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施す。

③灰原トレンチ出土遺物(図213～215・227～229、図版94～95、表22)

下層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は58点を数える。図化をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯H身13点・杯H蓋14点・短脚高杯(脚部のみ)2点・長脚高杯(脚部のみ)1点・長脚無蓋高杯1点・有蓋高杯1点・短頸壺2点・壺3点・提瓶1点・提瓶(口頸部のみ)2点・壺17点・器台1点

杯H身の口径平均値は12.6cm、杯H蓋の口径平均値は13.6cmである。

長脚無蓋高杯106は、2段1方向の長方形スカシを有している。

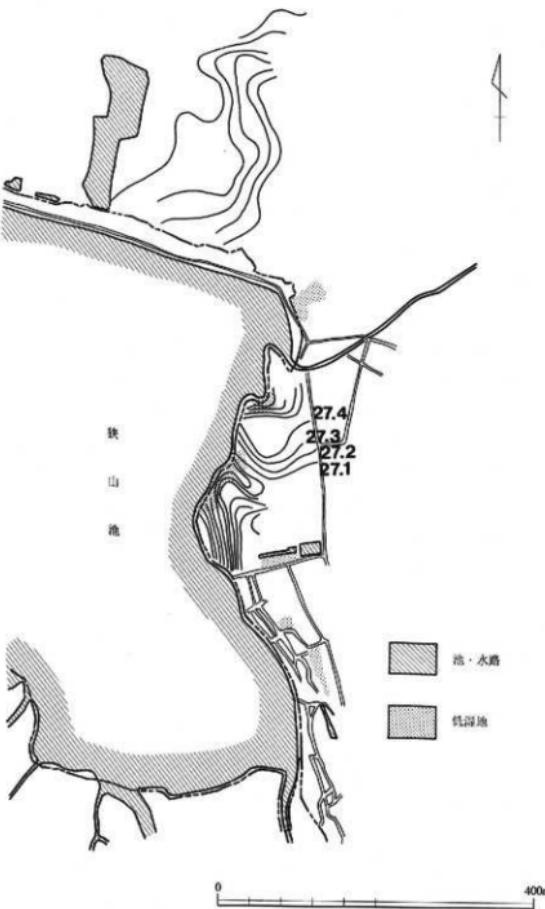


図207 狹山池東岸の旧地形(昭和改修以前)  
(「狭山池沿下構地整理地区及ビニール接続スル土地規形并予定図」等を参考)

短頸壺は104の体部最大径は15.3cm、114の体部最大径は23.5cmを測る。

提瓶105には、下方に屈曲する左右一対の把手が付されている。

口頸部が大型の壺178は頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施す。口頸部が小型のもの110・127・128・129・130・131・132・133・134・135・136・137・141・142・143・147・148・152・153・163・164・165・166・167・168・169・170・171・172・173・174・175・176・177の頸部外面は無文である。

#### 4 小 結

狹山池3号窯上層灰原から出土した須恵器は細片のものが多く、その総量も下層灰原の山上量の3分の1程度にとどまる。これは下層灰原が黒色灰土から成るのに対して、上層灰原は暗灰褐色灰土で形成されており、上層灰原は炭灰層というよりも、むしろ焼土混じりの灰土層と表現するほうが的確であるということと関係している。下層灰原は窯体で焼成を行った後に引き出した純粋な炭灰層で、上層灰原は床面の還元層の下、および壁面の還元層の外側にみられる酸化層をも含んで形成されたものであると思われる。上層灰原は、窯体から炭灰等の廃棄物を除去した後の床・壁の補修を予想した清掃、もしくは窯の廃絶後の破壊によって形成された層であるために、下層灰原とはまったく異なる堆積および遺物の残存状態を示しているのである。

第3章で述べているように、狹山池3号窯の杯身の法量はおおむねTK43集中域の範囲内におさまる数値を示しているが、たちあがりの角度がTK43号窯のそれよりも内傾気味である。よって、本窯で生産された須恵器はTK43型式～TK209型式の範疇に含まれるものと考えられよう。

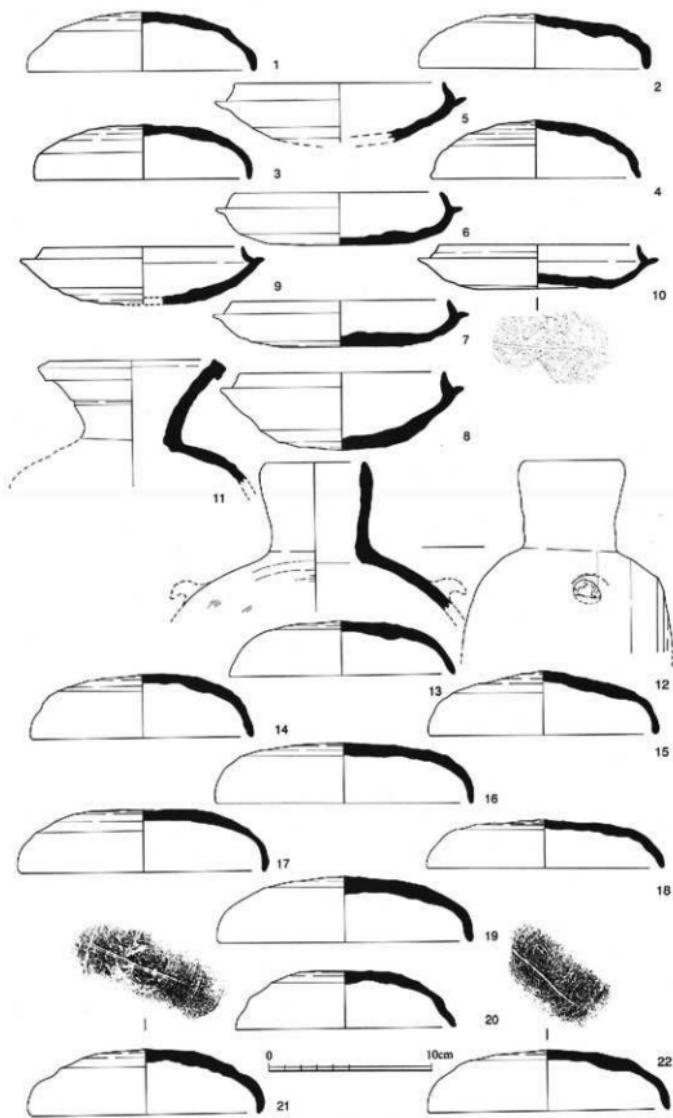


図 208 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (1) (1~12: 上層灰原、15~22: 下層灰原)

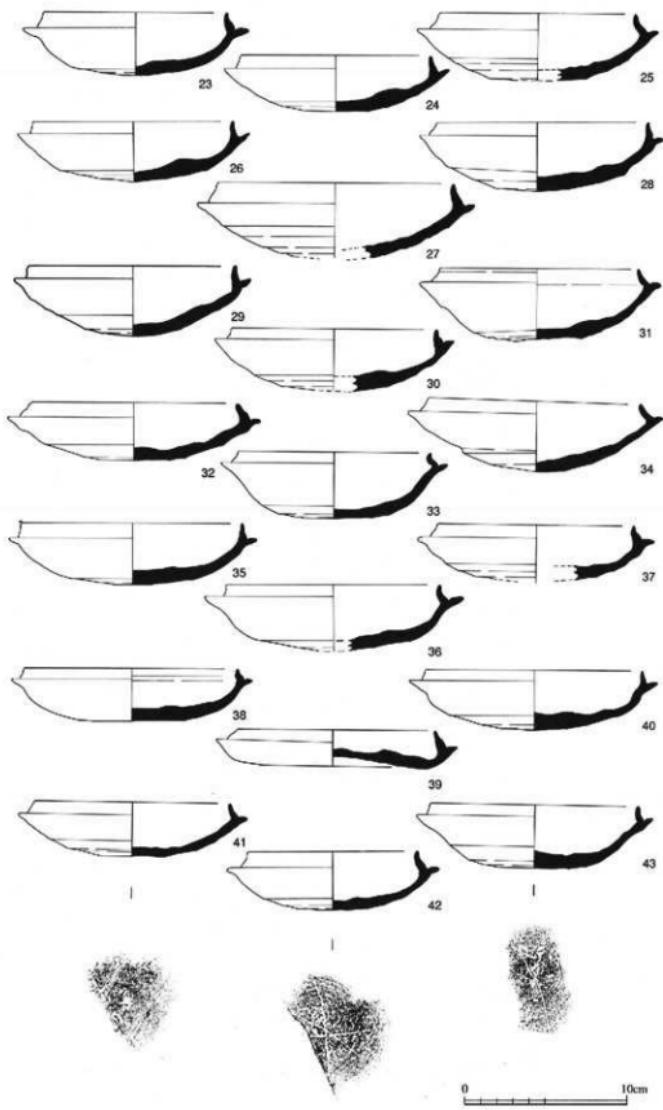


图 209 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (2) (下層灰原)

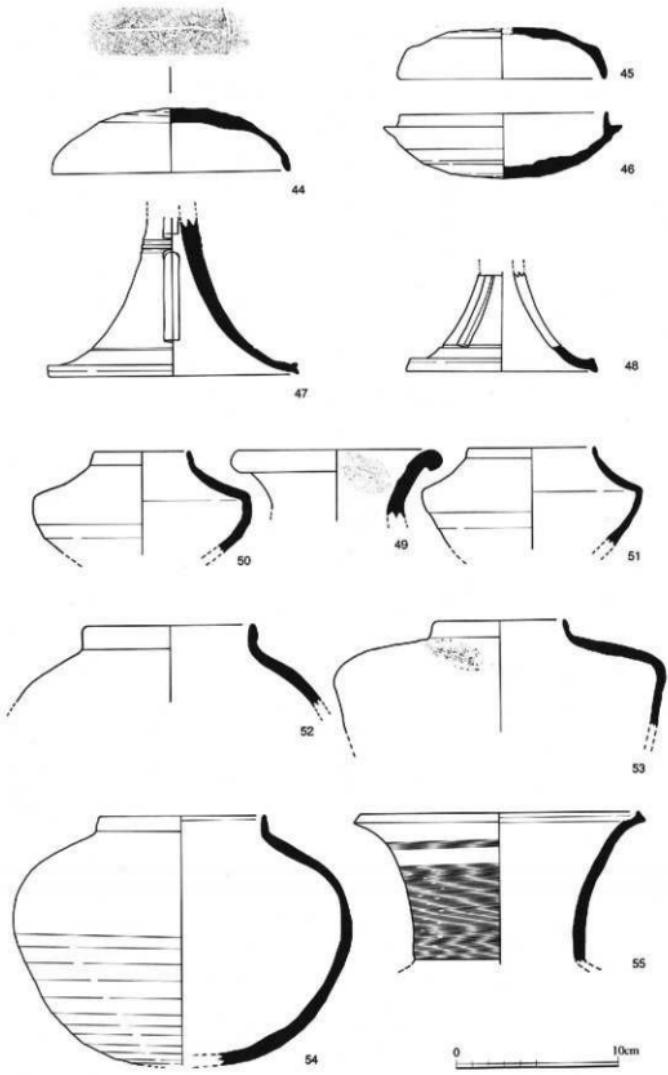


図 210 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (3) (下層灰原)

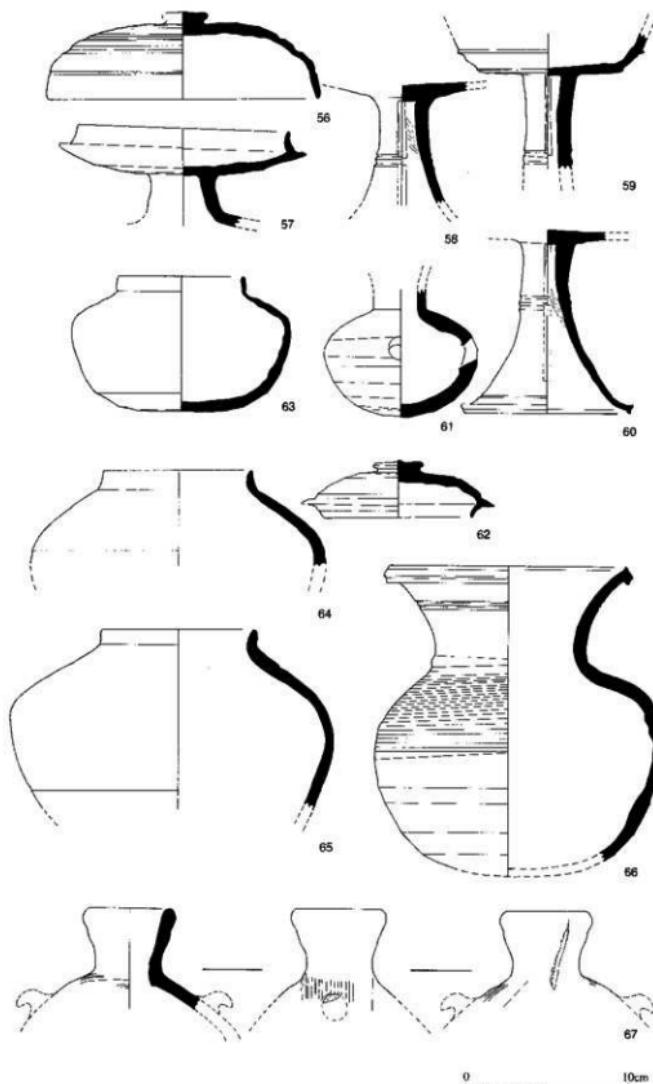


図211 狩山池3号窯灰原出土遺物(4)(下層灰原)

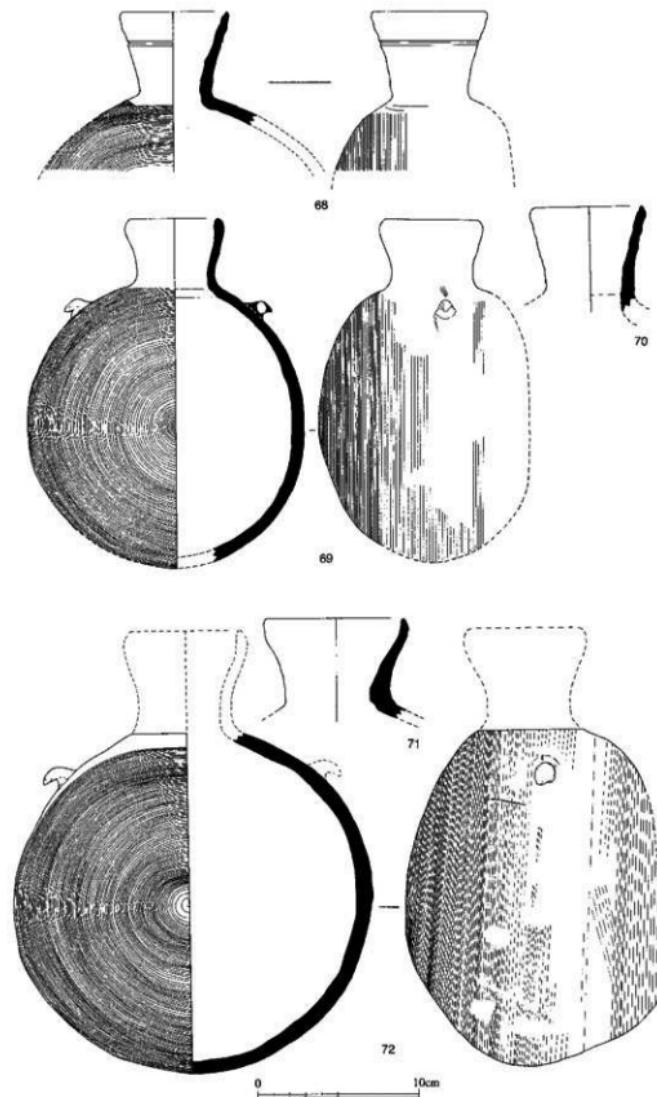


図212 狸山池3号窯灰原出土遺物(5)(下層灰原)

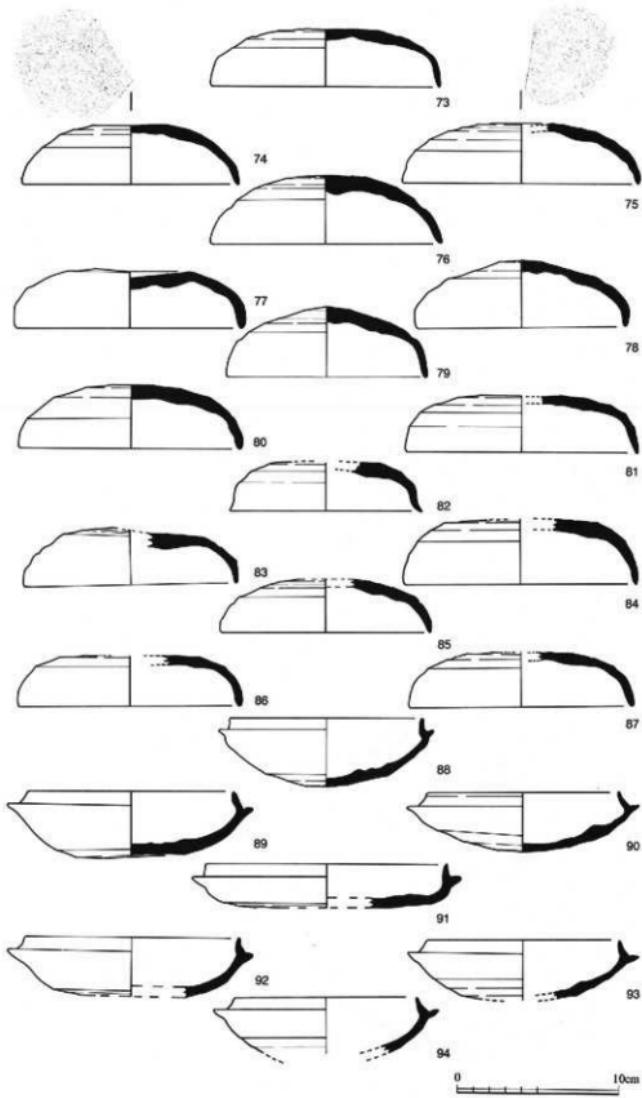


図213 狐山池3号窯灰原出土遺物 (6) (トレンチ内)

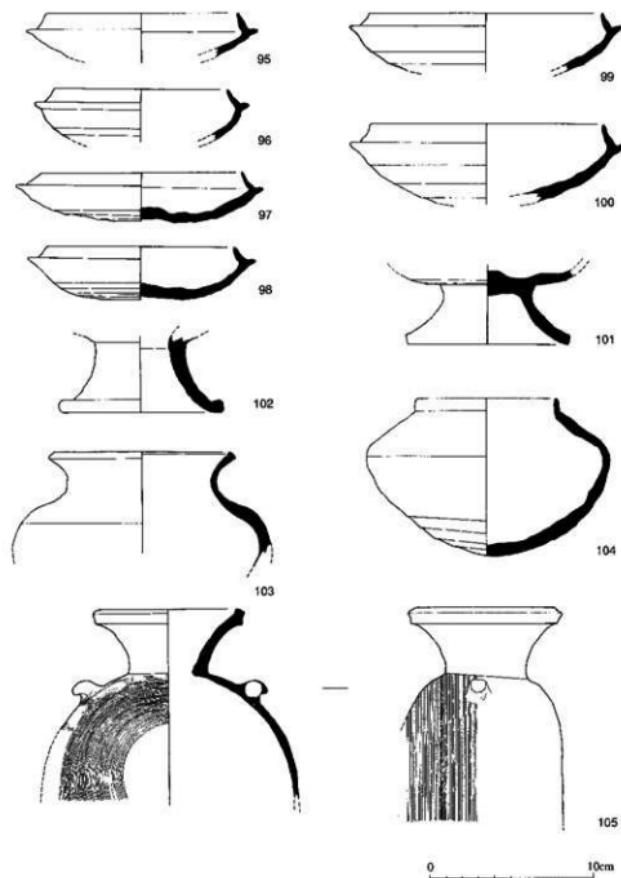


図 214 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (7) (トレンチ内)

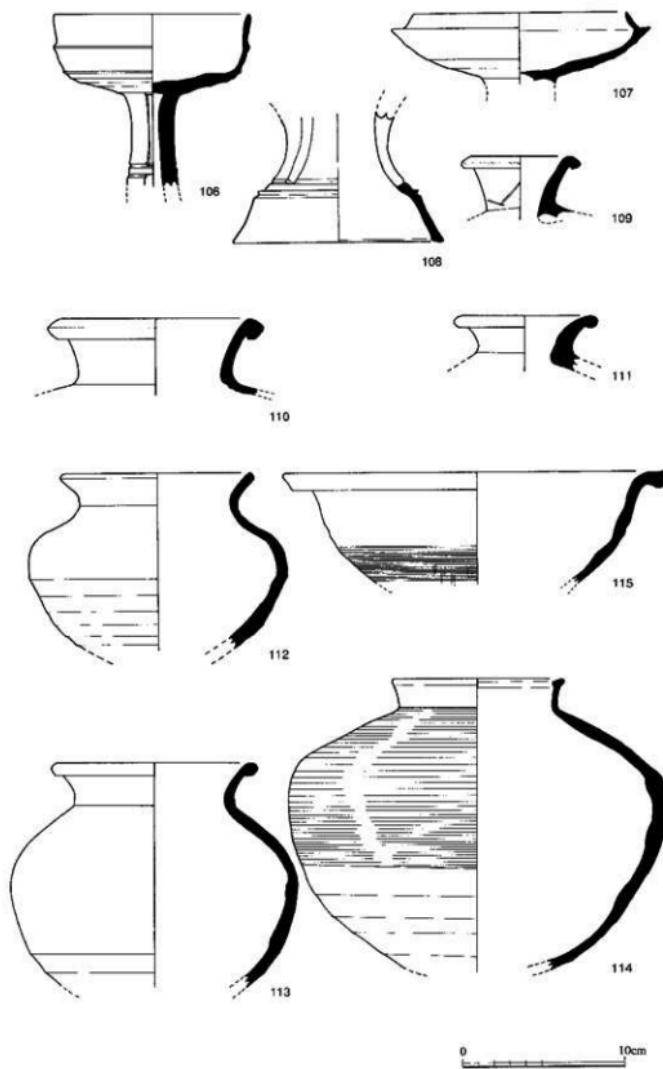


図 215 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (8) (トレンチ内)

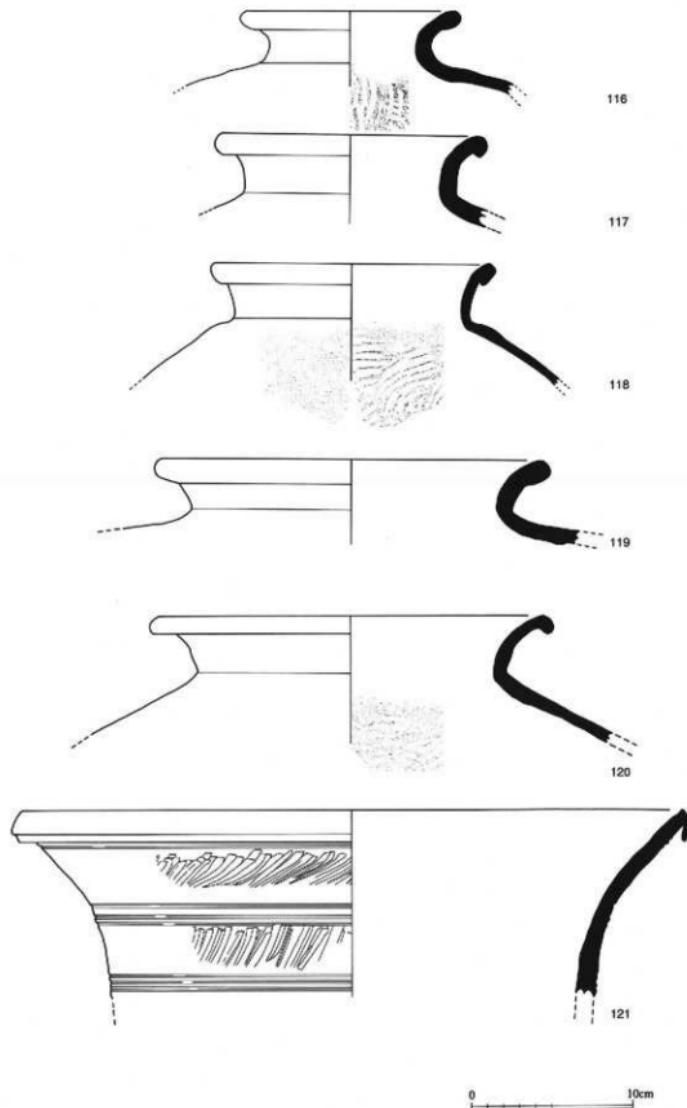


图 216 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (9) (上層灰原)

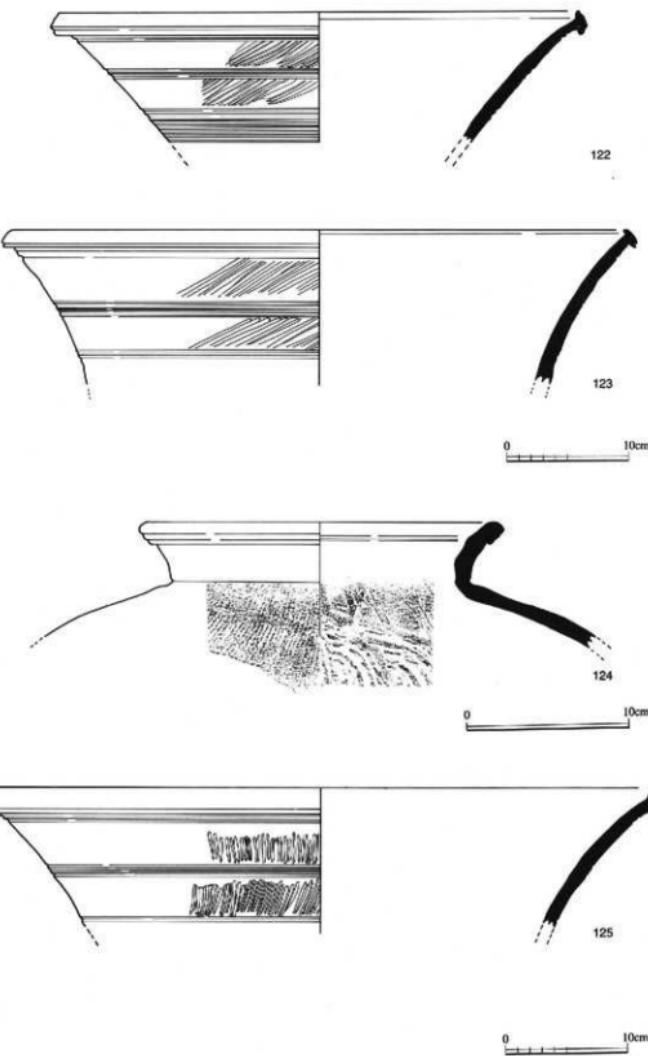
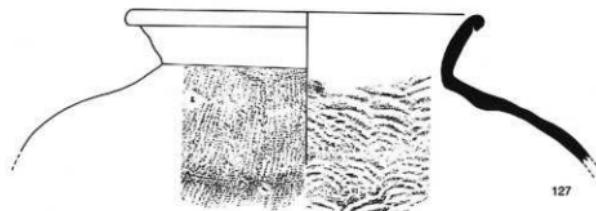
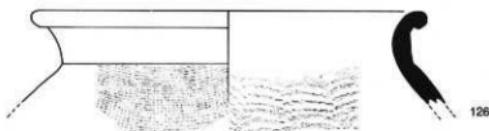
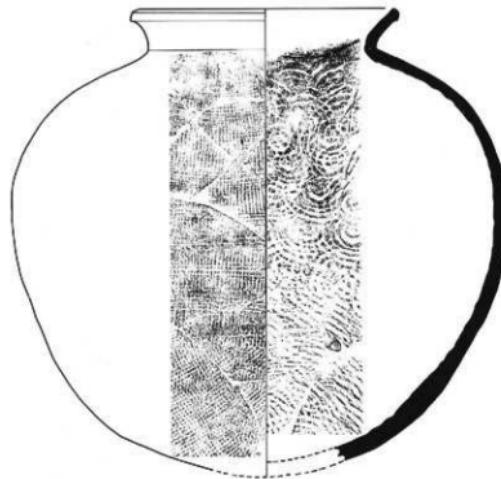


図 217 狩山池 3 号窯灰原出土遺物 99 (122~123: 上層灰原、124: 表面採集、125: 下層灰原)



0 10cm



128

0 10cm

図 218 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 33 (下部灰原)

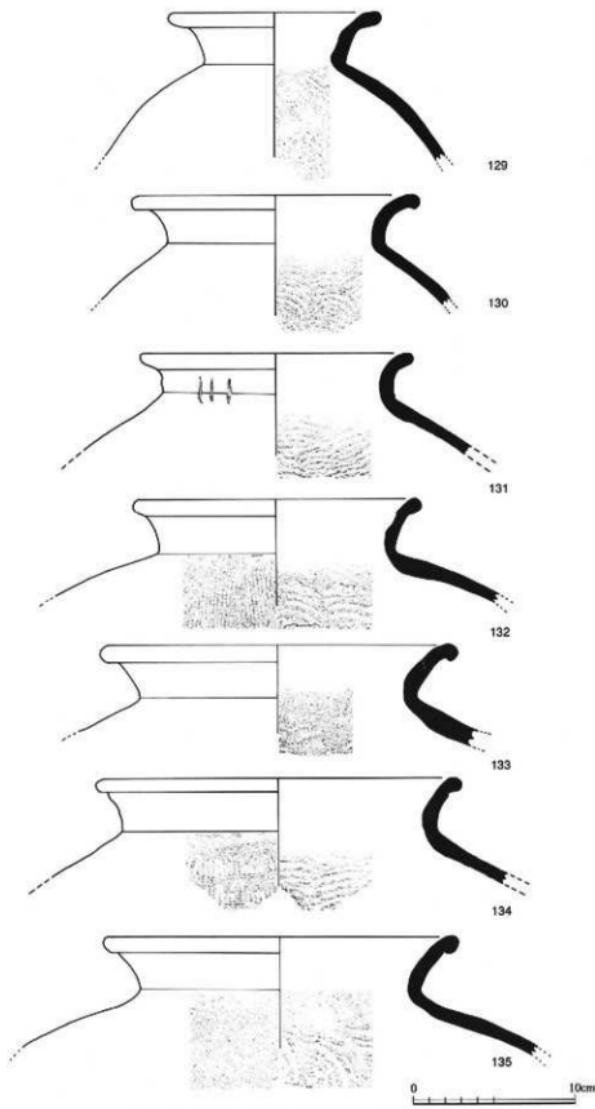


図219 狹山池3号窯灰原出土遺物 錆 (下層灰原)

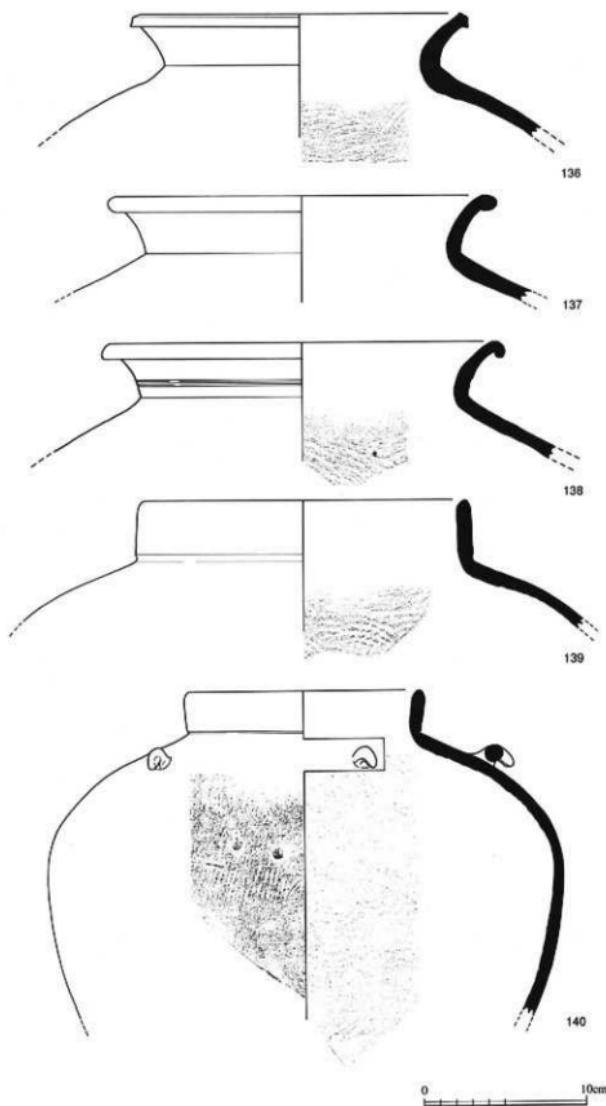


図 220 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 図 (下層灰原)

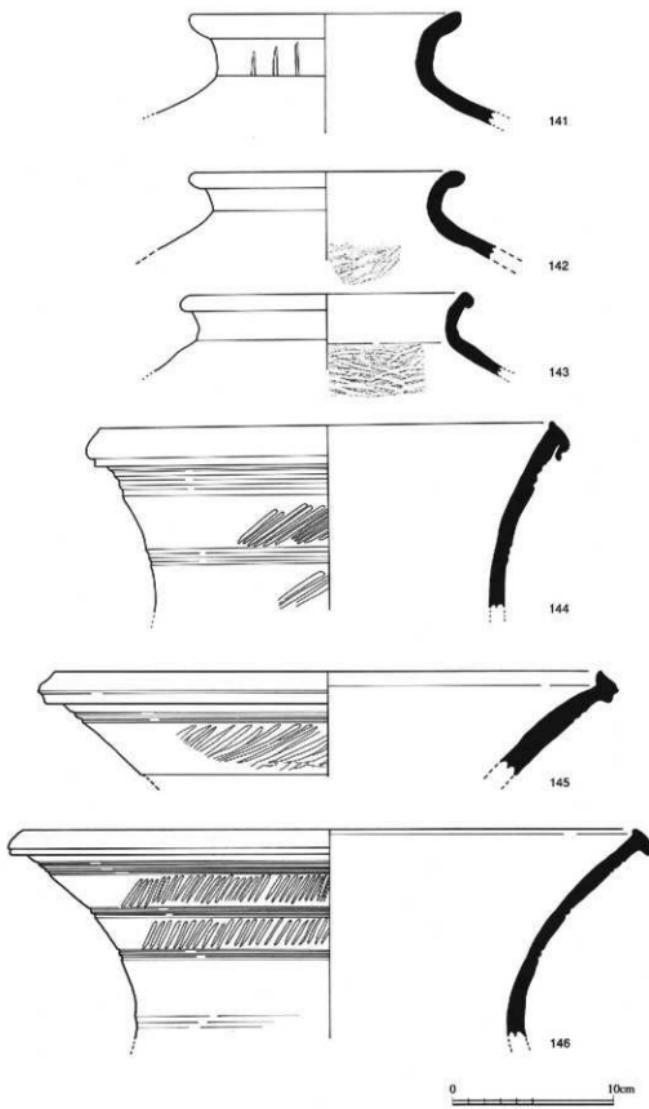


図 221 狂山池 3 号窯灰原出土遺物 14 (下層灰原)

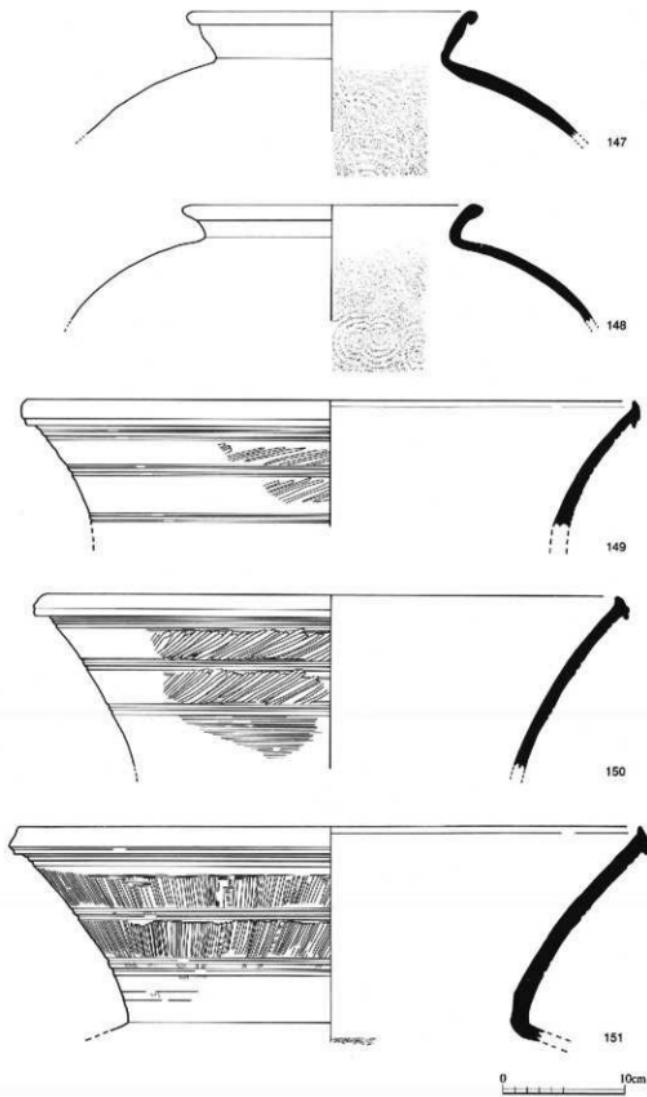
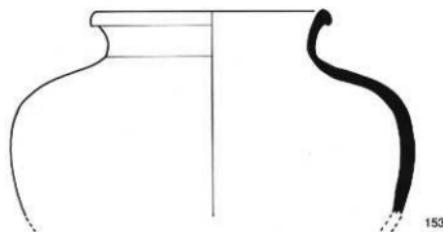
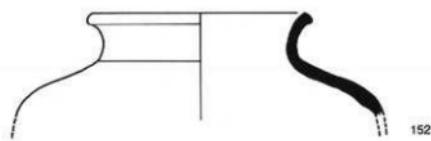
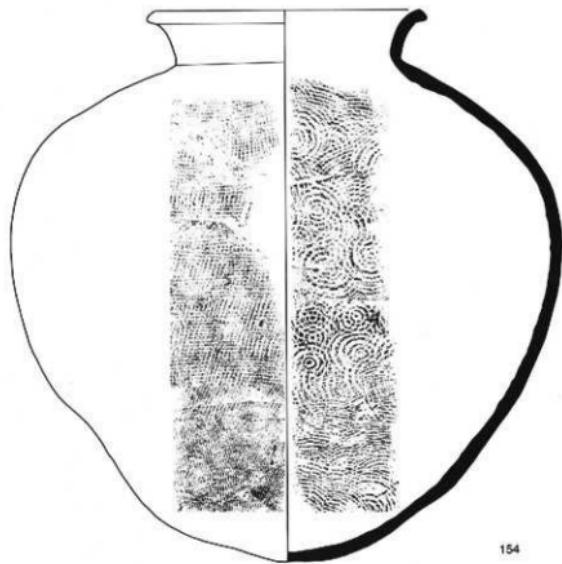


図222 狹山池3号窯灰原出土遺物 03(下層灰原)

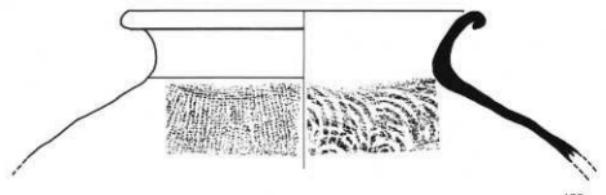


0 10cm

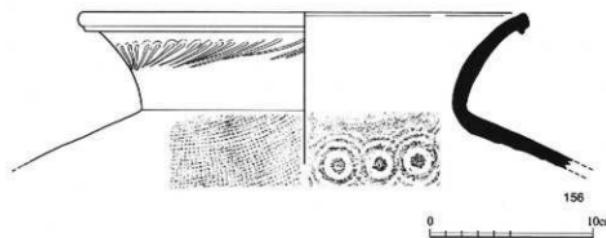


0 10cm

図 223 狂山池 3号窯灰原出土遺物 68(下層灰原)

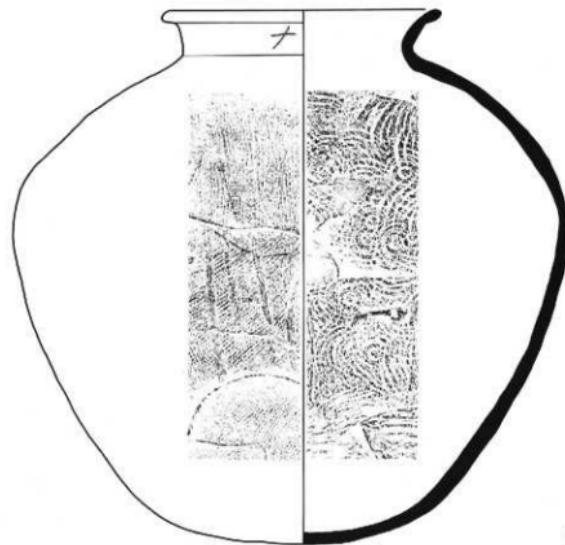


155



156

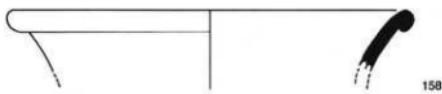
0 10cm



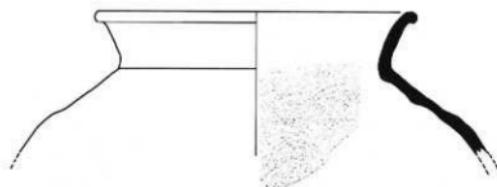
157

0 10cm

図 224 狂山池 3 号窯灰原出土遺物 錆 (下層灰原)

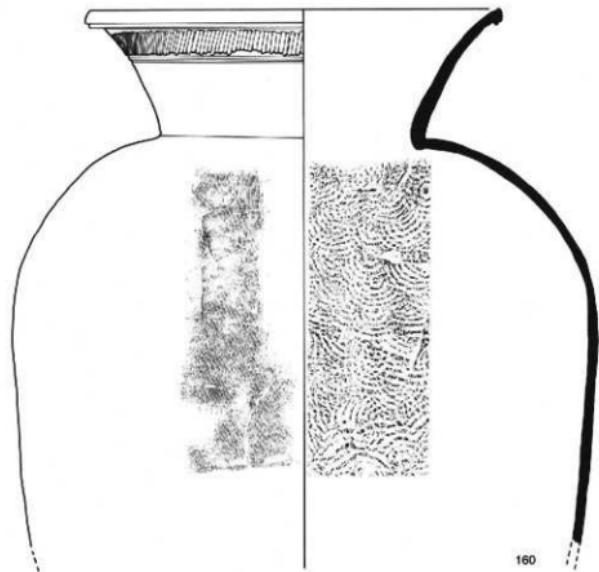


158



159

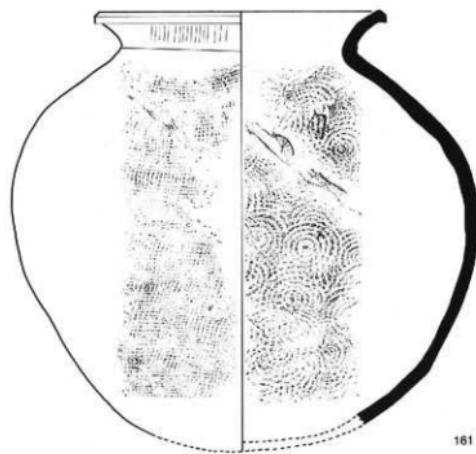
0 10cm



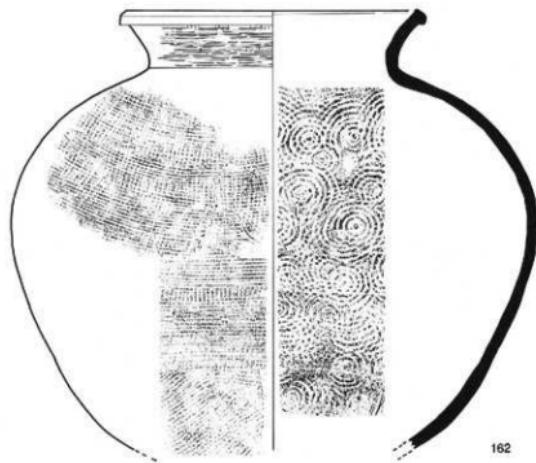
160

0 20cm

図225 狹山池3号窯灰原出土遺物 ⑧(下層灰原)



161



162

0 10cm

図 226 狸山池 3 号窯灰原出土遺物 ⑩ (下層灰原)

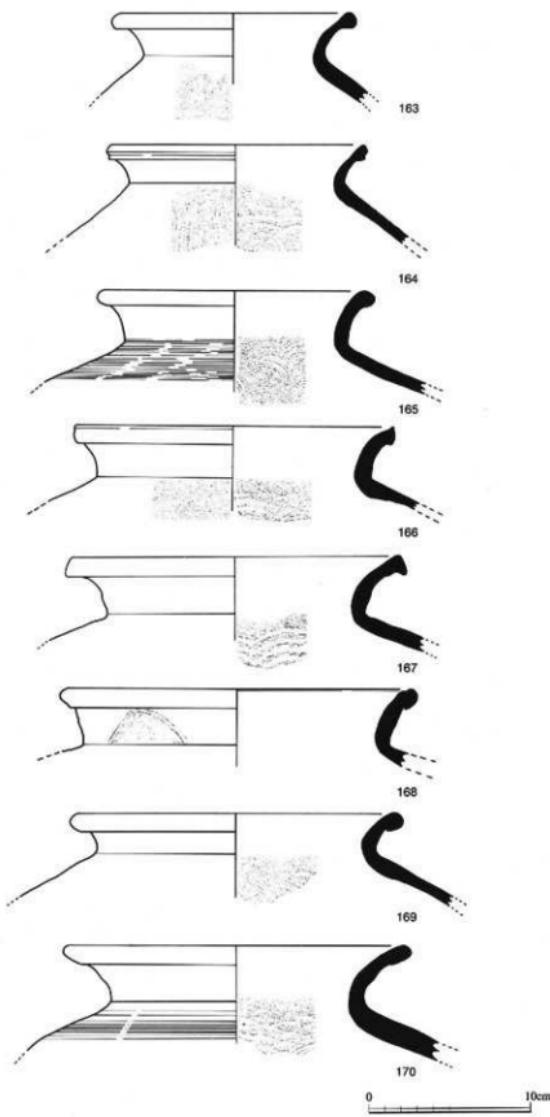


図 227 独山池 3 号窯灰原出土遺物 20 (トレンチ内)

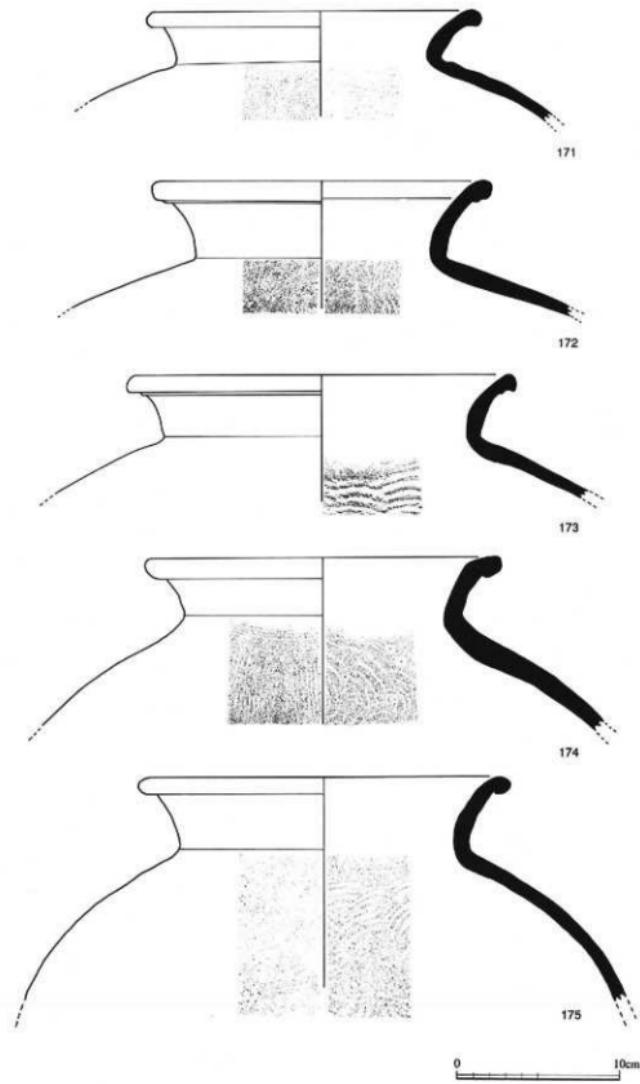
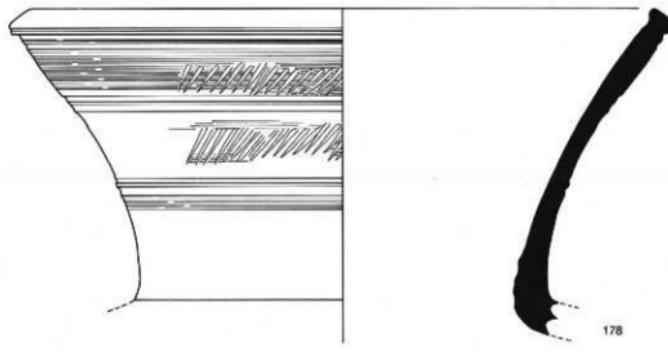
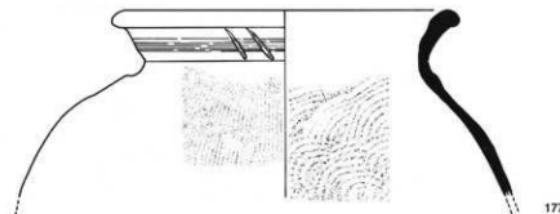
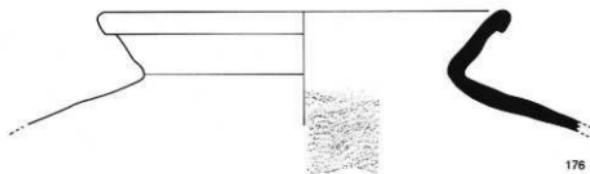


図 228 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 ㉚ (トレンチ内)



0 10cm

図 229 狹山池 3 号窯灰原出土遺物 (2) (トレンチ内)

表 20 狂池 3 号窯上層灰原出土遺物観察表

(丁はたもあがりを示す)

器種	固面 回版	底 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	208- 1 91- 1	口径13.9 高さ3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや内側して下方に下る。端部は丸くおさめる。底部はやくちやくある。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外周5/6回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一青灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm の長石を石子含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	208- 2 91- 2	口径14.1 高さ3.5	体部は外下方に下り、口縁部は垂直に下る。端部は丸くおさめる。大井部は底く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外周3/4回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一明青灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm の長石を石子含む。焼成：良好。残存：2/3。
杯 蓋	208- 3	口径13.2 残存高3.5	体部は外下方に下り、口縁部は垂直に下る。端部は丸くおさめる。大井部は底く半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外周3/4回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。1~2mm の長石を石子含む。1mm の石英を含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
	208- 4	口径12.8 高さ3.6	体部は下外方に下り、口縁部はやや外側する。端部は丸くおさめる。天井部はやくちやくある。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外周5/7回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一青灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	208- 5 91- 5	口径13.0 受部径15.4 残存高3.7 T 底1.1 T 角度32°00'	たちあがりは内傾したのち、端部付近ではほぼ成立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方へのひびき部はやや鋭。底部部はやや深い。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周5/6回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。3mm 以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：3/4。一部反転復元。
	208- 6	口径12.2 受部径15.3 高さ3.4 T 底1.0 T 角度35°15'	たちあがりは内傾したのち端部付近で外方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、施削は丸くおさめる。底部部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周9/10回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
杯 身	208- 7	口径13.4 受部径15.8 高さ3.9 T 底1.0 T 角度31°30'	たちあがりは内傾したのち端部付近で外方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はやや水平にのび、施削は丸くおさめる。底部部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周2/3回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一青灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	208- 8	口径12.6 受部径15.9 高さ3.9 T 底1.0 T 角度38°00'	たちあがりは内傾したのち中位でほぼ停止する。端部はやくちやく丸くおさめる。端部はやや外上方にのび、施削は丸くおさめる。底部部はやく、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周4/5回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。一部反転復元。
杯 身	208- 9	口径12.4 受部径15.2 残存高3.5 T 底0.8 T 角度43°00'	たちあがりは内傾したのち低位でやや上方へのひびき部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でやや段落成す。底部部はやく、底部はやく丸ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周6/6回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一青灰色、外一灰褐色。胎土：密。1~3mm の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側一面灰褐色かぶり。
	208- 10	口径12.4 受部径14.5 高さ2.7 T 底1.0 T 角度41°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でやや高い段落成す。底部部はやく、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外周5/6回版ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色。胎土：密。1~4mm の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。ヘラ記号：底部外周に「」。外面一面灰褐色かぶり。
提 瓶	208- 11	口径7.2 基部径6.3 残存高8.0	口縁部は外反しながら上外方に開き、口縁部下で下外方にややのび、口縁部は上方にのびたのち内傾し、端部は丸くおさめる。内面にあまり段落成す。肩部・底部・底部灰衣掛。口縁部1/2下方に長い1条の沈痕をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。背面側面部カキ目調整。背面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰青色、外一暗灰色。胎土：密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。口縫部1/2以下。背面一面灰褐色かぶり。
	208- 12	口径6.0 基部径6.2 残存高12.1	口縁部はやや外反しながら上外方にのび、口縁部はやや内脇して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部一部・底部一部・底部前部、背面・背面一部灰衣掛。肩部に左右一対の把手を付すが欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部前面同面カキ目調整。背面側面部カキ目調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一暗灰色。胎土：密。1mm の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。全面自然釉付。
甕	216-116	口径12.8 基部径11.1 残存高4.7	口縁部は外脇して上方にのび、口縁部内に内脇して上方にのび、口縁部内にカキ。肩部内面に至る。肩部は外下方に張り出す。肩部下部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外表面カキ目。肩部内面背面波タキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縫部の1/2以下。合成復元。外側一面灰褐色かぶり。
	216-117	口径16.0 基部径13.2 残存高4.7	口縁部はやや上方にのびたのも上方にのび、口縁部下外下方にのびたもの内脇して上方にのび、肩部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部下部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰白色。胎土：密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/8。反転復元。肩部内面に自然釉付。

表	216-118	口径16.9 基部径14.7 残存高7.8	口縁部はやや外側にして上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのち上方にのび、上方向にのび、口縫部内面に生る。肩部は下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ口調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナデ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/8。反転復元。肩部内面に自然釉付着。
表	216-119	LJ径23.4 基部径19.8 残存高5.3	口縫部は外側にして上方にのび、口縫部は外方にのびたのち内側にして上方にのび、上方向にのび、口縫部内面に至る。肩部は下方に張り出す。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ口調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナデ調整。	色調：内・口縫部は灰白色、肩部は灰褐色、外・灰白色。胎土：密。1~3mmの長石を含む。焼成：やや良。残存：口縫部の1/6。反転復元。口縫部内面に自然釉付着。
表	216-120	口径23.6 基部径19.2 残存高7.9	口縫部は外側して上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのち上方にのび、上方向にのび、上方にのび、上方向にのび、口縫部内面に至る。肩部は下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ口調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナデ調整。	色調：内・暗灰色、外・淡灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/4。反転復元。内外面に自然釉付着。
表	216-121	LJ径41.2 残存高11.7	口縫部は外側して上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのち上方にのび、上方向にのび、上方にのび、上方向にのび、口縫部内面に至る。肩部は下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ口調整。他は回転ナデ調整。	色調：内・淡灰色、外・灰白色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/5。反転復元。一部灰かぶり。
表	217-122	口径42.4 残存高10.8	口縫部基部附近欠損。口縫部は外側して上方にのび、口縫部下で下方にのびたのち上方にのび、あまい段を作成したのち上方にのび、さらに内側にして上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縫部内面にあまい段を作成。口縫部下に2条、肩部上方1/3に3条、肩部下1/3に3条の沈線をめぐらし、上方1/3の沈線の上下に櫛突き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側下1/3以下カキ口調整。他は回転ナデ調整。	色調：淡灰色。胎土：密。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/9。反転復元。内外面・部灰かぶり。
表	217-123	口径52.0 残存高12.8	口縫部下1/3以下欠損。口縫部は外側して上方にのび、口縫部下で下方にのびたのち成を成し、内側してやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縫部内面に段を作成す。口縫部下に2条の純い沈線をめぐらし、肩部上方1/3に3条の沈線をめぐらし、肩部下1/3に2条の純い沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上下に櫛突き斜行沈线文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側下1/3以下カキ口調整。他は回転ナデ調整。	色調：内・暗灰色、外・明灰青色。胎土：密。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：LJ頭部1/5以下。反転復元。

表21 狩池川3号窯下層灰原出土遺物類別表

(Tはたちあがきを示す)

器種	固度 堅度	法 量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
杯 蓋	208- 13	口径13.8 高さ3.5	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側5/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・暗青灰色、外・灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部試転復元。
杯 蓋	208- 14 91- 14	口径13.5 高さ4.1	体部は下外方に下り、口縫部はやや内側して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側5/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内・青灰色、外・灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。
杯 蓋	208- 15	口径13.9 高さ4.1	体部は下外方に下り、口縫部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側6/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内・灰色、外・暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	208- 16	口径15.8 高さ3.8	体部は下外方に下り、口縫部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部は底く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側6/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内・青灰色、外・灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	208- 17	LJ径15.0 高さ3.9	体部・口縫部は内側して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は底く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側9/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内・灰紫色、外・淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。一部試転復元。

杯 座	208- 18	口径14.1 器高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰色、外一紫青色。胎土：密。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。
	208- 19	口径15.4 器高4.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：淡灰色。胎土：密。焼成：不良。残存：1/2。反転復元。
	208- 20	口径13.4 器高3.7	体部は外反して下外方に下り、口縁部は下外方に下る。端部は丸くおさめる。大井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。
杯 蓋	208- 21	口径14.1 器高4.2	体部・口縁部は内側して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：棕色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：不良。残存：2/3。反転復元。ヘラ記号：天井部外表面に「-」あり。
	208- 22	口径14.2 器高3.9	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰色、外一灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。ヘラ記号：天井部外表面に「-」あり。
	209- 23	口径11.3 受部径13.9 器高4.0 T高1.0 T角度35°45'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/9回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一暗青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。
杯 身	209- 24	口径11.8 受部径13.9 器高3.6 T高0.9 T角度32°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部は上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底部部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	209- 25	口径12.0 受部径14.8 器高4.2 T高1.0 T角度32°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面9/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰黄色。胎土：密。焼成：不良。残存：1/2。反転復元。
	209- 26	口径11.2 受部径14.3 器高3.9 T高0.8 T角度21°45'	たちあがりは上方にのびたのち端部付近で直立する。端部はやややせ、受部はやや上方にのび、端部はやや深い。底部部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	209- 27	口径14.8 受部径17.6 器高4.7 T高1.4 T角度26°30'	たちあがりは内傾したのち端部付近でほぼ直立する。端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。焼成：不良。残存：1/6。反転復元。
	209- 28	口径13.4 受部径15.5 器高4.3 T高0.9 T角度17°45'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：不良。残存：9/10。
	209- 29	口径13.5 受部径15.1 器高4.5 T高0.8 T角度14°45'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：ほぼ完形。
杯 身	209- 30	口径12.7 受部径14.8 器高4.0 T高0.7 T角度25°45'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：青灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	209- 31	口径12.5 受部径15.3 器高4.5 T高1.0 T角度36°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：一部反転復元。
	209- 32	口径12.1 受部径15.6 器高3.7 T高1.0 T角度39°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部部はやや深く、底部は半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一深灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 身	209- 33	口径12.0 受部径14.0 器高4.2 T高0.7 T角度35°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部はやややせ。受部は上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底部部は深く、底部は半らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一深灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。

杯 身	209- 34	口径13.2 受部径15.8 高4.5 T高0.9 T角度45°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：青灰色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。
	209- 35	口径13.6 受部径15.2 高3.9 T高1.0 T角度14°00'	たちあがりは上方にのびたのも少し縮む。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/8回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：内灰灰色、外一灰黄色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 身	209- 36	口径13.3 受部径16.0 高4.2 T高0.8 T角度25°00'	たちあがりは内傾したのも端部付近で直す。端部はやや丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：内灰黄色、外一灰黄色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。
	209- 37	口径12.1 受部径14.5 高3.5 T高0.8 T角度30°45'	たちあがりは内傾したのも端部付近で直す。端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部一部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：内灰褐色、外一青灰色。胎土：密。施成：やや良。残存：1/2。反転復元。
杯 身	209- 38	口径13.2 受部径14.8 高3.4 T高0.7 T角度31°00'	たちあがりは内傾したのも中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：青灰色。胎土：密。施成：良好。残存：2/3。一部反転復元。
	209- 39	口径12.4 受部径14.9 高2.3 T高1.0 T角度36°45'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや高い。受部はやや上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗青灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：3/4。
杯 身	209- 40	口径13.5 受部径15.4 高3.8 T高0.7 T角度18°00'	たちあがりは上方にのびたのも、端部付近で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部は上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面7/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：2/3。反転復元。
	92- 40	口径13.7 高3.5 T高0.8 T角度33°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸く。底部は浅く、底部は平らに近く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
杯 身	209- 41	口径12.1 受部径13.7 高6.3 T高0.8 T角度29°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸く。底部は浅く、底部は平らに近く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
	92- 42	口径10.6 受部径15.2 高3.7 T高1.0 T角度29°15'	たちあがりは内傾したのも端部付近で直立する。端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
杯 身	209- 43	口径12.8 受部径14.6 高4.0 T高0.8 T角度25°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部はやや深い。底部はやや深く、底部は平らに近く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
	210- 44	口径14.8 高4.0	体部は外下に下り、口縁は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや底く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井井外面5/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：5/7。一部反転復元。ヘラ記号：大井井外面に「-」あり。
杯 蓋	210- 45	口径12.8 残存高3.1	体部・口縁部は外方に下り端部は丸くおさめる。大井井部は低く平らに近く。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井井外面5/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/4。反転復元。
	210- 46	口径12.9 受部径14.8 高4.1 T高0.9 T角度15°30'	たちあがりは内傾したのも直位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：内一明灰青色、外一淡灰褐色。胎土：密。施成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
高 杯	210- 47	脚底径15.6 残存高10.0	脚部上方1/2程度欠損。脚部は下方に下ったのも外方に回って下り、窓部で下方にのびる。脚部はやや内傾する凹面を成して接続する。中位に2条、脚部上方に1条の浅い沈線をめぐらす。2段2方向に、上端が長い長方形スカッシュをする。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロコ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。施成：良好。残存：脚部の1/6。反転復元。
	210- 48	脚底径11.8 89-48 残存高6.2	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下方に開いており、窓部で下方にのびる。窓部は外方に回る。脚部は内傾する平面を成して接続する。上端に浅い凹線をめぐらす。脚部上方に1条の沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカッシュをすると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロコ回転：左回り。色調：淡灰青色。胎土：密。施成：良好。残存：脚部の2/5。一部反転復元。

寺	210- 49	口徑12.4 基部径8.4 体部最大径13.6 残存高4.3	口頭部下半以下欠損。口頭部はやや外側に「外方にのひ、口頭部下で外方に下り、内側ながら外方に」の上内方にのひ、口頭部に凹凸に沿る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。口頭部の3/6。ヘラ記号：頭部内面に「」あり。
	210- 50	口徑5.8 基部径8.4 体部最大径13.6 残存高6.3	口頭部は基部から内側して上内方にのひ、端部は丸くおさめる。肩部は外側して外下方に張り出し、体部はやや下内方に下り、底部は下内方に下る。底部3/4下方欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側・体部外側1/2回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。内面・肩部外側灰かぶり。
加賀屋 査	210- 51	口徑7.8 基部径8.4 体部最大径13.6 残存高5.2	口頭部は基部から内側して上内方にのひ、端部は丸くおさめる。肩部は外側して外下方に張り出し、体部・底部は下内方に下る。底部4/5下方欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側・体部外側1/2回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。1~3mm程度の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4以下。反転復元。
	210- 52	口徑10.3 基部径11.0 残存高4.8	口頭部は基部から立ちし、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に緩く張り出す。体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。
短 頸 査	210- 53	口徑8.0 基部径9.0 体部最大径20.8 残存高6.8	口頭部は基部から内側して上内方にのひ、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に強く張り出る。体部は下内方に下る。底部・一部底部欠損。体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。(肩部外側にナデ調整時の布か革の使用痕が認められる。)	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色。外一層灰青。胎土は灰色。肩部・体部は内灰青色。胎土：密。1mmの長石を含む。チャコを含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。ヘラ記号：「」あり。肩部外側に土斑点接着。肩部へ体部外側に自然釉付着。肩部外側一部灰かぶり。
	210- 54 89- 54	口徑10.3 基部径10.7 体部最大径21.0 残存高15.6	口頭部は基部から上方にのびて端部は丸くおさめる。肩部は外下方にやや強く張り出し、体部は下方に下り、下内方に下る。底部は丸い。底部中央欠損。体部最大径はやや上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側・体部外側3/4回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外側一部灰かぶり。
庄 口 査	210- 55 89- 55	口徑17.2 基部径10.8 残存高9.4	口頭部は基部から上方にのびたのち、上外方にのひ、口頭部下で外上方に開く。口頭部内側する。平面を成して上内方にのひ、端部は丸くおさめ、内面にまいまい段を作成。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内灰青色、外一層灰青。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。内面一隅灰かぶり。外側一部自然釉付着。
	211- 56	口徑16.8 つづみ径2.8 基部高5.5 つづみ高0.9	体部・口頭部は外下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸く、外側中央に中央部が平らなつまみ付を。体部に1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側7/8回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内灰青色、外一層灰青。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
高 杯 査	211- 57	口徑13.1 受部高15.4 基部径4.5 残存高5.7 T高1.3	立ちあがりは内側したのち中位では横立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのひ、端部はやや丸くおさめる。底部は浅く平らに立つ。脚部は外下方に下ったのち脚部1/3より下で外下方に向いて端部とする。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。全面上に自然釉付着。全体に焼き込み。
	211- 58	基部径4.1 残存高6.7	脚部は外下方に下ったのち、外下方に下る。1/2上方に2条の沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカンを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。脚部内面にしおり11あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一層灰青。胎土：密。2mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。
高 杯 査	211- 59	基部径3.7 残存高8.5	口頭部は欠損。底部はやや高く立ち、底部・体部境界、底部1/4の位置にやや鋭い突をめぐらす。脚部はやや下内方に下ったのち下方に下る。1/2上方に2条の沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカンを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側3/4回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。
	211- 60	脚底深10.2 基部径3.5 残存高11.8 脚高11.0	脚部はやや下内方に下ったのち、外反しつつ外方に下り、脚部は外下方に短くのひ、端部は外傾する回転を成し、内面に段を作成。上方1/3の内面に鈍い2条の沈線と、脚部上方に1条の沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカンを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。脚部内面にしおり11あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外一層灰青。胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/2。脚部一部一隅。一部反転復元。
高 杯 査	211- 61 99- 61	基部径3.4 体部最大径9.8 残存高8.0	口頭部は上方にのひ、欠損。肩部は外下方に下り、体部最大径は下方3/7に位置し、その位置に凹孔を穿つ。底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側回転へ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/2。

壹 壹	211- 62	口徑9.2 つまみ径3.1 基部高3.7 つまみ高0.8	口縫部は外下方に下り、体部は外下方に下りて段を作成。端部はやや弧形。内面端部に内側するかえりを有する。かえりで接着し、端部はやや丸くおさまる。天井部外面部中央に扁平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外縫5/8回転ヘラ削り調整。端部内側ナダ調整。つまみ中央部内側調整。	クロロ回転：右回り。色調：薄灰褐色。外：青灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
	211- 63	口徑7.8 基部径8.0 体部最大径13.6 残存高8.6	口縫部は基部より上方にひび、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に張り出し、体部は下方内方に下り、内方にのびる。体部最大径は上方に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
貯 藏 室	211- 64	口徑9.4 基部径10.2 体部最大径17.2 残存高5.9	口縫部は基部よりやや内横して上方にひび、端部はやや丸くおさまる。肩部は外下方に張り出し、体部は下方内方に下り。底部欠損。体部最大径は上方に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：明灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。
	211- 65	口徑9.8 基部径10.1 体部最大径20.5 残存高11.2	口縫部は基部より重複にひび、端部は丸くおさまる。肩部は外下方に張り出し、体部は下方内方に下り。底部欠損。体部最大径は上方に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
広 口 壹	211- 66	口徑14.6 基部径9.6 体部最大径17.9 残存高19.3	口縫部は基部より上方内方にひびのち外反して外上方へ大きく聞く。口縫部下部では外下方へのひび、口縫部は強めに内横して上方外方にひびのち内横し、端部はやや丸くおさまる。内面にあまり段を作成す。肩部は外下方に張り出し、底部は下方内方にひびのち内方へのひび。体部最大径は上方3/7で位置する。口縫部は上方に残す2条の沈縫をめぐらすが全周しない。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部外面カキ目調整。のち底部外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：左回り。色調：内一灰色、外一黑色。胎土：密。6mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。肩部焼き歪み。
	92- 66		口縫部は外下方にひび、口縫部に半り、端部は丸くおさまる。肩部一部・体部・底部欠損。肩部に左右二対の把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部前面面側面カキ目調整。肩部・体部背面面側面カキ目調整のち回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
提 瓶	212- 67	口徑5.1 基部径4.5 残存高6.8	口縫部はやや外反しながら上方にひび、口縫部でやや上方外方にひび、端部は丸くおさまる。肩部一部・体部・底部欠損。肩部の把手は不规则。口縫部は上方に残す1条の沈縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部前面面側面カキ目調整。肩部・体部背面面側面カキ目調整のち回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
	212- 68	口徑6.8 基部径4.5 残存高10.1	口縫部はやや外反しながら上方にひび、口縫部でやや上方外方にひび、端部は丸くおさまる。肩部一部・体部一部・底部欠損。肩部の把手は不规则。口縫部は上方に残す1条の沈縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部前面面側面カキ目調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
提 瓶	212- 69	口徑5.6 基部径5.3 体部最大径17.6 残存高21.7	口縫部は外反しながら上方にひび、口縫部で内横して上方にひび、端部は丸くおさまる。肩部・体部・底部は正面で蝶形を成し、側面で若干角張った蝶形を成す。肩部に先端が扁平な外方へ向斜する左右二対の把手を付す。背面欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部・底部前面面側面カキ目調整。他は回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：明灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
	93- 69		口縫部は外反しながら上方にひび、口縫部で内横して上方にひび、端部は丸くおさまる。肩部・体部・底部は正面で蝶形を成す。肩部に先端が扁平な外方へ向斜する左右二対の把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。四回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一淡灰褐色、外一淡灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
提 瓶	212- 70	口徑6.7 基部径6.1 残存高6.6	口縫部は外反しながら上方にひび、口縫部でやや内横し、端部はやや丸くおさまる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内一淡灰褐色、外一淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
	212- 71	口徑8.5 基部径7.0 残存高6.5	口縫部は外反しながら上方にひび、口縫部で内横して上方にひび、端部は丸くおさまる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
提 瓶	213- 72	基部径7.0 体部最大径22.2 残存高21.6	口縫部欠損。肩部・体部・底部は正面で蝶形を成す。側面でやや内横して上方にひびる。端部に先端がやや扁平な外方へ向斜する左右二対の把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部・底部前面面側面3/5カキ目調整。他は回転ナダ調整。側面に敷設所の指揮印痕あり。	クロロ回転：右回り。色調：内一淡灰褐色、外一灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。
	93- 72		口縫部欠損。肩部・体部・底部は正面で蝶形を成す。側面でやや内横して上方にひびる。端部に先端がやや扁平な外方へ向斜する左右二対の把手を付す。背面欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部・底部前面面側面3/5カキ目調整。他は回転ナダ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部の2/5以下。反転復元。
壹	217-125	口徑55.0 残存高11.5	口縫部下方1/3以下欠損。口縫部は外輪して外方にひび、口縫部下で外下方にひびたもの上方にひび、段を作成したのちやや内横して上方にひびる。端部は丸くおさまる。口縫部内面に非常にあまり段を作成す。口縫部直下に1条の沈縫を、肩部上方1/3と3条のやや細い沈縫を、底部下方1/3と1条の純い沈縫をめぐらす。上方1/3の沈縫の上下に櫻彫き斜行沈縫文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。	

要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要	218-126	口径23.5 基部径21.3 残存高5.8	口頭部はやや外側して上外方にのび、口縫部下で外下方にのびたのち、やや上方にのびて内側して上外方にのび口縫部内面に至る。肩部は下外方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。肩部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の9/10。反転復元。
	218-127	口径21.4 基部径18.2 残存高13.0	口頭部はやや外側して上外方にのび、口縫部下で下外方にのびたのち上外方にのび、内側して上外方にのび内方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に内側して下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。他の回転ナダ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/6。反転復元。
	218-128	口径20.9 97-128 基部径18.7 体積大入荷0.4 残存高38.5	口頭部は上外方にのび、口縫部は上外方にのびたのちあまい段を成し、内側する半曲を成して上外方にのびる。肩部は外下方に内側して下り、体部は下方・下内方に内側して下る。底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部外側タタキのちカキ目調整。底部外側タタキ。肩部・体部内面凹心円タタキ。底部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内淡灰青色、外一淡灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：7/10。反転復元。
要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要	219-129	口径12.8 基部径9.0 残存高9.0	口頭部は上外方にのびたのち外上方にのび、口縫部は外下方にのびたのちやや内側して上外方にのび口縫部内面に至る。肩部はやや下外方に内側して下る。体部は下方・下内方に内側して下る。底部は丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。底部内面凹心円タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：淡灰黄色。胎土：陶。焼成：不良。残存：口頭部の1/3。反転復元。
	219-130	口径16.9 基部径13.6 残存高6.5	口頭部は外側して上外方にのび上外方にのびる。口縫部は外下方にのびたのち、やや内側して上外方にのび口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方3/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。底部内面凹心円タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：淡灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。
	219-131 96-131	口径15.6 基部径14.2 残存高6.4	口頭部は外側して上外方にのびたのち外上方にのび、口縫部は内側して上外方にのび口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。他の回転ナダ調整。	色調：灰褐色。胎土：密。1～2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の2/3。反転復元。ヘラ記号：頭部外面に「H」あり。
要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要	219-132	口径17.2 基部径15.0 残存高6.0	口頭部は上外方にのび、口縫部は外上方にのびたのち内側して上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方にやや張り出る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。肩部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一面灰色、外一面灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/8。反転復元。
	219-133	口径21.0 基部径17.2 残存高6.4	口頭部は上外方にのび、口縫部は外下方にのびたのち外上方にのびたの外方にのび、内側して上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。底部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：淡灰青色。胎土：陶。焼成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。
	219-134	口径21.6 基部径19.6 残存高6.7	口頭部はやや外側して上外方にのび、口縫部はやや外方にのびたのち上外方にのび、内方にのびて、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。底部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一面灰色、外一面灰青色。胎土：密。1～2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/5。反転復元。
要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要 要	219-135 96-135	口径21.5 基部径17.6 残存高6.9	口頭部はやや外側して上外方にのび、口縫部下で下外方に巻き込み下り口縫部外面には繋げたのち、内側して外方にのび、上外方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方2/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのち基部付近カキ目調整。肩部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一面暗灰色、外一面灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。口頭部外側・肩部内面山形輪付着。
	220-136	口径19.6 基部径17.0 残存高7.7	口頭部は外側して上外方にのび、口縫部下で外下方にのびたのち、内側する半曲を成して上方にのびる。口縫部は丸くおめる。肩部は外下方にやや内側して下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。肩部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。1～2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。
	220-137	口径22.4 基部径19.6 残存高6.6	口頭部はやや外側して上外方にのび、口縫部下で外下方に短くのび、口縫部は外方にのびたのち、内側して上外方にのび、内上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキ。肩部内面不明。他の回転ナダ調整。	色調：内一面暗褐色、外一面灰青色。胎土：密。燒成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。肩部外側灰かぶり。口縫部内面自然輪付着。
要 要	220-138	口径23.8 基部径20.2 残存高7.4	口頭部は外側して上外方にのび、口縫部下で下方にのびたのち外方にのび、やや内側して上方にのび、やや内上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。肩部下方1/3に2条の長い枕綱をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキ。肩部内面青海波タタキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一面灰色、外一面頭部は暗褐色、肩部は灰色。胎土：陶。1～2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。肩部外側灰かぶり。口縫部内外面自然輪付着。

腰	220-139	口徑20.0 基部径20.8 残存高8.0	口頭部は基部外側にあまい段を成し、基部からやや上方にひび。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に内側して下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調整。	色調：暗灰褐色。胎土：胎。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部1/2。一部反転復元。
	220-140	口徑14.4 基部径14.4 体部最大径32.0 残存高20.3	口頭部は基部外側にややあまい段を成し、基部からやや上方にひび。端部は丸くおさめる。肩部は外下方にやや内側して下り、体部は下方1/3ほど欠損。肩部4方向に孔隙がやや扁平な外下方へ傾曲する把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部・体部外側タキ。肩部内面凹面青海波タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：淡灰色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/18。反転復元。口頭部内面、肩部・体部外側に自然釉付器。
腰	221-141	口徑16.5 基部径13.5 残存高7.0	口頭部は上方にのびたもの口縫部で外上方にひび。口縫部は端部に内側して外上方にのびたもの上方にひび。口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：地灰青色。胎土：胎。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/5。合成復元。ヘラ記号：口頭部外面に「」あり。口頭部内外面に自然釉付器。
	221-142	口徑16.2 基部径14.0 残存高6.5	口頭部は外側して「」外方にのび。口縫部は内側して外上方にのびて上方にのびたもの上方にひび。口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：淡灰色。胎土：胎。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。焼成：良好。残存：口頭部の1/9。反転復元。
腰	221-143	口徑17.0 基部径16.3 残存高5.2	口頭部は外側して「」外方にのび。口縫部で外下方にのびたもの、やや内側して「」外方にのび、内上方にひび。口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：暗灰青色。胎土：胎。焼成：良好。型成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。
	221-144	口徑28.3 残存高11.5	口頭部下方1/3以下欠損。口頭部はやや外側して「」外方にのびたもの外方にひび。口縫部下で下内方にひび下外方にひびのうち上方にひび、あまい段を成したのち内側して外方にひび、上内方にひび縫部外側でやや上方にひび。端部は丸くおさめる。口縫部内面にあまい段を成す。口縫部底面に3条、頸部上方1/3の位置に2条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上に櫛突き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	色調：暗灰青色。胎土：胎。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/4。反転復元。
腰	221-145	口徑31.0 残存高6.4	口頭部下半欠損。口頭部はやや外方にひび。口縫部下で外下方にひびたのうち上方にひび、やややあまい段を成したのち上内方にひび、やや外側して上内方にひび。端部は丸くおさめる。口縫部内面に段を成す。口縫部底面に2条の沈線をめぐらし、頸部上位に幾条かの沈線をめぐらすようである。口縫部底面と頸部中位の沈線の間に櫛突き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	色調：内：灰褐色。外：淡灰褐色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/24以下。反転復元。口頭部外面・部灰かぶり。口頭部内面に自然釉付器。
	221-146	口徑37.8 残存高18.0	口頭部基部付近欠損。口頭部は上方にひびたの外側して上方にひび、口縫部下でやや下方にひびたの内側で内側して上方にひび。端部は丸くおさめる。口縫部内面にあまい段を成す。口縫部直下に3条の沈線を、頸部上方1/3の位置に2条、頸部下方1/3の位置に2条のやや浅い沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上に櫛突き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整のち回転ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。(頸部外側基部付近は強いナゲ。)	ロクロ回転：左回り。色調：地灰褐色。胎土：胎。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/6以下。反転復元。
腰	222-147	口徑22.5 基部径19.0 残存高10.5	口頭部は外側して上方にひび。口縫部下で外下方にひびたのうち上方にひび、やや内側して「」外方にひびたの内側に平ら。肩部は外下方にやや内側して下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキ。肩部内面青海波タキ。	色調：暗灰褐色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/8以下。口頭部外面に自然釉付器。
	222-148	口徑23.0 基部径21.0 残存高9.7	口頭部は外側して上方にひび。口縫部はやや内側して「」外方にひびたの内側に平ら。口縫部内面に平ら。肩部は外下方に内側して下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調整。肩部内面凹面青海波タキ下半は開口凹タキ。他は回転ナゲ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：胎。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8以下。

	222-149	L1径49.6 残存高10.4	口顎部下方1/3以下欠陥。口顎部は外側して上方にのび、口顎部下ではほぼ垂直に下ったものと上方にのび、段を成したのと直角にのび上内方にのびる。端部は丸くおさまる。口顎部前面にややあまい段を成す。口顎部直下に2条、顎部上方1/3に2条、顎部下方1/3に2条の沈線をめぐらし、上方1/3の沈線の上部に櫛状を斜行欠陥文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。1~4mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口顎部の1/18。反転復元。口顎部外面一部に自然釉付着。
要	222-150	口径46.6 残存高14.3	L1顎部基部付近欠損。L1顎部はやや外側して上方にのび、口顎部下で内側して下方にのびたものと内側して上方にのび、ややあまい段を成したものや外側して上方にのび、内側して上方にのびる。端部は丸くおさまる。口顎部直下に2条のやや長い沈線をめぐらし、顎部上方1/3に2条、顎部下方1/3に2条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上部に櫛状を斜行欠陥文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。顎部外面カキ目調整のち回転ナダ調整。他の回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：L1顎部1/6以下。反転復元。
要	222-151	口径50.8 基部径32.7 残存高16.9	口顎部は基部から上方にのびたものと外側して上方にのび、口顎部下でやや外下方にのびたものと上方にのびる。段を成したものと上方にのびる。端部は丸くおさまる。口顎部外面にあまい段を成す。顎部は外下方向に下る。口顎部直下に2条、顎部上方1/3に2条の沈線をめぐらし、顎部下方1/3にやや純い2条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上部に櫛状を斜行欠陥文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。顎部外面カキ目調整のち回転ナダ調整。他の回転ナダ調整。施文の底厚は口顎部直下と上方1/3の沈線をめぐらしたものの上に上方の施文を斜行欠陥文を施し最後に下方1/3の沈線をめぐらしていと観察される。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰色、外、灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口顎部の1/4以下。合成復元。
要	223-152	口径13.3 基部径12.1 残存高8.5	L1顎部は外側して上方にのび、L1顎部は外側にのびたものと内側して上方にのび、L1顎部前面に至る。顎部は外下方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。2mm~4mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/9。反転復元。外側灰かぶり。口顎部外面自然釉付着。
要	223-153 96-153	口径14.0 基部径13.0 体部最大径24.8 残存高12.7	L1顎部は外側して上方にのび、L1顎部下で外下方にのびたものと内側して上方にのび、L1顎部前面に至る。顎部は外下方に下り、体部は下方に下る。体部一部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面カキ目調整のち回転ナダ調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2/3。底部外面2箇所に环窓片が接着する。口顎部外面、肩部外面灰かぶり。L1顎部外面に自然釉付着。
要	223-154 97-154	口径21.5 基部径18.4 体部最大径45.1 高さ45.8	口顎部はやや外側して上方にのび、口顎部はやや上方にのびたものと上方にのび、内下方にのび、内上方にのび、L1顎部前面に平ら。肩部は外下方に下り、体部は内側して下方に下る。底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面カキ目調整。体部下外表面、底部外面タッキ。肩部基部付近内面、底部内面青海波タッキ。肩部前面、体部内面同心円タッキ。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2/3。底部外面2箇所に环窓片が接着する。口顎部外面、肩部外面灰かぶり。底部外面、体部外面、底部外面に自然釉付着。
要	224-155	口径21.2 基部径19.2 残存高9.5	口顎部は外側して上方にのび、L1顎部下で内下方にのびたものと短く上方にのび、非常にあまい段を成したものと上方にのび、内側して上方にのびる。L1顎部は丸くおさまる。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タッキ。L1顎部上面半青海波タッキ。底部下面下半同心円タッキ。他の回転ナダ調整。	色調：明灰青色。胎土：密。3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口顎部の1/4。反転復元。
要	224-156 96-156	口径27.4 基部径20.1 残存高9.7	口顎部は外側して上方にのび、L1顎部下で外下方にのびたものと上方にのび、内側して上方にのびる。L1顎部は丸くおさまる。肩部は外下方に下る。肩部下方半以下欠損。肩部上方に櫛状を斜行欠陥文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部基部付近内面のちカリ目調整。肩部基部付近内面L1ののみ同心円タッキ。肩部内面下半青海波タッキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一淡灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：L1顎部の1/2。
要	224-157 98-157	口径21.6 基部径18.8 体部最大径45.3 高さ44.0	口顎部は上方にのび、L1顎部は内側して上方にのびたものと上方にのび、L1顎部前面に平ら。肩部はやや内側して下方に下り、体部は内側して下方に下り、底部はやせらわ。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タッキのちカリ目調整。体部外面、底部外面タッキ。肩部基部付近内面、底部内面青海波タッキ。底部内面下半、体部内面同心円タッキ。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一淡灰色、外一淡灰青色。胎土：密。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：3/5。一部反転復元。ヘラ記号：頭部外面に「ナ」あり。底部外面に着目L1顎部付近内面青海波タッキ。L1顎部外面、頭部外面灰かぶり。L1顎部外面、底部外面、体部外面、底部外面、白釉内輪付着。

臺 臺	225-158	口徑24.5 残存高3.8	口縫部下平以下灰樹。口縫部は上方にのび、口縫部下で下方にのびたり内縫して上方にのび、上方にのび、口縫部内縫に平らる。底部はやや内縫して下方に下る。底部以下灰樹。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：明灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。模成：良好。残存：口縫部の2/3。口縫部外側に自然階付着。
	225-159 95-159	口徑19.2 基部径16.8 残存高9.0	口縫部はやや外縫して上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのもやや内縫して上方にのび、上方にのび、口縫部内縫に平らる。底部はやや内縫して下方に下る。底部以下灰樹。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側にタキ。肩部内面に半青海波タクタキ。下半同心円タクタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一暗灰色、外一淡灰青色。胎土：密。模成：良好。残存：1/12以下。反転復元。外側灰かぶり。
臺 臺	225-160 98-160	口徑50.3 基部径32.8 体部最大径72.0 残存高66.0	口縫部はやや外縫して上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのもやや内縫して上方にのび、上方にのび、口縫部内縫に平らる。底部は丸くおさめる。肩部はやや下方に下り、底部はやや下方に下る。底部下方1/3以下灰樹。口縫部直下に3条(部分的に2条)のやや短い沈澱を、底部上方1/3の長い沈澱をめぐらし、その間に繩括き斜行沈澱文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側・体部外側タキ。肩部内面同心円タクタキ。口縫部内面同心円タクタキ。他は回転ナダ調整。(原器下面下方2/3・口縫部内面には回転ナダ調整後に不整方向ナダを施す。その双方のナダには布・革の使用感が認められる。)	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。模成：良好。残存：1/3。一部反転復元。ヘラ記号：肩部外側に「-」あり。口縫部外側一部灰かぶり。
	226-161 99-161	口徑22.8 基部径19.1 体部最大径37.9 残存高35.5	口縫部は外縫して上方にのび、口縫部下でやや下方にのびたのもやや外縫して直進のもの、内縫して上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は上方に下り、底部は内縫して下方に下る。底部下半以下灰樹。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのち回転ナダ調整。肩部外側・体部外側タキのちカキ目調節。底部外側タキ。肩部基部附近・底部内面青海波タクタキ。肩部内面・体部内面同心円タクタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色、外一部は淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。模成：良好。残存：4/5。ヘラ記号：肩部・体部外側に「-」あり。
臺 臺	226-162 99-162	口徑23.8 基部径20.4 体部最大径42.9 残存高36.3	口縫部はやや外縫して上方にのび、口縫部下で下方にのびたのも直進にのび、内縫して上方にのびる。口縫部端部は丸くおさめる。底部内面に非常に多い段成をする。肩部は内縫してやや下方に下り、底部はやや内縫して下方に下る。底部下方1/4以下灰樹。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ目調節のち回転ナダ調整。肩部外側・体部外側タキのちカキ目調節。肩部内面基部附近・底部内面青海波タクタキ。肩部内面・体部内面同心円タクタキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡灰青色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。模成：良好。残存：2/3。一部反転復元。ヘラ記号：肩部外側にあり。

表 22 狹山池 3号窯灰原トレンチ内出土遺物・表面採集遺物観察表

(Tはたちあがり表示)

基種	表面	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	213- 73	口徑14.2 高3.6	体部・口縫部は下方に下り端部は丸くおさめる。大井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側4/5回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一淡褐色、外一灰褐色。胎土：密。1~3mmの長石・石英を若干含む。模成：良好。残存：1/3。合成復元。内面・大井部外側一部に自然難付着。
	213- 74	口徑13.4 高3.7	体部は下方に下り、口縫部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側の10回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰褐色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを含む。模成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：大井部外側に「-」あり。外側一部灰かぶり。
杯 蓋	213- 75	口徑14.8 高3.8	体部・口縫部は下方に下り端部は丸くおさめる。天井部は低くや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部内面回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。模成：良好。残存：1/3。反転復元。
	213- 76	口徑14.2 高4.2	体部・口縫部はやや内縫して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低くや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側4/5回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。模成：良好。残存：1/3。反転復元。
杯 蓋	213- 77	口徑13.9 高3.7	体部はやや下方に下り、口縫部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。天井部中央は焼け歪み凹む。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側2/5回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。模成：良好。残存：1/4。反転復元。
	213- 78	口徑12.9 高4.2	体部は上方に下り、口縫部は直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側3/5回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一暗灰青色、外一暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。模成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	213- 79	口徑12.2 高4.4	体部・口縫部はやや内縫して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側6/6回転ハラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。模成：良好。残存：1/4。反転復元。

杯 蓋	213- 80	口径13.8 器高4.0	体部は下外方にドリ、口縁部は下方にくる。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：淡灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/3。合版後元。
	213- 81	口径14.4 器高3.6	体部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。石英を含む。焼成：良好。残存：1/5。反転後元。
杯 蓋	213- 82	口径12.0 器高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は外反し、端部はやや親く、端部内面は内傾する。天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。石英を含む。焼成：良好。残存：1/5。反転後元。
	213- 83	口径13.1 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。天井部やや焼けむ。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：やや粗。3mm以下の長石を多く含む。燒成：良好。残存：1/2。合版後元。
杯 蓋	213- 84	口径14.4 残存高4.1	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1~3mmの長石を含む。燒成：良好。残存：1/4。反転後元。胎内に自然発射物。
	213- 85	口径13.0 残存高3.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面7/8回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：良好。残存：1/4。反転後元。
杯 蓋	213- 86	口径13.8 残存高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面6/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：良好。残存：1/5。反転後元。
	213- 87	口径13.8 残存高3.4	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ直進に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面5/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：良好。残存：1/4。反転後元。
杯 身	213- 88	口径11.9 受部径13.4 残存高4.3 T 高0.9 角度19°30'	たちあがりは基部より直立し端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面2/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。燒成：良好。残存：1/4。一部反転後元。
	94- 89	口径12.8 受部径15.4 高4.2 T 高1.1 角度26°15'	たちあがりは内横してのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、その上面は内面を成し、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は半円。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：良好。残存：1/4。反転後元。
杯 身	213- 90	口径11.8 受部径14.5 高3.7 T 高0.9 角度36°45'	たちあがりは内横したのち、端部で上外方にのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面1/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色。外一様青色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。燒成：良好。残存：1/3。合版後元。底部外側面に自然発射物。
	94- 90	口径11.9 受部径14.5 高3.7 T 高0.9 角度36°45'	たちあがりは内横したのち、中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面1/9回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色。外一様青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。残存：1/4。反転後元。
杯 身	213- 91	口径14.9 受部径16.7 高3.7 T 高0.9 角度15°00'	たちあがりは基部より直立し端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面9/10回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色。外一様青色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。燒成：良好。残存：1/3。合版後元。底部外側面に自然発射物。
	213- 92	口径13.2 受部径15.2 残存高3.8 T 高0.9 角度21°00'	たちあがりは内横したのち、中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面4/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：不良。残存：1/2。反転後元。
杯 身	213- 93	口径11.9 受部径14.5 残存高3.7 T 高1.0 角度30°15'	たちあがりは内横したのち、中位でやや上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。燒成：良好。残存：1/5。合版後元。底体部外側面に自然発射物。
	213- 94	口径11.4 受部径14.0 残存高3.4 T 高0.9 角度40°30'	たちあがりは内横してのび、端部はやや丸くおさめる。受部はやや上方にのび、その上面は凸面を成し、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや深い。底部は半円欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。燒成：良好。
杯 身	214- 95	口径11.8 受部径14.2 残存高2.8 T 高1.1 角度32°30'	たちあがりは内横したのち端部が逆行でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はほど水平に近くのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。燒成：良好。
	214- 96	口径10.8 受部径13.4 残存高3.2 T 高0.9 角度41°15'	たちあがりは内横したのち端部が逆行でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はほど水平に近くのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。燒成：良好。

杯 身	214- 97	口径12.3 95- 97 受部径15.3 器高3.3 T高1.1 T角度38°00'	たちあがりは内縫したもの中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は横幅本水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はねば平。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
	214- 98 95- 98	口径11.6 受部径14.0 器高3.4 T 高0.8 T角度45°30'	たちあがりは内縫してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや細く、ねば平。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
杯 身	214- 99	口径14.6 受部径17.1 器高3.6 T 高0.9 T角度30°30'	たちあがりは内縫したもの中位で下方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや細く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
	214-100	口径14.6 受部径17.4 残存高4.9 T 高1.3 T角度30°00'	たちあがりは内縫したもの中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部は丸く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/6回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
高 杯	214-101 95-101	脚部径9.8 基部径5.8 残存高4.7 脚部3.8	脚部は半圓。脚部は外下方に開いて下り、足元にさらに外下方へ開く。前脚部はやや外輪する平面を成して、根元部内面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。焼成：良好。
	214-102 95-102	脚部径9.8 基部径5.7 残存高4.9 脚部4.4	脚部は下方に下ったもの中位で外下方に下り、脚部で外下方に開く。端部は外方にやや肥厚して丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
真 珠	214-103 95-103	口径11.0 基部径9.5 残存高7.0 脚部4.4	口頭部はやや内傾気味に上方へのひたのち反して上方にのび、底部付近で内側して上方にのびる。口頭端部内面にあまい段を作成。口頭部は下外方へ下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タキ。他は回転ナダ調整。	色調：灰白色。胎土：密。焼成：やや不良。
	214-104 95-104	口径8.6 基部径9.0 体部最大径15.3 器高9.8	口頭部は底部よりは直立したのち端部付近でやや内傾する。口頭端部は丸くおさめる。肩部は外方へ張り出し、体部は内側して下内方へ下る。底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。
提 瓶	214-105 95-105	口径8.6 基部径5.1 残存高13.4	口頭部は外反して上方にのびたものも外上方にのびる。口頭部第1段を成し、腰・凹面をしてやや外方へのびる。口頭端部は内縫したもの中位で内側へ凹面を作成。肩部・底部は外下方へ下外方へ内側して下る。肩部に外下方へ屈曲する左右に一对の把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部前面・体部側面3/7・肩部外面カキ目調節。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。
	215-106 94-106	口径12.1 基部径3.4 残存高10.3	体部・口頭部は上方にのびる。端部は丸くおさめる。底部は深く、底部はやや丸い。底部・体部境界に接地。底部上方1/2の位置にやや純く・瘦めめぐらす。脚部は下内方に下ったのち、やや下外方へ下る。脚部中に純く1条の沈线条をめぐらす。2段の方向のみに長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。杯部内外一面・底部外側・脚部かぶり。
高 杯	215-107	口径13.2 受部径16.0 基部径4.6 残存高4.5 T 高1.0 T角度37°00'	たちあがりは内縫してのび、端部はやや丸い。受部は上方にのび、端部はやや細くおさめる。たちあがりは内縫の底部にあまい段を作成。底部は浅く、底部はやや丸い。脚部は下内方に下ったのち、やや下外方へ下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：杯部の1/3。反転復元。外側一部・底部灰化・脚部かぶり。
	215-108	脚部径13.0 残存高8.2	脚部基部行近似。脚部は外輪して下内方に下ったのち下外方に下り。底部上方1段を成して内側をめぐらす。下方に下る。脚部はやや内側する平面を成して外側で接地する。器底の茶の上方にやや純く1条の沈线条をめぐらす。3段方に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：脚部の1/4以下。反転復元。内外灰化かぶり。外側に自然剥付有。
提 瓶	215-109 94-109	口径6.1 基部径4.3 残存高3.7	口頭部は上方にのび、口頭部で短く外方にのびたものも外方にのび、上方にのび、底部内面に至る。肩部下方欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口頭部の3/4。口頭部内面灰化かぶり。ヘラ記号：脚部外間に「V」あり。
	215-110	口径11.6 基部径10.4 残存高4.8	口頭部は上方にのび、口頭部下で短く下外方にのびたものも外方にのび、上方にのび、内縫して上内上方にのび、器底内面に至る。底部は外下方に張り出す。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外面タキ。肩部内面青釉淡彩タキ。他は回転ナダ調整。	色調：口頭部-淡青色、他一暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。

探 査 板	215-111	口径8.1 基部径6.0 体部最大径16.0 残存高3.4	口頭部は外側して上方にのび、口縫部は内側して上方にのび、上内方にのび、口縫部内面に至る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一 液灰色、外一暗灰色。胎土: 密。 1~3mmの長石を若干含む。燒 成: 良好。残存: □頭部元形。外 部灰かぶり。内外面に自然釉付着。
	215-112 94-112	口径11.6 基部径7.9 体部最大径16.0 残存高11.0	口頭部は上方にのび、口縫部の 断面は方形で端部は丸くおさめる。 体部は外側したのち内側して下方に 下り、体部は内側して下方に下 る。底部は内下方に下がる下半を欠 損する。体部最大径はやや上位に位 置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面2/3回転ヘラ削 り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡 灰褐色。胎土: 密。1mmの長石を 若干含む。チャートを含む。燒 成: 不良。放置。残存: 1/4。一部 反転復元。
査 査	215-113 94-113	口径12.2 基部径10.0 体部最大径17.8 残存高13.9	口頭部は上方にのびたのも上内方 にのび、口縫部下で外方にのびたの ち上位方にのび、内側してやや上位 方にのび、口縫部内面に至る。肩部 は下方に下り、体部は内下方に下 る。底部は内下方に下がる下半を欠 損する。体部最大径はやや上位に位 置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面1/3回転ヘラ削 り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内 淡灰褐色、外一暗灰色。胎土: 密。 焼成: 良好。残存: 1/4以下。一部 反転復元。内外面に自然釉付着。
	215-114 94-114	口径10.6 基部径9.9 体部最大径23.5 残存高18.1	口頭部は基部からやや下方方に のび、口縫部下で非常におましい段を 成して下方にのびる。端部はほぼ半 面を成して下方に内側する。肩部 は下方に強引にし、体部はやや内 側して下方に下る。底部中央欠損。体 部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面・体部外面カキ目調整。の ち底部外側・体部外側1/3回転 ヘラ削り調整。他は回転ナダ調 整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰 色。胎土: やや密。3mm以下の 長石を多く含む。チャートを含む。 焼成: 良好。堅密。残存: 5/6。口 縫部内面に自然釉付着。口縫部端 部・肩部外側・底部外側に自然釉付 着。
査 査	215-115	口径23.6 同内径21.2 残存高7.0	体部は上方にのび、口縫部下で外 方にのびたのも内側して下方に方 にのび、外側して上方方にのび、端部 は丸くおさまる。底部はやや内下方 に下がる。下半以下を欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・カキ目調整。他は回転ナダ調 整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一 淡灰褐色、外一暗灰色。胎土: 密。 焼成: 良好。残存: 口縫部の1/7。反 転復元。体部・口縫部外側に自然 釉付着。
	217-124	口径21.3 基部径18.5 残存高8.0	口頭部は外側して上方にのび、口 縫部下でやや下方方にのびたのも上 方方にのび、2箇所で非常にあまい 段を成し、やや内側して下方に方 にのび、口縫部内面に至る。口縫部・顎 部境界内面は非常におましい段を成 す。肩部はやや内側して下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面・カキ目調整。口 縫部内面青海波タッキ。他は回転 ナダ調整。	色調: 淡灰褐色。胎土: 密。燒 成: 良好。残存: 口縫部の1/7。反 転復元。口頭部内面に自然釉付 着。
査 査	227-163	口径14.2 基部径11.2 残存高5.7	口頭部はやや外側して上方にの び、口縫部下で上方にのびたのも内 側してやや内上方に方のび、口縫部内 面に至る。肩部は下方に下る。肩 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タッキのちカキ目調整。口 縫部内面不規則。他は回転ナダ調 整。	色調: 淡灰褐色。胎土: 密。燒 成: 良好。残存: 口頭部の1/4。反 転復元。
	227-164	口径15.6 基部径13.4 残存高6.2	口頭部は上方にのび、口縫部下で やや下方方にのびたのも上方にの び、やや内側を段成したのも上方に のび、端部は丸くおさまる。胎 部は下方に下る。肩部下方1/3以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側タッキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タッキ。他は回転 ナダ調整。	色調: 内一頭部は淡灰色、肩部 は暗灰色、外一灰褐色。胎土: 素。 1mmの長石をわずかに含む。燒 成: 良好。残存: 1/4以下。残存: □頭部の1/4。反転復元。口頭部 内外面灰かぶり。肩部内面に自然 釉付着。
査 査	227-165	口径16.4 基部径13.9 残存高6.4	口頭部はやや外側して上方にの び、口縫部はやや外側して上方にの び、上方方にのび、口縫部内面に 至る。肩部は下方に下る。肩部下 方1/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側タッキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タッキ。他は回転 ナダ調整。	色調: 淡灰褐色。胎土: 密。2mm 以下の長石を若干含む。燒成: 良 好。残存: □頭部の1/4。反転復 元。
	227-166	口径19.6 基部径17.2 残存高5.2	口頭部は外側して上方にのび、口 縫部下で下方にのびたのも内側し て上方にのび、非常にあまい段を 成して口縫部は上方にのび、丸く おさまる。胎部は下方に下る。肩 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側タッキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タッキ。他は回転 ナダ調整。	色調: 内一頭部は灰色、肩部は 暗灰色。外一灰褐色。胎土: 素。 1~2mmの長石を若干含む。燒 成: 良好。残存: □頭部の1/4。反 転復元。外側・口頭部内面灰 かぶり。外側・肩部内面に自然 釉付着。
査 査	227-167	口径20.2 基部径16.1 残存高6.0	口頭部は外側して上方にのび、口 縫部下で下方にのびたのも上方に のび、内側してやや上方方にのび、口 縫部内面に至る。口縫部内面にあ まい段を成す。肩部は下方に下る。 肩部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側タッキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タッキ。	色調: 淡灰褐色。胎土: 素。4mm 以下の長石を若干含む。燒成: 良 好。残存: □頭部の1/4。反転復 元。外側・口頭部内面に自然 釉付着。
	227-168	口径21.4 基部径19.1 残存高4.8	口頭部は上方にのび、口縫部下で 近く下方にのびたのも上方にの び、内側してやや上方方にのび、口 縫部内面に至る。口縫部内面にあ まい段を成す。肩部は下方に下る。 肩部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調: 淡灰褐色。胎土: 素。1~2mm の長石を若干含む。燒成: 良好。 残存: □頭部の1/3。合成復元。 ヘラ記号: □頭部外側に「△」あ る。

要	227-169	口径19.6 基部径17.4 残存高9.9	口縁部は外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたものと外上方にのび、内側して上外方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内 噴灰色。外 噴灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/3。反転復元。
要	227-170	口径20.8 基部径16.4 残存高7.3	口縁部は外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたものと外上方にのび、内側して上外方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：噴灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/4。反転復元。
要	228-171	口径19.7 基部径16.7 残存高7.1	口縁部はやや外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側にのび、口縁部内面に至る。肩部はやや内側して外下方に下る。肩部下方1/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内 噴灰色。外 噴灰色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の3/4。
要	228-172	口径20.0 基部径16.6 残存高8.5	口縁部はやや外側して上方にのびたのもと外方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：噴灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部の1/3。反転復元。内外面に自然釉付着。
要	228-173	口径23.2 基部径19.6 残存高7.8	口縁部はやや外側して七外方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側して外下方にのびたのもと外方にのび、内側にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内 噴灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/4。合成復元。
要	228-174	口径21.5 基部径17.2 残存高11.0	口縁部は上方にのびたのもとやや外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側して上方にのび、内側にのび、口縁部内面に至る。肩部は内側してやや外下方に下る。肩部下方1/7以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内 噴灰色。外 噴灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/4。合成復元。口縁部内外面に自然釉付着。
要	228-175	口径21.6 基部径18.2 残存高14.1	口縁部はやや外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側して上方にのび、内側にのび、口縁部内面に至る。肩部は内側してやや外下方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面青海波タキ。下半は同心円タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内一団頸部は噴灰色、肩部は噴灰色、外一団底は噴灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。内外面に自然釉付着。
要	229-176	口径24.6 基部径19.8 残存高7.7	口縁部は外方にのび、口縁部で下にく下外方にのび、内側して上方にのび、内側に上方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に張り出す。肩部下方1/2以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タキ。肩部内面青海波タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：噴灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部の1/3。反転復元。
要	229-177	口径20.0 基部径17.5 残存高11.7	口縁部は上方にのび、口縁部は外上方にのびたのもと外方にのび、内側して上方にのび、内側に上方にのび、口縁部内面に至る。肩部は下外方に内側して下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ日調整のち回転ナナ子調整。肩部外側タキのちカキ日調整。肩部内面下半は青海波タキ。下半は同心円タキ。他は回転ナナ子調整。	色調：内 噴灰色。外 明灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。ヘラ記号：頸部外間に%あり。
要	229-178	口径38.7 基部径26.0 残存高20.4	口縁部は外側して上方にのび、口縁部で下にく下外方にのびたのもと外方にのび、内側して上方にのび、内側に上方にのび、口縁部内面に至る。口縁部内面にあまい段を成す。口縁部内面に1条、難部上方1/3の位置に2条の細い沈線をめぐらし、難部下方1/3の位置に2条のやや細い沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の下に網状き裂行沈線文を有する。なお、斜行沈線文は沈線をめぐらしたのちに施す。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ日調整。頸部外側1/4カキ日調整のち回転ナナ子調整。他は回転ナナ子調整。(難部内面基部付近はやや強いナナ子)	ロクロ回転：左回り。色調：内 噴灰色。外一端灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：口縁部の1/5。反転復元。内外面一部灰かぶり。内外面に自然釉付着。

## IV 狹山池4号窯

### 1 調査経過

狹山池調査事務所では、狹山池東岸部分において実施した一連の発掘調査によって、過去の分布調査で確認されていた5~6ヶ所の須恵器散布地は、<sup>⑨</sup>2点の須恵器窯灰原と東岸部の遺構群に伴うものと判断していた。ところが1997年1月に、東岸の南端から北端へ向けて、工事用簡易道路の盛土作業が開始された際、工事担当者が狹山遊園プールの西側にあたる部分で須恵器片の大量散布を確認した。報告を受けて現場へ急行すると、狹山遊園敷地内からの雨水管から流出した水流によって、東岸の地表面が溝状にえぐられ、その周囲に須恵器の蓋杯や壺の破片が散乱している状況が確認された。そこで当該地点においてバックホーにより、南北方向に長さ約10mの試掘溝を掘削し、上層断面を観察した。その結果、地表下約60cm~100cmの箇所に、厚さ10cm以下の灰層がほぼ全域において確認された。最初に実施したトレンチ調査においては、この灰層が遺存する箇所は分厚い池の堆積土に覆われており、調査不可能であった。その時に設定したトレンチは窯本体の検出を目的としていたため、狹山遊園敷地寄りの高い箇所に設定しており、この灰層の遺存を確認することができなかった。この新規に検出された窯を狹山池4号窯と呼称する。発掘調査は1997年1月~2月まで実施した。

### 2 遺構と層序

狹山池4号窯の灰層は、斜面上から流入してきたと考えられる暗灰色砂礫土の上面を被覆するよう広がっている。段丘面に相当する地山面は、調査区東端で標高77.25mを測り、池側の調査区西端では標高72.75mまで落ち込んでいる。暗灰色砂礫土層は30cm~80cmの厚みで調査区内ほぼ全域の地山面を覆う。土層を観察する限りでは、自然に崩落した土層ではなく、何らかの人為的要因による土層である可能性が高いように思われる。その上面を被覆する灰土層は非常に薄く、その厚みは10cm以下である。黒色もしくは暗灰色のこの灰土層内とその上面から出土した遺物は須恵器のみであり、他の時代の遺物の混入はみられなかった。

灰土層が広がる範囲は、南北20m、東西12mに及ぶが、標高75.0m付近の調査区西端における灰土層の厚みはわずか1cm程度であり、部分的に灰土層が途切れる箇所も多いために斑状の広がりを呈している。最も厚く灰土層が堆積しているのは、標高76.0m~76.75m付近である。局部的には15cm程度の厚みがあり、須恵器の包含量もこの付近が最も多い。灰土層の上には、20cm~70cmの厚さで灰褐色砂質土層がある。この上層もまた、締まりが悪い。その上には部位によっては10cm~60cm程度の厚みの灰色系砂質土層があり、さらにその上層は褐色砂礫土の表土層となる。

### 3 出土遺物

狹山池4号窯の灰層内もしくは灰層直上から出土した遺物の総量はコンテナ20箱分である。窯壁片は数点出土しているが、他の灰原における窯壁片の出土量と比べると少量である。

以下、本窯の灰土層から出土した須恵器の概要を述べる。なお、各個別の遺物観察結果については表23の遺物観察表を参照されたい。

上層灰原中に含まれていた須恵器のうち、岡化が可能であったものの個体数は70点である。その器種別の個体数は次の通り。

杯H身16点・杯H蓋14点・杯G身3点・杯G蓋10点・短脚高杯(脚部のみ)5点・長脚無蓋高杯(脚

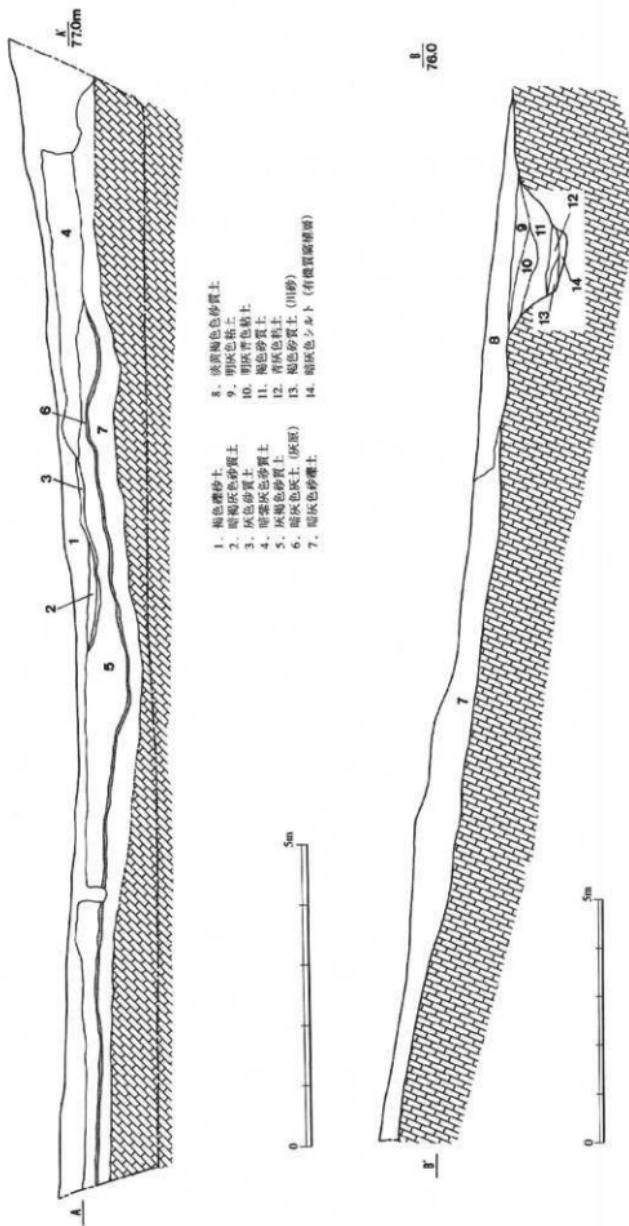


図230 黄金山地4号窓戸原土壤断面図 (1/50・1/100)

部のみ) 2 点・提瓶 2 点・  
甕 8 点・蓋蓋 4 点・短頸壺  
1 点・長頸壺 3 点・長頸壺  
(口頭部のみ) 3 点・平瓶 5  
点・平瓶(口頭部のみ) 4 点

杯 H 身の口径平均値は  
10.2cm、杯 H 蓋の口径平  
均値は 11.0cm である。杯  
H 身の法量は、図317のよ  
うな数値分布を示している。

杯 G 身の口径平均値は  
9.5cm、杯 G 蓋の口径平  
均値は外径が 11.3cm・内径  
が 9.3cm である。杯 G 蓋  
は、天井部外面中央に擬宝  
珠様つまみを付すものと乳  
首形つまみを付すものとが  
ある。

長脚 2 段の無蓋高杯 47 は、  
脚部にスカシをもたないタ  
イプのものである。

平瓶は、69・70 をみると  
ぎり、体部が下外方に比較  
的緩やかに張り出して肩部が丸みをもつタイプのようである。

4 号窯灰土層から出土する中で多い器種は杯であるが、その他の器種でとくに多く出土するのが平  
瓶と長頸壺である。図示した個体の他にも図化不可能な小片をも含めると、かなりの数量が破棄され  
ており、これは本窯の生産傾向とすることができる。また、平瓶の形態も TK217 型式の定型化し  
たものだけでなく、TK209 型式の提瓶体部を横倒しにし、上面に頸部を取り付けたようなものも含  
まれている。

#### 4 小 結

狭山池 4 号窯の灰土層は、多くの箇所では 1cm 程度の厚みしかなく、灰土層が途切れる箇所も多  
いために疵状の広がりを呈している。こうした検出状況から、不確定な要素が多いが、当該調査区で  
検出した灰土層は、中位段丘崖裾に堆積していた灰原が何らかの理由によって 2 次堆積したものであ  
る可能性が高いと考えられる。

包含される須恵器には、明確な型式幅を示す資料は含まれておらず、単一の窯によって形成された  
灰原の遺物組成を反映しているように思われる。

杯では、杯 H と杯 G の両器種が生産されていた。杯 H と杯 G の生産比率は、1:1 まではいかない  
が、それに近い比率で生産されていたと思われる。杯 H 身の法量は、図317で明らかなように、その  
数値分布の中心が、狭山池 1 号窯や東池尻 1 号窯よりも低い数値にあり、TG10-I 集中域と TG11-

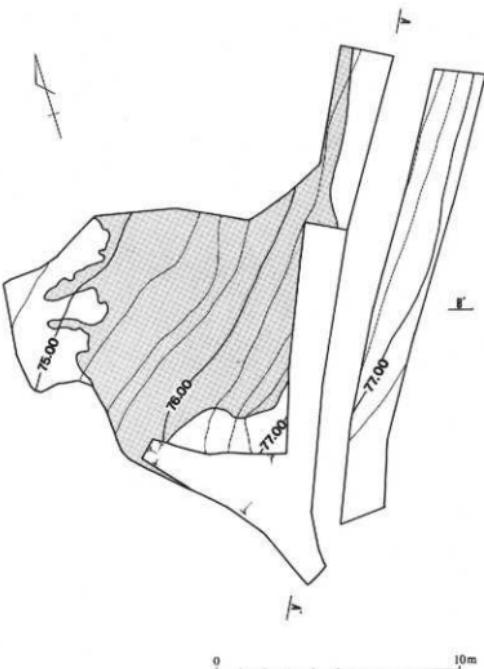


図 231 狹山池 4 号窯灰原平面図

II 集中域の双方にまたがる分布を示している。また、長脚 2 段無蓋高杯の脚部には、長方形やスリット状のスカシがみられない。ただし、杯 G 蓋のツマミ形状は、擬宝珠様つまみと乳首形つまみがある。

これらのことから、本窯で生産された須恵器は、狹山池 1 号窯とひつ池西窯の間、TK217 型式第 1 類から第 2 類の移行期に位置づけられる資料であると考える。

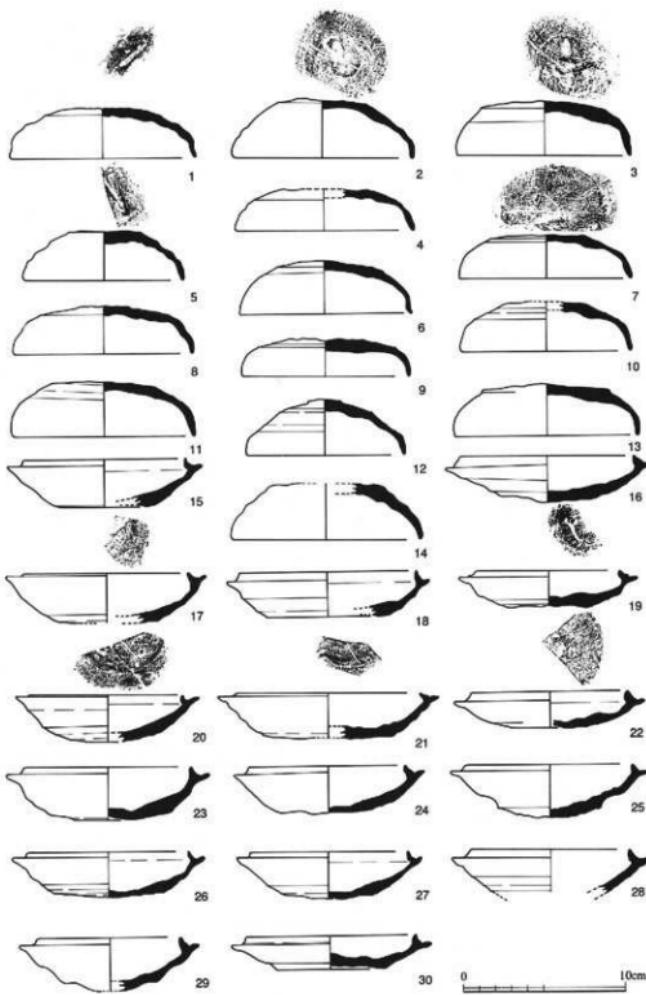


図 232 狂山池 4 号窯灰原出土遺物 (II)

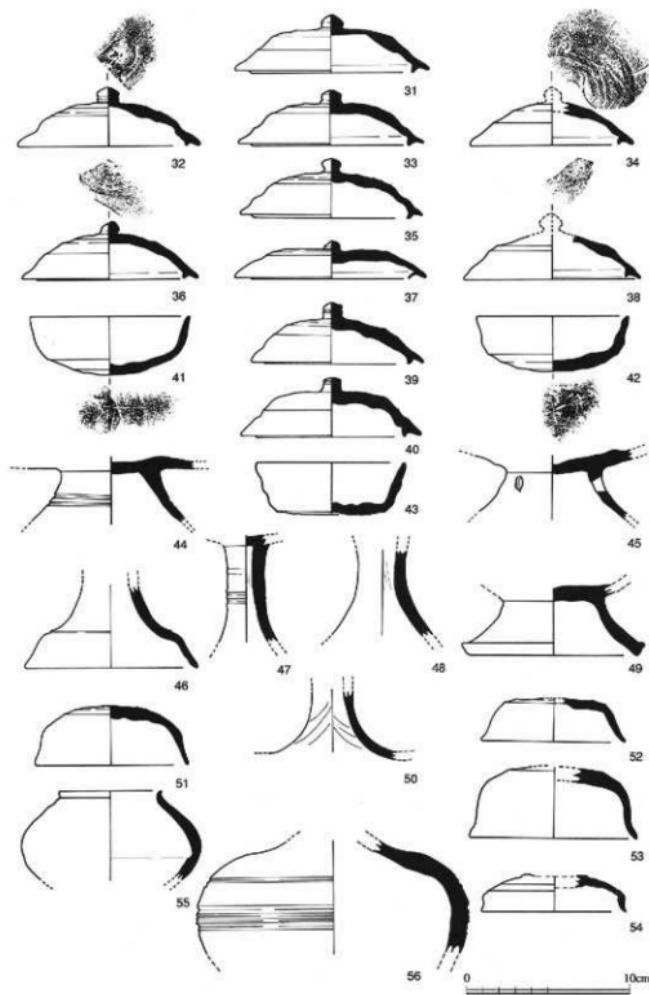


図233 狹山池4号窯灰原出土遺物(2)

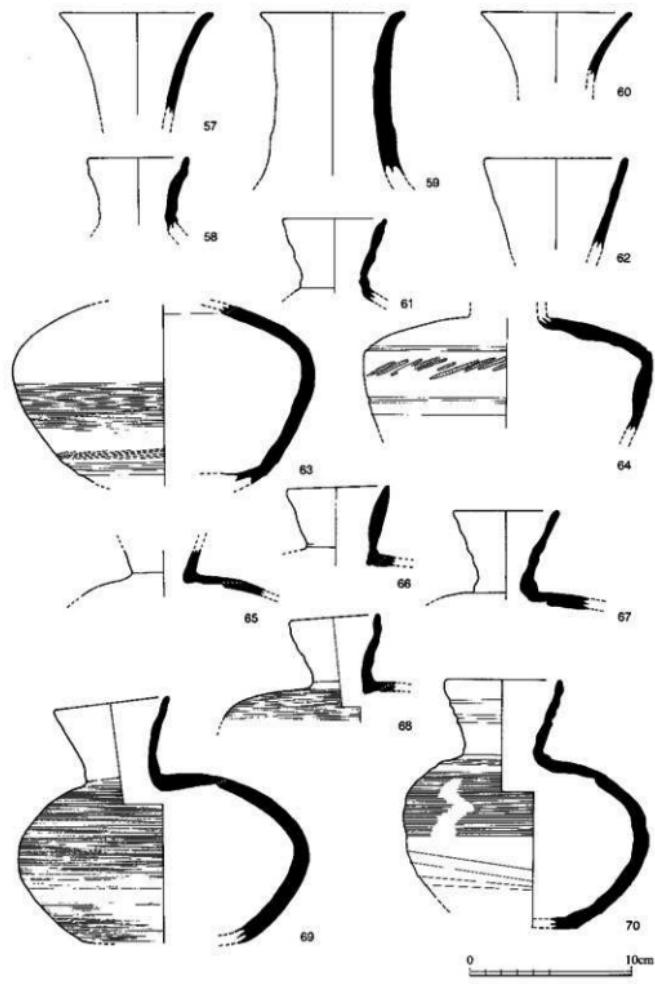


図 234 狹山池 4 号窯灰原出土遺物 (3)

表 23 独山池 4 号窯灰陶器出土遺物観察表

(丁はたもあがりを示す)

器種 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
杯 蓋 232- 1 101 1	口径11.6 高さ3.1	体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。天井部外面3/7(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 漆灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋 232- 2 101 2	口径11.0 高さ3.7	体部は外下方に下り、口縁部は下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石をや多く含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合成復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋 232- 3 101 3	口径11.0 高さ3.4	体部・口縁部は下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)ヘタ切り未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石をや多く含む。焼成: 良好。残存: 3/4。歪みのため合成復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋 232- 4 101 4	口径11.2 高さ2.6	体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 蓋 232- 5 101 5	口径10.0 高さ3.0	体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/10回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石をや多く含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。ヘラ記号: 大井部外面に「-」あり。
杯 蓋 232- 6 101 6	口径10.8 高さ3.3	体部は下方に下り、口縁部はやや外反して下方に下る。口縁端部はやや丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外1/6回転ヘラ削り調整。天井部外面3/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合成復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋 232- 7 101 7	口径10.6 高さ2.7	体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/6回転ヘラ削り調整。天井部外面3/5(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋 232- 8 101 8	口径11.2 高さ3.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/9回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。外面に自然釉付着。
杯 蓋 232- 9 101 9	口径10.6 高さ2.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/9回転ヘラ削り調整。天井部外面1/4(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/3。
杯 蓋 232- 10 101 10	口径10.8 高さ3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋 232- 11 101 11	口径11.2 高さ3.4	体部・口縁部は下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。天井部外面に蓋片付着。
杯 蓋 232- 12 101 12	口径10.0 高さ3.5	体部・口縁部は下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/8回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。3mm以下の長石をや多く含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反転復元。
杯 蓋 232- 13 101 13	口径11.4 高さ3.2	体部・口縁部はやや内轉して下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外1/4(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。
杯 蓋 232- 14 101 14	口径12.0 高さ3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外1/9(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 塗。2mm以下の長石をわざわざ含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 身 232- 15 101 15	口径10.0 受部径12.1 高さ3.0 T 高0.5 T 角度47°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 塗。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯 身 232- 16 101 16	口径11.0 受部径13.0 高さ2.8 T 高0.5 T 角度64°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面2/3(底部中央)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 漆黒灰色。胎土: 塗。3mmの長石を多く含む。1mmの石英を含む。焼成: 良好。残存: 3/4。歪みのため合成復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。

杯 身	232- 17	LH10.2 受部径12.6 高さ3.1 T 高さ0.3 T 角度65°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/5。合板復元。ヘラ記号: 底部外間に「-」あり。内外面自然剥離付着。
	232- 18	口径11.0 受部径12.6 高さ2.8 T 高さ0.6 T 角度31°00'	たちあがりは内傾してのひ、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部前面1/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/8。反板復元。ヘラ記号: 底部外間に「×」あり。
杯 身	232- 19	口径9.0 受部径11.2 高さ2.2 T 高さ1.4 T 角度55°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/9回転ヘラ削り調整。底部前面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。2mm の長石をやや多く含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反板復元。ヘラ記号: 底部外間に「-」あり。
	232- 20	口径11.4 受部径12.4 高さ2.9 T 高さ0.3 T 角度36°15'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部前面一部静止ナダ調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。3mm の長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合板復元。ヘラ記号: 底部外間に「-」あり。
杯 身	232- 21	口径11.8 受部径13.8 残存22.8 T 高さ0.3 T 角度61°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部はやや外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は半ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 明灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。
	232- 22	口径8.8 受部径12.0 高さ2.3 T 高さ0.6 T 角度46°30'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。1mm の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反板復元。内外面自然剥離付着。
杯 身	232- 23	口径10.4 受部径12.6 高さ3.3 T 高さ0.6 T 角度44°45'	たちあがりは内傾したのち上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。5mm 以下の長石をやや多く含む。チャートを含む。焼成: 不良。残存: 1/2。
	232- 24	口径9.7 受部径12.0 高さ3.0 T 高さ0.5 T 角度49°45'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面中央未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合板復元。内外面灰化。
杯 身	232- 25	LH径10.6 受部径12.4 高さ3.3 T 高さ0.4 T 角度46°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反板復元。外面自然剥離付着。
	232- 26	口径10.0 受部径11.0 高さ2.8 T 高さ0.5 T 角度43°15'	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部で段を作成。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面9/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反板復元。底部外面上器片焼着。
杯 身	232- 27	口径9.8 受部径11.6 高さ2.9 T 高さ0.5 T 角度44°15'	たちあがりは内傾したのち上位内方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内部で段を作成。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反板復元。
	232- 28	口径8.8 受部径12.4 残存2.7 T 高さ0.6 T 角度49°30'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。就緒: やや不良。残存: 1/8。反板復元。
杯 身	232- 29	口径10.6 受部径11.2 高さ3.3 T 高さ0.5 T 角度40°45'	たちあがりは内傾してのひ、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。8mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反板復元。
	232- 30	口径10.6 受部径12.5 高さ3.1 T 高さ0.5 T 角度32°30'	たちあがりは基部から上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部前面3/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反板復元。内外面灰化。
杯 身	232- 31	口径外112.2 口径内10.0 高さ3.6 つまみ径1.4 つまみ高0.8 かえり高0.3 かえり角度48°00'	LH端部は丸くおさまる。口径部内部に内傾するかえりを付す。その端部はやや緩い。かえりは口縁部以下に突出し、かえり端部は接地する。天井部は底平らに近い。大井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井外側2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 朱色。胎土: 密。1mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。一部反板復元。

杯 蓋	233- 32 102- 32	口径(外)11.5 口径(内)9.6 高さ3.7 つまみ径1.4 つまみ高1.0 かえり高0.6 かえり角度47°00'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや低い。かえりは口縫端部以下に突出せず。口縫端部はかえり端部で接地する。天井部は低くやや丸い。天井部外面中央に擬音波つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/5回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を若干含む。燒成: 良好。残存: 1/4。一部反転復元。被り歪み大。
杯 蓋	233- 33 102- 33	口径(外)11.6 口径(内)9.8 高さ3.4 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度57°45'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸い。かえりは口縫端部以下に突出せず。口縫端部で接地する。天井部は低く、平らに近く。天井部外面中央に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/4回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 細。1mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。被り歪み大。
杯 蓋	233- 34 102- 34	口径(外)10.6 口径(内)8.2 高さ2.7 つまみ径1.1 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度57°45'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸い。かえりは口縫端部以下に突出せず。口縫端部で接地する。天井部は低く、平らに近く。天井部外面中央に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/4回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 淡灰褐色。胎土: 細。1mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。被り記号: 「」あり。
杯 蓋	233- 35 102- 35	口径(外)11.4 口径(内)9.4 高さ3.7 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度64°30'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸い。かえりは口縫端部以下に突出せず。口縫端部で接地する。天井部はやや丸くやや丸い。天井部外面中央に擬音波形に近い乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/4回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 蓋	233- 36 102- 36	口径(外)11.2 口径(内)9.4 高さ3.4 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度61°00'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや低い。かえりは口縫端部以下に突出せず。かえり端部で接地する。天井部は低く丸い。天井部外面中央に擬音波つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/5回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/2。合成復元。天井部外面に窓片焼造。
杯 蓋	233- 37 102- 37	口径(外)12.0 口径(内)9.8 高さ2.4 つまみ径1.2 つまみ高0.7 かえり高0.3 かえり角度59°30'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや低い。かえりは口縫端部以下に突出せず。かえり端部で接地する。天井部は低く丸い。天井部外面中央に擬音波つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/4回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。3mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。
杯 蓋	233- 38 102- 38	口径(外)11.0 口径(内)9.0 高さ3.7 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度42°30'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや低い。かえりは口縫端部以下に突出せず。かえり端部で接地する。天井部は低くやや丸い。天井部外面中央に拟音波つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/3回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/3。反転復元。外向歯かぶり。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	233- 39 102- 39	口径(外)10.8 口径(内)9.0 高さ3.8 つまみ径1.2 つまみ高1.0 かえり高0.3 かえり角度47°30'	口縫端部は丸くおさめ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや低い。かえりは口縫端部以下に突出せず。かえり端部で接地する。天井部は低くやや丸い。天井部外面中央に拟音波つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/2回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。3mm以下の長石を含む。燒成: 良好。残存: 1/3。ほぼ光沢。
杯 蓋	233- 40 102- 40	口径(外)11.1 口径(内)9.2 高さ3.8 つまみ径1.4 つまみ高1.0 かえり高0.3 かえり角度31°15'	口縫端部は丸くされ、口縫部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸い。かえりは口縫端部以下に突出せず。かえり端部で接地する。天井部は低く半丸。天井部外面中央に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面/1回転ヘラ削り調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。3mm以下の長石を含む。燒成: 良好。反転復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	233- 41 102- 41	口径10.6 高さ3.6 底身	口縫部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。此部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底身外面/2回転ヘラ削り調整。底身外面2/5(底部中央)ヘラ切り未調整。底部内面中央静止ナダ調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を多く含む。チャートを含む。燒成: 良好。反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯 身	233- 42 102- 42	口径9.4 高さ3.4 底身	底部・口縫部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底部は低くほぼ半丸。	マキアゲ・ミズビキ成形。底身外面2/5(底部中央)ヘラ削り調整。底身外面2/5(底部中央)ヘラ切り未調整。底部内面中央静止ナダ調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。1mmの長石を含む。燒成: 良好。反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯 身	233- 43 102- 43	口径9.0 高さ3.2 底身	底部・口縫部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。底部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底身外面1/3回転ヘラ削り調整。底身外面1/3(底部中央)ヘラ削り未調整。他の四輪ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mm以下の長石を含む。燒成: 良好。反転復元。
高 杯	233- 44 102- 44	基部径6.2 残存高4.0	杯底部は平ら。脚部は下外方へ下る。脚部中位に輪1~2条の辺の波紋をぐらす。杯底部以上・脚部無欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。2mmの長石を多く含む。燒成: 良好。一部反転復元。外向歯かぶり。
高 杯	233- 45 102- 45	基部径6.0 残存高4.4	脚部は下外方へ下る。脚部上面に3方向の凹孔スカンを有する。杯底部以上・脚部無欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	クロロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 細。3mmの長石を含む。燒成: 良好。合成復元。内外面に自然釉付着。

高 体	233- 46	胸底高10.8 残存高5.2	脚部は外反して下外方へ下り、粗部上方で角度を変えて下外方へ下る。端端部は丸くおさめる。脚部上半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：脚部の1/10。反転復元。
	233- 47	残存高6.7	脚部は外反して下外方へ下る。脚部中位に2条の横線をめぐらす。杯端部以上・脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。同軸ナダ調整。脚部内面にしほり目を有する。	色調：灰白色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。一部反転復元。
高 体	233- 48	残存高5.3	脚部は外反して下外方へ下る。杯底部以上・脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。同軸ナダ調整。脚部内面にしほり目を有する。	色調：灰白色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。
	233- 49	脚底厚10.4 基部高6.4 残存高4.4 脚部3.6	脚部は下外方へ下り、端端部は外端する平面を成し、端部内面で接着する。杯底部以上欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外側面調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰白色。胎土：密。7mm以下の石英をわずかに含む。焼成：良好。残存：脚部は光沢、杯底部は底部のみ一部残存。
高 体	233- 50	残存高3.8	脚部は外反して下外方へ傾いて下る。杯底部以上・脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。脚部内面にしほり目を有する。	色調：淡灰白色。胎土：密。焼成：やや不良。反転復元。
	233- 51 102- 51	口径9.6 残存高3.7	体部・口縫部は下外方に下り、口縫端部は丸くおさめる。大井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/2(頂部)回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成：やや不良。残存：1/2。反転復元。
中 蓋	233- 52	口径9.0 残存高2.7	体部は下外方に下り、口縫部はやや低く。口縫端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外側1/2(頂部)回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	233- 53	口径10.4 残存高4.4	体部は下方に下り、口縫部は外反して下外方に下る。口縫端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/4(頂部)回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰白色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：やや不良。残存：1/8。反転復元。
中 蓋	233- 54	口径9.0 残存高2.2	体部は下方に下り、口縫部は外反して下外方に下る。口縫端部はやや低い。大井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側1/6(頂部)回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
	233- 55	口径6.4 基部高6.4 体部最大径11.2 残存高5.5	口縫部は基部よりやや外反して上方に傾くのびる。脚部は外下方に下り、体部は下内方に下る。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。4mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
短 盤蓋	233- 56	体部最大径17.0 残存高7.0	脚部は外下方に張り出し、体部は下方に内側して下る。口縫部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。反転復元。
	234- 57	口径9.6 残存高6.4	口縫部は外反して上方にのび、口縫端部は丸くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。
平 底	234- 58	口径6.4 残存高4.6	口縫部は外反して上方にのびたのち、内側して上方にのびる。口縫端部は丸くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
	234- 59	口径9.0 残存高10.2	口縫部はやや外反して上方にのびたのち、外反して上方にのびる。口縫端部は丸くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。焼成：やや不良。反転復元。
平 底	234- 60	口径9.4 残存高4.4	口縫部は外反して上方にのび、口縫端部は丸くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
	234- 61	口径6.4 基部径4.4 残存高4.6	口縫部は外反して上方にのび、口縫端部は丸くおさめる。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。内面灰かぶり。外側に自然釉付。
長 盤蓋	234- 62	口径9.0 残存高5.7	口縫部は上方にのび、口縫端部は丸くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口縫部の1/7。反転復元。
	234- 63	体部最大径18.8 残存高11.2	脚部は外下方に張り出し、体部は下方に下る。口縫部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側回転ヘラ削り調整。体部外側カギ目調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：脚部の1/3。一部反転復元。口部外側灰かぶり。体部外側に自然釉付。外側に土器片跡。

長 期 蓄 留	234- 64	体部最大径18.0 残存高7.0	肩部は外方に強く張り出し、体部は内方に下る。肩部・体部境界に1条の鈍い沈線をめぐらし、体部に非常に鈍い1条の沈線をめぐらす。その間に刺突文を有する。口頭部、底面欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：帯。焼成：良好。反転復元。肩部外面に窓壁片埋石。
	234- 65	基部径4.0 残存高3.0	口頭部は上外方にのびる。体部上面は外下方へのびる。口頭部上半・体部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。一部反転復元。外面に窓壁片埋石付。外面に窓壁片埋石。
半 残	234- 66	口径6.3 基部径4.4 残存高3.0	口頭部は上外方にのび、口頭端部は丸くおさめる。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：口頭部の3/4。
	234- 67	口径7.0 基部径4.2 残存高5.5	口頭部は上外方にのび、口頭端部は丸くおさめる。体部上面は外下方へのびる。体部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナナダ調整。	色調：淡灰灰色。胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。焼成：やや不良。残存：口頭部の1/3。合戻復元。
半 残	234- 68	口径5.4 基部径3.7 残存高3.8	口頭部は外反して上外方にのひたのち、内壁して上方にのびる。口頭端部は丸くおさめる。体部は外下方へのびる。体部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側カキ目調整。他は回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/4。一部反転復元。
	103- 69	口径7.0 基部径4.6 体部最大径18.2 残存高15.4	口頭部は外脣しながら上外方にのび、口頭端部は丸くおさめる。体部上面は丸みをもって外下方へ張り出し、肩部は下内方に下る。全体的に扁平な形で、模様体部に近い形状。頭部複合窓所は、体部上面粘土板の内側に位置する。底面部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側カキ目調整。底部外面回転ヘラ削り調査のちカキ目調整。他は回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：頭部内外面・体部外周 暗灰色。他一派灰色・淡棕灰色。胎土：密。1mm以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：やや不良。残存：1/2。合戻復元。
半 残	234- 70	口径7.0 基部径5.2 体部最大径15.3 残存高15.3	口頭部は上外方にのび、口頭端部は丸くおさめる。頭部上面に鈍い2条の沈線をめぐらす。頭部上面は丸みをもって外下方へ緩やかに張り出し、頭部は内脣しながら下内方に下る。底部は半ら。頭部複合窓所は、体部上面粘土板の外周側に位置する。底面部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側カキ目調査。底部外面回転ヘラ削り調査。他は回転ナナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色、断面：青灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：やや不良。残存：7/10。

## V 東池尻1号窯

### 1 調査の経過

旧天野川右岸の中位段丘崖には、狭山池2号窯・狭山池3号窯・狭山池4号窯・太満池南窯<sup>①</sup>・太満池北窯<sup>②</sup>などのTK43型式・TK209型式・TK217型式の須恵器を出土した窯跡が多くみられる。遺物の散布などから、この崖面では狭山池北堤から下池までの範囲で2基の窯跡の存在が想定されていた。<sup>③</sup>

『狭山町史』第1巻本文編<sup>④</sup>(以後、「町史」と略記)では、下池の南西の1基は「狭山池北方の窯」と記述され、「大規模な灰原」が遺存していたとされる。現在、当該地点は完全に宅地化し、段丘崖もコンクリート擁壁で覆われている。灰原の遺存が想定される崖下の平坦面にも盛土がなされており、須恵器片すら採集できない状態である。「町史」では森編年Ⅲ期に分類されている。また、狭山池北堤の北側の1基は「狭山池北方の窯」と『町史』に記述され、「窯壁片、土器片散乱」とある。これが今回発掘調査を実施した窯跡であると考えられる。『町史』編纂時には露出していた作土面も、調査前には青少年グラウンドの盛土によって厚く覆わっていたため、須恵器片の散布は確認できない状態であった。

今回の調査では、窯体および灰原が遺存すると考えられる箇所、大阪狭山市青少年グラウンドの東端部分および、里道を含むグラウンド東側の竹林内の崖面の約1,600m<sup>2</sup>で発掘調査を実施した。なお、前述の通り本調査区内にその遺存が想定される窯跡は『町史』で「狭山池北方の窯」と呼称されているが、下池の南西に位置する窯との混同が予想されるため、本窯の灰原部分が位置している箇所の住居表示「東池尻」を探って、東池尻1号窯と呼称する。

事前発掘調査は、1992年9月14日から同年10月16日まで実施した。この事前発掘で、灰原の散布域を特定し、発掘調査区の設定を行った。窯体部分の範囲確認調査を含めた本発掘調査は、1992年10月19日から1993年2月5日まで実施した。

調査にあたっては中位段丘崖の裾に相当するグラウンド東端において、南北約42m、東西2.6m～2.8mの試掘溝(中央トレンチ)を設定した。この試掘溝内における土層断面観察の結果、南北約29mの範囲で厚さ10cm～40cmの灰土層と厚さ10cm～20cmの有機質層を検出した。この結果をもとに、今回の開発工事によって影響の及ぶ範囲内で、南北約40m、東西約9mの調査区を設定し、バックホーでグラウンドの整地層と旧作土を掘削した。この後、主として人力掘削を行い、2次堆積によると思われる灰土層直上で平面図を作成、写真撮影を行い、これを掘削した。つぎに、中央トレンチ西侧では灰土層が検出されなかったため、直に有機物層上面を検出し、中央トレンチ東側では灰土層上面と調査区南端箇所で有機物層上面を検出した。これを精査の後、平面図および土層断面図を作成し、写真撮影を行った。この調査範囲を第1調査区と呼称する。この段階で、青少年グラウンド部分で行われていた池尻遺跡<sup>⑤</sup>の発掘調査とあわせて、12月12日に現地説明会を実施した。現地説明会終了の後、灰原および有機質層の掘削を行って遺物を取り上げ、地表面の直上まで完掘した。

つぎに、里道部分のフェンスとコンクリート舗装を撤



写真86 東池尻1号窯の位置（南上空から）

去し、里道東側の崖下までの平坦面において東西方向に長さ約13m、幅約0.8mの試掘溝を設定して、灰土層の東端を確認した。この範囲確認の成果に基づいて、里道部分で約100m<sup>2</sup>、南北約24m、東西約4mの拡張調査区を設定した。この調査区では、バックホーと人力で2次堆積灰土層直上まで掘削を行い、平面図を作成、写真撮影を行った。引き続き、灰土層と有機物層の直上まで人力掘削を行い、平面図および土層断面図を作成、写真撮影を行った後、遺物取り上げと並行して同層の掘削を行い、地山面を検出した。

また、これらの作業同時に、東側の崖部分では、斜面下と斜面中腹および段丘上に南北方向の試掘溝を設定して人力掘削を行い、窯体の確認に努めた。その結果、斜面上方と段丘上で窯体の一部と赤変箇所を確認したため、当該地点で南北約10m、東西約11mの第2調査区を設けて竹林を伐採し、バックホーで表土層と斜面の流出土を掘削、人力で窯体と赤変箇所を検出した。全体の平面図を作成し、写真撮影の後、窯体の焼成床面毎に掘削、図面作成、写真撮影、遺物取り上げを行った。この調査範囲を第2次調査区と呼称する。調査完了後は、安全のために、バックホーで復旧作業を行った。

## 2 遺構

### ① 窯体

東池尻1号窯の窯体部分は、ごく一部の焼成床面を残す以外は、削平を受けて消滅していた。

第2調査区の西端の箇所、標高74.75mより下の段丘斜面は、本来は灰原の東端付近である第1調査区拡張区の東端付近へ向けて下っていたものと推測される。調査時点における崖の下端から里道までの間の平坦部分は、本窯廃棄後のある時期における開発によって形成されたものである。崖下で地山直上に堆積している黄褐色砂質土・暗黄褐色砂質土は上方からの崩落土であり、調査前の斜面をこれと同質の土が被覆しており、これを除去するとはほぼ垂直に切り立った地山面が現れた。また、第2調査区内でも、窯体の上部構造は失われて床面も一部残存するのみであり、この段丘上および段丘崖上部も後世の開発に伴ってかなりの削平を受けている。当該調査区は、近世の狭山藩陣屋跡上屋敷の西端に位置し、第2調査区内地山直上の明黄褐色砂質土および暗褐色砂礫土中に平瓦の破片の包含が認められることから、近世に地形が改変された可能性が高い。

窯体は第2調査区西端で検出され、焼成部床面と両側壁の基底部がわずかに遺存する。焚口方向は前述の通り斜面が切断されているために崖になっており、奥側と両側壁外側も削られ、各々外側に向けて落ち込んでいる。窯体の幅は床面で1.80mを測り、現存長は主軸で1.04mを、最大部分で1.41mを計測する。窯体の主軸方向はN-78°30'-Wである。焼成床面は3枚を確認できる。最下層の第1次焼成床面と、最終床面の第3次焼成床面の上面で、遺棄された須恵器片を検出した。各々の床面中に大量の須恵器の包含が確認できることから、この部位は焼成部と判断できる。

第1次焼成床面は、暗赤黄色に酸化赤変した地山の直上に貼られている(図236)。地山面には窯体の主軸から約10度南へ振った方向に、上端幅約0.90m、下端幅約0.45m、深さ約0.11mの断面V字状の溝を掘り込んでいる。床面の貼土は暗灰青色の砂質土で、還元焼成されているために上面は硬質であるが、内部はそれほど堅くない。床の厚さは4cm~10cmである。床面には杯蓋・杯身・甕が破碎された状態で残存していた。南側壁付近



写真87 窯体遺景(西から)

の奥側の第1次焼成床面は、第2次焼成床面の貼り付け前に除去されている。

第2次焼成床面は、第1次焼成床面の大部分を残したまま、その直上に貼られている(図235下段)。貼土は、やや礫を含んだ暗灰褐色砂質土で、上面のみ硬質である。床の厚さは最も厚い箇所で4cmである。床面上で杯蓋・杯身・短頸壺を検出した。

第3次焼成床面は、第2次焼成床面の部分補修的な貼り床であったのか、主軸方向の長さは0.78mにとどまり、第2次焼成床面上で島状に遺存していた。貼土は、やや礫を含んだ淡青色砂質土

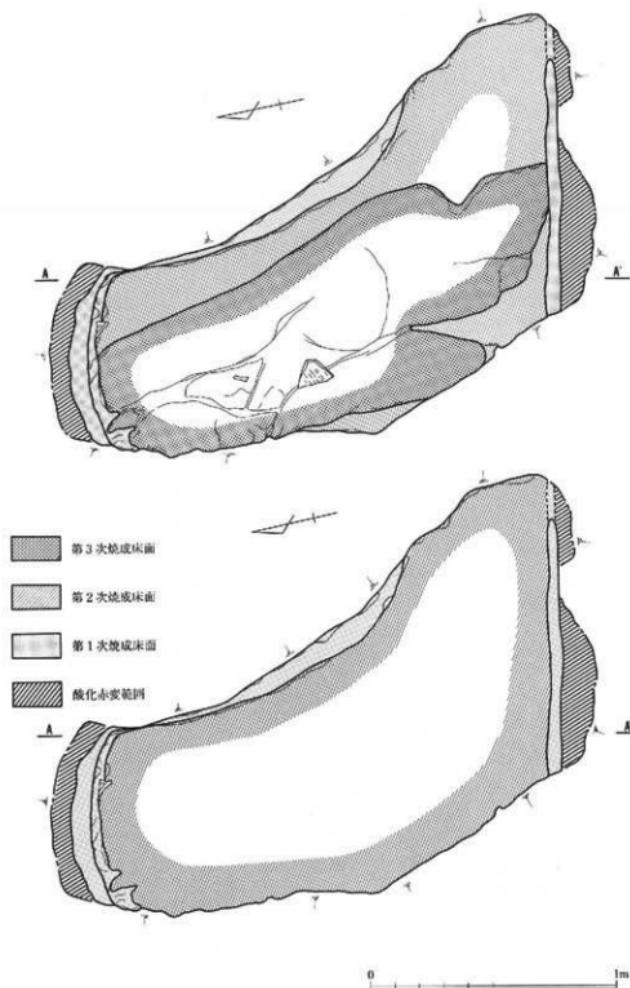


図235 東池尻1号窯焼成部平面図(I)

で、上面のみ硬質で内部はやや軟質である。床の厚さは3cm以下である。床面上には杯蓋と杯身との小片が残存していた。

焼成部床面が遺存していた箇所のすぐ東側は削平が著しく、地山の赤変も確認できないが、床面東端から主軸方向で4.4mの所の東側に地山が赤変した箇所を確認した。その範囲は南北6.8m、東西3.2mに及ぶ。この範囲内に奥壁・煙道部が存在していたと推定する。削平をどの程度受けているか分からぬが、主軸方向における床面と赤変範囲の東端との比高差および距離から、床面傾斜角度は

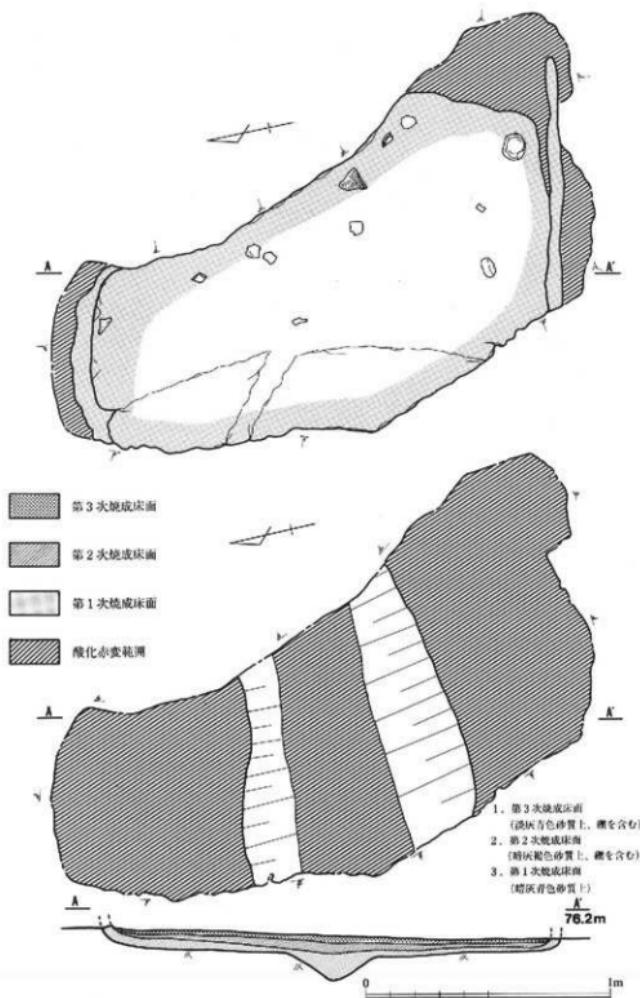


図236 東池尻1号窯焼成部平面図(2)・上層断面図(1)

8度～10度であったと思われる。なお、本窓の全長は、焚口・燃焼部・焼成部の下方が完全に消失しているために明かではない。ただ残存する床面の西端から赤変範囲の東端まで水平距離が8.80mであり、床面西端から灰原東端までの水平距離が10.00m～12.00mであるので、現在の灰原東端から約5m離れた所に焚口があったとすれば、窓体の全長は13m～16m程度と思われる。

## ②灰原

東池尻1号窓灰原は、大別して灰土層と有機質層の2層からなる。

有機物層は、第1調査区中央トレンチ東側の南端で灰土層の上層約25cmに間層を挟んで堆積するもの(図238中段土層36・38・41・43)があり、後者は中央トレンチ西侧にも広く堆積し、最長箇所で南北約32m、東西約15mを測り、南側は調査区外へ非常に薄くなりながらも続いている。この有機物層は木質などの植物遺体が腐殖した土の堆積で、須恵器片の他に多量の自然木・葉片と、少量の加工木材、炭を包含する。特に中央トレンチ東側

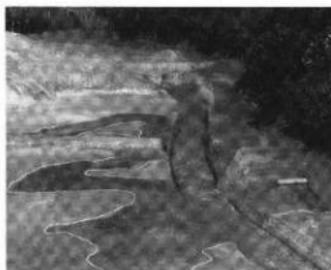


写真88 灰原遠景（南から）

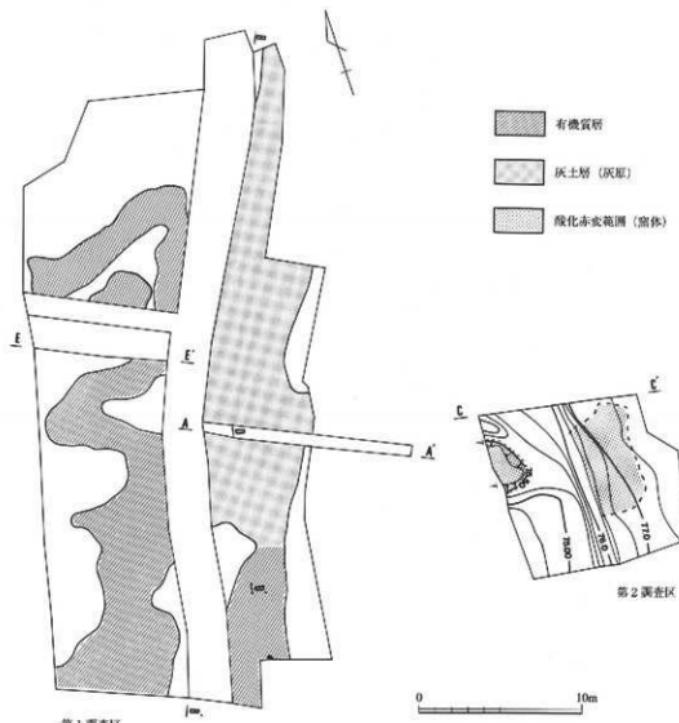


図237 東池尻1号窓平面図

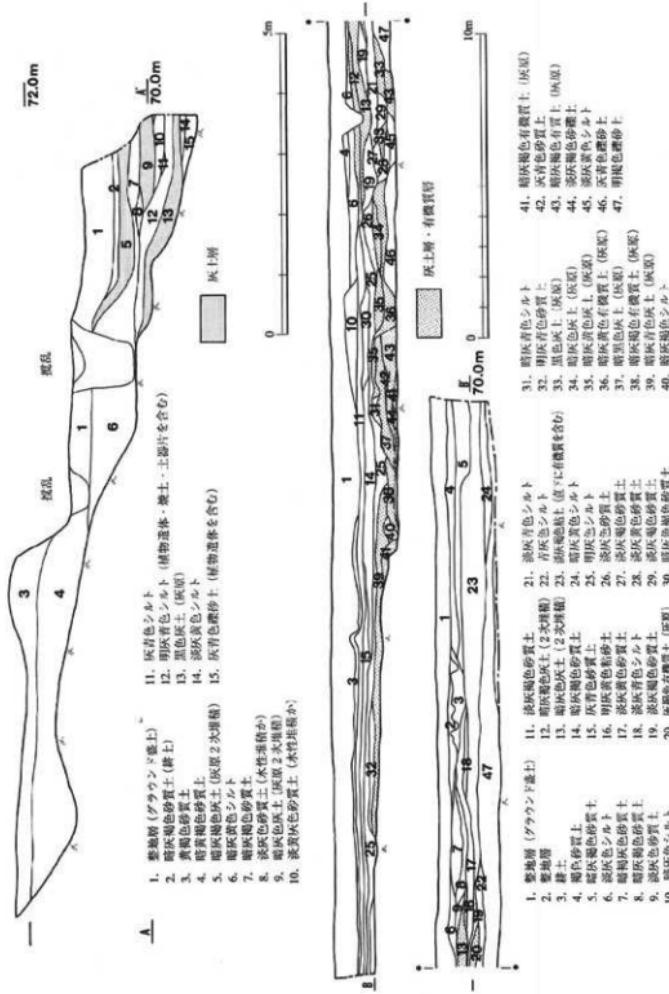


图 238 東池尾 1 号窯十號斷面圖 (2)

の中央より北側で、これらの出土数が多く、長さ89cm、幅27cm、厚さ10cmの建築材の一部とみられる木材も検出された(図253)。角材を断面の対角線に沿って半裁したような状態で残存し、正面と側面は平滑で加工痕らしきものも観察できる。裏面は破断面で、彎曲してえぐれ込み、裏面全体が黒色に炭化している。これ以外の自然木や木材にも、部分および全体が炭化したものが多くみられ、これが灰土層と部分的に混じるため、この有機物層が東池尻1号窯の操業に伴い、薪の燃え残りや、薪として不要な枝葉を廃棄したため形成された層である可能性が強い。

ただし、この東池尻1号窯の発掘調査後に新規発見された狭山池東橋下層遺構の放水口が、本調査区の南側に位置していることから、A.D.616年以後に機能していたこの樋管から配水された水流がど

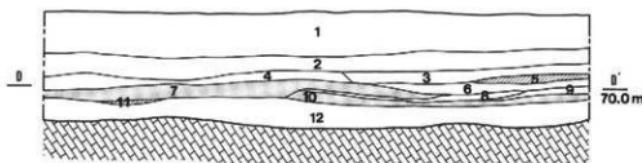
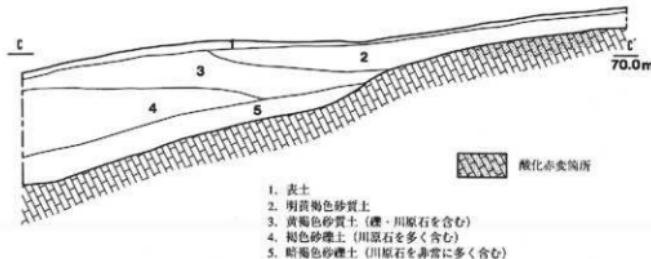


図239 東池尻1号窯土層断面図③

の位置を通過して、本窯の灰原にどのような影響を与えたのかについては慎重な検討をする。図238中段に示したように、土層7・10の灰土層の下層には土層11の有機質層が存在し、上層には土層5の有機質層が存在している。東槽下層遺構が据え付けられている箇所の沖積層上面の標高は71.0m前後であり、本窯の灰原と有機質層が堆積している箇所の沖積層上面の標高は70.0m前後である。樋管から流出した水は調査区内の沖積層上面を通過していた可能性も十分考えられよう。

灰土層は、中央トレンチ東側の南端で近世の平瓦片が混じった2次堆積層を検出したが(図238上段土層12・13)、それ以外の箇所では特に顕著な擾乱や2次堆積は認められなかった。灰土層を細かく分層すると、各小単位ごとの灰土塊に分層され、その間に有機質層も存在する。しかし、このせいぜい数10cm四方の大きさの灰土塊をそれぞれ1層として層毎に平面掘削を行うことは実際には不可能である。よって、今回の調査ではこれらの灰土塊の集合をもって、1層の灰原と認識するにとどめた。

灰土層の広がりは南北約31m、東西8m以下の規模を有する。南北端は厚さ10cm以下となって終わり、最も厚い箇所であるA-A'断面付近では40cmの厚みをもつ。この箇所を中心として須恵器の包含がみられ、杯蓋・杯身・腹・高杯・脚付長頸壺・平瓶・短頸壺・甕などが検出された。

### 3 遺物

東池尻1号窯の焼成部と灰原および、灰原の2次堆積層から出土した須恵器の総量は、コンテナ約70箱に達した。本稿では、焼成部(第1次焼成床面・第2次焼成床面・第3次焼成床面)・灰原・灰原2次堆積層の各層ごとに報告を行なう。なお、各個別の遺物観察結果については表25~28の遺物観察表を参照されたい。

#### ①焼成部出土遺物

##### (a) 第1次焼成床面上出土遺物(図240、図版106、表25)

第1次焼成床面上に遺存していた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は23点である。器種別の個体数は次のとおり。

杯H身11点・杯H蓋9点・杯G身2点・短脚無蓋高杯1点

杯H身の口径平均値は10.6cm、杯H蓋の口径平均値は11.2cmである。第3章で述べるように、第1次焼成床面出土の杯H身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯H身の外面調整は、2点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、4点は底部に向転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、5点は底部を欠損するため不明。杯H蓋の外面調整は、9点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、3点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とする。

杯G身の口径は12が11.1cm、13が8.7cmを測る。外面調整は、12が底部外面をヘラ切り未調整とし、13が底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。

短脚無蓋高杯23は、脚部にスカシを有さないタイプである。

##### (b) 第2次焼成床面上出土遺物(図240、図版106、表26)

第2次焼成床面上に遺存していた須恵器は、杯H身3点・杯H蓋2点・短頸壺1点の6個体である。

杯H身の口径平均値は11.2cm、杯H蓋の口径平均値は10.9cmである。第2次焼成床面上の杯H身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯H身の外面調整は、26・29が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、28が底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とする。

短頸壺27は体部最大径10.8cmの小ぶりなもので、肩部が下外方へ緩やかに下る形態である。

(c) 第3次焼成床面出土遺物(図241、図版241、表25)

第3次焼成床面上に遺存していた須恵器は、杯H身4点・杯H蓋2点の6個体である。

杯H身の口径平均値は10.1cm、杯H蓋の口径平均値は12.1cmである。第3次焼成床面出土の杯H身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯H身の外側調整は、34・35が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、33は底部を欠損するため不明である。

②灰原出土遺物(図241~250、図版3・106~112、表26)

灰原層中に含まれていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は138点を数える。その器種別の個体数は次の通り。

杯H身41点・杯H蓋29点・杯G身3点・甕1点・長脚無蓋高杯(脚部)7点・短脚無蓋高杯10点・短頸壺5点・短頸壺蓋2点・壺2点・長頸壺2点・平瓶1点・提瓶3点・壺30点・器台1点

杯H身の口径平均値は10.0cm、杯H蓋の口径平均値は11.6cmである。灰原出土の杯H身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯H身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯H身の外側調整は、13点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、26点は底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、5点が底部全域を未調整とする。杯H蓋の外側調整は、16点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、13点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とする。

杯G身の口径平均値は10.5cmである。83・85は底部外側に回転ヘラ削り調整を施すが、底部中央を削り残してヘラ切り未調整としている。84は底部外側中央をヘラ切り未調整とする。

長脚無蓋高杯は、130が脚部に2段2方向の長方形スカシを有している。112・113・129が脚部に2段2方向のスリット状スカシを有している。131・132は脚部にスカシを有していない。

甕111は底体部外側10分の9に回転ヘラ削り調整を施し、体部中位の高さに凹孔を穿つ。また、この甕を検出した際に、器内に粘土塊が入っていた。甕の円孔に形状と径および厚みが合致するため、円孔を穿った際に不要な粘土層を取り出さず、そのまま焼成てしまい、これが器内に残存していたものと思われる。

短頸壺は体部最大径が16cm以下の比較的小ぶりなものが多く、肩部が下外方へ緩やかに下る形態のものと、肩部が外下方へ強く張り出す形態のもの両者が存在する。

長頸壺115・128の体部外側にめぐらされている沈線はいずれも鈍いもので、その沈線の間に刺突文を有している。

甕は、口頭部が大型のもの148・149・150・156・161・162・163・166・169・171・173は口縁部直下の沈線の下方に櫛描き斜行沈線文を施文する。154・157・158・159・165・168・170は口縁部直下の沈線の下方に波状文を施文する。152・153・155・164・167・172は沈線のみを頸部外側にめぐらす。口頭部が小型のもの143・144・145・146・147の頸部外側は無文である。

③灰原2次堆積層出土遺物(図251~252、表27)

灰原層中に含まれていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は36点である。その器種別の個体数は次の通り。

杯H身15点・杯H蓋10点・杯1点・長脚無蓋高杯(脚部)1点・短脚無蓋高杯2点・短頸壺1点・提瓶1点・壺5点

杯H身の口径平均値は9.9cm、杯H蓋の口径平均値は10.9cmである。灰原出土の杯H身の法量

は、図314のような数値分布を示し、杯身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯身の外面調整は、11点が底部中央から回転ヘラ削り調整を施し、1点は底部に回転ヘラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、3点が底部欠損のために不明である。杯蓋の外面調整は、6点が天井部頂部から回転ヘラ削り調整を施し、3点は天井部に回転ヘラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とし、1点が天井部中央を欠損するために不明である。

長脚無蓋高杯202は、脚部にスカシを有していない。

窯は、口頸部が大型のものに208・209があるが、頸部沈線の上下に波状文を施文する。口頸部が小型のもの205・206・207の頸部外面は無文である。

杯198は、底部に八の字形の高台を付す。形態からみて、平城宮II<sup>◎</sup>・中村編年<sup>◎</sup>IV型式2段階に比定されるものであろう。

#### 4 小 結

東池尻下層遺構の発見が、東池尻1号窯の調査完了後のことであったため、東池尻1号窯と、東池尻下層遺構の樋管の延長線上にあったと推定される水路との位置関係が、調査で確認できなかったのは残念である。しかしこれらの調査成果は、その痕跡と思われる箇所を示している。そのひとつが、窯体の大半を削平している崖部の地形改変箇所であり、もうひとつが、沖積層上面に広がる有機物層の広がりであろう。

崖下部分の地山上面には、近世の遺物を包含した土層が堆積していたため、調査時には崖部の地形改変は、調査区の東隣の中位段丘上に占地している狭山藩陣屋跡に関連した土工事によるものと理解していた。しかし東池尻下層遺構の検出によって、東池尻1号窯の窯体が廃棄された直後、7世紀前半に窯体が構築されていた段丘斜面裾を削平して、東池尻からの水路をこの箇所に通していた可能性が生じた。また近世初頭に設置された東池尻上層樋管からの水路を再びこの場所に設定した可能性もある。

また、中位段丘崖から離れた場所に、東池尻下層・上層遺構の樋管からの水路を想定する場合は、沖積層上面に堆積している有機物層をどのように理解するかが重要であろう。沖積層上面を蛇行するように検出された有機物層の広がりは、水路の範囲を示すようなものとは考えられず、狭山池築造前の河川による堆積と理解するほうが自然である。この想定では、有機物層の上面に設けられた水路は、後世の工事によって完全に破壊されたものと考えざるを得ない。

また灰原中から検出された木製遺物の存在も興味深い。あきらかに柱などの建築部材と思われる木製遺物が含まれている。灰原の形成時期が、東池尻下層樋管の埋設と並行するものであるならば、樋管設置に関係する転用材を、本窯で燃料としていた可能性も考えられる。しかし、東池尻下層遺構の放水部拡張において窯壁片が使用されていたことや、窯に関わる遺構と東池尻の水路が併存していた状況が確認できないことから、東池尻1号窯は東池尻下層樋管設置よりもわずかに先行していたと考えられる。その場合、灰原中に含まれていた木製遺物は、薪として建築部材等を使用していたと理解できる。

また、灰原2次堆積層から出土した杯は、平城宮II期のものと考えられる。なんらかの理由で、本窯の灰原が2次移動を受けたのは、この遺物から8世紀前期のことと思われる。行基の狭山池改修に伴う遺物か、東池尻下層樋管の延長や北堤第10層堤体盛上などの天平宝字の改修に伴う遺物であるかは判然としないが、奈良時代の人々の活動が、狭山池北堤の改修工事にとどまらず、狭山池北側においてみられたことは確実であろう。

表24 東池尻1号窯と東橋下層樋管との関係

	東橋下層樋管の埋設時に東池尻1号窯が発見されていた場合	東橋下層樋管の埋設時に東池尻1号窯が操業していた場合
東橋からの水路	東池尻1号窯の窯体や灰原を削平して水路が開削された。	東池尻1号窯の灰原を避けて水路が開削されたか、水路を避けて灰原が形成された。
東池尻1号窯灰原の木製造物	窯の薪に用いられた建築部材などの転用材	東橋下層樋管の部材との関連も考えられる転用材。
東橋下層樋管の跡形に用いられた窯壁	跡形ではTK217型式の杯口身が出土しているため、破壊した東池尻1号窯の窯壁の破片を転用。	東池尻1号窯より入手した窯壁片を石のかわりに使用。
東池尻1号窯の操業時期	A.D.616年以前に廃窯	A.D.616年を含む操業時期

## 注)

①本報告書第3章第1節参照

②奈良国立文化財研究所・谷口哲実氏の鑑定による。

③川辺昭三「陶邑古窯址群I」『平安学園考古学クラブ研究論集』10、1968

④横山隆司「ひつ池西窯出土須恵器の編年的位置付け」(『ひつ池西窯』『大阪狭山市文化財報告書』10、1993)

⑤前出注③報告書

⑥森浩一「土器の生産」『狭山町史』第1巻、本文編、1967

⑦大阪狭山市教育委員会『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』1992

⑧以下、地質・地形については外山秀一氏(皇學館大学)、三田村宗樹氏(大阪市立大学)、豊田兼典氏(府立富田林高校)の三氏に観察、ご教示いただいた。

⑨大阪狭山市教育委員会『太満池南窯・北窯発掘調査報告書』1991

⑩前出注⑨報告書

⑪大阪狭山市教育委員会『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』1992

⑫『狭山町史』本文編 1967

⑬西弘海「七世紀の土器の区分と型式変化」「奈良時代の食器類の器名とその用途」(『土器様式の成立とその背景』1986)

⑭中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」(大阪府教育委員会『陶邑III』1978)

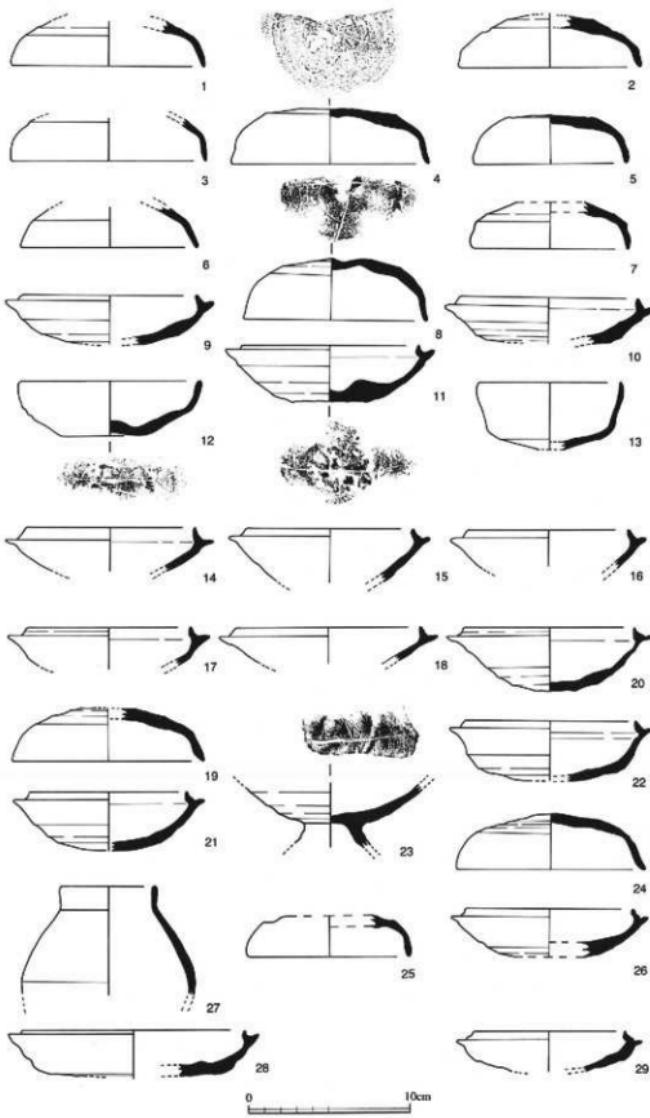


図240 東池尾1号窯出土遺物(1) (1~23: 第1次焼成底面、24~29: 第2次焼成底面)

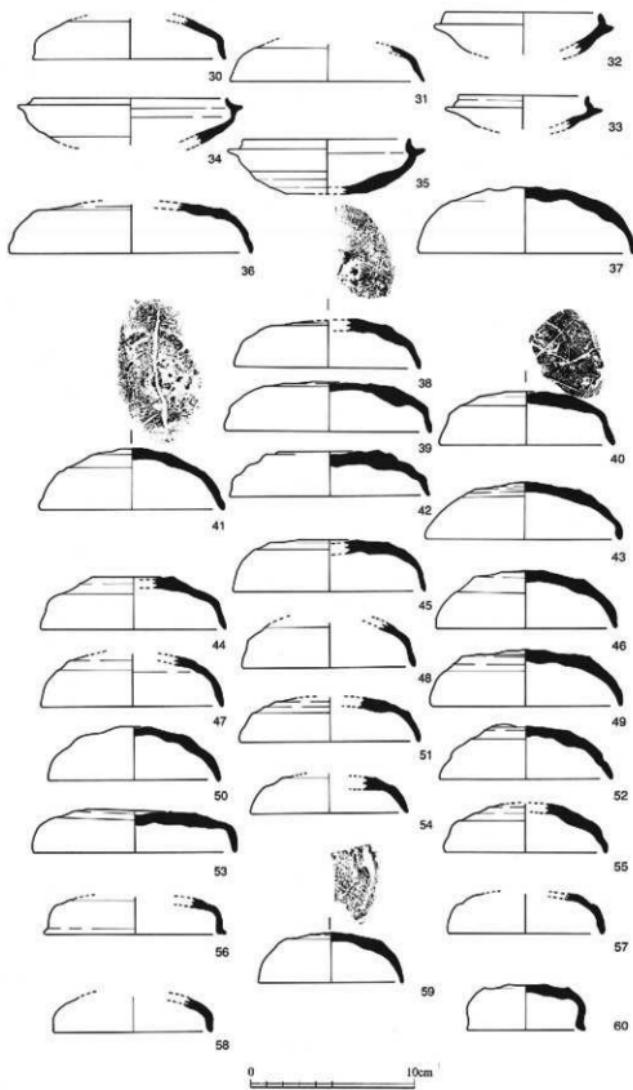


図 241 東池尻 I 号窯出土遺物 ②(30~35: 第3次焼成床面、36~60: 灰原)

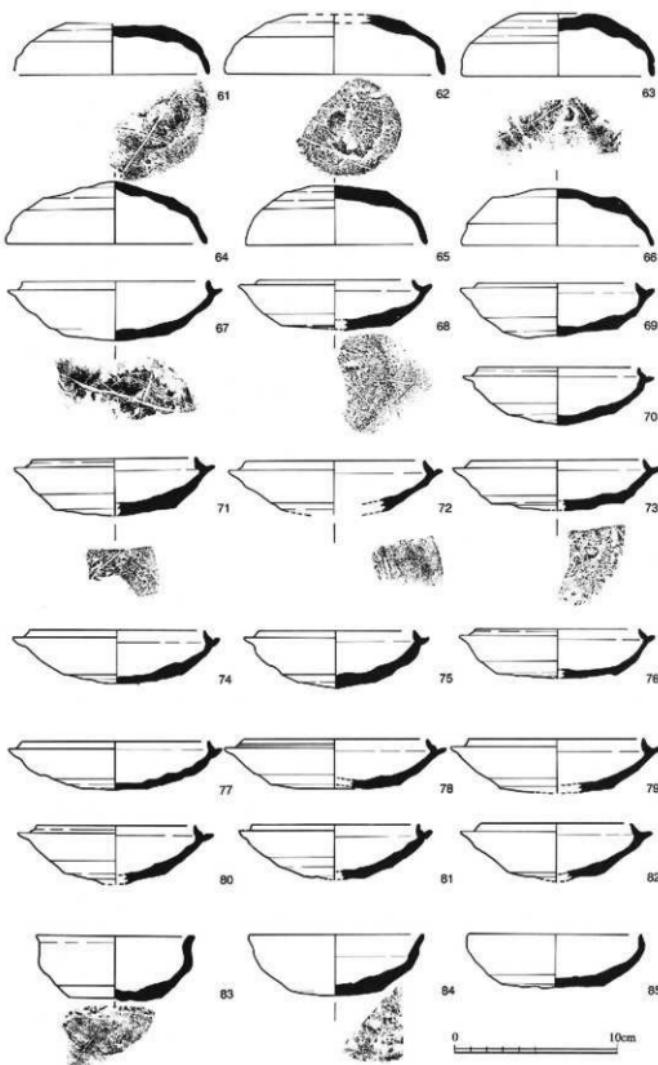


図242 東池尻1号窯出土遺物(3)(灰原出土遺物)

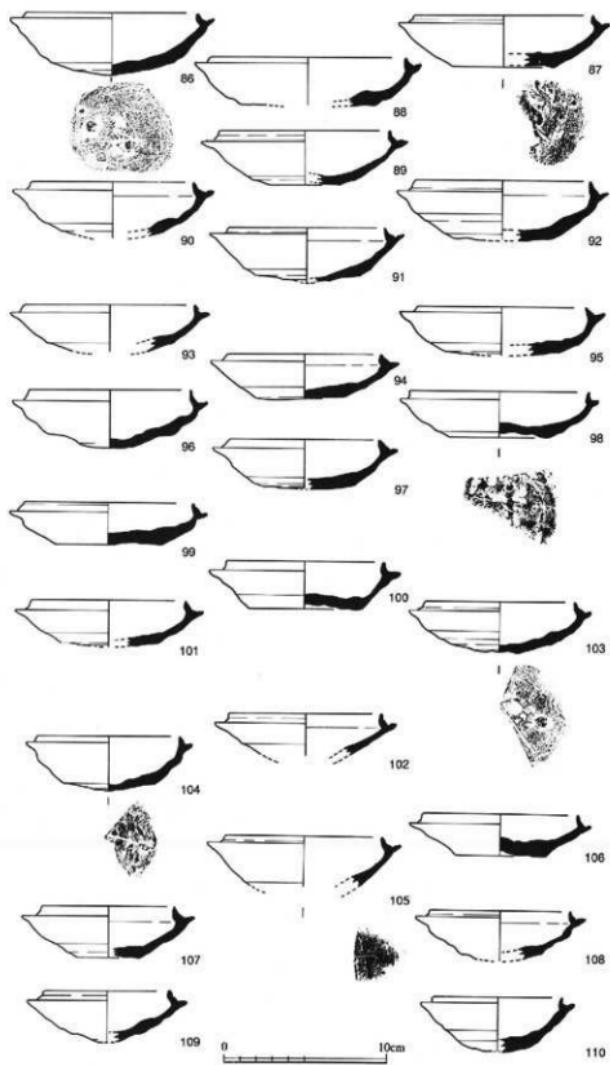


図243 東池尻1号窯出土遺物(4)(灰原出土遺物)

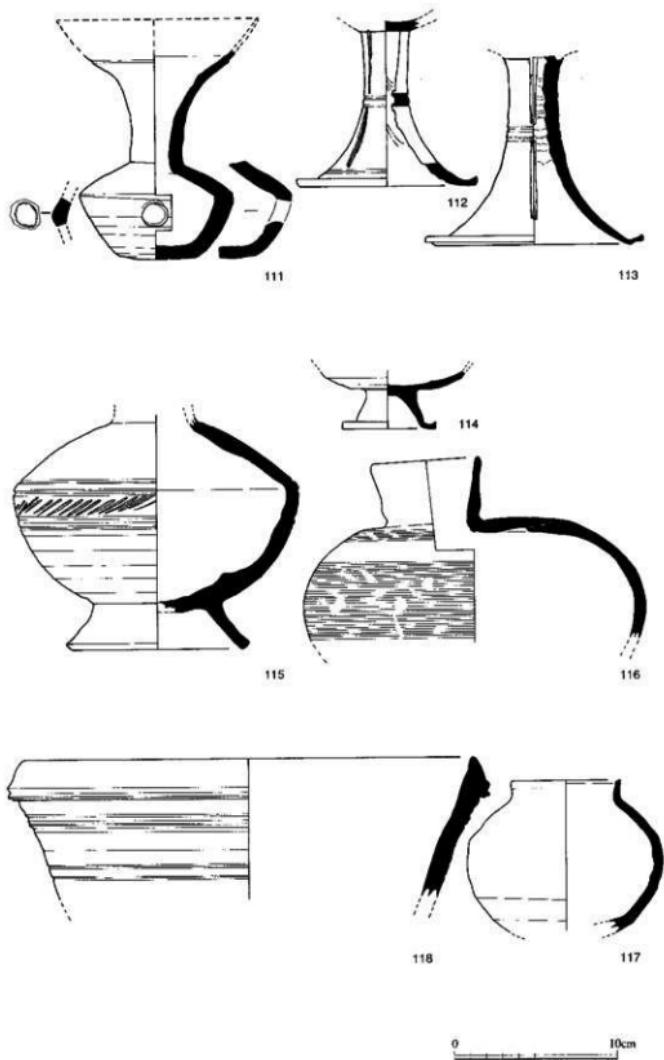


図244 東池尻1号窯出土遺物(5)(沃原出土遺物)

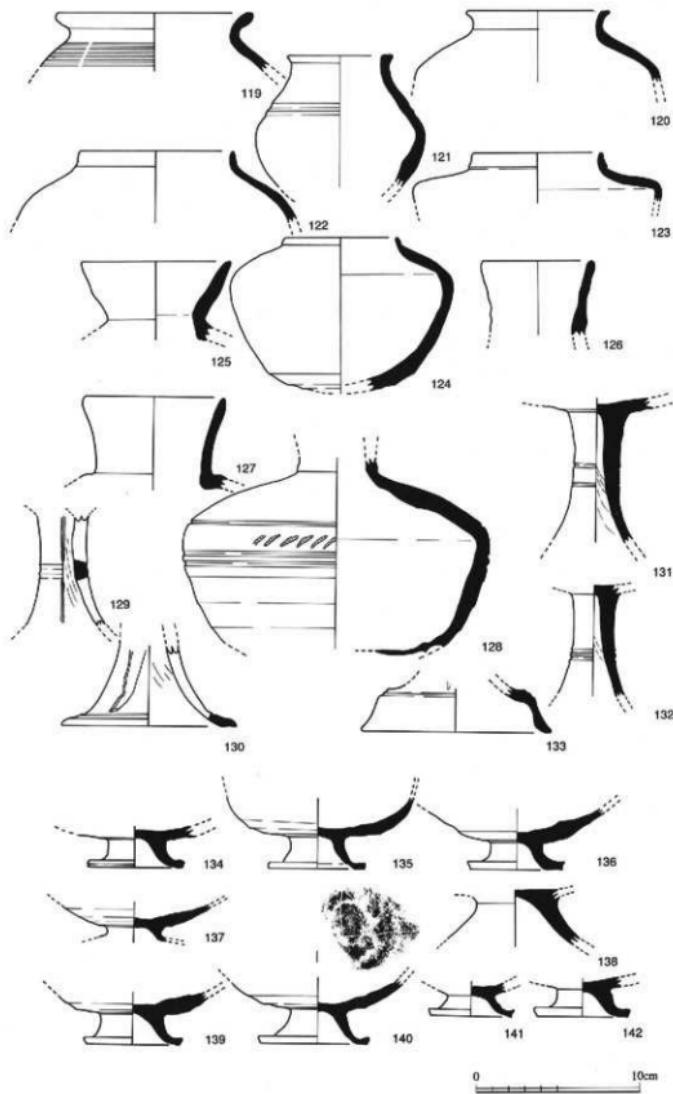


図 245 東池尻 1 号窯出土遺物 (6) (灰原出土遺物)

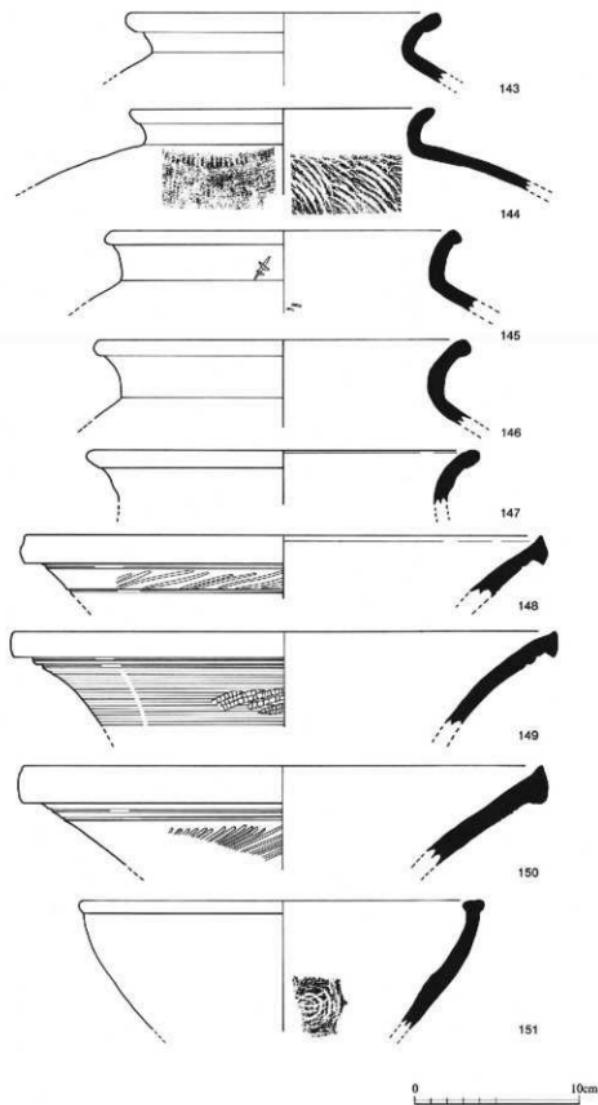


図 246 東池戸 1 号窯出土遺物 (7) (灰原出土遺物)

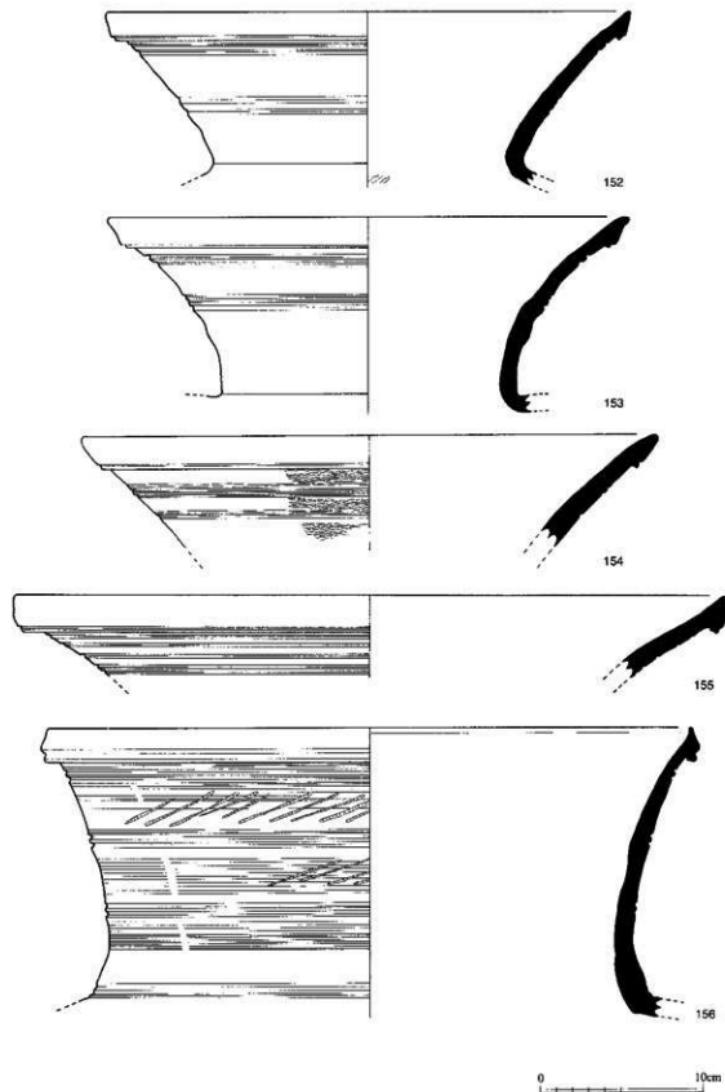
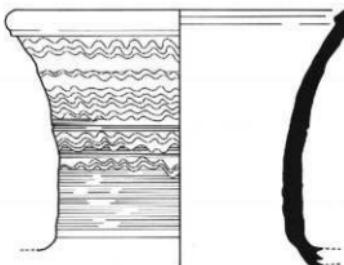
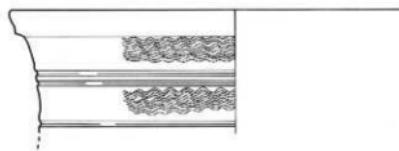


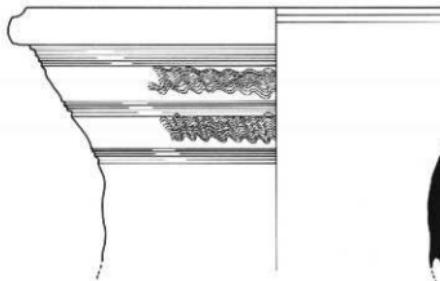
図 247 東池尻 1 号窯出土遺物 (8) (灰窓出土遺物)



157

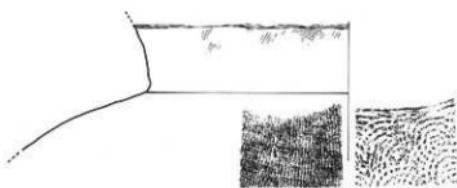


158



159

0 10cm



160



161

0 10cm

図248 東池尻1号窯出土遺物 (9) (灰原出土遺物)

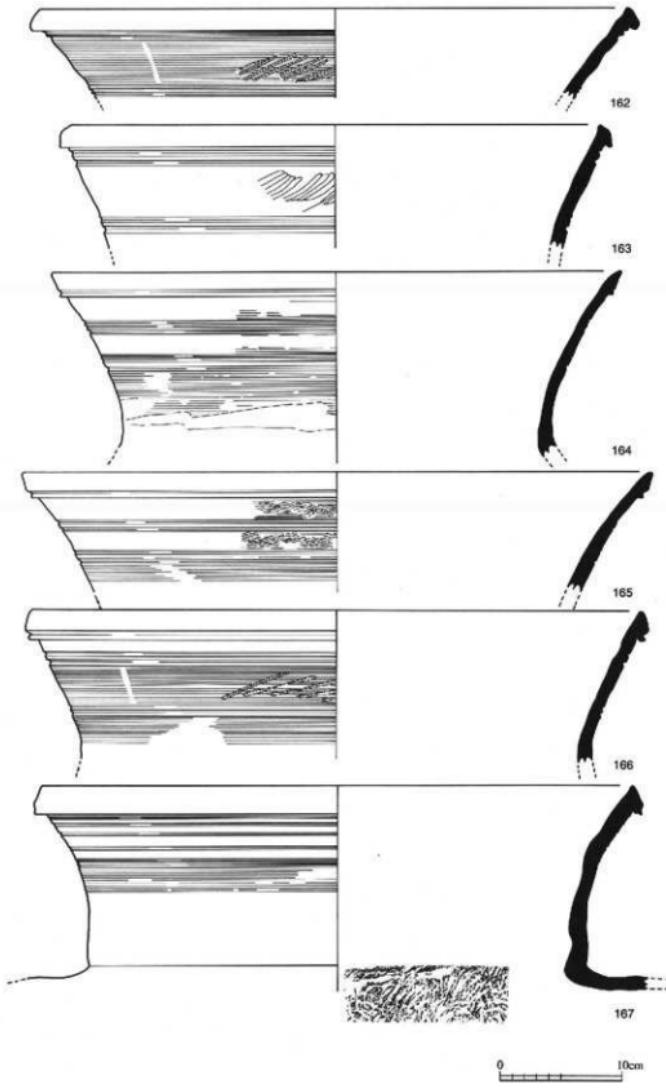
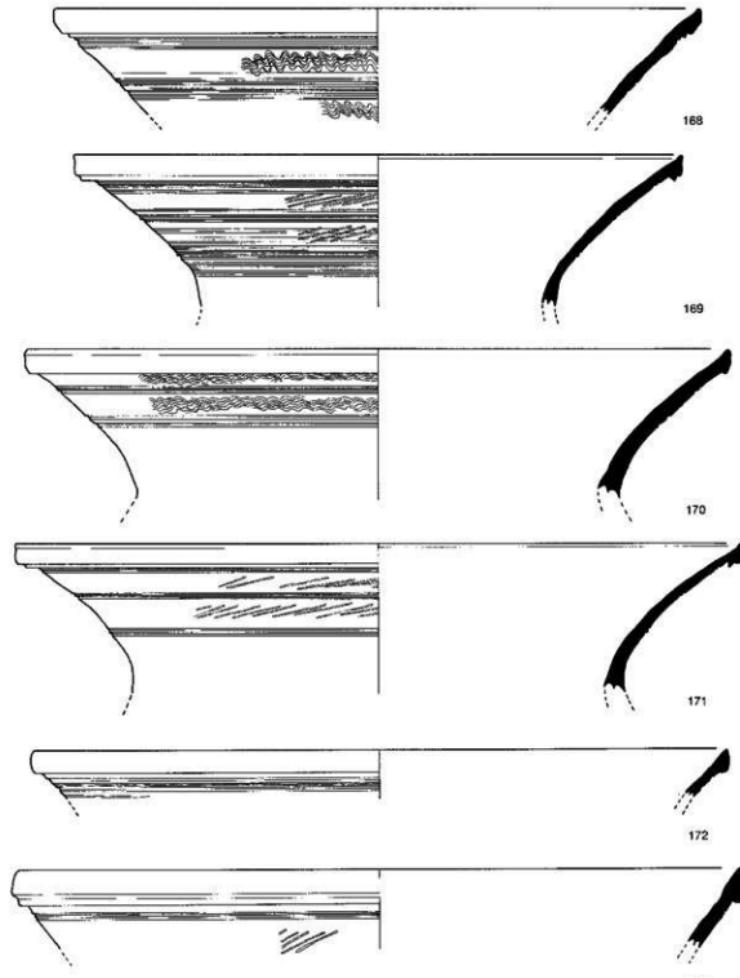


図 249 東池尻 1 号窯出土遺物 08 (灰原出土遺物)



0 10cm

図 250 東池坑 I 号窯出土遺物 10 (灰原山土遺物)

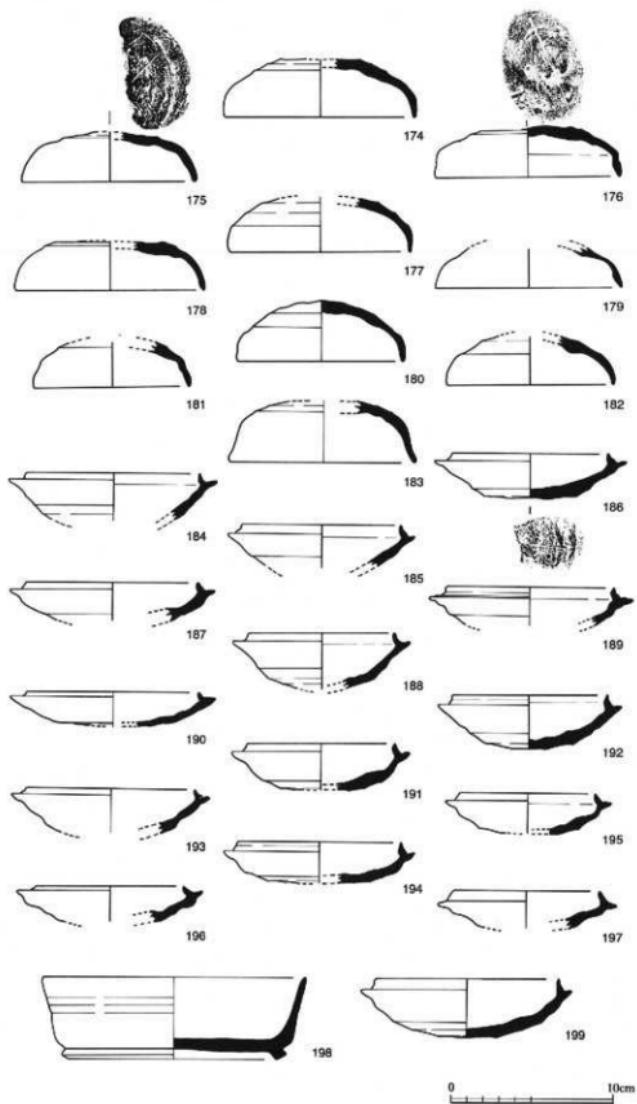


図 251 東池尻 1 号窯出土遺物 03 (灰窓 2 次堆積層出土遺物)

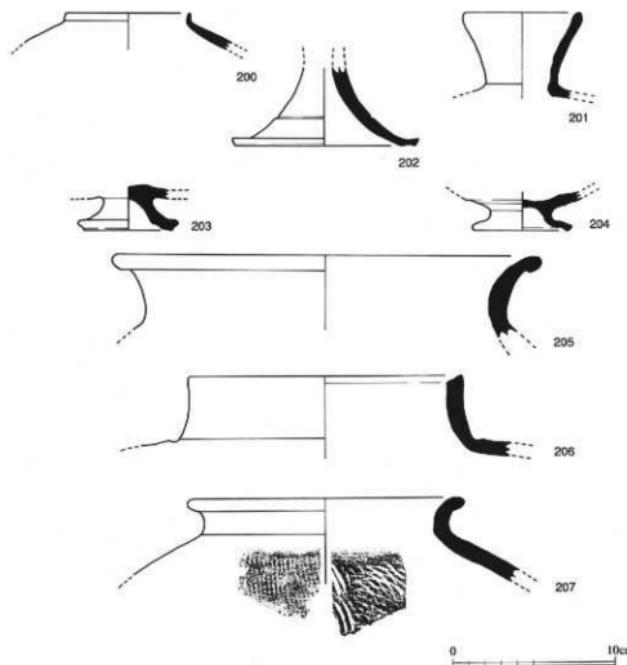


図252 東池尻1号窯出土遺物 03(灰原2次堆積層出土遺物)

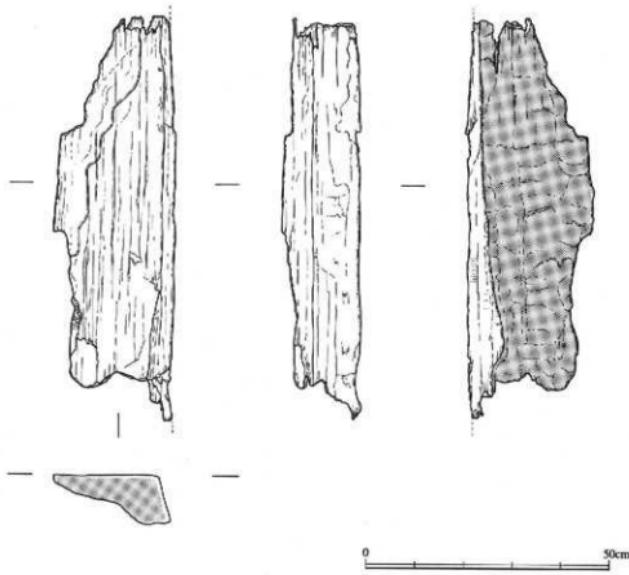


図253 東池尻1号窯出土遺物 04

表 25 東池尻 1 号窯第 1 次焼成床面出土遺物観察表

(丁はたもあがりを示す)

器種	表面 図版	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	240- 1	口径12.0 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面7/8回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。胎土: 泥。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/16。反転復元。内面灰かぶり。
杯 蓋	240- 2 110- 2	口径11.2 残存高3.2	体部はやや下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 泥。1~2mm の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/16。反転復元。
杯 蓋	240- 3	口径12.0 残存高2.6	体部はやや下方に下り、運部はやや丸くおさめる。天井部はやや低く。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 泥。1~2mm の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/16。反転復元。
杯 蓋	240- 4 106- 4	口径12.3 器高3.4	体部はやや下方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡青褐色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。若干含む。焼成: 不良。残存: 1/2。合板復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 蓋	240- 5	口径9.4 器高3.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/6回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 泥。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 蓋	240- 6	口径11.0 残存高2.4	体部・口縁部は下外方に直線的に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面9/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。若干含む。焼成: 良好。残存: 1/16。反転復元。内面灰かぶり。
杯 蓋	240- 7	口径9.6 残存高2.9	体部は下外方に下り口縁部はほぼ垂直となる。端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 泥。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
杯 蓋	240- 8 106- 8	口径11.3 器高3.9	体部はやや下方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/5回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内灰色、外一灰褐色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
杯 身	240- 9	口径10.8 受部径13.0 残存高3.0 T 高0.4 T 角度51°30'	たちあがりは内傾してのび縁部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、端部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面2/3回転ヘラ削り調整。底体外面1/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内灰色、外一灰褐色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外側灰かぶり。
杯 身	240- 10 106- 10	口径11.0 受部径13.0 残存高3.2 T 高0.7 T 角度33°00'	たちあがりは内傾してのび縁部は丸くおさめる。受部は上方にのび、上面はやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。たちあがりが底体内部で非常に多い段を成す。底体部はやや浅く、底体は平ら。底体内部の一部が焼け歪み、膨らんでいる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面9/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。外側自然釉付。
杯 身	240- 11 106- 11	口径11.0 受部径13.0 器高3.5 T 高0.4 T 角度45°15'	たちあがりは内傾したのち、底位で直立し、端部はやや丸い。受部はやや外方にのび縁部は丸くおさめる。底体部は深く、底体は平ら。底体内部の一部が焼け歪み、膨らんでいる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面2/3(底部中央)未調整。底体外面1/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 泥。焼成: 良好。残存: 1/2。一部反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯 身	240- 12 106- 12	口径11.1 器高3.5	体部はやや内傾して上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底体は平らに近い。底部中央がやや焼け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面2/5(底部中央)へら切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 泥。焼成: 良好。残存: 3/4。ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯 身	240- 13	口径9.7 残存高4.2	体部は上外方にのび、口縁部はやや内傾して上外方にのびる。端部は丸くおさめる。底体部は深く、底体はやや丸い。底部中央が深く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面9/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 泥。1mm の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。外側一部に自然釉付。
杯 身	240- 14	口径10.6 受部径13.0 残存高3.7 T 高0.8 T 角度34°30'	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常に多い段を成す。底体部は深い。底部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面下不明。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内灰青色、外一灰褐色。胎土: 泥。1~2mm の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/16。反転復元。外側灰かぶり。
杯 身	240- 15	口径10.2 受部径12.6 残存高3.3 T 高0.6 T 角度45°30'	たちあがりは内傾したの中位で上外方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外面下不明。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 泥。チャートを若干含む。焼成: やや不良。残存: 1/12。反転復元。

杯 身	240- 16	口徑10.0 受部径12.2 残存高2.4 T 高0.6 T 角度37°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや内下方に下る。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸不明。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石を若干含む。焼成：やや良。残存：1/12。反転復元。
杯 身	240- 17	口徑10.1 受部径12.6 残存高2.4 T 高0.6 T 角度41°30'	たちあがりは内傾したのち、端部付近ではほぼ直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや内側に下る。端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常に美しい段を作成。底体部は浅い。底部はほぼ欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸不明。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/20。反転復元。外面部一帯灰かぶり。
杯 身	240- 18	口徑11.6 受部径13.5 残存高2.2 T 高0.6 T 角度35°30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部はほぼ欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸不明。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。外面部灰かぶり。外面部に自然釉付着。
杯 身	240- 19	口徑12.0 残存高3.3	体部・口縫部はト外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外凸/4回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。外面部灰かぶり。
杯 身	240- 20	口徑10.7 受部径13.0 残存高3.9 T 高0.6 T 角度35°15'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/4回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面部自然釉付着。
杯 身	240- 21	口徑9.8 受部径12.0 残存高3.7 T 高0.6 T 角度44°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/2回転ハラ削り調整。底部外凸/5(底部中央)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。外面部灰かぶり。
杯 身	240- 22	口徑10.6 受部径12.0 残存高3.8 T 高0.5 T 角度43°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/2回転ハラ削り調整。底部外凸/5(底部中央)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：胎。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。外面部自然釉付着。
高 杯	240- 23	基部径3.8 残存高4.1	体部は外上方にのびる。口縫部欠損。底部は浅く、平ら。脚部は基部から外方に下る。脚部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部外面部回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：2/3。一部反転復元。ヘラ記号：杯部底部内面に「-」あり。

表 26 東洋尻 1 号窯第 2 次・第 3 次焼成床面上出土遺物観察表

(丁はたちあがりを示す)

番号	断面 図面 図版	法 量 (cm)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 蓋	240- 24	口徑11.8 高3.5	体部は下外方に下り、口縫部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低く丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外凸/3回転ハラ削り調整。天井部外凸/9(頂部)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内噴灰色、外一灰褐色。胎土：胎。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：4/5。外面部灰かぶり。
杯 蓋	240- 25	口徑9.9 高2.6	体部・口縫部はやや上方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く丸くおさめる。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部上方不平。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：胎。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	240- 26	口徑10.4 受部径12.2 残存高3.0 T 高0.6 T 角度35°45'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/3回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内噴灰色、外一灰褐色。胎土：胎。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
短 脚 座	240- 27	口徑8.8 基部径6.1 体部最大径10.8	口縫部は基部からほぼ直立し、端部は丸くおさめる。肩部は下外方に下り、体部は下内方に下る。体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外面部回転ハラ削り調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：胎。1mmの長石をわずかに含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/8以下。反転復元。
杯 身	240- 28	口徑13.8 受部径15.6 残存高2.8 T 高0.4 T 角度46°30'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/4回転ハラ削り調整。底部外凸/1(底部中央)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡青色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 身	240- 29	口徑9.4 受部径11.6 残存高2.5 T 高0.6 T 角度44°45'	たちあがりは内傾したのち端部は上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外凸/1(底部中央)未調整。他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：胎。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

杯 蓋	240- 30	口径12.0 残存高2.5	体部は下方に下り、口縁部は外側して下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低い。大井部上半欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。大井部外2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。燒成：良好。残存：1/16。反転復元。内面灰かぶり。
	241- 31	口径12.2 残存高2.3	体部・口縁部は下方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低い。天井部上方2/3欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。チャートを若干含む。燒成：良好。残存：1/16。反転復元。
杯 身	241- 32	口径9.7 受部径11.0 残存高2.6 T高0.7 T角度24°30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部はやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。底部は浅い。底部下方2/3欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部下方2/3外側不明。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。残存：1/7。反転復元。
	241- 33	口径8.0 受部径9.8 残存高2.1 T高0.8 T角度26°00' 3/4欠損	たちあがりは内傾したのち、中段で直立する。端部は丸くおさめる。受部はほぼ直線にのびる。端部は丸くおさめる。底部は浅い。底部下方2/3欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部下方4/5外側不明。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
杯 身	241- 34	口径12.0 受部径14.0 残存高2.8 T高0.4 T角度49°30'	たちあがりは内傾したのち、中段で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのびる。端部は丸くおさめる。底部は浅い。底部下方2/3欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
	241- 35 106- 35	口径10.2 受部径12.2 高さ3.4 T高0.7 T角度27°00'	たちあがりは内傾したのち、中段で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのびる。端部は丸くおさめる。底部は浅く、底部はほぼ平ら。底部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。底部外側4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

表 27 東池尻1号窯灰原出土遺物観察表

(丁はたちあがりを示す)

器種	図版 図版	法量 (em)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	241- 36	口径15.2 残存高3.1	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。大井部はやや低く平ら。天井部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。大井部外2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
	241- 37 110- 37	口径13.2 高さ4.1	体部・口縁部は下方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸い。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外2/5回転ヘラ削り調整。天井部上方1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	241- 38 110- 38	口径11.6 残存高2.9	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外2/5回転ヘラ削り調整。天井部上方1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。ヘラ記号：大井部外面に「-」あり。
	241- 39 110- 39	口径12.6 残存高3.1	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。大井部外2/5回転ヘラ削り調整。大井部外面1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	241- 40	口径10.8 残存高3.3	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外3/5回転ヘラ削り調整。天井部外1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：2/3。一部反転復元。
	241- 41 110- 41	口径11.4 高さ3.8	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。大井部はやや高くやや丸い。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外3/5回転ヘラ削り調整。天井部外1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一端灰紫色、外一端灰色。胎土：密。3mm以下の長石多く含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：大井部外面に「-」あり。
杯 蓋	241- 42 110- 42	口径12.3 残存高2.6	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。大井部外1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側灰かぶり。
	241- 43	口径12.0 高さ3.6	体部・口縁部は内傾して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。	マキアグ・ミズビキ成形。天井部外4/5回転ヘラ削り調整。天井部外1/2(頂部)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内一端灰紫色、外一端灰色。胎土：密。2mm以下の長石、石英を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。成後。外側に自然輪付着。内面灰かぶり。受上面に土器片付着。
杯 蓋	241- 44	口径11.6 高さ3.3	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。天井部中央欠損。	マキアグ・ミズビキ成形。大井部外2/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰色。胎土：密。1~2mmの長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側に自然輪付着。

杯 蓋	241- 43 110- 46	口径11.8 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	241- 46 110- 46	口径11.2 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。大井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。大井部外面1/6(天井部)木削調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色、外一帯灰色。胎土：密。1~3mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外表面に自然釉付着。天井部外面に窓型片状着。内部灰かぶり。
杯 蓋	241- 47 110- 47	口径11.2 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色、外一帯灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外表面に自然釉付着。
杯 蓋	241- 48 110- 48	口径10.6 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部はやや高い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	241- 49 110- 49	口径11.8 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外表面に自然釉付着。
杯 蓋	241- 50 110- 50	口径10.6 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰紫色、外一帯淡青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯 蓋	241- 51 110- 51	口径11.2 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	241- 52 110- 52	口径10.8 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)木削調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰、外一帯灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。一部反転復元。外表面に自然釉付着。
杯 蓋	241- 53 111- 55	口径12.8 器高2.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)木削調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内暗灰色、外一帯暗青色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：2/3。
杯 蓋	241- 54 110- 54	口径9.8 残存高2.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰、胎土：密。2mm以下の長石・石英を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外表面に自然釉付着。
杯 蓋	241- 55 110- 55	口径10.2 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	241- 56 110- 56	口径11.4 残存高2.9	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部はやや内傾する凹面を成す。天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
杯 蓋	241- 57 110- 57	口径11.6 残存高2.5	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
杯 蓋	241- 58 110- 58	口径10.0 残存高2.2	体部・口縁部は垂直に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部は低く平ら。大井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：外一帯暗灰色、内一帯灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
杯 蓋	241- 59 110- 59	口径8.8 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。大井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：天井部外面に「」あり。
杯 蓋	241- 60 110- 60	口径7.4 器高2.8	体部は垂直に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部はやや内傾する凹面を成す。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外面1/6(頂部)木削調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 蓋	242- 61 106- 61	口径11.9 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/4以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外一帯灰色。胎土：密。2mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/2。
杯 蓋	242- 62 106- 62	口径13.3 残存高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。大井部はやや低くやや丸い。大井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。大井部外面1/6以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調査。	ロクロ回転：右回り。色調：暗青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

杯 蓋	242- 63 106- 63	口径11.7 高さ3.9	体部は垂直になり、口縫部は外側に下りや下外方に下る。端部は丸くさめる。天井部はやや低く平ら。天井部中央はやや突出で歪みがある。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面4/4回転ヘラ削り調整。天井部外面1/7(頂部)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 蓋	242- 64 107- 64	口径12.2 高さ3.8	体部・口縫部は外方に下り、端部は丸くおさまる。天井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/4回転ヘラ削り調整。天井部外側面1/2(頂部)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 蓋	242- 65 107- 65	口径11.0 高さ3.7	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさまる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外側面1/2(頂部)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 蓋	242- 66 107- 66	口径11.9 高さ3.6	体部・口縫部は下外方に下り、端部は丸くおさまる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外側面1/3回転ヘラ削り調整。天井部外側面1/3(頂部)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 67 107- 67	口径11.4 受部径13.2 高さ3.7 T 高0.6 T 角度28°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近では直立する。端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 68 107- 68	口径9.6 受部径12.0 高さ3.1 T 高0.5 T 角度51°00'	たちあがりは内傾したのち上位で内方にのびる。端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは底部内面で凹んで底を成す。底体部は深く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5(底部中央)木削調。底部外面1/5(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 69 107- 69	口径9.8 受部径12.1 高さ3.5 T 高0.5 T 角度52°15'	たちあがりは内傾して伸び、端部はやや丸い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは底部内面で弧を成す。底体部は深く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/9回転ヘラ削り調整。底部外面1/3(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 70 107- 70	口径10.0 受部径11.9 高さ3.6 T 高0.6 T 角度37°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは底部内面であまり段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 71 107- 71	口径10.0 受部径12.4 高さ3.5 T 高0.6 T 角度48°00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で内方にのびる。端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは基部内面であまり段を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面5/6(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 72 107- 72	口径11.0 受部径13.2 高さ3.1 T 高0.7 T 角度42°00'	たちあがりは内傾して伸び、端部は丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは基部内面で凹んで底を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 73 107- 73	口径10.8 受部径13.0 高さ3.1 T 高0.5 T 角度43°30'	たちあがりは内傾して伸び、端部はやや丸い。受部は外下方にのび端部はやや丸くおさまる。たちあがりは基部内面で凹んで底を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 74 107- 74	口径10.9 受部径12.8 高さ3.5 T 高0.6 T 角度38°30'	たちあがりは内傾したのも端部付近で内方にのびる。端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、上面で凹面を成し、端部は丸くおさまる。たちあがりは基部内面で非常に凹いで底を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)木削調。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 75 107- 75	口径9.5 受部径11.4 高さ3.6 T 高0.5 T 角度38°00'	たちあがりは内傾したのも端部付近で内方にのびる。端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは基部内面で凹んで底を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。
杯 身	242- 76 107- 76	口径10.2 受部径12.2 高さ3.0 T 高0.5 T 角度40°00'	たちあがりは内傾したのも端部付近で内方にのびる。端部はやや丸くおさまる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさまる。たちあがりは基部内面で凹んで底を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。

杯 身	242- 77	口径11.5 受部径12.8 器高3.0 T高0.5 T角度36°'00"	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり差部内面で非常にあまり段を作らず。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：明灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。合成復元。外側に自然釉付着。
	242- 78	口径11.4 受部径13.8 器高3.1 T高0.7 T角度40°'30"	たちあがりは内傾したのち上内方にあまり段を成して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でややあまり段を作らず。底体部は浅く、底体部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。外側に自然釉付着。
杯 身	242- 79	口径10.8 受部径13.0 器高3.3 T高0.6 T角度45°'00"	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でややあまり段を作らず。底体部は浅く、底体部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。底部外面2/3(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に灰かぶり。
	242- 80	口径8.8 受部径12.2 器高3.6 T高0.6 T角度42°'30"	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、上部でやや内面に成し、端部はやや丸くおさめる。たちあがり基部内面であまり段を作らず。底体部は浅く、底体部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面2/1(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に窓型片付着。内外面灰かぶり。
杯 身	242- 81	口径10.8 受部径12.0 器高3.4 T高0.5 T角度32°'30"	たちあがりは内傾したのち低位で直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でややあまり段を作らず。底体部は浅く、底体部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/7回転ヘラ削り調整。底部外面1/1(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外側に窓型片付着。内外面灰かぶり。
	242- 82	口径9.4 受部径12.0 器高3.5 T高0.6 T角度47°'00"	たちあがりは内傾しての、端部はややくび。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面でややあまり段を作らず。底体部は浅く、底体部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/9回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。受部上面に杯口縁片付着。外面に窓型片付着。外側灰かぶり。
杯 身	107- 82	口径9.9 受部径12.0 器高3.5 T高0.6 T角度32°'00"	体部はやや上内方にのび、端部は上内方にのびる。端部はほぼ平面を成す。底体部はやや深く、底体部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/9回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。ヘラ記号：底部外面に「」あり。外側に窓型片付着。内外面灰かぶり。
	242- 83	口径9.9 103- 83 口径9.0 器高4.0	体部はやや上内方にのび、端部は上内方にのびる。端部はほぼ平面を成す。底体部はやや深く、底体部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。受部上面に杯口縁片付着。外面に窓型片付着。外側灰かぶり。
杯 身	242- 84	口径10.8 器高3.8	体部・口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。のびる。端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底体部は平らに近い。体部・底体境界内面であまり段を作らず。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5(底部中央)ヘラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「」あり。底部外側に窓型片付着。外側一部に自然釉付着。
	103- 84	口径10.8 器高3.8	体部は外方にのび、口縁部は直立する。端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)ヘラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を多く含む。チャートを多く含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。口縁部外側に窓型片付着。
杯 身	242- 85	口径10.8 器高3.4	体部は外方にのび、口縁部は直立する。端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)ヘラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内明灰青色、外淡灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を多く含む。チャートを多く含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。口縁部外側に窓型片付着。
	111- 86	口径10.6 受部径12.8 器高3.9 T高0.3 T角度48°'00"	たちあがりは内傾してのび、端部はややくびおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底体部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「」あり。
杯 身	243- 86	口径11.2 受部径12.0 器高3.1 T高0.5 T角度47°'30"	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部はややくび。受部は水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら、底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「」あり。
	111- 87	口径11.2 受部径12.0 器高3.1 T高0.5 T角度47°'30"	たちあがりは内傾してのび、端部はややくびおさめる。受部は外上方にのび、端部はややくび。受部は水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら、底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2以下回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。外一面部に自然釉付着。灰かぶり。
杯 身	243- 88	口径12.2 受部径14.2 器高3.4 残存高3.0 T高0.4 T角度44°'15"	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部はややくび。受部は水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/8回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外一面部に自然釉付着。灰かぶり。
	243- 89	口径10.7 受部径13.0 器高3.4 T高0.7 T角度37°'45"	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部はややくび。受部は水平にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部はやや深く、底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/8回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰青色、外淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外一面部に自然釉付着。灰かぶり。

杯 身	248- 90	口径10.2 受部径12.6 残存高3.3 T 高0.6 T 角度30°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はややくにおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/5以下回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内淡灰赤、外一灰色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外面に自然釉付着。灰かぶり。
	243- 91	口径9.6 受部径12.2 残存高3.4 T 高0.6 T 角度49°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部はややく、底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：右回り。色調：内淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。灰かぶり。受部上面に上器片付着。
杯 身	243- 92	口径10.8 受部径13.2 残存高3.7 T 高0.7 T 角度38°15'	たちあがりは内傾したも中位で上内方にのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部はややく。底部はややく、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	クロロ回転：左回り。色調：内淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：あり。
	111- 92	口径10.8 受部径13.2 残存高3.7 T 高0.7 T 角度38°15'	たちあがりは内傾したも中位で上内方にのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部はややく。底部はややく、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。灰かぶり。
杯 身	243- 93	口径10.6 受部径12.5 残存高2.9 T 高0.5 T 角度36°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はややくおい。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：内淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土：密。2mm以下の長石・石英を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：あり。
	243- 94	口径9.6 受部径11.8 残存高2.8 T 高0.5 T 角度49°45'	たちあがりは内傾したも離瓣で上方にのび、端部はややくおい。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。内外面に黒墨片付着。
杯 身	243- 95	口径10.6 受部径12.8 残存高3.0 T 高0.4 T 角度50°45'	たちあがりは内傾したも離瓣で上方にのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は浅く。底部は丸く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5以下回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰紫色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
	111- 95	口径10.0 受部径12.2 残存高3.6 T 高0.7 T 角度37°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は丸く。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰紫色、外一暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外面に窓型片付着。
杯 身	243- 97	口径9.3 受部径11.6 残存高3.1 T 高0.7 T 角度46°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。底部外面1/9(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰紫色、胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。受部上面に土器片埋着。
	111- 98	口径11.0 受部径12.4 残存高2.9 T 高0.5 T 角度20°00'	たちあがりは内傾したも低位で上方にのび、端部はややくおい。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。やや焼きむ。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
杯 身	243- 99	口径10.6 受部径12.4 残存高2.6 T 高0.6 T 角度39°00'	たちあがりは内傾したも離瓣付近上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰紫色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	111- 100	口径9.8 受部径12.0 残存高2.6 T 高0.6 T 角度24°30'	たちあがりは内傾したも中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。やや焼きむ。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/5回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	243-101	口径9.6 受部径11.8 残存高2.8 T 高0.7 T 角度42°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/6回転ヘラ削り調整。底部外面1/6(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰青色、外一灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。外面に自然釉付着。
	243-102	口径9.6 受部径13.6 残存高2.5 T 高0.7 T 角度45°45'	たちあがりは内傾したも離瓣付近上方にのび、端部はややくおい。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/6以下回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石をわざかに含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。内外面灰かぶり。
杯 身	243-103	口径9.2 受部径11.4 残存高3.1 T 高0.6 T 角度45°45'	たちあがりは内傾したも中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/7回転ヘラ削り調整。底部外面4/7(底部中央)ヘラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。
	243-104	口径8.8 受部径10.4 残存高3.4 T 高0.4 T 角度33°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面5/6回転ヘラ削り調整。底部外面5/6(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰青色、外一暗灰。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「-」あり。

体 身	243-105	口唇9.8 受部延12.2 残存高3.1 T 高0.6 T 角度44°45'	たちあがりは内傾したもの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く。底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5以下回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎生: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。ヘラ回転: 武部外側に「1」あり。
	243-106	口唇9.6 受部延11.4 残存高2.2 T 高0.6 T 角度32°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2(底部中央)へラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰灰色。胎生: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。底体部外側灰かぶり。
体 身	243-107	口唇9.2 受部延10.8 残存高2.2 T 高0.7 T 角度44°45'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや深い。受部は外上方にのび、端部はやや深い。底体部は浅く、底体部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3(底部中央)へラ切り未調整。底体部外側1/3(底部中央)へラ切り未調整。底体部外側にやや深いナダによる布目模様あり。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎生: 密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/7。反転復元。受部上部灰かぶり。
	243-108	口唇8.6 受部延10.5 残存高3.0 T 高0.4 T 角度30°30'	たちあがりは内傾したもの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く、底体部は平ら。底体部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3(底部中央)へラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰灰色。胎生: 密。燒成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
体 身	243-109	口唇7.0 受部延9.0 残存高2.2 T 高0.6 T 角度26°00'	たちあがりは内傾したものの中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はやや深い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4(底部中央)未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰色。胎生: 密。燒成: 良好。残存: 1/8。反転復元。
	243-110	口唇8.0 受部延5.6 残存高2.4 T 高0.4 T 角度30°30'	たちあがりは内傾したものの中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底体部はやや深い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5(底部中央)へラ切り未調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰灰色。胎生: 密。燒成: 良好。残存: 1/2。反転復元。
頭	244-111	基部延3.4 体部最大径9.5 残存高13.2	頭部はやや上外方にのびたもの外反して上方にのびる。口輪部・頬部境界よりやや深い沈線をめぐらす。口輪部欠損。脣部は外下方に下り、張りきり出す。脣部は内下方に下り、脣部は平ら。頭部最大径は17.1/3に位置し、ほぼ中位の高さに凹孔を帯びる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面9/10回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰色。外一灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 5/6。一部反転復元。頭部内面・頬部外側一部・脣部外灰かぶり。若宮山に、外表面1.6cm・内面径2.0cm・厚さ1.1cmを測る耕土堆が入っている。脣部の凹孔を穿つ際に器内に落ち込だるものと思われる。外面に調整が認められ、底体部にヘラ削りとナダ削除を施したのちに穿孔したようである。
	108-112	脚底延11.1 基部延3.1 残存高10.4 脚高9.7	脚部はやや内方に下ったもの外反しつつ外下方に下り、脛部で外方にのびる。端部はやや外側を水平する部で成し、脛部内面および脛部外側で接地する。中位に2条の長い沈線をもつ。脛部は「J」に1条の非常深い沈線をもつ。2段2方向に位置し、ほぼ中位の高さに凹孔をめぐらす。2段2方向に、指く切り込んだ幅2mm以下のスリット状のスカシを有する。底体部が一部残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ削除。脚部内面にしまり口があり。脚部と脚部の接合および脚部内側の沈線を施したのちスカシを切り込む。内外面ともスカシを開けたのちの周囲にナダ削除を行っていない。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。外一暗灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 5/6。一部反転復元。頭部内面・頬部外側一部・脣部外灰かぶり。
脚	244-112	脚底延11.1 基部延3.1 残存高10.4 脚高9.7	脚部はやや内方に下ったもの外反しつつ外下方に下り、脛部で外方にのびる。端部はやや外側を水平する部で成し、脛部内面および脛部外側で接地する。中位に2条の長い沈線をもつ。脛部は「J」に1条の非常深い沈線をもつ。2段2方向に位置し、ほぼ中位の高さに凹孔をめぐらす。2段2方向に、指く切り込んだ幅2mm以下のスリット状のスカシを有する。底体部が一部残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ削除。脚部内面にしまり口があり。脚部と脚部の接合および脚部内側の沈線を施したのちスカシを切り込む。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。外一暗灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 脚部の1/2以下。合成復元。外面一部に自然釉付着。
	108-113	脚底延13.7 基部延12.2 残存高11.8 脚高11.8	脚部は上方に下ったもの外下方に開いて下り、脛部で外上方にのびる。脛部は丸くおさめる。脛部下面で常にあまり瘦せこぼれ、脛部内面で接地する。中位に2条の長い沈線をもつ。脛部は「J」に1条の非常深い沈線をめぐらす。2段2方向に、指く切り込んだ幅2mm以下のスリット状のスカシを有する。底体部が一部残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ削除。脚部内面にしまり口があり。脚部と脚部の接合および脚部内側の沈線を施したのちスカシを切り込む。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。外一暗灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。外面一部に自然釉付着。
脚 杯	244-113	脚底延13.7 基部延12.2 残存高11.8 脚高11.8	脚部は上方に下ったもの外下方に開いて下り、脛部で外上方にのびる。脛部は丸くおさめる。脛部下面で常にあまり瘦せこぼれ、脛部内面で接地する。中位に2条の長い沈線をもつ。脛部は「J」に1条の非常深い沈線をめぐらす。2段2方向に、指く切り込んだ幅2mm以下のスリット状のスカシを有する。底体部が一部残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ削除。脚部内面にしまり口があり。脚部と脚部の接合および脚部内側の沈線を施したのちスカシを切り込む。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。外一暗灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。外面一部に自然釉付着。
	244-114	脚底延5.6 基部延3.3 残存高3.6 脚高2.5	脚底部は平ら。脚部以降欠損。脚部はやや内側にして下方外方に下り、脛部で外方にのびる。端部は丸くおさめる。脛部内面で接地する。脛部は常に底面で接地する。脛部・脚部境界に2条のやや深い沈線をもつ。脛部内側に2条の長い沈線をめぐらし、その間に斜文刻文を有する。なお、脛部・脚部は底体部接地の沈線を施してある。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外側1/2(底部中央)未調整のち脚部接合時に回転ナダ調整。他の回転ナダ削除。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。胎生: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転復元。外面一部に自然釉付着。
長 顎	244-115	頬部基部延0.4 体部最大径17.7 脚部基部延8.0 脚底延10.6 脚底延(外径)11.4 残存高14.4 脚高2.9	口類部欠損。脚部は外下方に下って張り出し、体部はやや内側して下内方に下り、底部は丸い。体部最大径は上位1/5に位置する。脚部はやや外反して下方外方に下り、脚部は外側を平面的で内側で接地する。脣部・脚部境界に2条のやや深い沈線を、体部内側に2条の長い沈線をめぐらし、その間に斜文刻文を有する。なお、脣部・脚部は底体部接地の沈線を施してある。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体外側下半回転ヘラ削り調整。底体外側下半回転ヘラ削り調整。なお底部外側は脚部接合時に脚部付近のみ回転ナダ調整。他の回転ナダ削除。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰青色。胎生: 密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 2/5。一部反転復元。肩部外側・底体外側・内側一部灰かぶり。内外面一部に自然釉付着。

半	244-116	口径6.6 基部径6.1 体部最大径21.5 残存高11.4	口頭部は上方にのび、端部は丸くおさめる。体部上面は丸いをもって外下方に張り出し、制限は上方向に下る。体部上面中央部・制限下部・底部欠損。なお、口頭部は(1)体部上面筋と底板の周縁が基部の(1)点位を通る位置で接着されている。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部上面・肩部外面3/5・底部外面カット調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一青灰色、外一淡灰青色。胎土: 厚。4mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 1/6。反転版元。口頭部上面・体部上面外向面かぶり。体部上面外間に自然輪付着。
	109-116				
短 類 造	244-117	口径6.4 基部径7.0 体部最大径12.2 残存高9.5	口頭部は基部からやや上方にのびる。端部はほぼ平面を成して内下方に内積する。肩部は下外方に強く張り出し、体部は内彫して(1)内方に下る。底部は上方に下る。底部下半欠損。体部最大径は上方3/7に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面・体部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡青灰色。胎土: 厚。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 1/6。反転版元。
	109-117				
臺	244-118	口径27.9 残存高8.7	頭部下方1/3以下欠損。口頭部は上外方にのび、口頭部下で外下方向にのびたの外より上方にのび、内方にのび、ややあまい段を成して上方にのび、やや内彫して上方にのび、端部は丸くおさめる。頭部上方1/3に2条、頭部下方1/3に2条の細い沈線をめぐらし、その間に1条の非常に鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 厚。1mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: L1頭部の1/7以下。反転版元。
	244-119	L1径12.0 基部径10.6 残存高3.5	口頭部は外反して上方にのび、口頭部は丸くおさめる。肩部は下外方に下る。体部以下欠損。	肩部外向カキ目調査。のち他を回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰紺。胎土: 厚。焼成: 良好。残存: L1頭部の1/5以下。反転版元。L1頭部外向に自然輪付着。
臺	245-120	口径8.6 基部径8.0 体部最大径15.2 残存高4.2	口頭部は外反して上方にのびる。口頭部は内面上端でやや平面を成し、端部は丸くおさめる。体部下半以下欠損。	回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰色。外一暗灰青色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/20。反転版元。
	245-121	口径1.8 基部径4.2 体部最大径7.2 残存高8.3	口頭部は基部からやや上方にのびる。端部はほぼ平面を成す。肩部は下外方に下り、体部は下外方に下る。底部は内彫で2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰紺。胎土: 密。5mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/6。反転版元。
短 類 造	245-122	口径9.4 基部径10.0 残存高4.3	口頭部は基部から上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方向に張り出し。体部は下外方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰色。外一淡灰青色。胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/10。反転版元。
	245-123	口径7.8 基部径8.4 体部最大径15.4 残存高3.1	口頭部は基部から上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部はやや外側して下方に強く張り出し、体部は下外方に下る。底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰色。胎土: 密。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/10。反転版元。
臺	245-124	口径7.0 体部最大径13.9 残存高3.5	口頭部は基部から上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方向に張り出し、体部は下外方に下り、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一淡褐色。胎土: 厚。3mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転版元。外面に自然輪付着。
	245-125	口径9.2 基部径5.8 残存高4.9	口頭部は上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 厚。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: L1頭部の1/3。反転版元。自然輪付着。
提 板	245-126	口径6.8 残存高4.6	口頭部は上方にのび、端部は丸くおさめる。基部以下、肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一暗灰青色、外一暗灰青色。胎土: 厚。焼成: 良好。残存: L1頭部の3/5。
	245-127	口径9.0 基部径7.2 残存高5.1	口頭部は上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰紺。胎土: 厚。1mm以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: L1頭部の1/3。反転版元。
長 類 造	245-128	基部径6.0 最大径18.8 残存高12.5	口頭部欠損。肩部は外下方向に張り出し、体部は下外方に下る。底部・制限・底部欠損。肩部・体部境界に2条の鈍い沈線を、体部上方2/3の位置に2条の鈍い沈線をめぐらし、その間に削文字を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一灰色、外一暗灰色。胎土: 厚。3mm以下の長石を多く含む。焼成: 良好。残存: 1/7。反転版元。外面に自然輪付着。
	112-128				

高 杯	245-129	残存高6.8	脚部は下方に下ったのも下外方に開いて下る。脚部基部付近から上方と脚部は欠損する。中位に2条の非常に純い沈線をめぐらす。2段2方向にスリット状スカシを打む。中位の沈線を施したのちスカシは切り込まれている。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。長径7mmの長石を1ヶ含む。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/6。
高 杯	245-130	脚底径10.8 残存高6.0	脚部上方に2以上欠損。脚部は下外方に開いて下り、裾部で外方にのびる。裾端部は丸くおさまる。裾端部と脚部内面で接地する。脚部上方に非常に純い1条の沈線をめぐらす。2段3方向に長方形スカシを育すと思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：内淡灰青色、外一様灰白色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：脚部の1/6。反転復元。脚部外面に自然釉付着。
高 杯	245-131	基部径3.9 残存高9.0	脚部は下方に下ったのも下外方に開いて下る。脚部欠損。中位に2条の純い沈線をめぐらす。沈線の間隔は広い。スカシはない。杯部は底部中央のみ残存。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外面回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。杯底部内面と底部灰かぶり。
高 杯	245-132	基部径2.9 残存高6.9	脚部は下方に下ったのも下外方に開いて下る。脚部欠損。中位に2条の純い沈線をめぐらす。沈線の間隔は広い。スカシはない。杯部は底部中央のみ残存。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。脚部内面にしづり目あり。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。脚部外表面灰かぶり。
高 杯	245-133	脚底径11.8 残存高2.9	脚部基部のみ残存。脚部は下外方に開いて下る。脚部上方であまり段を作成して2条の純い沈線をめぐらし、下外方に下ったのも裾端部附近で外反する。裾端部に外傾する平面を成して外側で接地する。長方形スカシを育てる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：淡灰青色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：脚部の1/7。反転復元。
高 杯	245-134	脚底径5.7 基部径3.7 残存高2.6	杯底部はほぼ平ら。体部以上欠損。脚部は下外方に下ったのも下外方にのびる。裾端部は外傾する凹面を成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外面回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰青色。胎土：密。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/6。合成復元。
高 杯	245-135	脚底径5.9 基部径3.6 残存高1.5	杯底部はほぼ平ら。口縫部欠損。脚部は下外方に下ったのも内面でない段を作成し、裾部で外方にのびる。裾端部は外傾する平面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外面回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。ヘタ割り跡：杯底部内面に「×」あり。一部灰かぶり。
西 杯	245-136	脚底径5.8 基部径3.2 残存高3.8	杯底部はほぼ平ら、杯部上方欠損。脚部は下外方に下ったのも裾端部で外方にのびる。新端部は外傾する凹面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部底面外回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰黄色、外暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：2/5。一部反転復元。外側に自然釉付着。一部灰かぶり。
高 杯	245-137	基部径3.7 残存高2.3	杯底部はほぼ平ら、杯部上方欠損。脚部基部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部底面外回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mm以下以上の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：不良。残存：1/3。一部反転復元。
高 杯	245-138	基部径4.8 脚底径6.3	杯底部欠損。脚部は下外方に開いて下る。脚部基部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内外一灰椎角。断面は暗椎角。胎土：密。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成：不良。残存：脚部2/3。一部反転復元。
高 杯	245-139	基部径4.0 脚底径5.8 残存高5.3	杯底部は平ら。杯部上方欠損。脚部は下外方に下り、裾部で外下方にのびる。裾端部は外傾する平面を成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。
高 杯	245-140	基部径3.5 脚底径6.7 残存高4.1	杯底部は平ら。体部・口縫部欠損。脚部は下外方に下り、裾部で外方にのびる。裾端部は外傾する平面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外回転ヘタ割り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内灰黄色、外暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。灰かぶり。
高 杯	245-141	基部径4.9 脚底径5.0 残存高2.1	杯底部欠損。脚部は下外方に下り。脚部は下外方にのびる。裾端部は外傾する平面を成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。含む。残存：1/2。一部反転復元。灰かぶり。
高 杯	245-142	基部径3.3 脚底径5.6 残存高2.5	杯部欠損。脚部は下外方に下り、脚部で外下方に下る。裾端部は外傾する平面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外側灰かぶり。

要	246-143	口径19.0 基部深16.2 残存高4.4	口縁部は外側して上方にのび、口縁部下で外下方に細いのが、口縁部は上方にのびたものも内側して上方向にのび、口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一暗灰色、外一淡灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縁部約1/10。反転復元。内面一部自然釉付着。外面灰かぶり。
要	246-144	口径18.6 基部深14.7 残存高17.4	口縁部は外側して上方にのび、口縁部下で外上方にのびたものも外側して上方にのび、平面を成す。肩部は丸くおさめる。肩部は外上方に下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部外側タタキのちカキ目調整。肩部内面青苔波タタキ。他は回転ナダ調整。	色調：内一暗灰黄色、外一淡灰黑色。 胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部約1/4。反転復元。口縁部外側、底部灰かぶり。
要	246-145	口径21.0 残存高5.1 基部深20.2	口縁部は上方にのび、口縫部下で外方に下り、口縫部内面脇しながら上方にのび、内上方にのび、口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部一部、体部、底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部内面同心円タタキ。他は回転ナダ調整。	色調：内一暗灰黄色、外一淡灰黑色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：口縫部外側、底部内面灰かぶり。 ヘラ符号：口縫部外側に「+」あり。
要	246-146	口径22.6 残存高4.9 基部深20.0	口縁部は上方にのび、口縫部下で外下方に下り、口縫部内面脇しながら上方にのび、内上方にのび、口縫部内面に平ら。肩部は外下方に下る。肩部一部、体部、底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：淡灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
要	246-147	口径23.6 残存高3.3	口縁部は上方にのび、口縫部は外方にのび、端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：淡灰黄色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
要	246-148	口径32.0 残存高3.9	口縁部は外側して上方にのび、口縫部下で外下方にのび、口縫部はやや上方にのびたものも内側する凹面を成す。肩部はやや低い。口縫部直下に1条、頸部1/2上方に1条の沈縫をめぐらし、その間に櫛縫き斜行沈縫文を行す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一暗灰黄色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。1mm以下の石英を若干含む。ナットを含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。
要	246-149	口径31.6 残存高5.9	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で下外方にのび、内側して上方にのび、口縫部内面に平ら。1条の沈縫をめぐらし、櫛縫き斜行沈縫文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。口縫部外凸カキ目調整。他は回転ナダ調整。	色調：淡灰青色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
要	246-150	口径32.2 残存高6.2	口縫部は外反して上方にのび、口縫部下で外方にのび、内側して上方にのび、口縫部内面に平ら。2条の沈縫をめぐらし、その間に櫛縫き斜行沈縫文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一淡灰白色、外一灰色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。
器台右部	246-151	口径25.0 残存高8.0	体部は上方にのび、口縫部は上方にのび、口縫部端部内側しながら上方にのびたもの、やや内傾する平面を成す。底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部外側タタキのちカキ目調整。他は回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一暗灰黑色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。
要	247-152	口径32.6 基部深19.4 残存高10.8	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で外下方にのび、口縫部はやや上方にのびたものから内側して口縫部内面に至る。肩部以下欠損。口縫部直下および頸部1/2位に2条の沈縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一灰褐色、外一暗灰黑色。胎土：密。2mm以上の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。内面灰かぶり。
要	247-153	口径32.6 基部深18.4 残存高11.2	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で外下方にのびたものから上方にのび、口縫部内面に至る。肩部以下欠損。頸部1/2位に2条の沈縫をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：暗褐色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。内面灰かぶり。
要	247-154	口径55.8 残存高7.2	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で外下方にのびたものから上方にのび、口縫部内面に至る。肩部下1/3以下欠損。頸部上方に2条、頸部中位に1条の沈縫をめぐらす。頸部外側、に波状文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整のち施釉。他は回転ナダ調整。	色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。反転復元。
要	247-155	口径44.4 残存高5.1	口縁部は外反して上方にのび、口縫部下で外下方にのびたものから内側して上方にのび、口縫部内面に至る。肩部に1条の沈縫を4箇所めぐらす。頸部中位以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一灰白色、外一灰色。胎土：密。1mm以下の長石を含む。1mm以下の石英を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
要	247-156	口径42.0 基部深17.0 残存高34.0	口縫部は外反して上方にのび、口縫部下で外下方にのびたものから段落をして上方にのび、口縫部内面に至る。肩部は外下方にのびる。口縫部直下・頸部1/3上方・頸部1/3下方に2条の沈縫をめぐらし、その間に櫛縫き斜行沈縫文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外側カキ目調整のち施釉。他は回転ナダ調整。	色調：内一暗灰青色、外一暗灰黑色。胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。内面灰かぶり。

248-157	口徑20.8 基部径15.4 残存高15.0	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのび、内側して上 方へのび縫部内面に凹む。内面で あまり段を作成。顎部中央2箇所に 1条の鈍い沈線をめぐらし、その間 と上下に波状文を形成する。顎部以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面下方1/3カキ口調整ののち に施文。他の回転ナダ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。焼成： 良好。反転復元。内外面一部に自 然釉付着。
248-158	口徑28.0 残存高7.7	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのび、内側して上 方へのび縫部内面に凹む。内面で あまり段を作成。顎部中央2箇所に 1条の鈍い沈線をめぐらし、その間 と上下に波状文を形成する。顎部以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。焼成： 良好。反転復元。内外面自然釉 付着。内外面灰かぶり。
248-159	口徑31.2 残存高15.8	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのび、内側して上 方へのび、凹面を成して上方内面 にのびる。端部は丸くおさめる。顎 部上方の3箇所に3条の沈線をめぐら し、その間に波状文を形成する。基 部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：暗灰色。胎土：密。焼成： 良好。反転復元。
248-160	基部径32.8 残存高11.3	口顎部は上方にのびる。端部は外 下方に下る。顎部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面タキのち回転ナダ調整。 顎部外表面タキ。肩部内面同 心円タキ。他の回転ナダ調整。	色調：内一灰色、外一暗灰色。胎 土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。合模復元。口 顎部外表面自然釉付着。
248 161 112 161	口徑45.6 残存高6.3	顎部下半以下欠損。口顎部は上方 にのび、口縫部で下方にのびたの ち上方にのび、端部は丸くおさめ る。口縫部底面に2条の沈線をめぐら し、その上に1条の沈線をめぐら す。1条の沈線の下方に櫛擦き斜行 沈線を有する。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 回転ナダ調整。	色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。焼成：良好。反転復元。
249-162	口徑48.4 残存高7.5	口顎部は上方にのび、口縫部で 下方にのびたのち上方にのび、 端部は丸くおさめる。口縫部底面に 2条、顎部に2条の沈線をめぐら し、その間に櫛擦き斜行沈線文 を有する。顎部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。焼成：良好。反転復元。
249-163	口徑43.6 残存高10.2	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのびたのち内側して 上方にのび、端部は丸くおさめ る。口縫部底面に2条、顎部に2条 の沈線をめぐらし、その間に櫛擦き 斜行波状文を有する。顎部下半以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。 回転ナダ調整。	色調：内一淡黄灰色、外一暗 灰色。胎土：密。焼成：良好。残存： 口顎部の1/8。反転復元。
249 164	口徑52.8 残存高15.4	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのび、段を成し、段を成し、 上方にのびる。端部は丸くおさめ る。口縫部上方1/3の位置に3条、 顎部に1条の沈線をめぐらし、 その間に波状文を形成する。基部以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。2mmの長石を含む。 焼成：良好。反転復元。内外面灰 かぶり。外面に自然釉付着。
249 165	口徑51.6 残存高10.0	口顎部は上方にのび、口縫部で 下方にのび、段を成し、上方にの びる。端部は丸くおさめる。顎部上 方に2条、顎部中央に1条の沈線を めぐらし、その間に口縫部底面に波 状文を有する。顎部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石をわ ずかに含む。焼成：良好。反転復 元。内外面灰かぶり。外面に自然釉 付着。
249 166	口徑51.6 残存高10.0	口顎部は上方にのび、口縫部で 下方にのび、段を成し、上方にの びる。端部は丸くおさめる。口縫部 直下に2条、顎部中央に2条の沈線 をめぐらし、その間に櫛擦き斜行 波状文を有する。顎部下半以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面カキ目調整ののちに施文。 他の回転ナダ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：密。 2mm以下の長石をわずかに含 む。焼成：良好。反転復元。
249-167 112-167	口徑48.6 基部径16.0 残存高16.0	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部で下方にのび、段を成し、 上方にのびる。端部は丸くおさめ る。口縫部底面に1条の沈線をめぐ らす。顎部は外方に張り出す。顎 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面タキのちカキ目調整。顎 部内面凹面波タキ。他の回転 ナダ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：密。 5mm以下の長石を若干含む。焼 成：良好。反転復元。
250-168	口徑52.8 基部径51.4 残存高9.4	口顎部は外反して上方にのび、口 縫部下方に下ったのち、段を成 し、内側して上方にのびる。端部 は丸くおさめる。口縫部底面に2 条、顎部に3条の沈線をめぐらす。 3条の沈線の1/3に波状文を有する。 顎部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。顎部 外表面タキのちカキ目調整。他の 回転ナダ調整。	色調：暗灰褐色。胎土：密。燒 成：良好。反転復元。内外面一部に 自然釉付着。

250-169	口径49.6 残存高12.6	口縁部は外反して上方にのび、口縁部下で下方に下ったのち、段を成し、上方にのびる。端部は丸くおさめ。内面はやわらぎ模様。口縁部直下に2条、頸部上方1/3に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間に繰織き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。頸部外断カキ目調整のうちに施す。他は回転ナダ調整。	色調：内一淡灰赤、外、灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。1mmの石英を含む。チャートを含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。内外面灰かぶり。
250-170	口径49.6 残存高12.6	口縁部は外反して上方にのび、口縁部下で下方に下ったのち、内壁にして上方にのびる。端部は丸くおさめる。頸部上方1/3に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間に繰織き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	色調：内一淡灰赤、外、暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。内外面灰かぶり。
250-171	口径59.8 残存高12.3	口縁部は外反して上方にのび、口縁部下で下方に下ったのち、内壁にして上方にのびる。端部は丸くおさめる。頸部上方1/3に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間に繰織き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。頸部外断カキ目調整。他は回転ナダ調整。	色調：内一淡灰赤、外、灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外面に自然釉付着。内外面灰かぶり。
250-172	口径57.0 残存高3.9	口縁部は外方にのび、口縁部下で外方にのひたのち、上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部直下に2条の沈線をめぐらし、その間に繰織き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。頸部外断カキ目調整。他は回転ナダ調整。	色調：淡灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。反転復元。外側一部に自然釉付着。内外面灰かぶり。
250-173	口径50.2 残存高6.6	口縁部は外方にのび、口縁部下で下方にのひたのち、上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部直下に2条の沈線をめぐらし、その下方に繰織き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	色調：内、暗灰色、外、暗灰色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。内外面灰かぶり。

表 28 東池尻1号窯灰原2次堆積層出土遺物観察表

(丁寧なあがりを示す)

器種 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋 251-174	口径11.8 残存高3.6	体部・口縁部は外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周5/9回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰黄色。胎土：密。焼成：不良。残存：1/5。反転復元。
杯蓋 251-175	口径11.0 残存高3.1	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。ヘラ記号：天井部外周に「一」あり。
杯蓋 251-176	口径11.4 残存高3.2	体部・口縁部はやや垂直に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：2/3。反転復元。ヘラ記号：天井部外周に「一」あり。反転復元。内外面灰かぶり。
杯蓋 251-177	口径11.4 残存高3.3	体部・口縁部は垂直に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。
杯蓋 251-178	口径11.6 残存高3.1	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/3回転ヘラ削り調整。天井部外周2/3(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一灰褐色、外一灰色。胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。反転復元。内外面灰かぶり。
杯蓋 251-179	口径11.6 残存高2.5	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。反転復元。灰かぶり。
杯蓋 251-180	口径10.4 残存高3.8	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く、やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/2(頂部)未調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一暗灰褐色、外一暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
杯蓋 251-181	口径9.8 残存高2.8	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。
杯蓋 251-182	口径10.6 残存高3.0	体部・口縁部は外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成型。天井部外周1/2回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。

杯 身	251-183	口径9.6 残存高1.9	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
	251-184	口径10.8 受部径13.0 残存高3.1 T角度29°00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は高く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。焼成：良好。反転復元。内外面灰かぶり。外外面に自然釉付。
杯 身	251-185	口径9.8 受部径11.6 残存高2.6 T高0.7 T角度34°00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は高く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰褐色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。反転復元。内外面灰かぶり。外外面に自然釉付。
	251-186	口径9.7 受部径12.0 残存高2.8 T高0.7 T角度40°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸い。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は高く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/4回転ヘラ削り調整。底部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。ヘラ記号：底部外間に「一」。あり。外外面灰かぶり。
杯 身	251-187	口径10.8 受部径12.8 残存高2.4 T高0.5 T角度30°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は高く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
	251-188	口径9.9 受部径11.0 残存高3.5 T高0.6 T角度30°15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は高い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一側灰褐色、外一側白色。胎土：密。1mmの長石を含む。焼成：良好。一部反転復元。外外面灰かぶり。
杯 身	251-189	口径10.4 受部径12.6 残存高2.4 T高0.6 T角度29°30'	たちあがりは内傾した中位で上方にのび、端部はやや細い。受部は水滴型にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は高い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。残存：1/8。
	251-190	口径10.8 受部径12.8 残存高2.4 T高0.6 T角度41°45'	たちあがりは内傾した中位で上方にのび、端部はやや細い。受部は水滴型にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は低い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。残存：1/8。
杯 身	251-191	口径9.0 受部径11.0 残存高2.9 T高0.5 T角度31°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや細い。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
	251-192	口径9.6 受部径11.4 残存高3.3 T高0.6 T角度25°00'	たちあがりは内傾した中位で上方にのび、端部はやや細い。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面4/7回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一側灰青色、外一側暗褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。外外面自然釉付。
杯 身	251-193	口径10.6 受部径12.4 残存高2.7 T高0.4 T角度44°30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや細い。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は高い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
	251-194	口径10.0 受部径11.8 残存高2.6 T高0.6 T角度29°30'	たちあがりは内傾した中位で上方にのび、端部はやや細い。受部は上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯 身	251-195	口径8.4 受部径10.4 残存高2.5 T高0.5 T角度39°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸く、底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
	251-196	口径9.2 受部径11.6 残存高2.2 T高0.3 T角度53°30'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/7。反転復元。
杯 身	251-197	口径9.0 受部径11.2 残存高2.3 T高0.7 T角度36°15'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は平ら。底部内側で接する。高台端部は平らであります。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
	251-198	口径16.4 高台径14.0 高台径(内径)12.8 高脚径1 高台高0.7	体部・口縁部は上方(船底方向より17°30')にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底体部は平ら。底端部より内側に八字型の高台を設け、端部内側で接する。高台端部は平らであります。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整(体部外側はやや深めの回転ナダ調整)。高台はハリツケ。	ロクロ回転：左回り。色調：淡灰褐色。胎土：やや密。2mm以下の石英をわずかに含む。焼成あり。焼成：良好。残存：2/6。
杯 身	251-199	口径11.4 受部径11.1 高脚径3.6 T高0.8 T角度23°15'	たちあがりは内傾した中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや丸くおさめる。底体部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰青色。胎土：密。外面に自然釉付。残存：1/4。反転復元。

短 脚 壺	252-200 口径7.6 基部径7.8 残存高1.9	口縁部は基部から立ち立てる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下り、腹部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：暗灰 色。胎土：密。焼成：良好。反転復元。
提 瓶	252-201 口径7.2 基部径4.5 残存高5.3	口縁部は外反して卜外方にのひた る。口縁部はやや内傾する。端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内一 淡灰色。外一淡灰褐色。胎土：密。 1mm の長石を若干含む。焼成： 良好。反転復元。内外面に自然釉 付着。
高 杯	252-202 脚底径11.4 残存高4.9	脚部上半以上欠損。脚部は下外方に 開いて外方にのびる。握端部は外傾する平面 を成し、握部内面と端部内面で接地す る。握部上方に1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：内 暗灰色。外一淡灰褐色。胎土：密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼成： 良好。反転復元。
高 杯	252-203 脚底径5.4 基部径5.0 残存高2.7	杯部欠損。脚部は下外方に下り、握 端部は外傾する凹面を成し、握部内 面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰 青色。胎土：密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成：良好。反転復元。
高 杯	252-204 脚底径5.9 基部径3.8 残存高2.4	杯部全体以上欠損。杯底部はほぼ平 ら。脚部は卜外方に下り、握部は外 方にのびる。握端部はややかいな形 の曲面を成し、握部内面で接地す る。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外側回転ヘラ削り調整。他は 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：灰 色。胎土：密。2mm 以下の長石を 若干含む。焼成：良好。一部反転復元。 内外面欠み有り。
甕	252-205 口径26.6 残存高4.6	口縁部は外反して卜外方にのひ、口 縁部下で下外方に下ったのち、内脇 して卜外方にのひ。口縁部内面に至 る。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：暗灰青色。胎土：密。焼成： 良好。反転復元。
甕	252-206 口径16.8 基部径18.2 残存高5.1	口縁部は基部から上方にのひる。端 部は内傾する凹面を成す。肩部は外 方にのびる。肩部下以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰 色。胎土：密。2mm 以下の長石を 若干含む。1mm の石英を含む。チャ ート不含む。焼成：良好。反転復元。 肩部外面欠け有り。口縁部外側 内外面に自然釉付着。
甕	252-207 口径16.4 基部径15.6 残存高6.4	口縁部は外反して卜外方にのひ、口 縁部は内傾して卜外方にのひ、口縁 部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側タカキのちカキ目調整。肩 部内面青釉波タキ。他は回転 ナダ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：卜外 部外側・肩部内面・右灰色、口縁 部内面・肩部外側・淡灰色。胎土： 密。チャート不含む。焼成： 良好。反転復元。
甕	252-208 口径44.0 残存高8.7	口縁部は外反して上外方にのひ、口 縁部下で下外方に下ったのち、段を 成し、内上面にのひる。端部は丸くお さめ、内面であまり段を成す。口縁 部底直下に1条、肩部上方1/3に2 条の沈線をめぐらし、上方1/3の沈 線の上下に波状文を有する。肩部下半 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外側カキ目調整のちヒスチ。他 は回転ナダ調整。	色調：内一暗灰青色、外一暗 青色。胎土：密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成：良好。反転復元。
甕	252-209 口径43.6 残存高7.1	口縁部は外反して卜外方にのひ、口 縁部下で下外方に下ったのち、内脇 して上外方にのひる。端部は丸くお さめ、内面であまり段を成す。口縁 部底直下に1条、肩部上方1/3に2 条の沈線をめぐらし、上方1/3の沈 線の上下に波状文を有する。肩部下半 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調：内一暗灰青色、外一暗 青色。胎土：密。焼成：良好。反転 復元。

## 第5節 下流遺跡の調査

### I 池尻遺跡(1)

#### 1 調査の経過

本調査は大阪府がダム化工事に関連して造成した仮設グランド工事に先立って実施したものである。調査区は狭山池北堤の北方約300mの場所に所在している。調査開始以前には狭山池北東側の段丘面には狭山藩陣屋跡、また西北の段丘面には池尻城跡として周知の埋蔵文化財包蔵地が存在したが、本調査区の所在する谷底平野の部分については遺跡は確認されていなかった。そこで大阪府から造成計画がされた際、狭山池調査事務所で試掘調査を実施することとなった。グランド予定地は約12,000m<sup>2</sup>と広大であったため、試掘調査は東西本のトレントを機械掘削によって入れ、その断面を観察する方法で実施した。その結果、北トレント東側において中世の土器を多量に含む包含層が検出され、また北トレント西側では須恵器、瓦などを検出した。また南トレントの西半分においては水田面と考えられる断面が検出された。さらにトレントのはば全体において、洪水砂や旧河道と思われる礫層がみられ、その中には須恵器片が多く含まれていた。結果的にはグランド用地の全域が遺跡であると考えられるに至った。大阪狭山市教育委員会ではこの結果を受けて遺跡発見届を提出し、この新規発見の遺跡は池尻遺跡と命名された。本報告書では池尻遺跡における二つの調査結果を報告していくので、本調査区は池尻遺跡(1)と呼ぶことにしたい。このグランドは、ダム工事の関連で仮設的につくられるものであり、盛土によって造成されるため造構等に対する直接的な影響はない。そのため大阪狭山市教育委員会、狭山池調査事務所は大阪府土木部、大阪府教育委員会と協議し、遺物が多く分布し、また特色的ある場所において調査を実施することとなった。具体的な調査方法としては、3箇所において10m四方の調査区を設定し、平面的な発掘を実施するとともに、さらに3本のトレントを掘削し造構の広がりや、地形などを観察することとした。以後の記述においては、3箇所の調査区をそれぞれA調査区、B調査区、C調査区と呼ぶこととする。また調査を進める過程でA調査区では特に多くの土器の出土をみたため、A調査区に南接してあらたに調査区を設けたがこれをD調査区と呼びたい。試掘調査は1991年1月に実施し、本調査は1992年1月から2月まで実施した。



写真89 池尻遺跡(1)調査区

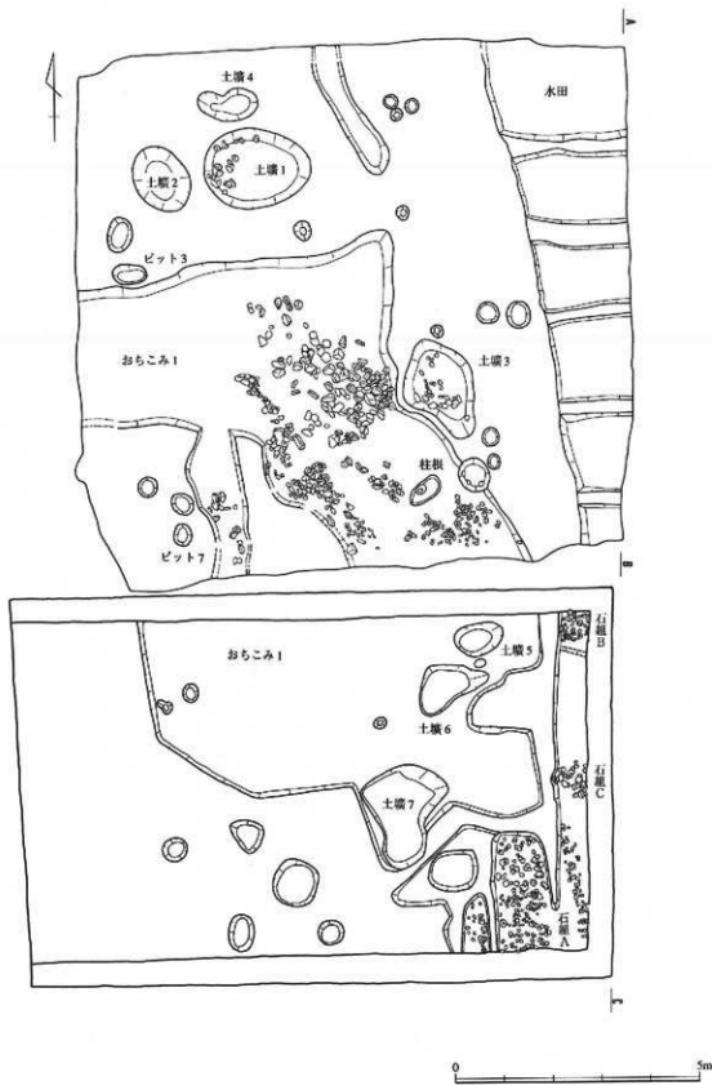


図 254 池尻遺跡(1) A 調査区・D 調査区遺構平面図 (S=1/100)

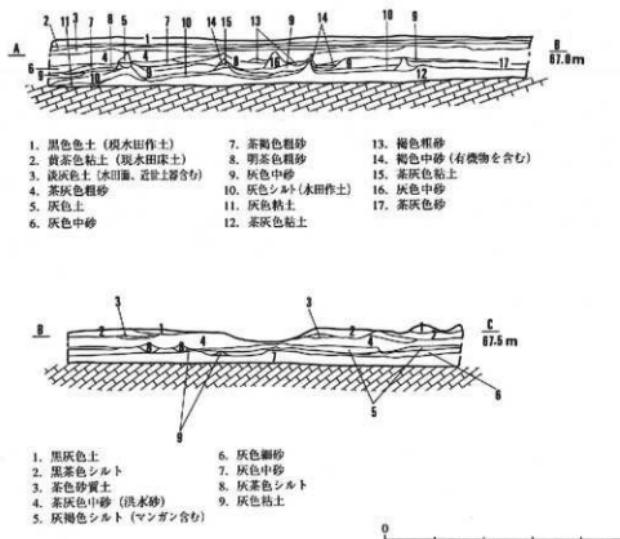


図255 池尻遺跡(I) A調査区・D調査区 東壁断面図 (S=1/100)

## 2 遺構と遺物

### ①A調査区・D調査区

(遺構)

以下、発掘調査の成果を調査区ごとに述べていくこととした。

A調査区は仮設グランド予定地のもっとも東側に所在する。先にも述べたようにA調査区発掘の結果、土器を大量に含む遺構がさらに南側にむかって広がっていることが明らかになったため、A区にすぐ南接してさらにD調査区を設けた。この二つの調査区については併せて説明する。この調査区の層序は次の通りであった。現在の地表面である水田の作土、床土を除去すると、黒褐色シルトからなる遺物包含層に達する。この層の下が遺構面となつており、その下には包含層、遺構面はなかつた。また調査区東部からは水田が検出されているが、作土面の上には砂層がみられた。この砂層は洪水によって堆積したものと考えられる。砂層は細かく見ると4層にわけられる。これらが何度の洪水による堆積かは不明であるが、少なくとも複数の洪水がこの地を製つたことは確実であろう。この砂層は調査区の東半分においてのみ観察でき、洪水による砂の堆積は今日の中樋筋を中心とする局地的なものであったことを知ることができる。調査区のすぐ南には狭山池北堤が存在しており、その決壊がなければ、このような洪水砂の堆積は考えにくい。よってA調査区において遺構が検出された鎌倉時代以降狭山池の堤は決壊していることが想定される。

以下個々の遺構について説明していく。調査区東部において検出された水田の西端のラインは北から20度西側に振っていた。水田は調査区内において6枚確認され、それぞれは高さ30cm、底幅40cmの畔で区画されている。畔は調査区内で5本存在し、それぞれの間隔は1.8m~1.3mと今日の水田から考えると極めて狭い。この水田は屋敷地に隣接するいわゆる門田であると考えられるが、中



写真90 落ち込み1



写真91 石組A

世の門田の一般的な機能を考えればこの小区画の水田は苗代田であるとするのが適当であろう。

A・D調査区にまたがって存在する大きな遺構が落ち込み1である。この遺構は全体的に周囲の面から10cm～20cm掘下げられており、底面はほぼ平坦である。長さ12.0m幅8.0mの長方形で長辺は真北に対して約30度西に振っている。この遺構の内部には幾つかの柱穴があり、特に柱穴1では柱根と考えられる木が残されていた。以上から考えて落ち込み1の性格は住居に伴う掘り込みであると考えるのが妥当であろう。柱の配列は明確でないため、建物の復元は困難であるが中世に掘り込みをもつ住居が存在したことは注目される。ただ落ち込みの規模から考えて屋敷地の中心的な建物であったとは考えにくい。

落ち込み1の内部には多くの礫が並んでおり、礫に混じって完形の瓦器碗など多量の遺物が出土している。礫は西北—南東方向に3列に並んでいるが、もっとも東側の列の礫は計10cmから20cmの大きなものが多く、他の列の礫はやや小さいものが主体となる。この礫列およびそれに含まれた土器群の性格については現在まだ適当な解答をえていない。

また落ち込み1を囲むようにして幾つかの土壙が検出されている。土壙1は長径2.2m、短径1.8mの楕円形で、深さは最大で33cmである。底面から土師質羽釜、東播製こね鉢などの食器が出土している。土壙2は長径1.70m、短径1.00mの楕円形で最大の深さは15cmである。土壙4は長さ1.30m、幅70cm、深さ30cmでメガネ形をしている。これら3つの土壙はいずれも落ち込み1の北側に所在している。土壙3は落ち込み1の東側に位置し、長径2.20m、短径1.50m、深さ15cm、やはり羽釜片が出土している。落ち込み1の南側にも四つの土壙がある。土壙5は長径1.0m、短径70cmの楕円形で、深さは23cm。この土壙の埋土には焼土、炭などが多く含まれており、内部で火を使ったことが推定される。ただし土壙内の壁には高熱のための赤化はみられなかった。土壙6は長さ1.8m、幅1.0m、深さ15cm。土壙7は一辺1.0mの正方形。土壙8は長さ2.1m、幅1.9m、形態はひょうたん型で深さは最大70cmである。D調査区の東側には南北方向に3本の溝があり、それそれに多量の礫が入っていた。礫は間隙が空かないようにきっちりと詰め込まれた状態であった。落ち込み1を建物と考えればこれらの石組はその東南角にあたり、建物の入口の部分を構成していたものと考えられる。石組3の上からは完形の土師器小皿、瓦器碗が出土している。

#### (遺物)

この調査区からは落ち込み1を中心として多くの土器が出土している。器種としては土師器では皿、杯、羽釜があり、瓦器では楕、皿がある。その他ごく少數ではあるが白磁、須恵器ねり鉢がみられた。その他古墳時代の須恵器の細片が非常に多くみられるが、これは付近の須恵器窯の遺物が後世混入したものであろう。また鉄器として馬具の金具1点が出土している。以下、遺物の概要を述べることとする。

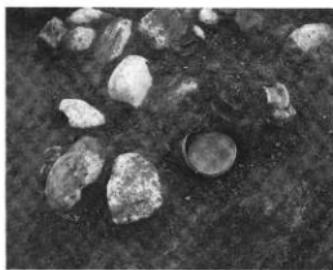


写真92 落ち込み1土器出土状況



写真93 土壌1土器出土状況

図256～259は落ち込み1出土の土器である。1は土師質の蓋。同種のものは他に出土しておらず、具体的な用途も不明である。3、4は高台がつく土師器の椀である。5～33は上皿皿。33のみが大皿で、他はいずれも小皿に分類されるものである。小皿は外面に指押さえを施し、口縁部はヨコナデを施すものがほとんどであるが指押さえの強弱によって、底部と側面との間に変化点を持つもの(5～13)と持たないものに分類できる。34～39は瓦器である。34～36、39～44は皿、それ以外は椀である。皿のうち34は底部に高台がつく若干特殊なものである。瓦器椀はすべて和泉型である。全体的に焼成は良好なものが多いが、炭素の吸着が不十分である。時期的には尾上実氏の編年3-1期を中心とする。<sup>①</sup> 60～67は土師器の羽釜。口縁がくの字型に屈曲するもの(63～67)とほぼ水平にのびるもの(60～62)に分類が可能である。前者は体部が円柱に近い形態を示すが、後者においては体部が丸みを帯びる。鍔は62がやや下方に下がっているのを除けば、水平に伸びる。

図260は落ち込み1以外の遺構から出土した遺物である。68～70は土師器の小皿。71～73はやはり和泉型の瓦器椀。71は高さが5.7cmと非常に高く、形態的に他のものと差異が大きい。74は東播系のねり鉢である。内部には磨滅痕が残る。75は土師器羽釜である。図261には鉄器を載せたとともに落ち込み1より出土している。76は先端が環状になった鉄製品である。一方の端は欠損しており、全体を知ることはできないが、残存長9.3cmである。環の形態から轡の銜か引き手の一部かと考えられる。77はやはり鉄製品である。現存長10.1cm。用途不明だがやはり馬具の一部か。遺物の全体的な様相を眺めたとき、落ち込み1と他の遺構はほぼ同時代のものとみることができる。時期は瓦器、羽釜などの年代観からほぼ13世紀初頭とするのが妥当であろう。

## ②B調査区

B調査区については試掘調査において確認できた水田に伴う畦状の遺構の検出を目的として調査を実施した。この調査区では現在の水田の下に3面の水田を観察することができた。図にあげたのは第3面の水田である。この面においては北西一南東方向に並ぶ6本の畦(高さ20cm、幅35cm)、および東北一南西方向の大きな畦(高さ25cm、幅210cm)が検出されたが、両者はほぼ直行している。出土遺物は須恵器の破片のみであったが、それらからこの遺構は7世紀代のものと考えられる。畦は定規で引いたように真っすぐであり、この水田の開発が計画的であったことをうかがわせる。ただ畦の間隔が非常に狭く1区画が長方形であることから、これが水田ではなく畠である可能性も否定できない。こ



写真94 B調査区全景

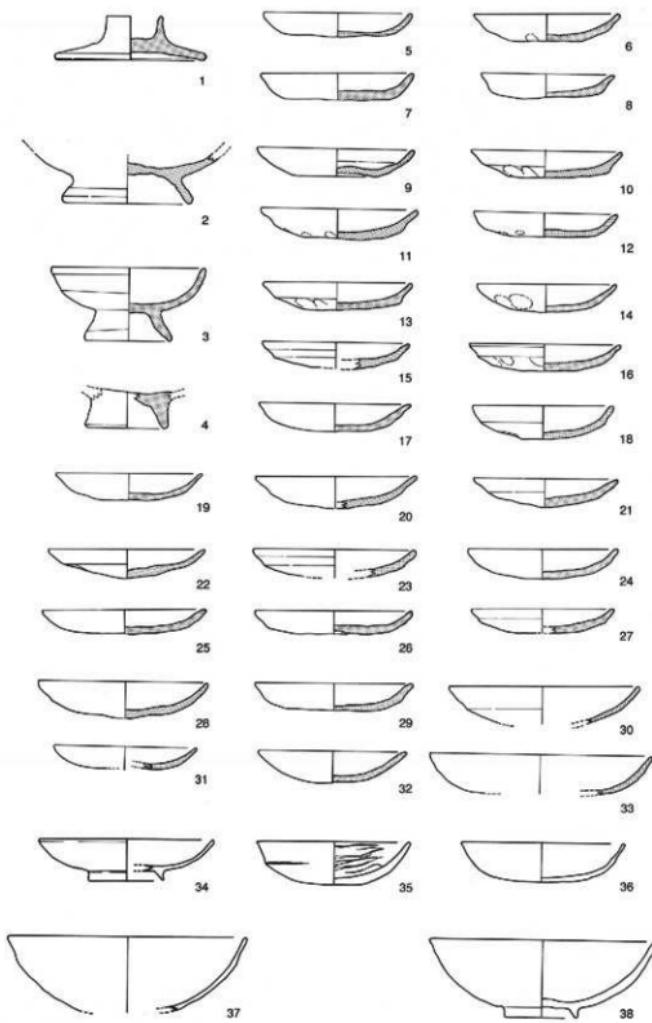


図256 池尻遺跡(I)A区・D区出土遺物 落ち込み1 (I)

0 10cm

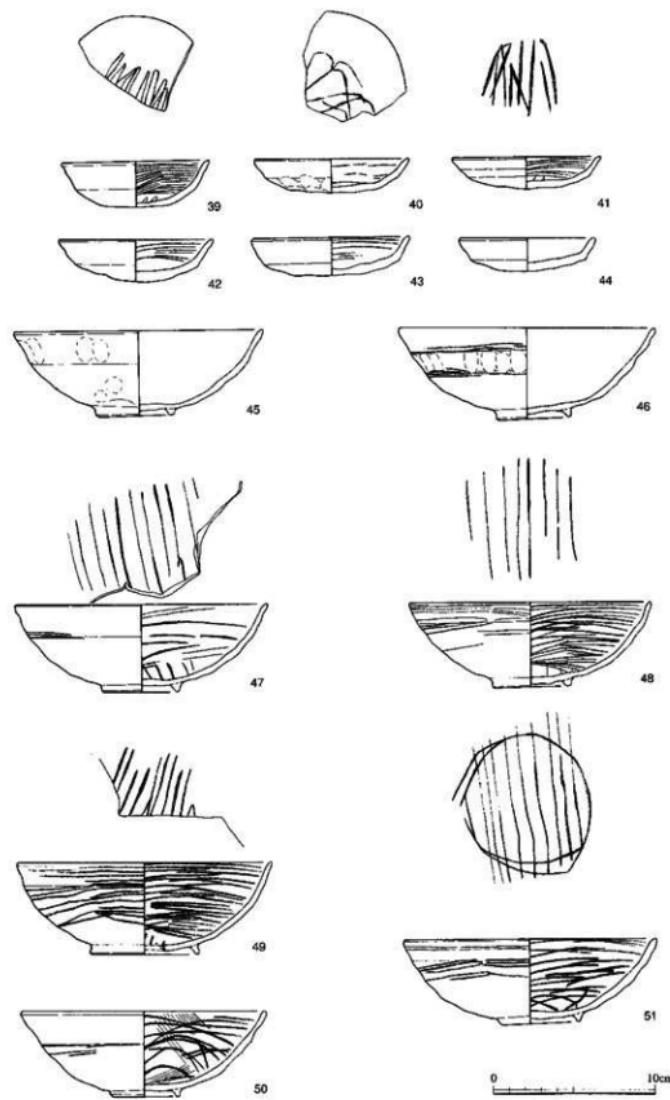


図 257 池尻遺跡(I) A 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (2)

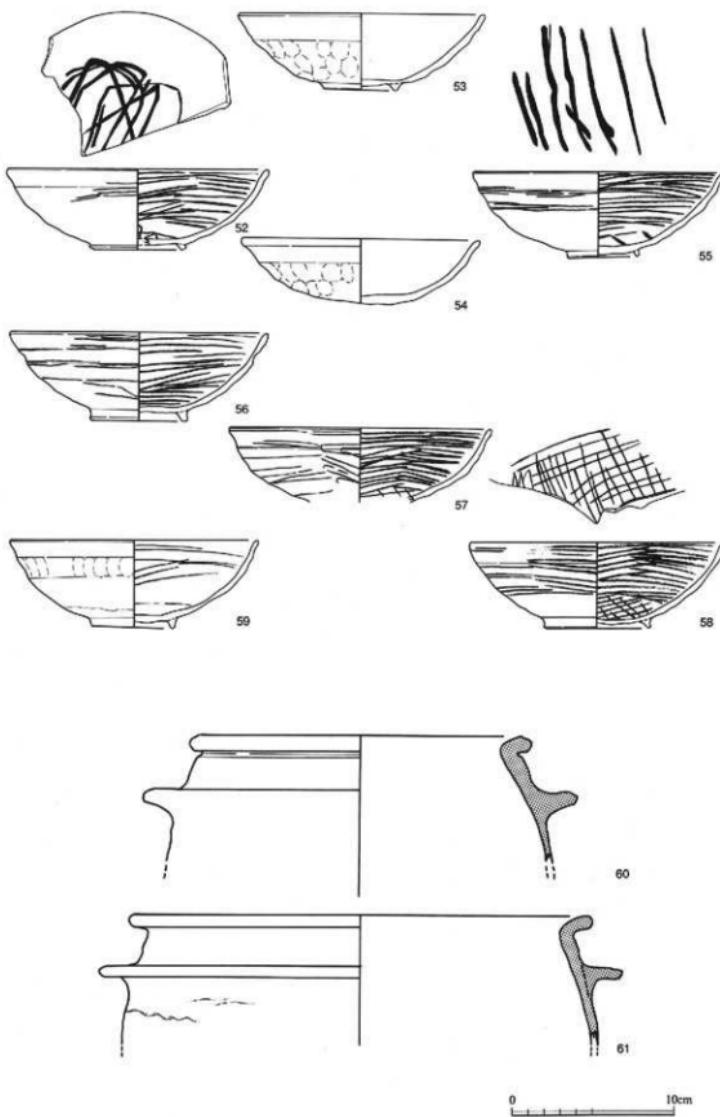


図 258 池尻遺跡(I)A区・D区出土遺物 落ち込み 1 (3)

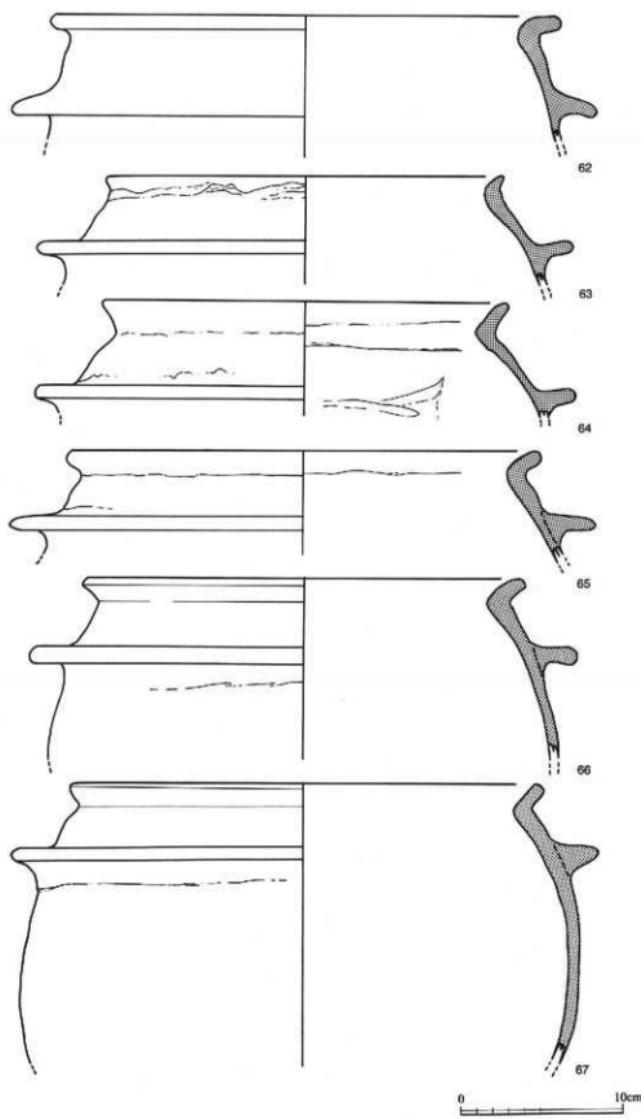
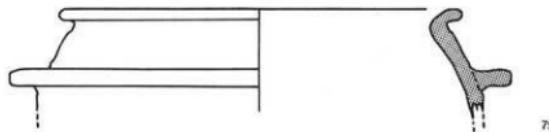
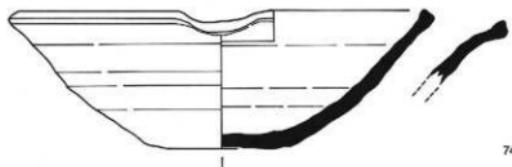
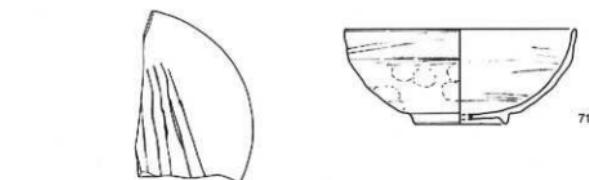
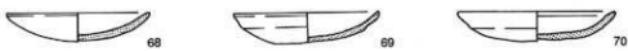
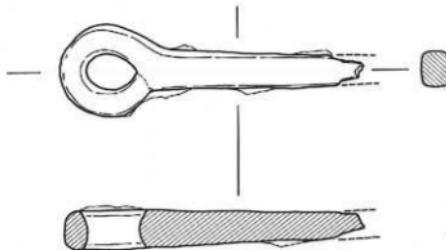


図 259 池尻遺跡ⅠA 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (4)

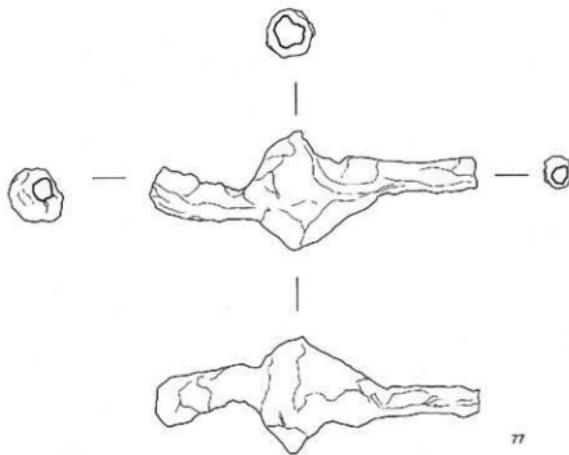


0 10cm

図 260 池尻遺跡(I) A・D 調査区出土遺物実測図 (68、69、70→石桶B・71→ビット3・72→ビット7・73→土壤3・74・75→土壤1)



76



77



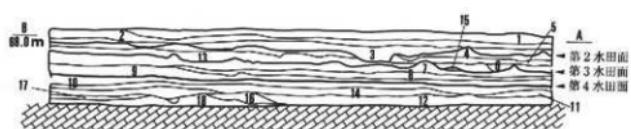
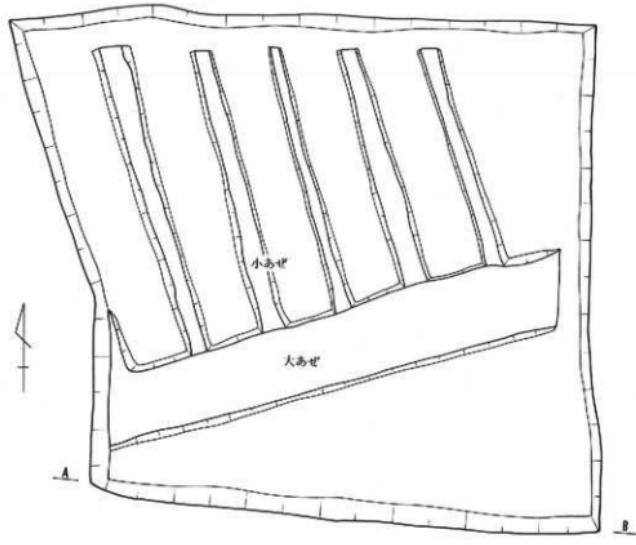
図 261 池尻遺跡(I) A・D調査区出土遺物 落ち込み 1 出土鉄製品

の調査区においては平面的に掘削できたのは第2面だけで他の面は断面観察だけを実施した。第1面の水田はその遺物から近世のものと考えられる。第3の水田は遺物がなく確実なことはいえないが、C地区や池尻遺跡<sup>(2)</sup>との対比でいえば6～7世纪代に遡る可能性がある。

### ③C調査区

(第2造構面)

C調査区については全部で5層の造構面が認められたが、そのうちもっとも上の第1造構面については平面的な調査ができなかったので、第2～第5の4枚の造構面について述べることとする。



- |             |            |            |
|-------------|------------|------------|
| 1. 茶褐色土(埴土) | 7. 淡灰色シルト  | 13. 茶褐色シルト |
| 2. 茶褐色シルト   | 8. 茶褐色シルト  | 14. 淡茶色粗砂  |
| 3. 茶色シルト    | 9. 細灰褐色粗砂  | 15. 灰色シルト  |
| 4. 淡灰色シルト   | 10. 淡茶色土   | 16. 灰色シルト  |
| 5. 茶褐色粘土    | 11. 淡青褐色粗砂 | 17. 灰茶色シルト |
| 6. 淡茶褐色中砂   | 12. 茶色中砂   | 18. 淡綠灰色砂  |

0 5m  
図262 池尻遺跡(B)B調査区 第3造構面平面図・南壁断面図 (S-1/100)



写真 95 C 調査区第2遺構面

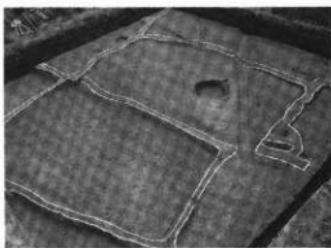


写真 96 第4遺構面の水田

第2遺構面においてはB調査区でも検出された畦によって区画された細長い地割りを検出した。この地割りの長軸は東北一西南を向き、B調査区の畦の方向に一致する。調査区内において確認された区画は全部で12であるが、北西部の6つの区画は南北方向の畦によって切られて、他のものより小さい。また調査区の北東角には水路と考えられる溝が検出されている。やはり畑の可能性があるが、外山秀一氏によって行われたこの面の土のプラントオパール分析の結果によると畦の部分でも、畦の間でもイネのプラントオパールが検出されており、水田であるかどうかは別にしても稲作が行われていた可能性が強い。

この遺構面からは遺物の出土が無く、時期は決めがたいが、B調査区の第2遺構面の水田に連続するものとみて間違いなさそうである。

#### (第3遺構面)

第2遺構面の畦を除去するとすぐに第3遺構面が現われた。この間に第2遺構面の水田作土と思われる灰色シルトを挟む箇所もあるが、この層は非常に薄い。第3遺構面においては北部において落ち込み箇所と、南東一北西方向に走る2本の溝、その他2本の東西方向の溝、ピット6つを検出した。各遺構の埋土中には須恵器の破片が比較的多くふくまれているが、いずれも須恵器の細片で、図化できたのは図267の1~8のみである。須恵器は田辺昭三氏のいうTK217型式に含まれることから、<sup>②</sup>この遺構の時期は7世紀前葉とみられる。この面は第3遺構面や、下の第4遺構面とは異なり、水田とは考えられない。遺構の全体的な性格は明確ではないが、第2遺構面との時期的な差が殆どないことから、第2遺構面の時代に展開されたとおもわれる大規模な土地開発に伴う遺構である可能性がある。この遺構面は第2・第4遺構面によって確認された時期と性格の異なった水田をつなぐ性格を持っている。ここでは一応第2遺構面の水田面を造成するための工事の痕跡と考えておきたい。

#### (第4遺構面)

第4遺構面においては8区画の水田を確認することができた。水田はいずれもきわめて小規模なものである。全城が調査区内に収まる水田2を例にとってみると、縦4.7m、横3.2m、面積15.0m<sup>2</sup>である。また水田と水田の間には水口と考えられる切り口が4箇所みられる。水口の両端のレベルを比較すると水の流れはおおよそ図265に示した通りに復原できる。調査区内には水路は見当らず灌漑は上の田から下の田へ田越しで行われていたと思われる。また畦は底幅約30cm高さ12cm~20cmで褐色シルトによって築かれていた。水田2水口付近には円弧を描くように7個の直径5cmほどの小ピットが検出された。これは杭穴と考えられる。水口にともなう施設の一部であろうか。また水田1、および水田4の内部には有機物が幅50cmにわたって帯状に堆積していた。この有機物は南側のみ掘りこまれたL字溝のような溝に堆積している。堆積の厚さはもっとも深い箇所でも8cmであ

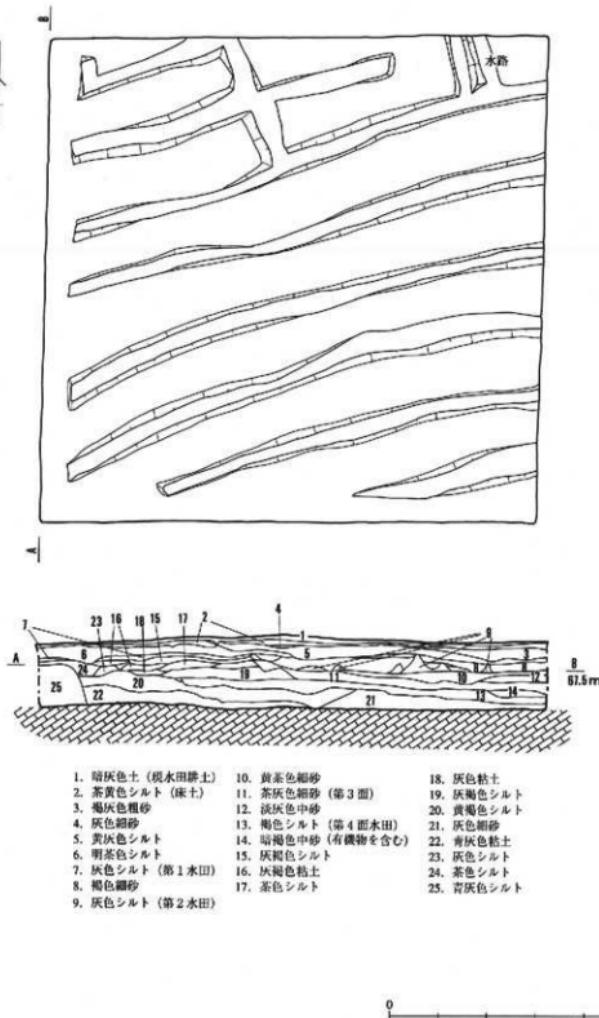


図 263 池尻遺跡(IIC)調査区 第2追構面平面図・西壁断面図 (S=1/100)

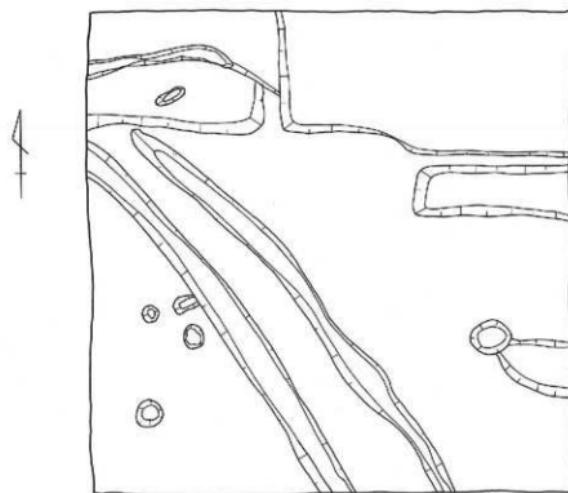


図 264 池尻遺跡(II)C 調査区 第3遺構面平面図 (S=1/50)

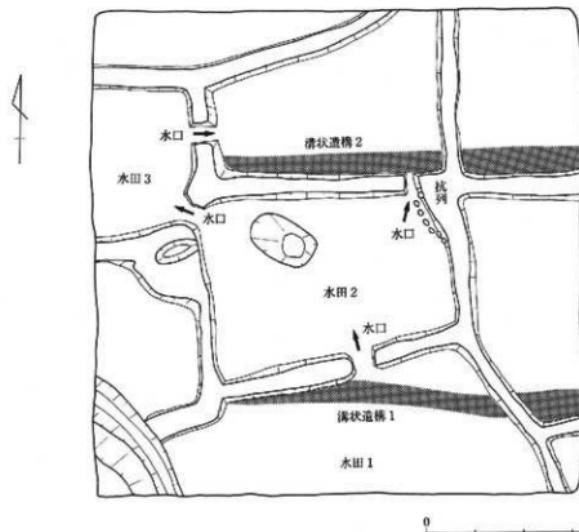


図 265 池尻遺跡(II)C 調査区 第4遺構面平面図 (S=1/100)

る。この溝状遺構は畦を横切って掘られていることから水入れに関する施設とは考えにくい。現在でも水田の排水に関してこのような溝が掘られることがあるが、この場合も排水施設とみるのが妥当と思われる。

第4遺構面からは図化不可能な土師器細片が多く出土しているが、第3遺構面までは多くみられた須恵器は全く検出されなかった。狹山池周辺は須恵器窯が多く、古墳時代以後の包含層にはたいてい須恵器が含まれている。したがって全く須恵器がみられないこの遺構面は狹山池周辺に須恵器窯が多く築かれる6世紀後半以前のものと考えるのが適当である。狹山池の築造年代はこの調査が終了後、実施された東極遺構や狹山池1号窯の発掘調査によってほぼ7世紀初頭であることが確定したが、これらの調査の成果を参照すると第3遺構面の經營時期は狹山池築造に先行すると考えられる。またこの遺構面で検出された面積の小さい水田は一般に小区画水田と呼ばれ、弥生時代から古墳時代にかけて全国でみられる水田の一般的な形態である。狹山池築造以前において狹山池のすぐ下流にあるこの地点で水田遺構の存在が確認された意義は極めて大きいといわねばならない。

#### (第5遺構面)

この遺構面においては南北方向の溝や土壤、焼土壤などを検出している。溝1、およびピット1の埋土から破片ではあるが土器が出土している。図267-9は布留式甕、10はややそれに先行する庄内式の甕である。ともに外面は摩滅のため調整は観察できない。11は甕の底部であるが、形態的には弥生土器の可能性もある。12は無頸甕でやはり庄内期のものであろう。これらの土器は細片であり、これらから遺構面の時代を決定することは困難であるが、古墳時代の前期から中期に遡る時代の面であることは間違いない。また焼土坑の存在から住居跡があると思われるが、すでに述べたように後世に

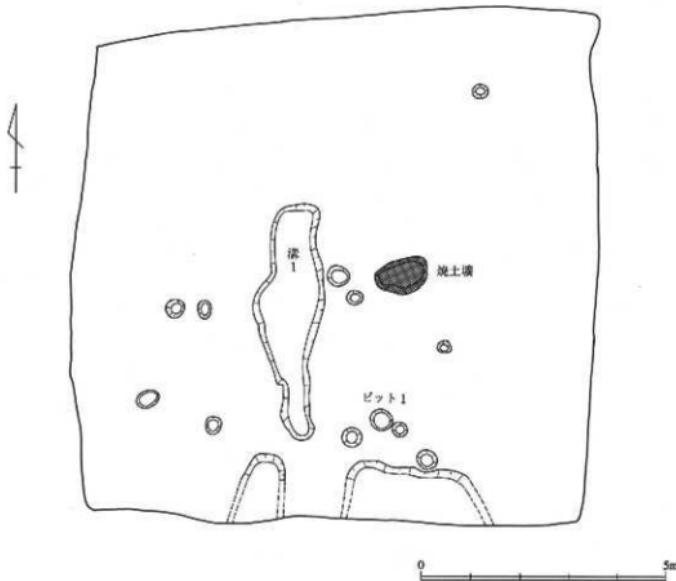


図 266 池尻遺跡①C 調査区 第5遺構面平面図 (S=1/100)

水田の開発がなされており、遺構面が削られているためか、それを確認することはできなかった。大阪狭山市内において布留・庄内期の遺構が確認されたのはこれがはじめてであった。また第5遺構面では、地震による液状化現象に伴う噴砂の跡が観察できた。この面においては長さ2.8mにわたって砂の入った割れ目が観察でき、噴砂の痕跡と考えられる。この割れ目は第5遺構面より上の遺構面では見られないため、地震は古墳時代前期～中期に起こったものと考えられる。

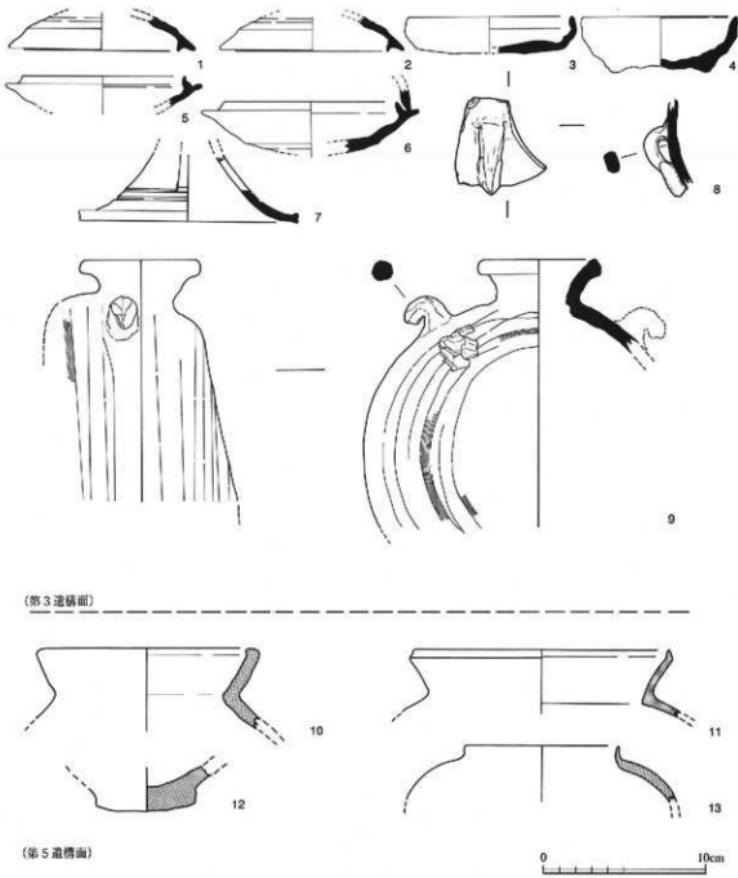


図267 池尻遺跡(II)C調査区出土遺物

3 小 結

池尻遺跡(II)は前述の通り狭山池の北側約300mに所在し、狭山池の中樋筋水路にもすぐ西接している。発掘調査は面積的には小規模なものであったが、狭山池の築造やその後の改修と深く関連したこの地域の開発状況を部分的に明らかにすることが可能となった。

C調査区では層序的な調査が可能であったために、狹山池の築造期をはさむ遺構面を検出することができた。第5遺構面から出土した土師器や焼土塊は狹山池北方の谷底平野における集落の展開が古墳時代前～中期にまで遡ることを明らかにした。また第4面で検出された小区画水田は狹山池の築造以前にも狹山池下流部に水田が存在していたことを示している。池尻遺跡(1)の調査の翌年に発掘が行われた池尻遺跡(2)でも、狹山池に先行する小区画水田が検出されており、狹山池の築造以前にも段丘からの谷水を利用した小規模な水田開発が行われていたことはほぼ明らかになった。第2面の水田は7世紀以後のものと思われるが畦が整然と並んでおり、狹山池以前の水田とはやや趣を異にする。狹山池の築造を契機として下流でも土地区画や水路網の整備が進められたことが推測できる。B調査区で検出された水田もC調査区第2遺構面の水田に対応するものであろう。

A調査区では中世の建物址が検出された。遺構の主体は落ち込み1付近に想定される建物である。その周辺にも多くの土壤や柱穴が存在していることから複数の建物が存在したと考えられ、この遺構群は複数の建物から構成される小規模な屋敷地と考えられる。そのすぐ横には苗代田と思われる小規模な水田が並んでいたことも注目される。この景観からは中世史研究において注目されている門田の景観が想定できる。図268は調査区付近の小字図であるが、

A調査区を含むこの周辺の小字名は門田(かどた)であることも、この遺構の性格を考える上でヒントになるだろう。<sup>④</sup> 屋敷地とその門前に広がる水田が対になった景観は中世前期の村落景観のひとつのモデルとされてきた。今回の調査区からは破片ではあるが白磁碗も出土しており、ここではこの遺構を鎌倉期の小領主の屋敷地および門田であると考えておきたい。また本調査区で今一つ注目すべきものは水田の上に堆積した砂層である。これを洪水による堆積と考えるならば、この屋敷地が廃絶した後に狹山池は決壊していたということを考えなければならない。また屋敷地横の水田の存在から考えるとこの遺構の時期には狹山池が機能していたとも推測できる。この遺構の時期と考えられる鎌倉時代初期は狹山池を東大寺の僧重源が改修した時期に一致する。水田面に堆積した砂層の時期は不明であるが、狹山池の堆積物を地質学的に調査した三田村宗樹氏などの研究成果によって、狹山池は築造以来数回地震に襲われており、特に1596年の地震は堤体を崩壊させた可能性があることが明らかにされている。<sup>⑤</sup> A調査区で検出された砂層も地震等の災害の被害と関連づけて理解できるだろう。

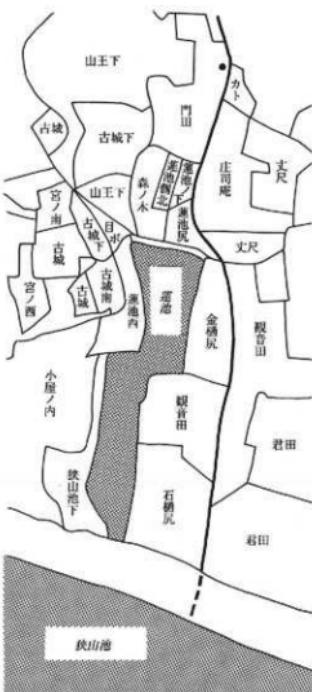


図 268 池尻遺跡(2)付近の小字図

## II 池尻遺跡(2)

### 1 調査の経過

本調査区は狹山池北堤のすぐ北側に所在しており、ダム工事完成後は堤体の一部あるいは資料館敷地として利用される場所にある。狹山池の両岸を構成する段丘崖にはさまれた谷底平野にあたり、狹山池築造以前にはこの付近を旧天野川が北流していたことが予想される場所である。調査箇所は調査以前には周知の遺跡ではなかったが、試掘調査の結果、古墳時代の水田など多くの遺構や須恵器などの遺物を検出したため、トレンチによって遺構、遺物が確認できた範囲 2200m<sup>2</sup>において全面的な発掘調査を実施することになった。遺跡発見によりこの調査区は池尻遺跡の一部となつた。本報告書では本調査区を池尻遺跡(2)と呼ぶことにしたい。また調査の過程で須恵器窯(狹山池1号窯)の灰原など新たな発見があったため、調査区を若干拡張し、調査につとめた。試掘調査は1992年9月から同年10月まで実施し、それに引き続いて本調査を1993年2月まで実施した。また1992年12月12日には現地説明会を開催した。

### 2 層序

今回の発掘調査は先述の通り試掘トレンチによって遺構が認められた範囲において南北 46m、東西 35m の長方形の調査区を設定して実施した。調査区内における基本的な層序は以下の通りである。まず最上層には厚い盛土がかぶさっていた。これはグランド造成のため1968年ごろに盛られたもので、もっとも薄い南端で 120cm、もっとも厚い北端では 220cm 程度の厚さである。盛土の再下層にはグランド排水用の管が縦横にいれられておりその一部は遺構面を破壊していた。それ以外についてはグランド造成時には元の水田には一切手を加えず盛土をしたようで、この盛土の下にはそれ以前の水田がそのまま埋められていた。この水田の作土の厚さは 30cm から 40cm とこの地方の水田としては厚いほうである。この水田作土の中からはいくつか遺物もみつかっているが、おおむね近世初期以降のものである。つまりこの水田面は近世以降昭和後期までの面である。この水田作土の下には茶色粘土からなる鍛床層が形成されていた。調査区南部ではこの鍛床層の下に砂層、あるいは後述する須恵器窯の灰原層が存在している。これらの層は北へいくほど薄くなり、調査区北部ではほとんどみられなかった。そのため調査区北部においては近世水田作土、鍛床の下に古墳時代の水田面が直接接しており、近世以降の耕作によって古墳時代の水田面が大きく影響を受けている。この砂層、あるいは灰原層の下が古墳時代の水田作土の層である。この層の厚さは平均 25cm 程度であるが厚い部分では 60cm に達しており、水田作土層としては非常に厚い。水田は畔によって区画されていたが、この畔を



写真 97 池尻遺跡(2)と狹山池北堤

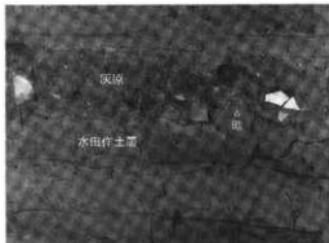


写真 98 灰原層と水田作土層

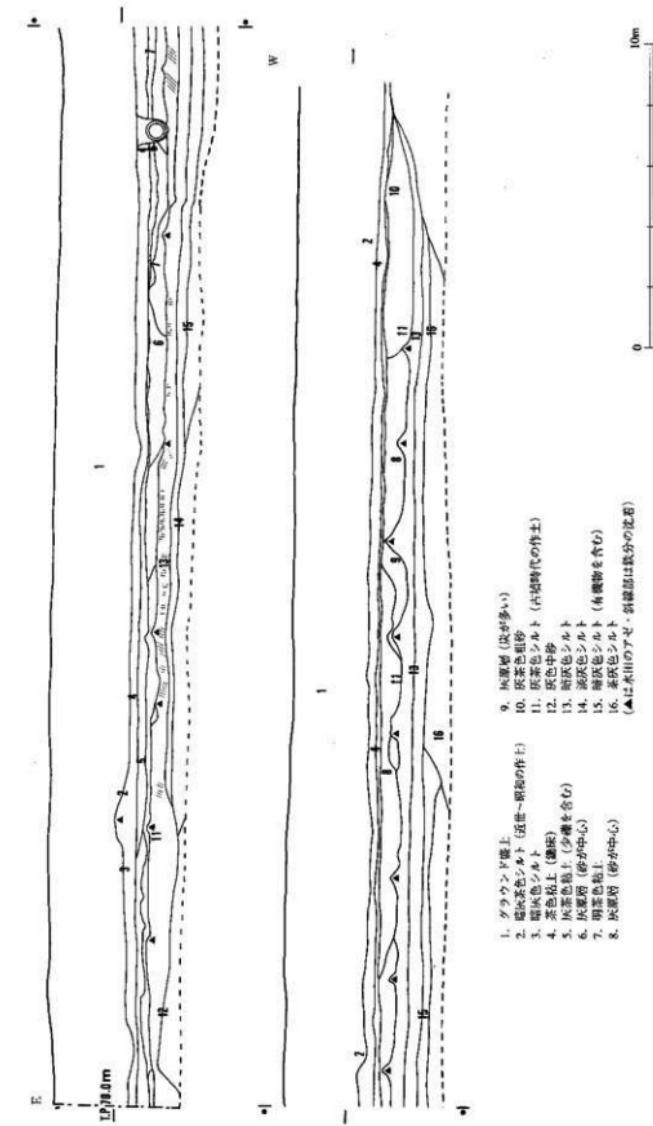


図269 池尻遺跡 (2) 東西断面図 (S=1/160)

構成していた土は水田作土と同じものであった。この層の下には暗灰色シルト層が存在する。この層が古墳時代水田の歯床と考えられる。その下には淡灰色あるいは暗灰色のシルト層が存在する。この層には多くの有機物が含まれている。これは低温性の環境で堆積した層であり、人為的な水田面ではないようである。その下には灰色の砂層が堆積している。今回の調査ではその上面を確認しただけ、砂層を深く掘削しその厚さを計ることはしなかった。ただしこれまで大阪狭山市教育委員会などがこの付近で実施した発掘調査の結果によれば、この砂層は谷底平野のあらゆる箇所において観察することができ、その厚さは最大で3mに及ぶことが確認されている。これは明らかに河川などによって運搬され堆積した沖積層であり、常識的に考えれば狭山池築造以前この低地を北流していた旧天野川によって形成された層とみることができよう。この層の年代は水田および狭山池の年代を定める上で非常に重要である。今回の調査ではこの層の上面から60cm下がったところから横瓶と思われる須恵器を検出している(図270)。口縁部が欠けているため正確な型式は決めがたいが、横瓶の初現自体が田辺昭三氏の編年でいうTK209型式あるいはTK217型式であると考えられ、遺物の年代は6世紀末を過ることはないだろう。最大で厚さ3mにもおよぶこの砂層の年代については慎重にならざるをえないが、その後の時期はほぼこの年代に限定してよいと思われる。したがって水田の経営された時期はそれ以後の時代ということになる。

調査区の基本的な層序は以上の通りである。今回の調査では古墳時代の水田面に調査の主眼をおき、まずグランド盛土を重機で掘削し、近世の水田面以下の層を人力で掘削し、古墳時代水田面の検出につとめた。またこの水田作土より深い層についてはトレーナーの断面を観察した結果、遺物などはほとんど含まれておらず調査の対象から外した。ただし最下層の砂層には先に述べたように須恵器などの遺物が少量みられたが、これは河川や洪水の運搬によるものと考えられる。これらの遺物は採集するにとどめた。

### 3 遺構と遺物

#### ① 遺構面の重なり

今回の発掘調査で確認した遺構面は基本的には1層である。しかしながら調査区の南部においては3層の異なる遺構の重層がみられた。このことは今回の発掘調査にとって重要な意味を持つので、まず年代の古い下層の遺構面から順にその概要を述べ、ついで個々の遺構について説明を加えていく。

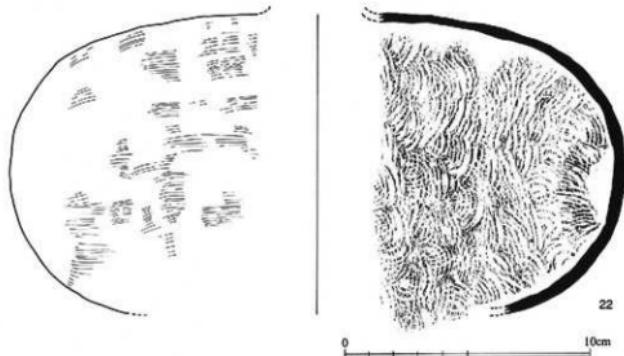


図270 砂層出土遺物実測図

こととしたい。

本調査区のはば全面にわたって水田遺構が検出された。ただし先述の通り調査区の北側や西側ではこの水田面の直上に近世の水田面が存在したため、耕作によって攪乱や掘削がなされ畦の検出は困難であった。また調査区中央部でも畦がまったく検出されない部分があったが、この付近は水田面が他の部分より高くそのため後世の耕作により畦が失われてしまったものと思われる。このような後世の遺構の改変を考慮にいれれば調査区の南西角から北東にのびる段差を水田の西端とみなすべきであろう。この段差にそつて杭列とみられるピット列が一部でみられた。ただしこの段差の西側においても一部では水田がみられる。また調査区のもっとも北部において狭い間隔で畦が並んでいる部分があった。これは形態から畑と考えられる。またこの場所で川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析の結果によればソバ属、イネ属などの花粉が検出されており、これらの作物が栽培されていた可能性が高い(第3章参照)。これらの水田面のうち南側の部分については作土の上に大量の須恵器の破片が散布しており、また焼土や窯壁の破片も多くみられた。これは明らかに須恵器窯の灰原の状況を示すものであった。この場所は狹山池の東岸を構成する段丘崖からは50m以上離れているため、当初須恵器窯の存在はまったく想定していなかった。この灰原を追い掛けて調査区を南(堤体側)に拡張したところ、南にいくほど、つまり狹山池の北堤に接近するほど灰原は厚くなり遺物の量も増加していった。このことから考えてこの窯は狹山池築造後、その堤の斜面を利用して築かれたものと考えられる。この窯は調査後、狹山池1号窯と命名した。狹山池1号窯の遺構、遺物については本章第4節において別途報告している。この灰原層のさらに上層に厚さ20cmの砂利を主体とする盛土がなされていた。この盛土はかなり踏みしめられた状態で盛られており、明らかに水田面を別の形で利用するための造成と考えられる。ただしこの盛土の面からは明確な遺構は確認されなかった。またこの盛土に対応する遺構として石が直線的に並べられたものが2列平行して検出されている。この石列は盛土の西端ラインに垂直に配置されておりその上に土が盛られていた。遺構の性格としては盛土部分に通じる道であると考えられる。これらの遺構の重なりは、水田→灰原→盛土という土地利用の変遷が調査区の南部地域においてみられたことを物語る。また水田作土の上に直接に灰原が堆積している状況はこの変化が比較的短期間に生じたことを示している。調査区の南部においてはこのような土地利用の変遷を地層の重なりとして読み取ることが可能であるが、逆に北部においては同じ面に異なった時代の遺構が残されており著しい対照を示している。

## ②水 田

調査区は南北東西の2本のセクションによって4つに区画されている。南西部がA区、南東部がB区、北西部がC区、北東部がD区である。さらに灰原の範囲を探るために調査区を南に拡張したがこの拡張区をE区とする。今回検出した水田は調査区内において140箇検出されている。ただしC区、D区など北側の水田は後世の攪乱、削平によって畦が相当変化していると考えられる。これに対してA区、B区、E区の水田は灰原、盛土などによっていわば密封された状態で残存しており当初の水田

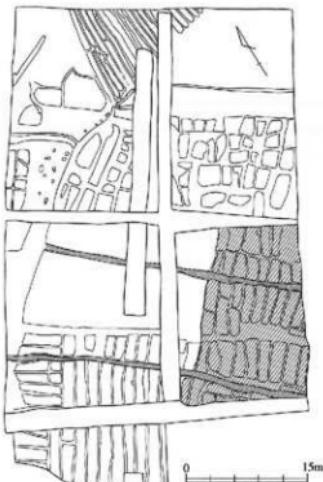


図271 盛土遺構平面図(斜面部が盛土部分)  
(S=1/600)

の形態を探るには南部のものを中心とりあげるべきであろう。この地区の水田の基本的な形は南北に長い長方形である。正確には水田の長軸は磁北から東に40~45度程度振っている。A区、B区、E区の水田の大きさの平均は長軸の長さが3.63m、短軸が1.37mである。長軸の長さは北側の水田が短く、南に行くほど長くなっている。これに対して短軸長は1.3mにはば一定している。もっとも大きい水田の面積はE調査区で検出されたもので9.1m<sup>2</sup>、またもっとも小さい水田はA区でみつかったもので面積は1.8m<sup>2</sup>である。全体的に非常に小さな区画が多く、典型的な小区画水田といえる。最近全国で弥生時代、古墳時代の水田の出土が増加し、その構造も次第に明らかになってきている。

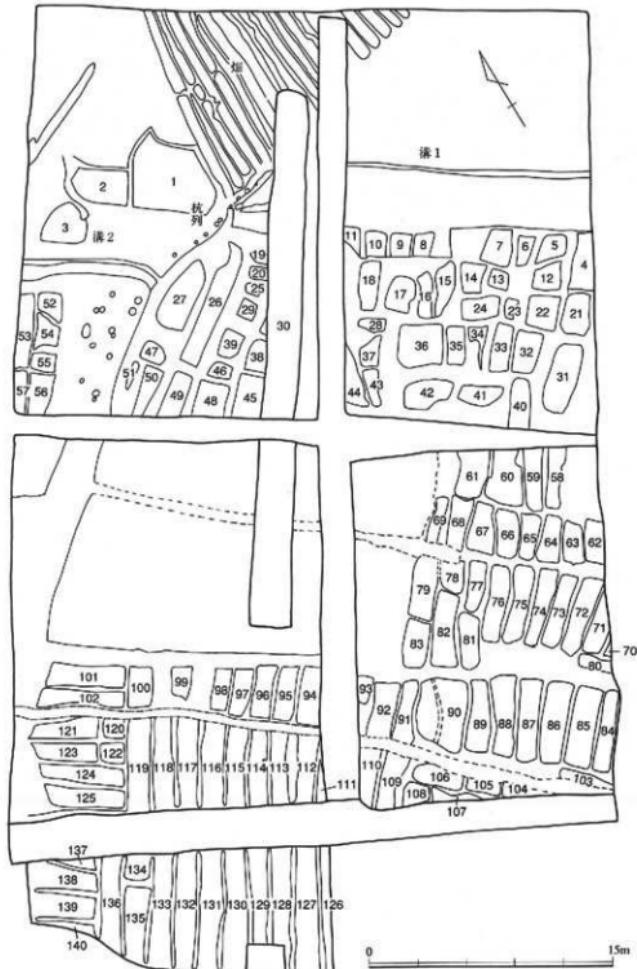


図272 水田遺構平面図 (S-1/300)

弥生・古墳期の一般的な水田の形態は池尻遺跡にみられるいわゆる小区画の水田である。<sup>⑤</sup>これまでの研究によれば、水田はまず大きな畔によって区画され、それを小さな畔によって細かく区画していくことが明らかになっている。多くの小区画水田はいわゆる所有の単位ではなく、傾斜地などで水持ちをよくするために区画されたと考えられるようになってきている。池尻遺跡の水田もまた大畔によって区画された後、小畔によって細分されたと考えるべきだろう。水持ちをよくするための小畔は傾斜方向に対して垂直に設けるのが当然であるが、本調査区は東から西に向けて僅かに傾斜しているた



写真99 一番小さい水田

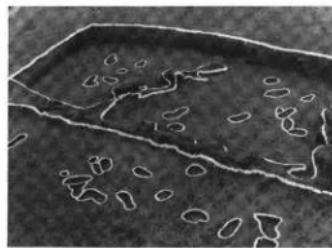


写真100 水田に残された足跡

表29 水田の規模と方位

番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き	番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き	番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き	番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き
1				36	2.7	2.7	30°E	71	3.9 以上	1.2	55°E	106	1.35以上	3.15	45°E
2				37	1.95	1.2	40°E	72	4.95	2.7	55°E	107	3.15以上	0.9	35°E
3				38	1.95	1.35以上	40°E	73	4.65	1.2	50°E	108	1.5 以上	1.65以上	45°E
4	3.3	1.65以上	40°E	39	1.8	1.2	45°E	74	4.95	1.2	45°E	109	3.6 以上	1.5 以上	45°E
5	1.8	1.95	40°E	40	3 以上	1.35	35°E	75	4.95	1.35	45°E	110	3.6 以上	1.35以上	45°E
6	1.8	1.05	50°E	41	1.2	3	40°E	76	4.65	1.35	45°E	111	2.7 以上	0.6 以上	35°E
7	2.1	1.8	50°E	42	1.8	3	40°E	77	3.15	1.2	40°E	112	4.2 以上	1.35以上	35°E
8	1.5	1.2	40°E	43	2.4	1.05	25°E	78	2.1 以上	1.5 以上	35°E	113	4.5 以上	1.05	35°E
9	1.5	1.2	40°E	44	4.2 以上	1.55以上	15°E	79	3.9 以上	1.5	40°E	114	4.8 以上	1.2	35°E
10	1.65	1.35	40°E	45	2.7 以上	1.5 以上	45°E	80	0.9 以上	2.25以上	45°E	115	4.95以上	1.2	35°E
11	1.65	1.05以上	30°E	46	1.05	1.5	45°E	81	3.6	1.2	30°E	116	5.4 以上	1.5	35°E
12	1.8	30°E	47	1.2	1.5	50°E	82	4.65	1.8	40°E	117	5.7 以上	1.2	35°E	
13	1.05	1.2	50°E	48	2.1 以上	1.8	40°E	83	3	1.5	40°E	118	5.7 以上	1.35	35°E
14	1.8	1.8	30°E	49	3 以上	1.2	55°E	84	5.1	1.05	40°E	119	5.7 以上	1.5	35°E
15	3.45	1.35	40°E	50	3.15以上	1.2	55°E	85	5.1	1.65	40°E	120	1.2 以上	1.35	35°E
16	2.7	0.9	40°E	51	1.8	0.45	35°E	86	5.1	1.5	40°E	121	1.35以上	4.2	30°E
17	2.1	1.65	50°E	52	1.8	1.5	30°E	87	5.1	1.5	35°E	122	1.35	1.5	30°E
18	3	1.2	40°E	53	4.5 以上	0.9 以上	35°E	88	5.1	1.65	35°E	123	1.2	4.05	35°E
19	0.6 以上	1.05以上	40°E	54	2.25	1.5	40°E	89	4.5	1.5	35°E	124	1.2	5.25	35°E
20	0.9 以上	1.05以上	40°E	55	1.2	1.5	35°E	90	4.5	3	40°E	125	1.35	5.1	35°E
21	2.55	1.8	45°E	56	2.25以上	1.5	35°E	91	3.9 以上	1.5	45°E	126	7.8 以上	0.45以上	30°E
22	2.1	1.8	45°E	57	2.7 以上	0.9 以上	35°E	92	3.45以上	1.5	45°E	127	7.8 以上	1.5	35°E
23	0.8	7.5	45°E	58	3.75以上	1.2 以上	40°E	93	1.65	1.2 以上	50°E	128	7.8 以上	1.2	35°E
24	1.35	2.4	45°E	59	3.9 以上	1.2 以上	30°E	94	3.6	1.5 以上	40°E	129	5.85以上	1.2	30°E
25	7.5	9	50°E	60	3.45以上	2.4	45°E	95	3.45	1.2	45°E	130	7.5 以上	1.5	30°E
26	7.8	1.35	55°E	61	3 以上	2.1 以上	45°E	96	3.3	1.2	45°E	131	7.5 以上	1.5	35°E
27	4.5	1.95	55°E	62	2.7	1.2 以上	45°E	97	2.85	1.2	40°E	132	7.5 以上	1.35	35°E
28	0.9	1.8	35°E	63	2.7	1.5	35°E	98	2.55	1.05	40°E	133	7.05以上	1.2	35°E
29	1.2	1.05	55°E	64	3	1.5	35°E	99	2.1	1.2	35°E	134	1.65以上	1.5	35°E
30	1.05以上	0.6 以上	55°E	65	2.85	1.35	40°E	100	2.4	1.5	35°E	135	4.8 以上	1.5	35°E
31	4.35	1.8	50°E	66	3	1.5	40°E	101	1.35	4.8	35°E	136	6 以上	1.2	35°E
32	2.55	1.65	50°E	67	3	1.8	45°E	102	1.2	5.4	35°E	137	0.9 以上	3 以上	45°E
33	3	1.2	40°E	68	3.3 以上	1.35	45°E	103	0.6 以上	3.3 以上	45°E	138	1.5 以上	4.2 以上	35°E
34	2.7	1.2	40°E	69	2.85以上	0.75	45°E	104	0.9 以上	3 以上	45°E	139	1.5 以上	4.05以上	35°E
35	2.4	1.2	30°E	70	0.9 以上	0.6 以上	55°E	105	0.75以上	2.1	45°E	140	0.6 以上	3.9 以上	40°E

め南北方向の小畠が多くみられるものと考えられる。A、B、E区における大畠の区画は図273に記した通りで、一応調査区内において8つの区画を考えている。この大畠を設けたのち、南北方向を中心とする小畠を1.3m間隔で設けたのだろう。各水田の間には水路らしいものはまったく観察できず、いわゆる田越灌漑がおこなわれていたと思われるが、水田には水口などもみられない。この程度の大きさの水田区画であれば特に水口がなくても水入れは可能であったのだろうか。ちなみに調査中、何度か降雨があり、その度に水田跡にたまつた水を排水する作業を行ったが、その際には板で水を押すように排水するのがもっとも効果的であった。かつての農民も同じ要領で入排水をした可能性があるだろう。どちらにせよ調査区内において水路がみられないということから、今回検出された水田群は河川などから水を引いて灌漑したのではなく、天水または段丘崖などから流れてくる小規模な谷水を利用したものと考えられる。

また水田群のなかには数箇所水田を掘り残した部分がみられた。B区の東北隅の掘り残し部分は長軸方向(NE-SW)の長さが4.8m、短軸方向の長さが2.7m、面積は $12.96\text{m}^2$ 、またB区の中央の掘り残し部分は長軸方向(NW-SE)の長さが6.0m、短軸方向の長さが1.9m、面積は $11.4\text{m}^2$ である。ともに水田1区画ないしは2区画を掘り残したもので、現在の水田と比較してその機能を類推すれば、刈入れの時に稲を仮置きするような作業空間であったとみられる(図273の斜線部分)。

また畠はこれまで述べてきたように大畠と小畠に分類できる。大畠は断面が台形であり、これに対して小畠はかまぼこ形の断面である。小畠の高さは場所によって相違がありもっとも高い所で14cm、もっとも低いところで4cm、平均は7cm程度である。

この水田の作土の中からは遺物の出土はなく、直接的に水田が築造された時期を確定することはできないが、先に述べたようにこの水田の下の砂層から6世紀以降のものと思われる須恵器が検出され、また水田の上に堆積している灰原の遺物がTK217型を中心とするものであることから考えてこの水田は6世紀末に築かれ7世紀の前半にはすでに廃棄されていたとみられる。またこの水田と狹山池の前後関係については現在のところ以下のように考えている。今回検出された水田は狹山池の北堤のすぐ北まで続いており、現在の狹山池北堤の中にさらに連続する可能性がある。また狹山池調査事務所が北堤において実施したボーリングのコアのうち、堤体の基盤にあたる有機物層からはイネのプラントオパールが検出されたことが外山秀一氏によって報告されており、<sup>⑤</sup>水田が狹山池に先行する可能性が高い。この水田作土の上に直接須恵器の灰原がかぶさっていることから、水田は狹山池築造直後に廃棄されたことが考えられる。水田は北堤のすぐ直下であったために、狹山池から流出する水路よりも標高が高く引水ができず、また狹山池築造以前に依拠していたと思われる東側段丘からの谷水も、北堤によって供給を断たれたことがこの耕作放棄の原因であろう。

調査区の西端で他の水田とは切り離された状態で、水田が6筆検出されている。これらの水田は他の水田とは異なり、砂で埋没していたために足跡が顕著に残っていた。足跡は大部分が人間のものと

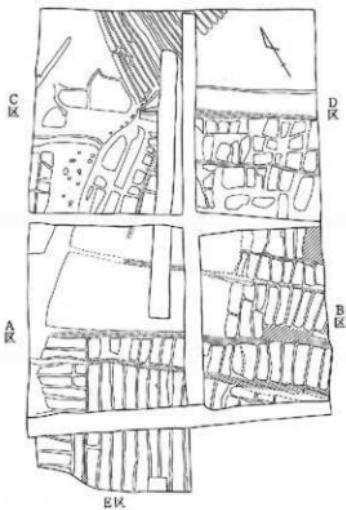


図273 大畠と小畠

考えられるが、なかに梢円形のものがありこれについては家畜のものである可能性がある。人間のものと考えられる足跡は長さが20cm程度のものがほとんどで非常に小さい。また砂を掘って深さを計ったがほとんどは2~3cmの深さであった。

### ③畑

C区、D区の北部において畔が30cm~40cm間隔で並んでいる部分がみられた。これは畑と考えられる。畑はおおむね砂によって埋められていたため検出は比較的容易であった。畑の一本一本の畔の断面は上面が平たく両端が急角度におちこむ台形であった。畑の畔の間隔が30cm程度と非常に狭いためそれほど大きな作物が植えられていたとは考えられない。花粉分析の結果ではソバ属、イネ属の花粉が検出されている(第3章参照)。畑が検出された面は基本的に水田と同一面であるが、先にものべたように今回の調査区の北側では古墳時代の水田と近世以降の水田が直接接しているためその時期の判断には慎重な態度を取りたい。最近では群馬県などで古墳時代の畑も幾つか報告されているが、関西においては古い時期の畑の事例は極めて少なく、奈良県広陵町箸尾遺跡や大阪府藤井寺市西大井遺跡において中世の畑が報告されているにすぎない。かりに今回検出した畑が古墳時代のものであれば貴重な事例となろう。

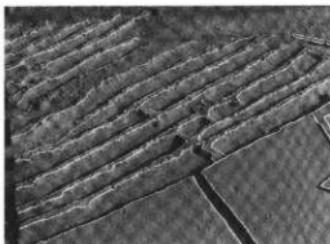


写真101 畑 全 景

### ④須恵器窯灰原

先述の通り調査着手以前には須恵器窯の存在は予想しなかったが調査途中多量の須恵器片が出土し、灰原であることが確認された。灰原はA区、B区および拡張区であるE区において見られた。灰原の厚さはもっとも厚い部分で35cmであるが、薄い箇所では2cm程度である。B地区では灰原は広い範囲に広がっているが大半は焼土のみの層であり、遺物などが多く含まれているのはA、B地区の南端とE地区である。それ以外の箇所においては須恵器片はブロック状にかたまって検出された。灰原中の遺物については第4節において別途報告する。この灰原層は水田の畝と畝の間を埋めるように堆積しており、水田作土との間に間層はまったくみられなかった。このことから水田の放棄後、間を置かずに窯が築造され灰原が形成されたと考えられる。またこの灰原を堆積させる原因となった窯本体の所在については、東側の段丘崖までは距離も遠く、北堤そのものの傾斜面を利用して築いたものと考えられる。この点についても第4節で触れている。これまで我が国の須恵器窯でこのように人工の斜面を利用して築造されたものの発掘例はまったく無く、この窯は非常に特殊なものと考えられる。今日の常識で考えれば池の堤体に窯を築くことは池の決壊を考えれば絶対に考えられない。しかしながら狭山池は我が国でも最古の段階の溜池であり、少なくとも当時我が国でもっとも主要な須恵器生産地帯であった陶邑窯跡群においては最初の大土木構築物であったと思わ

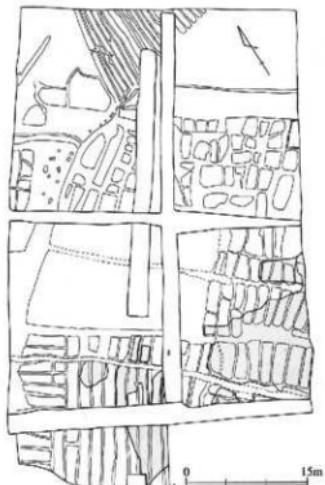


図274 灰原のひろがり(トーン部分が灰原の被覆)

れる。そのような状況の中で須恵器を生産する工人達に今日的な意味での土木技術に対する常識が欠落していてもそれはどの不思議はないだろう。狹山池1号窯の経営は最初の溜池であるために生じた現象とみることができる。

#### ⑤中近世の遺構、遺物

今回の調査区においては先にも述べたように、南側では古墳時代の水田の上に須恵器窯の灰原などの中層があり、その上に水田を中心とする近世遺構が展開していた。溝の中には相当深く掘りこまれたものがあり、その中からはいくつか遺物が出土している。図275に掲載した鎌は調査区外のトレンチ中から出土したものである。この場所は近世の水田面から深く掘りこまれた溝の底の部分にある。共伴する遺物がないため正確な時期は不明であるが、やはり近世の遺物と考えられよう。鎌は刃渡りが15.2cm、峰の厚さは2.5mmである。刃はほぼ直線的に伸びていて、峰は平面形でゆるやかな曲線を示している。柄の部分の先端は内側に曲がっておりこの部分に釘を引っ掛けた木部に着装できるようになっている。柄と刃の角度は112度でこれは草刈鎌の一般的な角度である。

また調査区の北部においては古墳時代の水田面の直上が近世の水田面となっていたため、近世の面からの遺構と思われるものがいくつか残されていた。図272における溝1

は幅20cm、調査区内における長さは15.1m、深さは25cm、断面形はほぼ正方形である。溝の中には直径5cm程度の小石がぎっしりとつまっていた。またそれらに混じって近世の土器や瓦片が若干出土している。この溝は排水のために利用されたものと考えられる。溝2は幅60cm、調査区内における長さ7.9m。流れの方向は東から西である。図276・277はともに包含層出土の遺物である。包含層からは古墳時代の須恵器もみられるがいずれも狹山池1号窯から後世移動したものであろう。ただし13のみは奈良時代の須恵器である。また14、17は近世以降の遺物である。これらは近世水田の耕作に伴う遺物であろう。

#### 4 小 結

池尻遺跡(2)の発掘調査では、古墳時代後期の水田跡や須恵器窯など多くの遺構を検出した。なかでもっとも特筆すべき点は、狹山池築造の下限を考古学的には押さえることができたことであろう。この調査の後に行われた東橋下層遺構の調査によって狹山池の築造年代は7世紀初頭には確定したが、池尻遺跡および狹山池1号窯の調査成果はそれを補完する役割を担っている。さらに狹山池築造に先行すると見られる水田を検出したことも大きな成果であった。狹山池の築造は南河内の開発にとって大きな契機であったことは間違いないことであろうが、狹山池ができる初めて水田の開発が開

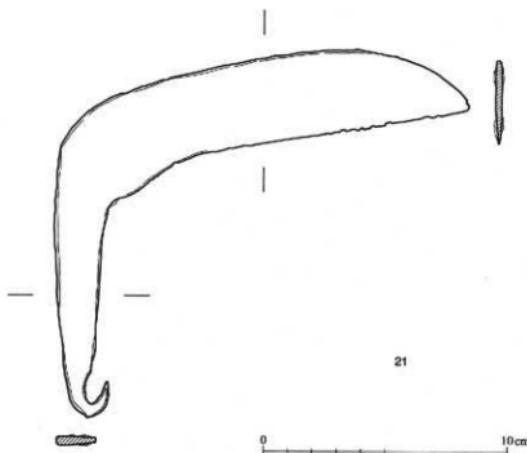


図275 池尻遺跡(2)トレンチ内出土遺物実測図(S-1/2)

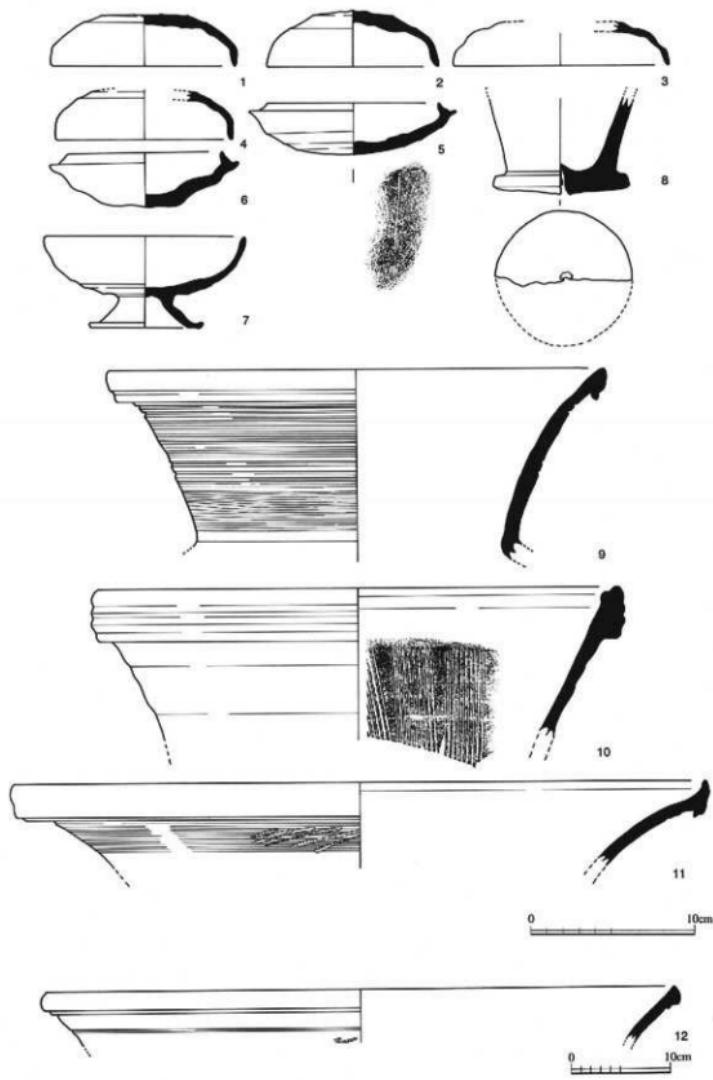


図 276 池尻遺跡 (2) 包含層出土遺物 (1)

表 30 池尻遺跡(2)出土遺物

(丁はたちあがりを示す)

器種	画面 版面	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	276- 1 122- 1	口径11.2 高さ5.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 蓋	276- 2 122- 2	口径10.6 高さ3.5	体部上縁部は下外方に下る。縁部は丸くおさめる。天井部はやや高くやや丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。焼成: やや不良。残存: 1/3。反転復元。
杯 蓋	276- 3 122- 3	口径13.4 残存高2.8	体部、口縁部は下外方に下る。縁部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。1mmの長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/7。反転復元。
杯 蓋	276- 4 122- 4	口径10.8 残存高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 粘土。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。
杯 身	276- 5 122- 5	口径10.4 受形深12.8 高さ7.2 T高0.5 T角度50°45'	たちあがりは内傾して上外方にのびる。縁部は丸くおさめる。受形は上外方にのび、縁部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面外面1/2回転ヘラ削り調整。底面外側1/2(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 1/3。ヘラ記号: 武部外面に「一」あり。
杯 身	276- 6 122- 6	口径9.6 受形深11.8 高さ6.4 T高0.5 T角度40°15'	たちあがりは内傾して上外方にのびる。縁部は丸くおさめる。受形は上外方にのび、縁部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面外面1/2(底部中央)未調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一輪灰青色、外一輪灰色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 1/4。
高 杯	276- 7 122- 7	口径12.2 基部厚6.4 脚部厚6.8 高さ5.8	口縁部は内傾しながら上外方にのびる。縁部は丸くおさめる。口縁部は平らに近い。縁部は下外方に下り、縁部は外方にのびる。縁部は平面を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。底面外面4/5回転ヘラ削り調整。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。2mm以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。ヘラ記号: 外面灰かぶり。
高 杯	276- 8 122- 8	口径8.5 基部厚6.8 残存高6.1	体部は上外方にのびる。底部はほぼ平ら。底部中央に円孔を有する。口縁部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 粘土。1mmの長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。自然釉付。
盃	276- 9 122- 9	口径30.6 残存高12.0	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で短く外方にのび、段成して上外方にのび、内傾して上外方にのびる。縁部は丸くおさめる。縁部上方に2条の沈線をめぐらす。縁部は下外方にのびる。縁部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。縁部外面カキ目調査。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。2mm以上の長石、石英を含む。焼成: 良好。残存: 1/2。口縁1/5。反転復元。外面部灰かぶり。
盃	276- 10 122- 10	口径32.4 残存高9.5	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で短く外方にのび、あまり一段も成らず段成して上方に至る。縁部は丸くおさめる。口縁部に2条の沈線をめぐらす。縁部は下外方にのびる。縁部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 1/5。反転復元。
盃	276- 11 122- 11	口径43.0 残存高5.3	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で短く下方にのびあまり一段も成らず内傾して上外方にのび、端部は丸くおさめる。口縁部下鉢: 3条の沈線をめぐらし、その下方に横筋と斜行沈線を有する。口縁部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。縁部外面カキ目調査。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。胎土: 粘土。1mmの長石を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。内面部灰かぶり。
盃	276- 12 122- 12	口径65.4 残存高5.7	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で短く下方にのびあまり一段も成らず内傾して上外方にのび、端部は丸くおさめる。縁部上方に1条の沈線をめぐらし、上方縁の下方に刻劃文を有する。口縁部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。焼成: 良好。反転復元。
杯 身	277- 13 122- 13	口径16.6 高さ12 残存高4.3 高さ6.62	体部は上外方にのびる。口縁部欠損。底部はやや深く、底部は平らに近い。底部よりよきや内側に八の字型の高台を付し、高台端部は平面を成す。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調査。他の回転ナナ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰色。胎土: 粘土。1mmの長石を含む。ナットを含む。焼成: 良好。残存: 高台部1/2。反転復元。
高 杯 小 盤	277- 14 123- 14	口径11.4 残存高6.0	体部はやや外反しながら上外方にのびる。縁部は丸くおさめる。底部は内下方にのびる。底部中央欠損。	縫花文様。透明釉を施す。	色調: 白色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 1/5。以反転復元。
高 杯 小 盤	277- 15 123- 15	基部厚6.6 脚部厚6.0 残存高3.0	体部は上外方にのびる。口縁部欠損。底部は平ら。底部端より内側に八の字型の高台を付し、高台端部は丸くおさめる。底部中央欠損。	透明釉を施す。	色調: 茶色。胎土: 粘土。焼成: 良好。残存: 底部1/5。反転復元。

陶器小皿	277-16 122-16	口径8.2 底径5.2 残存高1.6	体部・口縁部は上外方にのびる。端部は平面を有し内側で接する。底体部は浅く、底面は平ら。底部中央欠損。	透明物を施す。口縁部内面無釉。	色調：淡灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
陶器盤口子	277-17 122-17	基部径3.2 高台径2.8 残存高1.9	体部は上外方にのびる。口縁部以下欠損。底部は平らに近い。底部端よりやや内側に下方におりた高台を付し、高台端部は丸くなめる。底部中央欠損。	高台部露胎。外面褐色系。内面透明物。	色調：内・白色。外・褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：高台径1/4。反転復元。
瓦	277-18 123-18	瓦当面の幅3.5		瓦当面皆草文様。外区無文。	色調：地灰色。胎土：密。焼成：良好。
羽蓋	277-19 123-19	口径20.2 残存高5.3	口縁部は上内方にのびる。端部は平面を成す。口縁部外面に3条の鈍い波線をめぐらす。肩部は外下方にのびる。端部は平面を成す。肩部下に1条の沈線をめぐらす。体部は下内方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ形成。内面にカキ日割繩。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転：右回り。色調：淡灰褐色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：口縁部1/3。反転復元。
羽蓋	277-20 123-20	口径20.8 残存高5.4	口縁部は上内方にのびる。端部は平面を成す。口縁部外面に2条の鈍い波線をめぐらす。肩部は外方にのび、端部は丸くなめる。体部は下内方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ形成。回転ナゲ調整。	ロクロ回転：左回り。色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口縁部1/3。反転復元。外面上に自然輪付着。

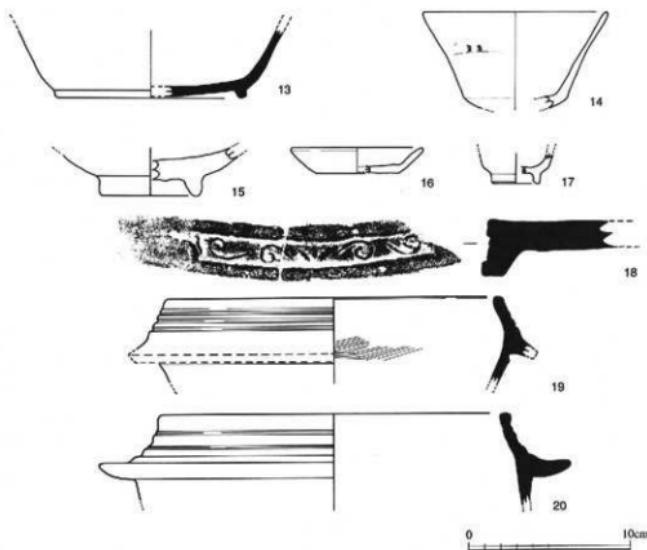


図277 池尻遺跡(2) 包含層出土遺物(2) (S=1/3・1/5)

始されたのではなく、谷水や雨水などを利用した不安定な水田が所々に細々と營まれていた状況のなかで、狹山池が築かれたことが今回確認された。狹山池の築造と下流の大開発は恐らくは国家レベルでのものとみられるが、今回検出された水田は狹山池の築造によって廃棄されたと考えられ、国家的大開発が一面では地域的な小規模開発を飲み込む形で進行したことを示している。

### III 池尻城跡

#### 1 調査の経過

池尻城跡は狹山池の西北側の段丘面に所在する中世城館である。古くから遺物の散布や「古城」「小屋ノ内」などの小字名の分布から城跡の存在が予測されていたが、1985年に大阪府教育委員会によって発掘調査が行われ、濠に囲まれた曲輪の存在が確認された。遺物などからみてこの城館は13世紀末から15世紀前半にかけてのものであることも判明している。<sup>⑦</sup>

今回のダム工事の一環として、狹山池北堤上を通っていた市道を池の北側に移動させる工事が行われることとなり、この付け替え市道が池尻城跡内を通るために工事に先立って、発掘調査を実施した。なお調査は用地買収などの関係で3回にわけて実施したが、本書においては個々の調査の結果を総合して報告する。調査期間は1988年11月、1991年7月、1992年7月～8月であった。

#### 2 遺構

前述の通り調査は3回に分けて行った。図278のA調査区は1991年に、またB調査区は1992年に調査を実施した箇所である。両区の真ん中の部分は1988年に発掘調査を実施した箇所であるが、ほとんど無遺構、無遺物であったために、地山の確認調査のみを実施した。

西側に位置するA調査区では溝・ピットを検出した。また調査区の東側半分では溜池1が検出さ

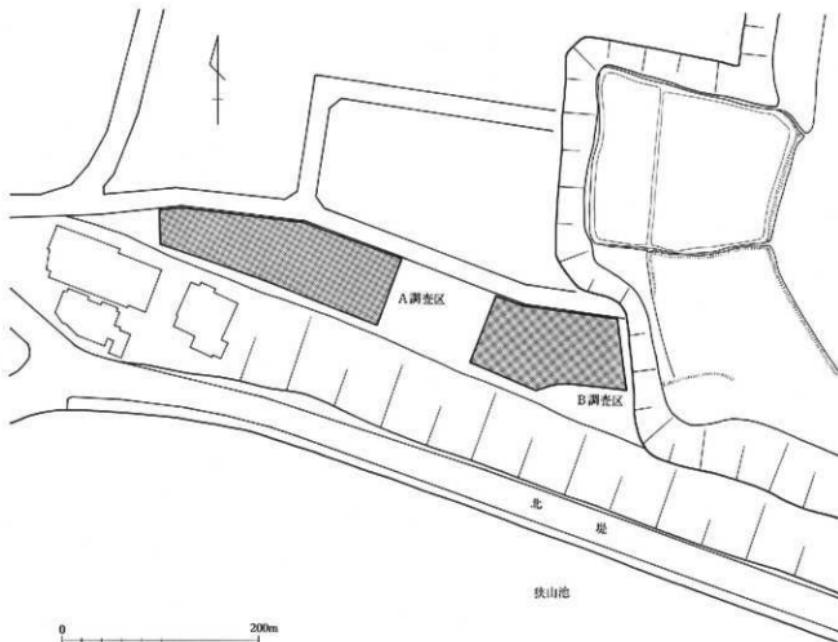


図278 池尻城跡調査区位置図 (S=1/5,000)

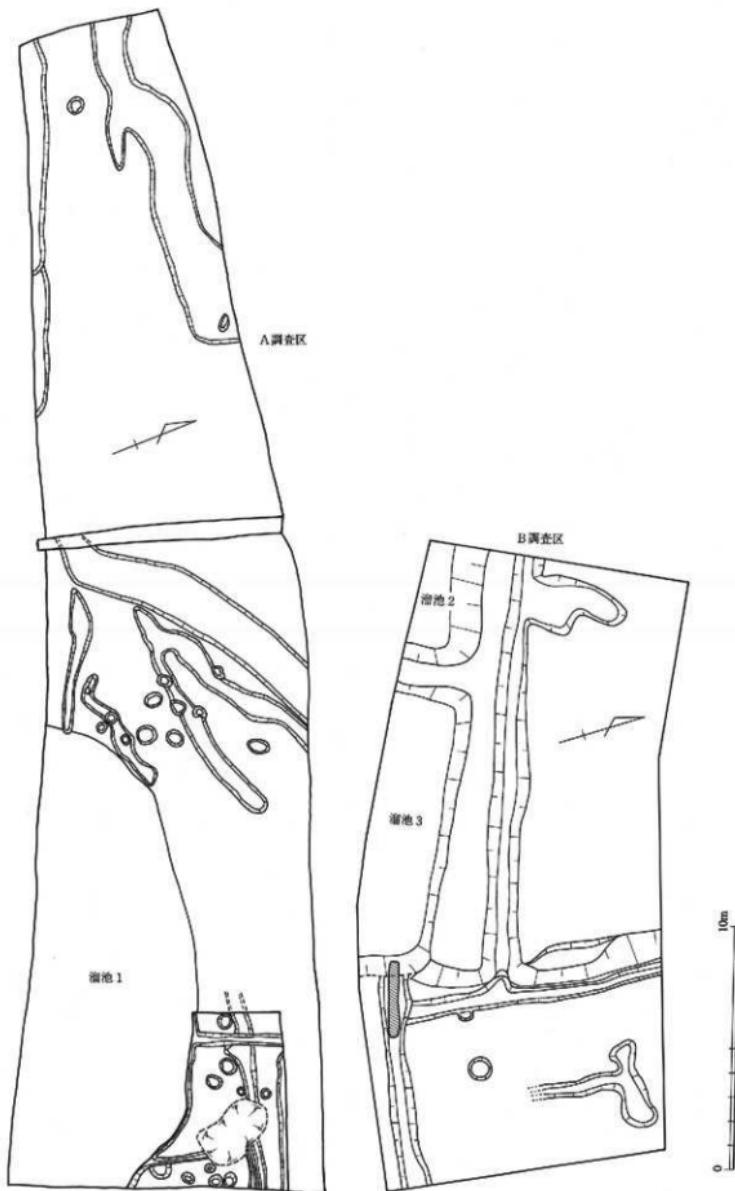


図 279 沢尻城跡遺構平面図 (S=1/200)

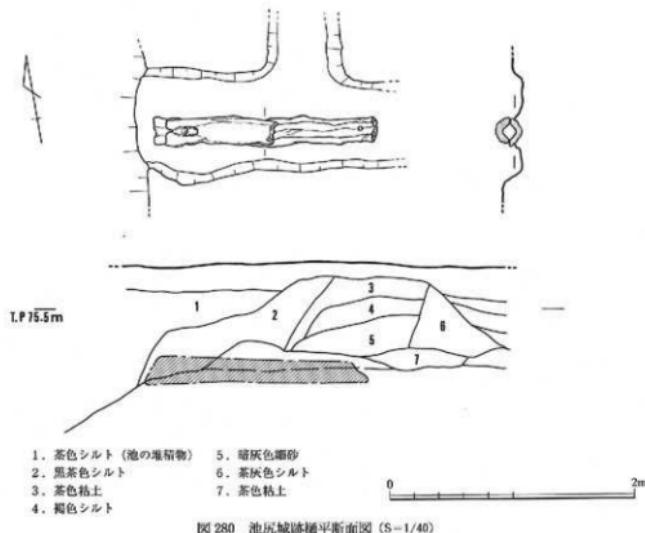


図 280 池尻城跡築平断面図 (S-1/40)

れている。溜池1は溝など他の遺構よりも後に掘削されており、溝などを断ち切っている。長さは調査区内で18.5m、幅はやはり調査区内で6.8mである。深さは少なくとも3.2m以上あるが、それ以上の掘削は危険であったために行わなかった。溜池1の範囲は調査区よりもさらに東と南に広がっている。溝は溜池1よりも西側においては定まった方向をもたずランダムに配置されている。溜池1付近においては東西、南北方向に直角に交差して流れている。ただしA調査区におけるこれらの溝やピットの意味については遺物もなく不明というしかない。

東側のB調査区においては二つの溜池(溜池2・溜池3)と溝を検出した。溜池2は調査区内における長さ、幅がそれぞれ4.8m・2.7mであり、さらに南側、西側に広がっている。溜池3は溜池2に連続する小さな溜池で、両者の境界には小規模な堤がみられた。溜池3の規模は調査区内において長さ12.0m・幅3.4mであった。また溜池3の東端には幅3.1m、高さ0.7mの堤がありその下には樋管が埋設されていた。堤の中心にはよく練まった粘土、シルトが入れられており、水漏れを防いでいる。現在中ハガネとも呼ばれているコア構造をもつ堤である。堤はマツの丸太を半切にし内部を正方形にくりぬいて再びあわせたもので、検出された長さは182cmであった。堤防はこれよりも長いので堤の長さも設置当初はさらに長かったと思われる。蓋材は86cmのみが残存していたが、端部の上面には直径11cmの穴があけられていた。この部分に男柱を差し入れて水の調整を行っていたと思われる。ただ溜池3についても池の堆積物は随分と深いことが予想されたが、湧水が激しく掘削が困難であったため深さは不明である。しかしながら堤で取水できる部分よりもはるかに溜池は深いことだ



写真 102 溝池3の樋

けは確実であり、この樋では溜池3に貯まつた水のうち、上層のものしか取水できないこととなる。樋よりも深い部分の水については人力で汲み出し利用したのであろう。狹山池周辺の段丘上においてはこのような掘り込み式の溜池が多く、フチと呼ばれている。フチでは水田の経営は不可能であり、主として畑作に利用されている。今回検出された3個の溜池はいずれもフチであると考えられる。B調査区では二つの溜池に平行して東西方向の溝が検出されており、さらに溜池3の樋付近ではこれに直行する南北方向の溝も検出されている。いずれもこれらの小規模な溜池の水を最大限利用するための水路であると考えられる。本調査区においては遺物はほとんど検出できなかったため、これらの溜池をはじめとする諸遺構の時期は不明であるが、堤防にハガネ工法をもちいている点や、いわゆる〇型の樋管を利用している点などからみて、溜池の時期は近世であると考えられる(第3章参照)。

### 3 小 緒

今回の調査地は池尻城跡に含まれていたが、当初予想していた中世の城館の遺構は検出できなかつた。おそらく池尻城の南端はこの調査区よりもさらに北であり、池尻城と狹山池は直接接していなかつたことがわかる。今回の調査で検出できたのは池尻城よりもさらに後世の近世の農業関係の遺構であつた。特に溜池3においては小規模なものではあったが堤と樋を対で検出でき、樋や堤の歴史の上では新たな資料を手にすことができた。また狹山池の西北の段丘面上の耕地開発の時期が近世であり、小規模な溜池を中心とする開発であったことも明らかになった。

#### 注)

- ①尾上実「南河内の瓦器碗」(『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983)
- ②田辺昭三「陶邑古窯址群I」半光学園考古学クラブ 1966
- ③上田宏範「東池尻・池尻の〈庄司庵〉〈門田〉」(『狭山の地名五十話』大阪狭山市役所 1992)
- ④吉川周作・三田村宗樹・内山高・長橋良隆・榎木玲美・Edy Sunardi・里口保文・橋本定樹・山本岩雄・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之「大阪狭山市狭山池堆積物における液状化跡」(『地質学雑誌』第103巻10号1997)
- ⑤工楽善道「『水田の考古学』東京大学出版 1991
- ⑥外山秀一「狹山池の形成と植生環境その1 一堤体ボーリングコアのプランツオバール分析ー」(『狭山池調査事務所平成2年度報告書』狭山池調査事務所 1991)
- ⑦『池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1987

## 第6節 出土遺物・遺構の保存処理

### 1はじめに

狹山池からは多くの遺構が出土しているが、ダム工事に伴う池底の掘削や、堤防の盛り立てによって現位置での保存はきわめて困難であり、もちろんダム完成後、貯水が開始されれば遺構を見学者などもできないために、遺構については遺物同様、取り上げて保存し、将来的な展示に備えるという方針を採った。調査が進行するうちに大阪府土木部によって(仮称)狹山池ダム資料館の建設計画が具体化してきたため、資料館内での展示を具体的な目標としてさまざまな遺構の保存を進めることになった。保存処理は遺物が巨大で運搬が困難なこともあり、業者に依頼せず、狹山池の内外において保存処理施設を設け、直接狹山池調査事務所が実施することになった。以下、遺構ごとに保存処理の方法と成果について報告する。なお保存処理については、奈良国立文化財研究所の沢田昭一氏に全面的にご指導いただいた。記して感謝する次第である。

### 2木製枠工

木製枠工の発掘調査は1993年4月より調査を開始して、翌年3月に終了した。木製枠工は木材を組み合わせて、中に土を充填し、表面に竹や石を並べた構造であり、この構造を保ったまま取り上げや保存処理を進めることは非常に困難であった。検討の結果遺構の全長28.8mのうち、2区画分、幅8.3m・奥行2.5m・高さ2.5mについて取り上げ、材木と土が一体のまま保存処理を実施することとなった。取り上げのための方法は次の通り。まず木製枠工の背後、側面を機械で掘削して側面、上面をウレタンで梱包した。この際前面についてはもちろん検出面をウレタン梱包したが、側面は外側の柱にそった土の断面を垂直に近い角度で掘削して、それが崩れないようウレタンを吹き付けた。また背後はなるべく遺構の重量を小さくするため可能なかぎり掘削を行った。したがって一部では内面をえぐるような掘り方をして崩れる前に急いでウレタンを吹き付けるという状況にもなっている。なるべく土の部分を薄くすべく作業を進めたので、遺構の上部では30~50cm程度の土の厚さとなっているが、下部においては土の掘削は困難であり、厚さは80cm程度と思われる。また上面は発掘調査の一過程での任意の面であり、また背後の土を掘削することもあって、柱の部分以外の土は残していない。このようにして土を掘削しながら全体的にウレタン吹き付けの作業を進めた。底部にはオーガーで横方向の穴をあけH鋼を差し込み、穴の余白を埋めるために隙間にウレタンを充填した。次にH鋼の下部に沿って鉄板を差し込み、遺構と地面を縁切りし、鉄板の下にはさらに径30cmの大きなH鋼を入れた。これは吊り上げ作業を考慮しての措置であった。これによってH鋼の上に鉄板が載り、その上に木製枠工が載る状態となったが、土が残されている前面部や側面部などについては底に鋼管を打ち込んでいる部分もある。また吊り上げ作業などによる全体的なきしみなどを防ぐために3ヶ所で鋼管による補強を行った。このように遺構の地面との縁切りおよびウレタンによる梱包を行った上で、大型のクレーンによって遺構を吊り上げ、狭



写真103 木製枠工の梱包作業

山池東北角の旧体育館の敷地内に搬送した。池内の搬送は工事用の通路を利用し大型のトレーラーによって行い、池内部から体育館敷地への移動や、敷地内の移動はクレーンを移動させて、何度か釣りながら少しづつ移動させた。この時点では造構全体をウレタンで梱包しただけであり、将来の展示にむけてどのような処理の方法を採用するのかは未定であった。取り上げられた木製枠工は、約4年間体育館の敷地内に仮置きをした。

1997年に入って、仮置場の近くでもダム化工事が始まり、またダム資料館の建築も開始されたこともあり、本格的な保存工事を開始した。保存処理の方法については、基本的にはPEG水溶液によつて保存をはかるものの、木製枠工は高さ2m以上もあり、それを含浸させるプールを作ることは不可

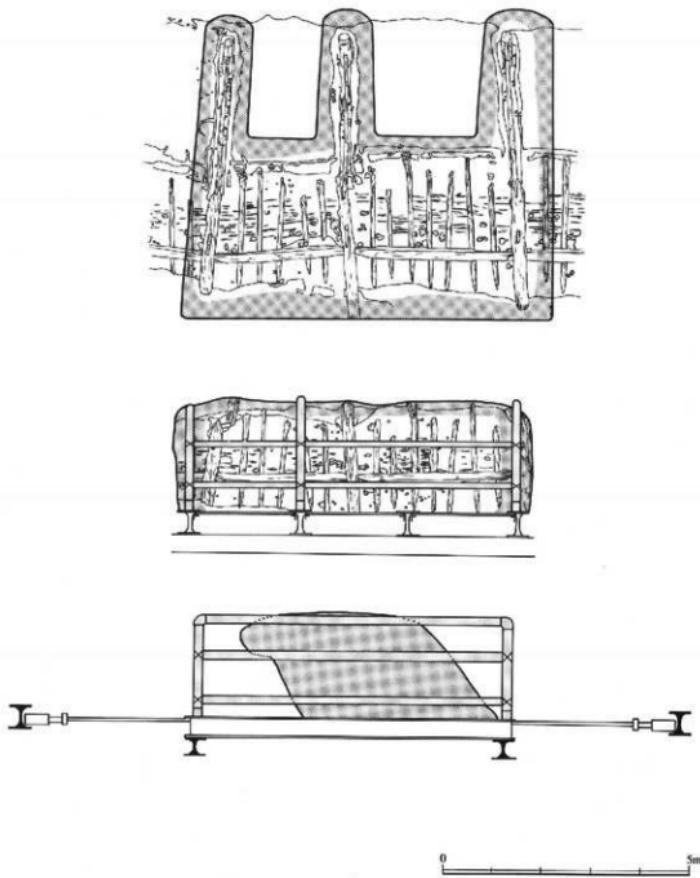


図281 木製枠工ウレタン梱包状況（スクリートーン部分がウレタン）

能であるうえ、木や土や竹を一體として保存する必要があるために、シャワー方式による含浸を行うこととなつた。ベタ基礎の上に鉄板で深さ20cmの浅いプールを作り、その上に遺構を設置し、全体をテントに入れた上で、遺構の上方や側面にパイプを設置し、ノズルによってシャワー状に液を散布する方法である。この方法によれば漬け込むことによる、土の大規模な溶解や崩壊は防げるものの、流水が発生するために土が液中に溶けだすことが予想される。そこでプールの横には濾過装置を設置し、液を濾過した上でポンプによって循環させるシステムを採用した。PEG水溶液の濃度は当初39%で開始し、徐々に濃度をあげて最終的には45%となつた。

含浸施設の基礎およびプールを作り、その上にウレタンで梱包した遺構をクレーンで吊って移動したが、その際の重量は26トンであった。その後ウレタンを人力除去したが、やはり取り上げ後4年近い年月を経ていることもあり、前面の一部で直径約1m、深さは最大で25cmほどの大きなへこみがみられた。その影響を受けて横方向の梁材も下方にずり落ちていた。このへこみの原因は乾燥による土の収縮であると考えられる。しかしそれ以外は、遺構はほぼ発掘当初の姿を保っていた。そこでへこみの部分によく似た土を池内で探して入れ、また各所にみられたクラックについてもそれ以上広がることを避けるために土を詰め込んだ。またPEG水溶液を散布すると遺構の土の強度が落ちて、遺構全体が前方に滑りだすのを防ぐために前方の鉄板の上にモルタルを混ぜた改良土を張りつけて、遺構の滑りを防いだ。土自体が多少下方向に流れだすことは当初より予想していた。また大規模な崩壊を防ぐためには土を外側から力を加えて押さえる必要があった。そのため土の表面に不織布、メッシュ材、クッション材を順に敷設し、そのうえに鉄のアングルを載せた。アングルは横方向の材によって押さえる方法を探った。この緩衝材の選定や、敷設する順番、量などは現地で何度も実験をし、土の表面にある程度PEG水溶液が留まり、しかも激しく流れないということを目的として決定した。シャワー散布は1997年の7月より開始し、1998年の3月初旬で終わった。これは遺構を資料館内部に搬入する日程が、資料館の建築工程との関係で決定しており、それに向けて一定の乾燥期間を確保する必要があったからである。乾燥のために表面のアングルをはずし、緩衝材を撤去したが、ただ土の壁が自立している状態の両側面については急速に乾燥することによってクラックが入ることを恐れてアングル材を外さなかった。約1ヶ月の乾燥によって、材木は相当に強度が生じ、また土も表面は固化した状態となつた。1998年の4月には資料館への搬入時期も迫つたために、再度全体をウレタン樹脂で梱包し、館内に搬入する予定である。資料館の工事が完成した後、遺構の表面部分のウレタン樹脂は再び撤去され、乾燥および展示に向けた遺構表面の仕上げの作業をすることとなる。

また木製桟工のうち、ウレタン梱包をして取り上げた以外の部分については、同じ敷地内において鉄の水槽にPEG水溶液を入れ、そこに漬け込んで保存処理を行つた。PEG水溶液は濃度39%で、



写真104 木製桟工の吊り上げ作業

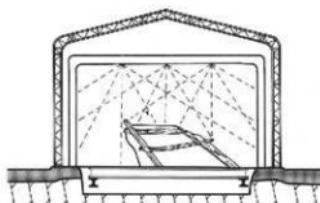


図282 木製護岸 PEG液散布状況

1994年4月から含浸を開始し、1997年6月までの約3年間含浸処理を行った。その後現在にいたるまで大阪狭山市立総合体育館駐車場に建てた倉庫において乾燥処理を行っている。

### 3 中樋遺構本体等

中樋遺構の調査は1993年10月より開始し、翌年3月に終了した。調査終了後、石棺や重源狭山池改修などを取り上げ、ついで樋本体など木材部分の取り上げ作業を実施した。樋本体については樋管および上部構造を解体せずそのままクレーンで吊り上げ、鉄製水槽に入れPEG水溶液によって含浸処理を行った。また両側の扁板、それをとめる杭などについては取り上げ時に1点ずつばらばらに取り上げ同じ水槽に入れた。水槽には屋根をかけたものの、野外での処理であったためにPEG水溶液の濃度は39%とした。処理用水槽は当初狭山池の南側に設置していたが、工事の関係で池の西側に移動した。含浸処理は1994年3月に開始し、1998年3月現在でも実施している。今後資料館への搬入時期を考慮に入れながら、資料館周辺において乾燥処理の過程に移る予定である。

### 4 中樋遺構出土石棺

中樋遺構からは計10点の家形石棺が出土している。これらについては現地よりクレーンによって取り上げ、石材の専門業者によって上台に載せて移動し、大阪狭山市立郷土資料館の駐車場敷地内に屋根をかぶせた状態で仮置した。しかしながら石棺のうち1点のみは内面に朱を施しており、また非常に石が柔らかく痛みやすい状態(二上山牡丹洞付近産凝灰岩)であったため、業者に委託して樹脂による強化処理を実施した。エポキシ樹脂を人力によって塗布し、その後 石棺を真空タンクの中にいれて気圧を下げ、石棺内の水分を飛ばし、代わりに樹脂の浸透をはかるという作業を3回実施した。この作業は1994年度に実施している。

### 5 中樋遺構出土重源狭山池改修碑

中樋遺構より出土した重源改修碑は和泉砂岩製で非常に剥離しやすくまたすでに剥離した痕跡もあったので、取り上げ作業直後に業者に委託し樹脂による保存処理を実施した。処理方法は先の石棺とはほぼ同じであるが、樹脂はエポキシ樹脂を使用した。この処理は1994年度に実施している。

### 6 東樋遺構

東樋遺構は上下2本の樋管からなるが、ともに全長約70mという長大なものであった。下層遺構は木材を組み合わせてとめてあるだけの構造で、複雑な部分でもぞ穴にもう一方の材を差し込みくさびで固定したものであるために解体は容易であった。番号を付して取り上げ作業を実施した。これに対して上層遺構は釘を打って固定しており、左右の側板も切れ目の場所が異なっており、たとえ釘を抜いても解体は困難な状況であった。そこで墨書きや釘のない場所を選んで10m程度の長さで切断した。鋸による目減りはそれぞれ2mm程度であった。解体あるいは切断によって上下とも移動可能な状態となつたが、運搬・保存時の補強のために遺構のまわりに角材で枠を作り、吊り上げ作業はその枠にロープをかけて実施した。遺構はその規模があ



写真105 東樋遺構のプールへの搬入

よりに大きかったために業者委託は不可能であり、場内にプールを作り、そこでPEG水溶液による含浸処理を行うこととした。処理場所は狭山池の南側で、プールの規模は6m×60m、深さは1mという大きなものとなった。このプールの中にまず遺構を固定して、その後に深さが90cmになるまで39%PEG水溶液を満たした。浮力を押さるためにプールの上面にはH鋼を横方向にはり、遺構の浮上を押された。またPEG水溶液の腐敗や滴出を防止するためにポンプをプールの端に設置して液を循環させた。このプールの上にはビニール製のテントをはって雨水などの侵入を押さえた。遺物が巨大であり、保存に必要なPEG水溶液の量も膨大だったので、保存処理は中樋遺構同様常温で実施せざるを得なかった。含浸処理は1995年の6月より開始し1999年1月ごろまで実施する予定である。その後資料館への搬入時期を考慮しながら乾燥処理作業に移ることとなる。

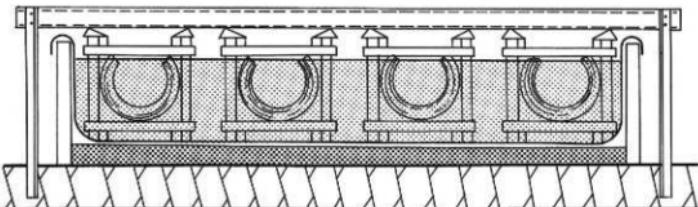


図283 東樋遺構含浸状況

## 7 西樋遺構

西樋遺構は1993年にその存在を確認し、翌1994年に本格的な発掘調査を実施した。調査終了後、解体して遺構を構成していた木材を取り上げ、実測や写真撮影などの作業を実施し、翌1995年6月に東樋と同じプールに入れ、PEG水溶液による含浸処理を開始した。条件などはまったく東樋遺構と同様である。

## 8 西樋遺構出土鉄製品

西樋遺構からは多くの鉄釘・カスガイなどが出土しているが、そのうち残存状況の良好なもの30点は、1996年に姫大阪府文化財調査研究センターに委託して保存処理を実施している。処理方法は最初にX線検査によって劣化状況を把握したのち、クリーニング作業を行い、アクリル樹脂(パラロイドNAD-10)による含浸補強処理を実施した。最後に防錆処理を実施している。

## 9 北堤敷葉工法

北堤の断面については大阪府の堤体保存工事に伴って断面調査を実施し、平面的な調査は実施しなかったが、掘削の過程で第10層の敷葉が多くみられた部分において遺構を切り取りウレタン樹脂で梱包して取り上げ作業を実施した。取り上げ後、敷葉を平面的に見せるために籠壇式に掘削、整形をおこない、その後PEG水溶液を塗布し、再びウレタンで梱包、上下逆にして裏面を籠型状に掘削した。これは処理する土の量を最小限にするための措置である。裏面の掘削した部分にもウレタンを吹き付けて間隙を充填し、再び上下を反転して元の位置に戻した。この状態で数年間放置しておりたが、ダム資料館の展示計画も固まってきたので、1998年に再びPEG水溶液の塗布および乾燥処理を行う予定である。

## 10 小 結

以上述べてきたように狭山池からは多くの貴重な遺物、遺構が出土しており、狭山池調査事務所はその保存処理にも全力をあげて取り組んできた。これらの遺物、遺構は処理完了後、(仮称)狭山池ダム資料館内に展示される予定である。



# 第3章 考 察

## 第1節 池尻遺跡(2)における花粉分析

川崎地質株式会社 担当者 渡邊 正巳

### 1はじめに

池尻遺跡(2)は、狹山池(大阪府大阪狭山市)の北側に位置する遺跡である。今回の調査区では、狹山池の堤体を利用した古墳時代の窓跡(灰原)や、畦畔造構などが検出されている。今回の花粉分析調査は、畦畔造構での栽培植物の推定や、同時代の狹山池周辺の自然環境の推定などを目的として、川崎地質株式会社が狹山池調査事務所の委託を受けて実施したものである。

### 2試料について

分析試料は、図284に示す2地点で採取した。それぞれの地点での試料採取基準は、図285、286の花粉ダイアグラムに示す。No.1地点試料 No.5, 6、No.2地点試料 No.1, 2, 3の採取基準が、古墳時代の畦畔あるいは床上と推定できる基準である。

### 3花粉分析方法および分析結果

分析方法は渡邊(1995)に従った。また分析結果を図285、286の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは計数した木本花粉を基準にし、検出できた種類をすべて百分率によりスペクトルで表した。

### 4花粉分帶

花粉分析結果から以下のように花粉分帯を行った。

#### I带 (No.1 地点1~4)

マツ属(復総管束亞属)、アカガシ亜属が高い出現率を示すほか、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉の出現傾向から、ガマ属-ミクリ属が高い出現率を示すa亜帯(試料 No.1, 2)と、イネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示すb亜帯(試料 No.3, 4)に細分した。

#### II带 (No.1 地点5, 6、No.2 地点試料 No.1~5)

マツ属(復総管束亞属)が高い出現率を示すほか、アカガシ亜属を伴う。草本花粉では、I带に引き続きイネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示す。No.2地点試料 No.3ではアカガシ亜属がほとんど

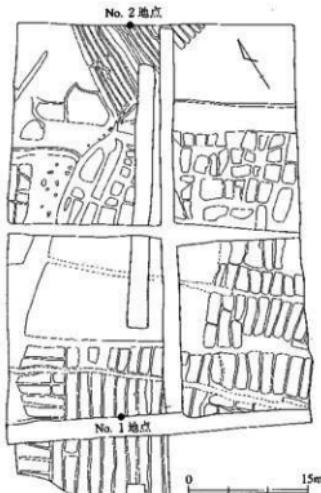


図 284 試料採取地点

出現しないこと、No.1 地点試料 No.5,6 と No.2 地点試料 No.1,2 が同層準であることから、II 帯を a 亜帯(No.1 地点 5,6, No.2 地点試料 No.1,2)、b 亜帯(No.2 地点試料 No.3)、c 亜帯(No.1 地点試料 No.4, 5)に細分した。

### III 帯 (No.1 地点試料 No.6)

マツ属(複維管束亞属)が高い出現率を示すほか、スギ属を作り。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)のほか、アブラナ科が高い出現率を示す。

## 5 堆積年代について

No.1 地点試料 No.5,6 層準、No.2 地点試料 No.1,2,3 層準は、出土遺物から古墳時代に堆積したと推定されている。

また I 帯の花粉組成は、マツ属(複維管束亞属)、アカガシ亞属が高い出現率を示すほか、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亞属を伴うなど、東北丘陵北部に位置する伏尾遺跡での古墳時代の花粉組成(川崎地質株式会社、1992)と類似し、古墳時代に堆積した可能性がある。

No.2 地点試料 No.6 層準は、出土遺物から室町時代以降に堆積したと推定されている。一方この層準の花粉組成は、マツ属(複維管束亞属)、スギ属、イネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科で特徴付けられ、伏尾遺跡での近代以降の花粉組成(川崎地質株式会社、1992)と類似する。したがって、この層準は室町時代から近代にかけて連続的に堆積した可能性もある。この場合、約 0.3mm/年(およそ 15cm の層厚をおよそ 500 年で堆積したと仮定)という堆積速度が推定できる。

## 6 古環境変換

### I 帯期(古墳時代)

今回調査の池尻遺跡(2)は、三方を泉北、富田林、河内長野丘陵(中世古・中川、1976)に囲まれ、さらに河内長野丘陵の背後には金剛、和泉山地が広がっている。今回の調査により検出された木本花粉化石の多くは、広くこれらの地域からもたらされたと考えられる。

花粉組成を植生の垂直分布に当てはめてみると、各丘陵あるいは山麓、山腹には、アカガシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またアカマツ(マツ属(複維管束亞属))には、アカマツ、クロマツ、およびこれらの雜種のアイグロマツがあるが、現在のマツ属の分布から、アカマツと推定できる。などを要素とする二次林が分布していた可能性もある。一方金剛、和泉山地の山腹から山頂には、アカマツ、モミ、ツガ(モミ属、ツガ属)には亜寒帯要素の種も存在するが、現在の調査地周辺の地理環境および分布状況から、中間温帯林要素のモミ、ツガと推定した。コウヤマキ、スギ(コウヤマキ属、スギ属は本邦産現生種では一属一種であることから、コウヤマキ、スギと推定した。)などを要素とする中間温帯林が、山頂にはブナ(イヌブナの可能性もあるが、現在の分布域からブナと推定した。)、ミズナラ、カシワ(ここでのコナラ亜属には、二次林要素のコナラ、クヌギ、アベマキなどの可能性もある。)などを要素とする冷温帯林が分布していたと考えられる。

また a 亜帯期では、遺跡内にガマ属-ミクリ属などが繁茂する湿地あるいは沼が広がっていた可能性がある。さらに b 亜帯期では、遺跡内で稲作が行われ、ソバやマメ(ソラマメ属類似が検出できた。畑作跡でこのタイプがしばしば出現し、自然堆積物ではほとんど見られないことから栽培に由来すると考えた。)の栽培も行われていたと考えられる。

### II 帯期(古墳時代)

b 亜帯でのアカガシ亜属の減少、試料 No.3,4 でのマツ属(複維管束亞属)の増加が、植生の変化によ

図 285 No. 1 地点の花粉ダイアグラム

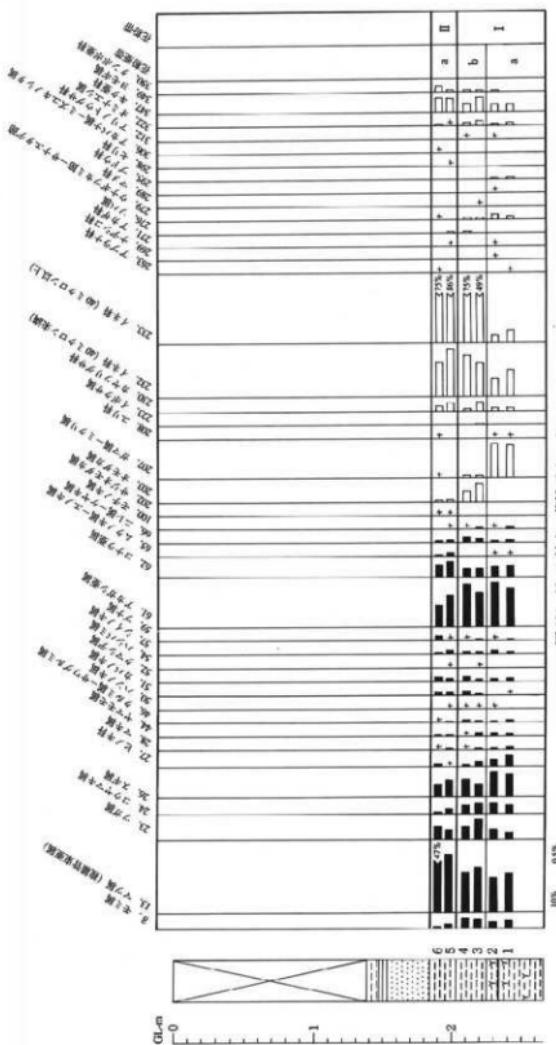
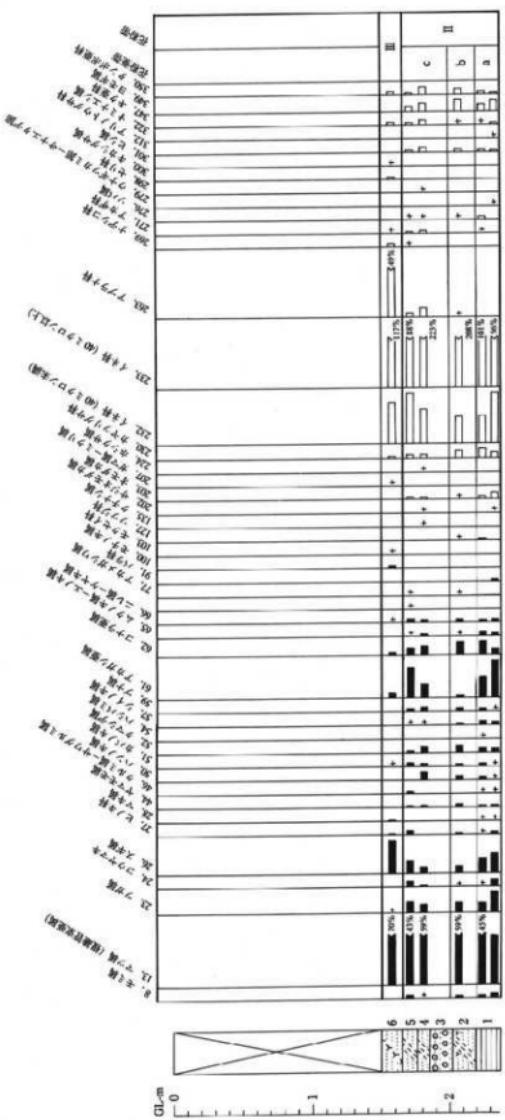


図286 No.2地点の花粉ダイアグラム



るものか、堆積状況の変化によるものか、今回の結果からは判断できなかった。このことは、今後の遺跡内でのデータの蓄積、および花粉帯の詳細な時期決定、他地域との比較などにより明らかになる。

各丘陵あるいは山麓、山腹の照葉樹林は分布を縮小し、アカマツを要素とする二次林が分布を拡大したと考えられる。一方金剛、和泉山地の山腹から山頂では大きな変化ではなく、アカマツ、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギなどを要素とする中間温帶林が、山頂にはブナ、ミズナラ、カシワを要素とする冷温帶林が分布していたと考えられる。

遺跡内では稲作が行われていたと考えられる。また畦畔の遺構と直接結びつくもの(畑作作物)として、ソバの栽培が推定できる。

### Ⅲ帶期(室町時代以降、近代以降?)

各丘陵あるいは山麓、山腹には、アカマツを要素とする二次林が広く分布していたと考えられる。また金剛、和泉山地の山腹には現在見られるようなスギの植林が行われていたと考えられる。Ⅲ帶で高率となるアブラナ科花粉は、藤田ほか(1991)の条件を満たすことから、栽培に由来すると考えられる。したがって遺跡内では、稲作や、アブラナの栽培が行われていたと考えられる。

## 7まとめ

今回の調査から以下の事が明らかになった。

- (1)花粉帯としてⅠ～Ⅲ帯を設定した。さらにⅠ帯をa、b亜帯、Ⅱ帯をa～c亜帯に細分した。
- (2)花粉組成から、Ⅰ帯が古墳時代の植生を表すと推定できた。
- (3)古墳時代以降の植生変遷が推定できた。
- (4)出土した畦畔の遺構からは、ソバ属、イネ科(40ミクロン以上)の花粉が検出され、ソバ栽培や稲作が行われていたと推定できる。

## 参考文献

- ①川崎地質株式会社「第2節伏尾遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析 陶邑・伏尾遺跡ⅡA地区」(『大阪府埋蔵文化財協会調査報告書No.72』75-89 1992)
- ②中世古幸次郎・中川要之助「地形分類図」(『縮尺10万分の1土地分類図大阪府』国土庁土地局 1976)
- ③藤田憲司・古谷正和・渡邊正巳、「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」(『日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨』33-34 1991)
- ④渡邊正巳(1995)「40・花粉分析方法」(『考古学ライブラリー65考古資料分析方法』84-85 ニュー・サイエンス社 1995)

## 第2節 池尻遺跡(1)・狹山池ボーリングの珪藻・花粉分析

川崎地質株式会社 担当者 渡邊 正巳

### 1はじめに

狹山池は大阪府中部に位置する大阪狭山市に位置する。また池尻遺跡(1)は狹山池堤下流部に位置する遺跡である。今回の報告では、発掘調査に伴って露出した地層より採取した試料と、狹山池内のボーリング試料を対象として珪藻分析・花粉分析を行い、狹山池周辺の古環境復元などを行った。

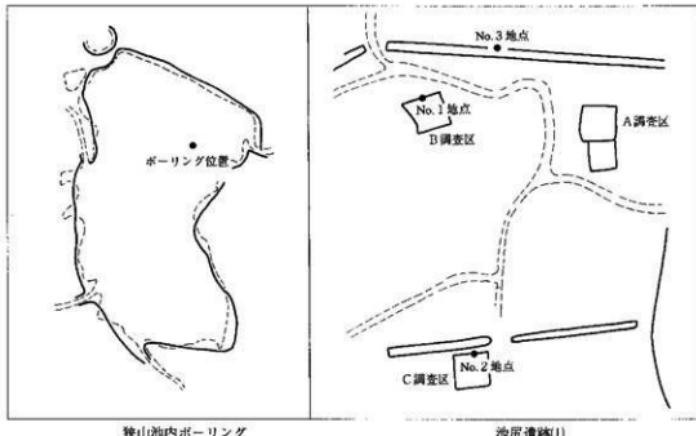


図287 試料採取位置図

### 2 試料について

今回分析した試料のうち池尻遺跡(1)の3地点(図287)22試料については、川崎地質株式会社が採取を行った。池内ボーリングの試料は西田(1992)に示されたNo.2地点のもので、採取後細分された試料から川崎地質株式会社が分取した。それぞれの地点の柱状図および試料採取層準は図2~10のダイアグラムに示す通りである。

### 3 分析方法

珪藻分析、花粉分析は、それぞれ渡辺(1995a・1995b)に従い行った。

### 4 分析結果

#### (1)珪藻分析結果

分析結果を図288~295の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムは計数した珪藻化石の総数を基數にし、百分率で表した。珪藻含有量が少なく、珪藻検出数が50に満たなかった試料については、検出できた花粉化石の種類のみを示す。

## (2)花粉分析結果

分析結果を図296の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基準にし、百分率で表した。花粉含有量が少なく、木本花粉検出数が100に満たなかった試料については、検出できた花粉化石の種類のみを示す。

## 5 考 察

### ①珪藻分帶

No. 1, 2 地点では珪藻化石の検出量が少なかったため、珪藻分帶を行わなかった。No. 3, 4 地点(ボーリング No. 2)について、珪藻分析結果をもとに珪藻分帶を行った。

#### No. 3 地点

##### ◎ 3-I 帯 (試料 No. 12)

海産～汽水産種の *Coscinodiscus spp.*, *Cyclotella stylorum*, *Thalassiosira bramputrae* などで全体の50%を占める。淡水種では *Stephanodiscus astraea* などの浮遊性種が淡水種の50%以上を占める。

##### ◎ 3-II 帯 (試料 No. 11)

海産～汽水産種はほとんど検出されず、淡水・底生種の *Cymbella aspera*, *Eunotia pectinalis*, *Gomphonema parvulum*, *Pinnularia* 属、*Stauroneis phoenicenteron* などではほぼ100%を占める。

##### ◎ 3-III 帯 (試料 No. 10)

*Cyclotella stylorum*, *Thalassiosira spp.*, *Coscinodiscus spp.* などの海産～汽水産種が全体の30%程度を占める。淡水種では *Gomphonema gracile*, *Cymbella aspera*, *Pinnularia spp.* などのなどの底生種で淡水種の80%程度を占める。

##### ◎ 3-IV 帯 (試料 No. 9)

海産～汽水産種はほとんど検出されず、淡水・底生種の *Pinnularia gibba*, *Cymbella* 属、*Eunotia pectinalis*, *Gomphonema* 属、*Stauroneis phoenicenteron* などで全体のはば100%を占める。

##### ◎ 3-V 帯 (試料 No. 8, 7)

*Nitzschia cocconeiformis* などの海産～汽水産種が全体の10～15%程度を占める。淡水種では、*Cymbella aspera*, *Cymbella cuspidata*, *Pinnularia viridis*, *Stauroneis phoenicenteron* などの底生種で淡水種の100%近くを占める。

##### ◎ 3-VI 帯 (試料 No. 6～3)

検出量が少ないが、淡水・底生の *Cymbella* 属、*Pinnularia* 属などが検出される。

##### ◎ 3-VII 帯 (試料 No. 2)

海産～汽水産種は全体の10%未満であり、淡水種では *Cymbella cuspidata*, *Neidium cuspidata*, *Pinnularia* 属、*Stauroneis* 属などの底生種が淡水種の80%程度を占める。

##### ◎ 3-VIII 帯 (試料 No. 1)

検出量が少ないが、汽水産種の *Nitzschia cocconeiformis* や、淡水・底生種の *Cymbella cuspidata* などが検出される。

#### No. 4 地点(ボーリング No. 2)

##### ◎ 4-I 帯 (試料 No. 6)

検出量が少ないが、淡水種が全体の100%を占める。*Achnanthes inflata* などの底生種や、*Eunotia pappaeerupta*, *Hantzschia amphioxys* などの陸生種で、淡水種のはば100%を占める。

##### ◎ 4-II 帯 (試料 No. 4, 3)

*Coscinodiscus spp.*, *Thalassiosira spp.*, *Thalassiosira bramaputrae*, *Cyclotella stylorum*などの海産～汽水産種が全体の50%～20%程度検出される。淡水種では *Stephanodiscus astraea*, *Melosira* 属, *Surirella* 属などの浮遊種が淡水種の80%～50%程度を占める。

◎ 4—I带 (試料 No. 2)

海産～汽水産種はほとんど検出されず、淡水種が全体のはば100%を占める。淡水種では *Stauroneis phoenicenteron*, *Neidium iridis*, *Pinnularia viridis*などの底生種が90%程度を占める。

◎ 4—IV带 (試料 No. 1)

海産～汽水産種はほとんど検出されず、淡水種が全体のはば100%を占める。淡水種では *Gyrosigma spp.*, *Cymbella tumida*, *Nitzschia tryblionella*などの底生種が75%を占める。

②花粉分帶

花粉分析結果をもとに花粉分帶を行った。

◎ P—I带 (試料 No. 6, 5)

検出された花粉の量は少ないが、カラマツ属、トウヒ属、マツ属(単維管束亞属)など、上位の試料

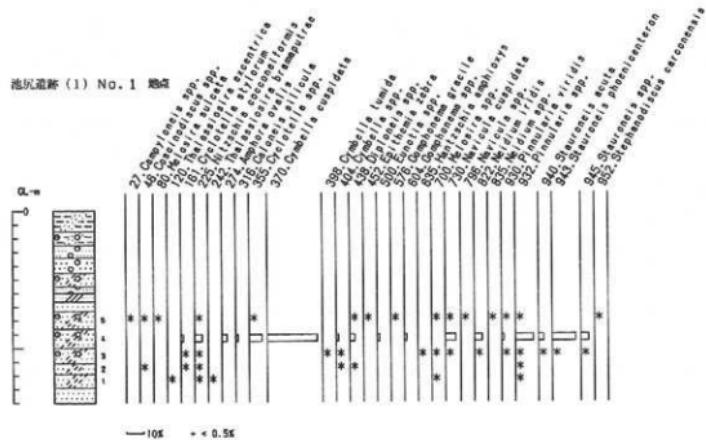


図 288 池尻遺跡(1)No. 1 地点の珪藻ダイアグラム

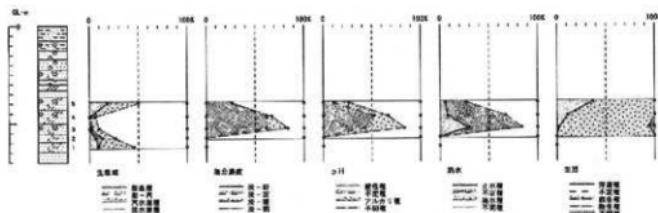


図 289 池尻遺跡(1)No. 1 地点の珪藻総合ダイアグラム

No. 4~1とは異なる種類が検出される。

◎ P-I 带 (試料 No. 4, 3)

マツ属(複維管束亜属)が優占し、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

◎ P-II 带 (試料 No. 2, 1)

マツ属(複維管束亜属)が優占し、スギ属を伴う。

③堆積環境

珪藻分析結果および珪藻分带をもとに、1~3地点での堆積環境を推定した。No. 4地点については「④環境変遷」で花粉分析結果および花粉分带を踏まえて述べる。

(No. 1 地点)

全ての試料から海産~汽水産種が検出されるが、試料の採取状況から海での堆積であるとは考えられない。このことから、これらの珪藻化石は再堆積による二次化石であると考えられる。全ての試料で、*Cymbella cuspidata*などの底生種が優占することから、浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

(No. 2 地点)

No. 1 地点同様、海産~汽水産種が検出される。特に試料 No. 3 では海産~汽水産種の検出率が高いが、試料の採取状況から海での堆積であるとは考えられない。このことから、これらの珪藻化石は再堆積による二次化石であると考えられる。試料 No. 3 では淡水種の浮遊種が優占し、やや水深のある環境が考えられる。しかし後述の

ように浮遊種の検出量と海産~汽水産種の検出量の関係から、浮遊種にも二次化石の可能性がある。  
試料 No. 5 では底生種が優占し、浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

(No. 3 地点)

3-I、III、IV 帯では、海産~汽水産種が優占する傾向にある。  
しかし、No. 1, 2 地点同様に、試料の採取状況から海域での堆積であるとは考えられない。また海産~汽水産種が優占する試料では、淡水の中で浮遊種が優占する傾向

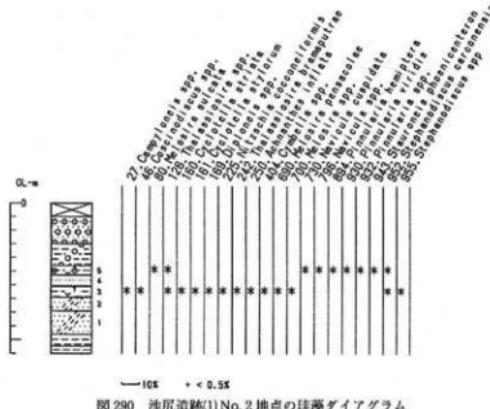


図 290 池尻遺跡(I) No. 2 地点の珪藻ダイアグラム

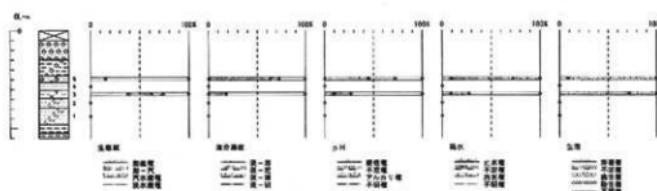


図 291 池尻遺跡(I) No. 2 地点の珪藻総合ダイアグラム



図292 池尻沼跡(1)No.3地点の柱面ダイアグラム

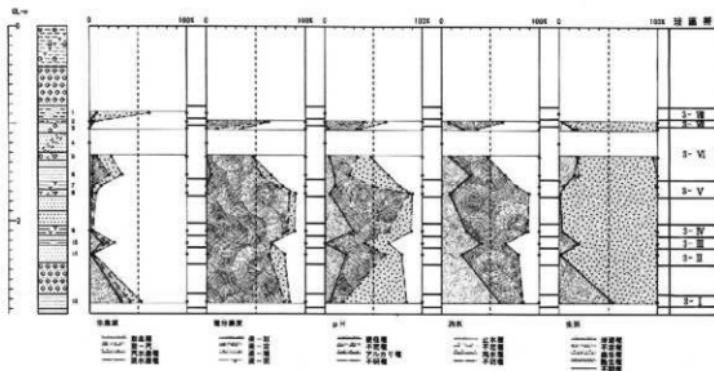


図293 池尻遺跡(1)No.3地点の珪藻総合ダイアグラム

がある。このことは他の3地点にも当てはまり、海産～汽水産種と同様に浮遊種にも二次堆積の可能性がある。

#### ◎3-I带 (試料No.12)

海産～汽水産種で全体の50%以上を占める。また浮遊種が淡水種の50%以上を占める。これらには前述のように二次化石の可能性がある。検出された淡水種の珪藻化石を一次的なものと考えると比較的浅い池・沼であったと推定できる。

#### ◎3-II带 (試料No.11)

*Cymbella aspera*, *Eunotia pectinalis*, *Gomphonema parvulum*, *Pinnularia*属, *Stauroneis phoenicerteron*など淡水・底生種が全体のはば100%を占めることから、浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

#### ◎3-III～VII带 (試料No.10～1)

3-III、V、VII帶では二次堆積と考えられる海産～汽水産種が全体の15%以上を占める。しかし、*Gomphonema*属、*Cymbella*属、*Pinnularia*属などの底生種で淡水種の80%以上を占めている。また3-IV、VI、VII帶では海産～汽水産種は10%以下の出現率であり、*Pinnularia*属、*Cymbella*属、*Eunotia*属、*Gomphonema*属、*Stauroneis*属などの底生種で淡水種のほとんどを占めている。これらのことから、III～VII帶は浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

#### ④環境変遷

No.4地点(ボーリングNo.2)について、珪藻・花粉分析結果から古環境を推定する。

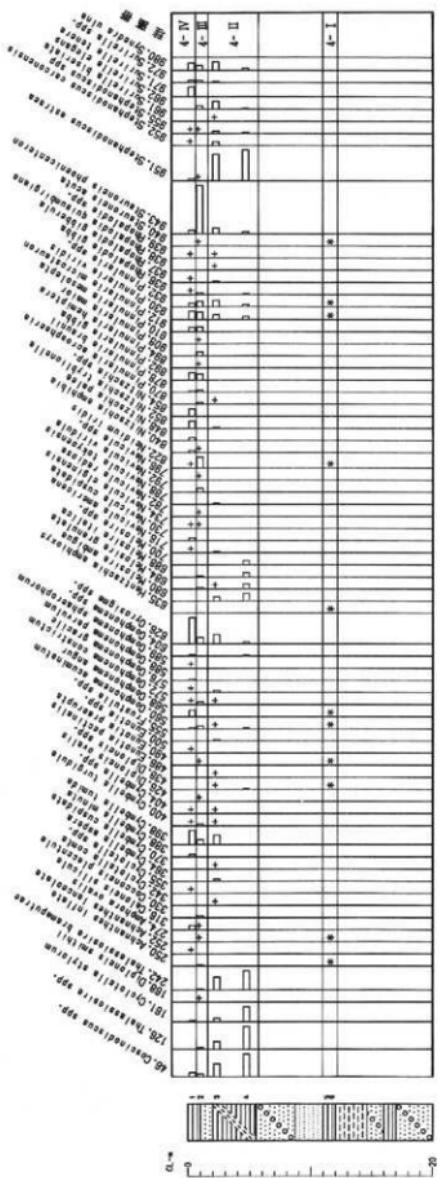
#### ◎P-I带 (4-I带: 試料No.6, 5)

試料No.6では珪藻化石の検出量が少なかったが、淡水・底生種や、淡水・陸生種が比較的多く検出される。したがって、湿地あるいは周辺に湿地の広がる浅い沼での堆積が推定できる。花粉化石の検出料量も少なかったが、カラマツ属、トウヒ属、マツ属(単維管束葉属)など、亜寒帯林の構成要素と考えられる種類が検出された。これらのことから、試料No.6, 5層準の粘土層は現在より寒冷な時期に堆積したと推定できる。しかし連続した試料が得られなかつたために、P-I带が対応する年代は判断できなかった。

#### ◎P-II带 (4-III带: 試料No.4, 3)

多くの珪藻化石が検出量されたが、海産～汽水産種および、淡水・浮遊種で全体の50%以上の出現

図294 狹山池ボーリングNo.2の土壤ダイアグラム



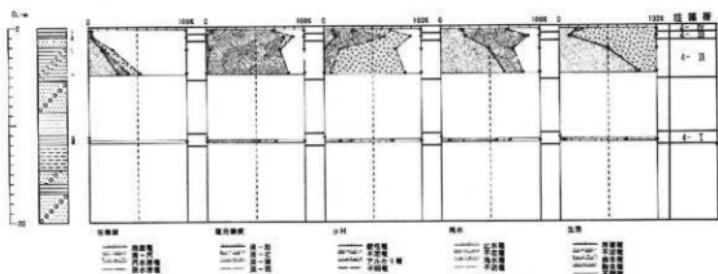


図 295 狹山池ボーリング No. 2 の珪藻総合ダイアグラム

率を占める。したがって、前途のように検出された珪藻化石のはほとんどが二次化石である可能性がある。検出された淡水種の珪藻化石を一次的なものと考えると、比較的浅い池・湖であったと推定でき、狹山池の堆積物の可能性がある。花粉化石ではマツ属(複維管束亞属)が優占し、ツガ属、スギ属、アカガシ亞属、コナラ亞属を伴うなど、古谷(1979)のF6带に対比される。またF6带はおよそ5世紀以降の植生を表すと考えられている(古谷、1979)。また、上部の試料No. 3からはワタ属の花粉が検出されている。ワタは外来種であり、近畿地方で連続的に栽培されたのは戦国時代(1500年頃)以降と考えられる(武部、1981)。ことから、本帶上部は16世紀以降の堆積であると考えられる。この時期の遺跡周辺の丘陵や山麓はマツ属(複維管束亞属)を要素とする二次林に広く被われており、山腹にはツガ属、スギ属、コナラ亞属を要素とする中間温帯林や二次林が分布していたと考えられる。また近くの平地では、ワタやイネ(あるいはコムギなど)が栽培されていたと考えられる。

#### ◎ P—I带 (試料 No. 2, 1)

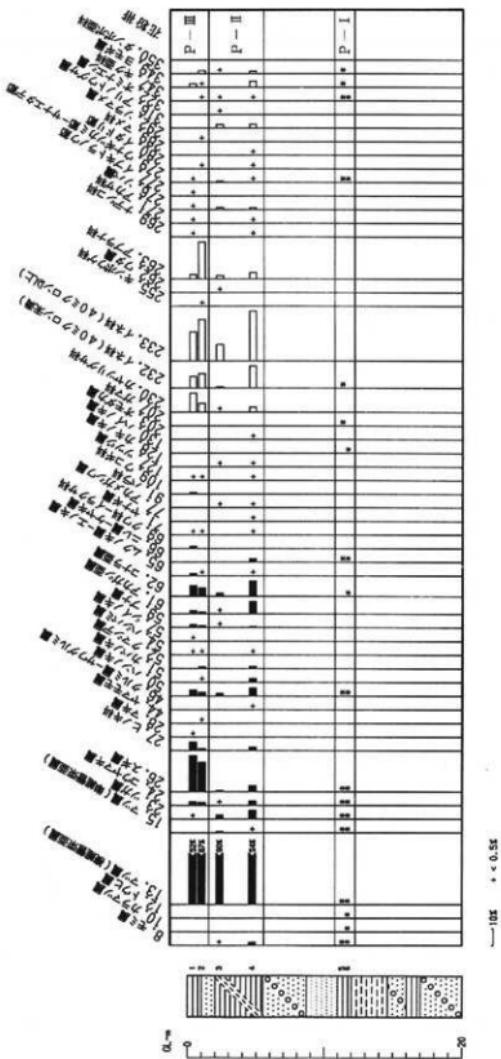
多くの珪藻化石が検出され、淡水種がほぼ100%を占めた。底生種が淡水種の70%以上を占め、浅い沼や湿地での堆積が推定される。また酸性種が増加し、アルカリ種が減少することから、前帶に比べ腐植栄養型あるいは酸栄養型の水域に変化して行ったと推定される。花粉化石では、P—I带に比べマツ属(複維管束亞属)が減少し、スギ属が増加する。この変化は大阪府内各地で報告されており、近代以降、あるいは現代の植生を表していると考えられている。遺跡周辺の丘陵や山麓はマツ属(複維管束亞属)を要素とする二次林で被われ、スギの植林も山麓から山腹には広がっていたと考えられる。また近くの平地ではソバや、イネ(あるいはコムギなど)、アブラナなどが栽培されていたと考えられる(アブラナ科=アブラナは藤田ほか(1991)による)。

## 6まとめ

今回行った珪藻分析・花粉分析から以下のことが明らかになった。特に狹山池周辺の環境変化を推定するためには、池内部でのボーリング試料を対象とした花粉分析が有効であることが、No. 4地点の分析から明らかになった。

- (1)珪藻分析結果からNo. 3地点では3—I~Ⅴの8珪藻帶に、No. 4地点では4—I~Ⅳの4珪藻帶に分帶できた。
- (2)花粉分析結果からNo. 4地点ではP—I~Ⅲの3花粉帶に分帶できた。
- (3)No. 1, 2地点での堆積環境、No. 3地点での堆積環境変遷が推定できた。
- (4)No. 4地点での環境変遷が推定できた。

図296 狹山池ボーリング No.2の花粉ダイアグラム



- (5)No. 4 地点試料 No. 5、6 層準は氷期の堆積物であると考えられたが、年代は推定できなかった。
- (6)No. 4 地点 P-I 帯の内、下部の試料 No. 3 の層準は 5 世紀以降、上部の試料 No. 4 の層準は 16 世紀以降の堆積であると推定できた。
- (7)No. 4 地点試料 No. 1、2 の層準は近代以降の堆積であると推定できた。

#### 参考文献

- ①古谷正和 「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」(『第四紀研究』181 21-141 1979)
- ②藤田憲司・古谷正和・渡邊正巳 「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」(『日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集』33、34 1991)
- ③中村 純 「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*を中心として」(『第4紀研究』13 187-197 1974)
- ④西川一彦 「狭山池内堆積土の物理・力学的性質」(『狭山池調査事務所平成3年度調査報告書』72-84 1992)
- ⑤武部善人 『河内木綿史』p. 275、吉川弘文館 1981
- ⑥渡邊正巳 「40・珪藻分析方法」(『考古学ライブライアリ-65 考古資料分析方法』86-87 ニューサイエンス社 1995a)
- ⑦渡邊正巳 「40・花粉分析方法」(『考古学ライブライアリ-65 考古資料分析方法』84-85 ニューサイエンス社 1995b)

### 第3節 狹山池出土木樋の年輪年代

奈良国立文化財研究所 埼藏文化財センター  
発掘技術研究室長 光 谷 拓 実

#### 1はじめに

大阪府大阪狭山市にある狭山池は、日本最古の溜池である。狭山池の名は「古事記」や「日本書紀」にも登場し、その築造は五世紀ごろのこととされてきた。狭山池は東西の段丘の間を流れる旧大野川を塞き止め溜池としていたもので、堤の長さは500m、高さ15mの巨大なものである。狭山池は、築造後幾度となく災害にあい、その都度大改修がおこなわれてきた。なかでも奈良時代の名僧行基によっておこなわれた改修はもっとも有名である。平成元年以降、実施されてきたダム化工事に伴って、狭山池調査事務所が本格的な発掘調査をおこなった結果、多くの新事実が明らかになった。狭山池の発掘調査では、北堤付近において中樋造構、西樋造構、東樋造構の3つの樋の造構が検出された。中樋造構では、大正時代まで使用されていた尺八樋の最下段が出土した。これは慶長13年(1608)に片桐且元が改修した際に設置されたものである。西樋造構は、中樋同様に慶長の改修の際に設置されたものであり、構造船の廃材が大量に転用されていた。東樋造構は、もっとも東で発見された造構で長さ70m以上の樋が上2層になってそのまま残っていた。下層の樋は築造当初のもの、上層の樋はやはり慶長の改修で設置されたものである。

- 上記3つの樋のうち、東樋と中樋に使われていた部材の年輪年代法による年代測定をおこなったので以下にその概略について報告する。

#### 2 東樋造構

東樋下層の樋管は、コウヤマキの丸太材直径60cmの内側をU字状にくり貫いたもので、総数9本の樋管を連続していた。東樋下層造構の池側取水部においては築造当初の樋の先端部を切断し、補修がおこなわれていた。年代測定用の試料はコウヤマキの樋管のなかで一部に未加工部分が残っていたものが5本あり、それぞれ直径5mmの棒状標本を採取した。池側のヒノキの補修材からは辺材部が完存していたもの1点、辺材部が2.2cm普通、ヒノキの平均辺材幅は3cm残っていたもの1点を選定。総数7試料を採取した。これらの年輪年代は樋管5本の伐採年がいずれも616年(推古24)、補修材2点のうちの1点の年輪年代は726年と確定した。

以上をまとめると、下層の樋管には616年に伐採された木が使われていたことから、狭山池の築造は五世紀代ではなく七世紀代前半であることが確実となった。このことから、五世紀代の河内平野の大開発と結びつけてきた見方は、否定された。また池側の補修材の1点は、奈良時代大改修の際に使われた材とみてよからう。もう一点の伐採年からは、記録にはないが9世紀の前半にも改修のあったことが明らかになった。

一方、東樋上層造構は下層造構の直上にあって、おもにヒノキの厚い板材を箱形に組み合わせた構造となっていた。この樋の長さは73mあり、取水部、樋管、排水部ともすべて存在していた。年代測定用の試料は、ヒノキの蓋材のなかで辺材部が完成していたもの2点を選定した。これら2点の伐採年は、1554年、1600年と確定した。伐採年は異なっているが、いずれも慶長13年の改修の時に使われた材とみてよからう。ちなみに上下2層の年代差は約1000年、築造当初の樋本体が長年壊れること

なく機能していたことになり、当時の土木技術の水準の高さをうかがい知ることができる。

### 3 中樋造構

この造構では、護岸に伴う部材1点の年代測定をおこなった。材種はヒノキで辺材部は全く残っていなかった。この年輪年代は1566年と確定、これに削除された年輪層数を加算することを考えると、これまた慶長13年(1608)の時の改修材とみてよからう。

## 第4節 TK217型式の類型化および他型式との相対評価

—狭山池1号窯およびその近辺の窯跡資料を中心に—

狭山池調査事務所 植田隆司

### 1はじめに

本節では、狭山池およびその近辺における一連の須恵器窯跡発掘調査で出土した須恵器について考察を行う。特に出土した須恵器の器種の中でも多くの数量を占める蓋杯の身の形態および法量の計測データを、陶邑窯跡群中の標式とされる窯跡資料と比較検討することで、それぞれの窯跡資料の陶邑須恵器編年における有川性を確認したい。

ここで取り上げる資料は、狭山池1号窯[SI1]・狭山池2号窯[SI2]・狭山池3号窯[SI3]・狭山池4号窯[SI4]・東池尻1号窯[HII]の各窯から出土した須恵器である。従来の概略的な編年観をもって各資料の型式を述べると、狭山池2号窯・狭山池3号窯はTK43型式～TK209型式、狭山池1号窯・狭山池4号窯・東池尻1号窯はTK209型式～TK217型式という幅の中におさまる。

ただし、ここで問題となるのは、須恵器型式に対して研究者が各自設定している概念的な判断基準の妥当性についてである。特に古墳時代後期においては、他の器種から得られる編年観も存在するとはいえ、やはり多くの研究者が須恵器編年の基軸としているのは杯であろう。杯の個体情報のうちで特に重視されてきたのは、杯Hの場合、杯身のたちあがりと法量に関するデータである。たとえば1個体の杯Hに対して、TK10型式かTK43型式かTK209型式かTK217型式かを判断するとき、最重要視されるのはその個体の法量とたちあがり形状である。その個体に施されている調整の様子は、二次的な着目点として扱われているように思われる。各研究者が既定事項のように行っている峻別作業は、一見正確なもののようにみえる。この峻別作業は、編年基準とされている資料に従って、各々の研究者が個別に把握している各型式に対する概念的な形態が存在するゆえに可能となる。須恵器1個体をTK43型式かTK209型式かと判断するに際しては、この概念的な形態を基準に据えて観察すれば問題がない。しかし、その際に基準に据えられた概念的な形態は、編年基準とされている資料から得られていることを忘れてはならない。主に用いられている古墳時代の須恵器編年は、窯跡資料をもって作成されている。周知のとおり、一つの窯から出土する須恵器の同一器種には、個体間ににおいて形態・法量の差異が存在するの普通である。こうした個体間の差異には、順序的に先後関係を確認できるものとそうでないものとの両方が存在する。たとえば、窯体内の焼成床面ごとに出土した資料と灰原出土資料をクロスチェックして、灰原出土資料の型式学的分類を行う床式編年の事例が存在するならば、その窯跡資料に含まれる個体間の差異は層次的な先後関係を確認できるといえよう。ただし、こうした例を確認することはむつかしく、実際に行なわれた床式編年の過程を追認することもできない。このような状況をふまえると、一つの窯での資料中の個体間における差異は、窯の操業期間も考慮する必要があるが、その窯跡資料の幅として捉えるのが妥当であろう。

よって、本稿では、狭山池およびその近辺における一連の須恵器窯跡の資料と、基準資料として適当な陶邑窯跡群中の窯跡の資料を取り上げ、杯H身の形態と法量の幅を比較し、標式とすべき各型式の幅を抽出する作業に重点を置いた。

## 2 比較基準の設定

杯身の形態比較については、たちあがりの角度と高さを比較要素とした。たちあがり高は、たちあがり基部外面から口縁端部までの鉛直方向の距離を計測し、図中の縦軸とした。たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中心として鉛直方向を $0^\circ$ とし、これから、たちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測した。これを図中では横軸とした。なお、個体中において、たちあがり高・たちあがり角度にバラツキがある場合はその平均値をとった。従来、たちあがりの形状を観察する際に、たちあがり高は数値的に把握されていたが、たちあがりの内傾度合いは数値的に把握されておらず、客観的な形態比較の要素とは言い難かった。ここで行っている一連の作業は、たちあがり形状をより客観的に評価しようとする試みである。

杯身の法量については、口径を図中の横軸に、器高を図中の縦軸にして、その数値分布を表した。そして、窯跡資料の比較対照を行う基準として、陶邑田辺編年の基準資料となっている窯跡資料<sup>①</sup>を採用した。

## 3 陶邑窯跡群資料のTK217型式に至るまでの変遷過程

図298に示しているように、TK208号窯・TK23号窯・TK47号窯の杯身は、口径9cm~10cm・器高5cm前後の値を示している。MT15号窯の杯身は、口径12cm前後、器高5cm前後の値を示している。TK10号窯の杯身は、11.8cm~12.8cm、器高4.4cm~4.8cmを測る。これらの杯身法量数値分布から、TK47型式以前の法量はあまり変化しておらず、MT15型式から口径の拡大が進行し、TK10型式で口径の拡大傾向をもつとも顕著に認めることができる。

図301に示しているように、MT15型式以前の杯身のたちあがりは、たちあがり高1.3cm~2.0cm・たちあがり角度 $20^\circ$ ~ $35^\circ$ の値を示している。これに対して、TK10号窯の杯身のたちあがり高は1.2cm~1.4cmを測り、TK10型式ではたちあがりの低さが低下傾向にあることが確認できる。

さらに、杯身の法量とたちあがり形状は、次のような変遷をたどる。TK43号窯の杯身の口径は11.3cm~16.0cm、器高は3.0cm~4.6cmを測り、図299のような数値分布域

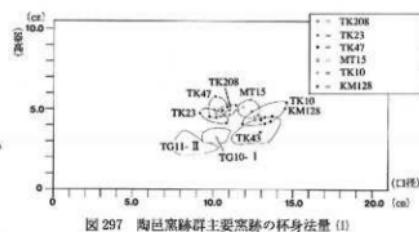


図297 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(1)

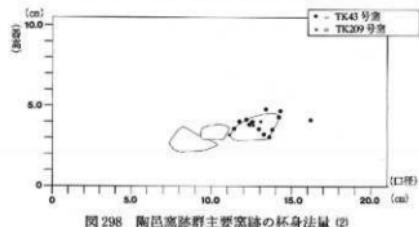


図298 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(2)

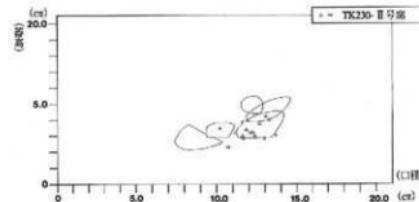


図299 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(3)



図300 陶邑窯跡群主要窯跡の杯身たちあがり(1)

を示している。この数値分布状況から、TK43型式の杯身はTK10型式のそれと口径はさほど異ならないが、器高が相対的に低いことが理解できる。TK43号窯の杯身のたちあがり角度は、 $20^{\circ} \sim 35^{\circ}$ の範囲に集中し、図302のような数値分布域を示している。この数値分布状況は、すでに低下傾向にあったTK10型式の杯身たちあがりの数値分布域を内包するものであるが、MT15型式以前のそれと比較すると、たちあがり角度の値はさほど変わらずに、主としてたちあがり高い数値分布域が下方へ移行していることがわかる。以後、TK43号窯資料の数値分布範囲を「TK43集中域」と呼ぶ。

TK43号窯と同様の杯身體形・法量の数値分布を示している窯跡資料にTK118号窯資料がある。TK118号窯の杯身のたちあがり角度は2点を除いて $20^{\circ} \sim 35^{\circ}$ の範囲に集中し、たちあがり高もほぼTK43号窯資料の分布域におさまり、本窯の杯身は、そのたちあがり角度と高さにおいてTK43号窯資料と近似したものといえる。

TK209号窯資料の杯身の報告点数是非常に少ないため、たちあがり・法量の数値分布を設定することが困難である。よって、TK209型式併行期の窯と考えられているTK230-II号窯の資料を参考として取り上げた。TK230-II号窯の杯身のたちあがりは、その半数以上の資料がTK43号窯資料の分布域の外にあって $35^{\circ}$ 以上の内傾を示し、最も内傾するもので $50^{\circ}$ に至る。その法量は、TK43号窯資料の分布域から左外側へかけて分布している。TK43型式の杯身法量とTK209型式の杯身法量との差異は、口径の縮小化に求められる。ただし、その分布域はTK43集中域から大きくはずれたものではなく、TK43集中域に含まれる個体と口径の縮小化した個体の両方が存在しているようである。

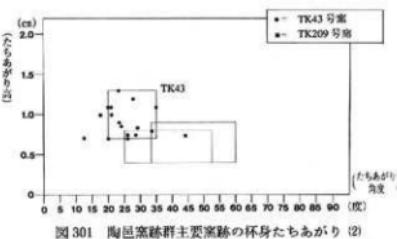


図301 胸邑窯跡群主要窯跡の杯身たちあがり(2)

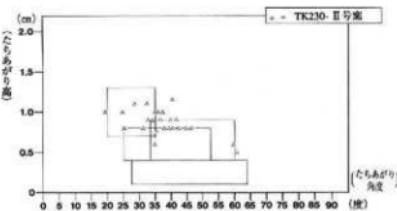


図302 胸邑窯跡群主要窯跡の杯身たちあがり(3)

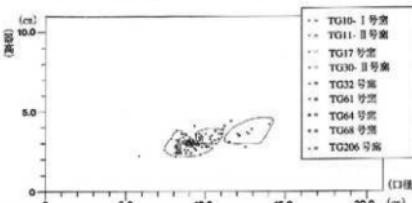


図303 胸邑窯跡群主要窯跡の杯身法量(4)

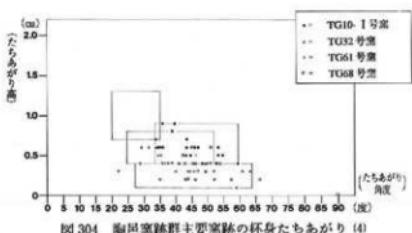


図304 胸邑窯跡群主要窯跡の杯身たちあがり(4)

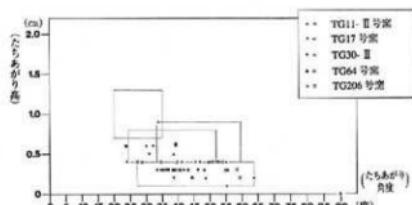


図305 胸邑窯跡群主要窯跡の杯身たちあがり(5)

#### 4 K217型式に分類される窓跡資料の細分類

TK217号窓資料の杯身の報告点数は非常に少ないため、たちあがり・法量の数値分布を設定することができない。このため、TK217型式古段階の窓と考えられるTG10-I号窓の資料を参考として扱った。TG10-I号窓の杯身のたちあがりは、たちあがり高0.4cm～0.9cmを測り、たちあがり角度33°～60°を測る。この数値分布域は、TK43分布域とはほぼ重複せず、たちあがり高の低い数値に限定して、なおかつ、より内傾したたちあがり角度を示すものである。これを「TG10-I分布域」と呼ぶ。また、その法量は、口径9.4cm～11.1cm・器高3.0cm～3.6cmの範囲に集中した分布を示している。この数値分布範囲を「TG10-I集中域」と呼称する。TG10-I集中域は、TK43集中域よりも口径が縮小化した値を示しており、その集中域は重複していない。このことから、TK217型式古段階の杯身法量と、TK43型式・TK209型式の杯身法量との差異は、口径の縮小において明確に認められるといえよう。

つぎに、TK217型式新段階の窓と考えられるTG11-II号窓の資料をみてみたい。TG11-II号窓の杯身のたちあがりは、たちあがり高0.1cm～0.4cmを測り、たちあがり角度26°～64°を測る。この数値分布域はTG10-I分布域の下側にあり、明瞭なたちあがり高の低下が確認できる。これを「TG11-II分布域」と呼ぶ。また、その法量は、口径7.4cm～10.4cm・器高2.3cm～3.8cmの範囲に集中した分布を示している。この数値分布範囲を「TG11-II集中域」と呼称する。

TG10-I号窓資料とTG11-II号窓資料との中間的な経過型の法量・たちあがり数値分布を示す窓跡資料として、ひつ池西窓[HTW]があげられる。<sup>2)</sup> ひつ池西窓の杯身法量の数値分布は、TG10-I集中域とTG11-II集中域の境界を中心にして両方の集中域にまたがった分布を示している。たちあがりの数値分布も同様に両方の分布域にまたがつ

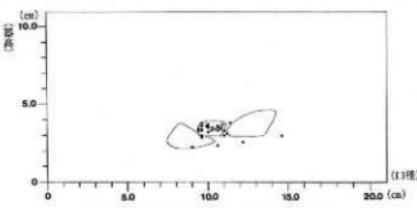


図306 狹山池1号窓(下層灰原)の杯身法量

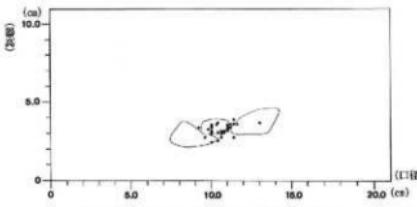


図307 狹山池1号窓(中層灰原)の杯身法量

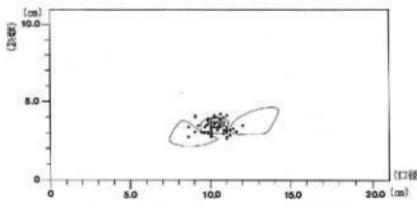


図308 狹山池1号窓(上層灰原)の杯身法量

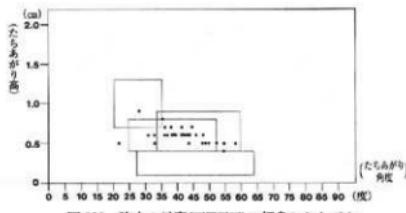


図309 狹山1号窓(下層灰原)の杯身たちあがり

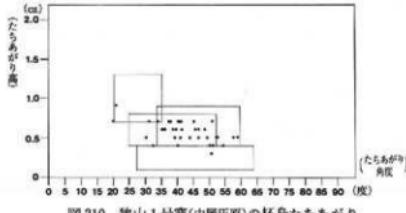


図310 狹山1号窓(中層灰原)の杯身たちあがり

た分布である。

ところで、TG10-I号窯資料には杯Gが含まれていない。この資料と同様の杯身法量・形態の数値分布を示す窯跡資料でも、杯Gを含まないかもしくは少數にとどまる例が多いようである。これに対して、ひとつ池西窯およびそれと同様の法量・数値分布を示す窯跡資料では、杯Gを含む場合は杯Hに匹敵する数量の杯Gが出土する例が多い。蓋身逆転期の杯Hの法量・形態は、その前段階と比べて著しい縮小・退化傾向にあり、その器形の矮小化は、杯Hの生産が完全に停止する段階に至るまでの間、継続的に進行していったと理解される。

これらの窯跡資料から、TK217型式は、TG10-I→HTW→TG11-IIといった変遷過程を内包していると理解されよう。この型式内の細分類を便宜上、TK217型式第1類→TK217型式第2類→TK217型式第3類と考えたい。

## 5 狹山池およびその近辺の窯跡資料

狹山池とその周辺における発掘調査で確認された窯跡には、狹山池1号窯・狹山池2号窯・狹山池3号窯・狹山池4号窯・東池尻1号窯がある。これらの窯跡から出土した遺物の報告は、本書に掲載しているとおりである。

狹山池1号窯[SI1]の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高0.3cm~1.0cmを測り、0.4cm~0.8cmに集中している。たちあがり角度は15°~60°を測り、30°~60°に集中しており、TG10-I分布域におさまる数値分布を示している(図310~312)。SI1の杯身法量は、TK43集中域とTG11-II集中域にも若干の数値分布がみられるが、概ねTG10-I集中域を中心とした数値分布を示している(図307~309)。狹山池2号窯[SI2]の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高0.6cm~1.1cmを測り、たちあがり角度20°~45°を測る。たちあがり角度が大きい、つまり内傾の度合いが大きいために、TK43分布域からはずれた計測値を示す個体が多い。概して、TK230-II号窯資料に近い分布状況であるといえよう。SI2の杯身法量は、TK43集中域からTG10-I集中域にかけて分布しており、TK43集中域内の分布は口径8cm前後に中心がある。SI2の杯身の法量とたちあがりは、TK209型式の典型的な数値分布を示していると考える。

狹山池3号窯[SI3]の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高0.6cm~1.4cmを測り、たちあがり角度14°~45°を測る。SI2と同様に内傾度が大きく、TK43分布域からはずれた計測値を示す個体が多い

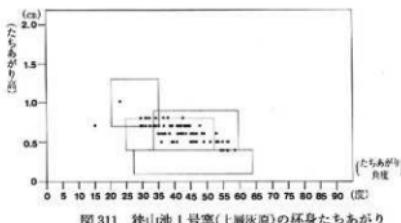


図311 狹山池1号窯(上層灰原)の杯身たちあがり

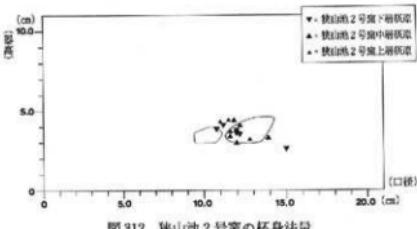


図312 狹山池2号窯の杯身法量

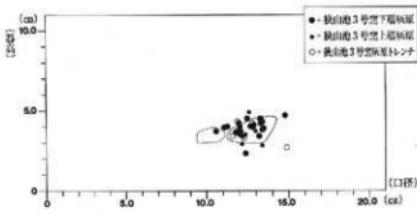


図313 狹山池3号窯の杯身法量

ため、TK230-II号窯資料に近い分布状況を示している。SI3の杯身法量は、TK43集中域においてほぼ均等な分布が認められるが、TG10-I集中域に入る計測値を示す個体も認められる。SI3の杯身の法量は、TK43型式の資料の数値分布として、概ね把握することができるが、たちあがりはTK209型式の数値分布として把握されるものである。

狹山池4号窯[SI4]の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高0.3cm～0.6cmを測り、たちあがり角度31°～66°を測る。TG10-I分布域からTG11-II分布域にかけて分布しており、ひつ池西窯[HTW]と同様の数値分布状況であるといえる。SI4の杯身法量は、口径8.8cm～11.8cm・器高2.1cm～3.3cmを測り、TG10-I集中域からTG11-II集中域にかけて分布しており、これもひつ池西窯と同様の数値分布状況である。

東池尻1号窯[HI1]の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高0.4cm～0.8cmを測り、たちあがり角度25°～52°を測る。たちあがり高はTG10-I集中域におさまる数値であるが、たちあがり角度が若干立ち気味であるので、参考として図のようにHI1集中域を設定した(図317)。HI1の杯身法量は、ほぼTG10-I集中域内に数値分布が認められる。

以上のデーターから、各窯跡資料の型式は以下のように考えるのが妥当であろう。

- TK43型式～TK209型式併行資料：狹山池3号窯
- TK209型式併行資料：狹山池2号窯
- TK217型式第1類：狹山池1号窯・東池尻1号窯
- TK217型式第2類：狹山池4号窯

## 6まとめ

今回の発掘調査において、操業期間が短期間と考えられる須恵器窯跡が確認され、この窯跡の操業時期の上限を実年代で示すことが可能であったのは、きわめて重要な成果であろう。TK217型式の古段階に位置付けられる窯跡資料を生産した狹山池1号窯は、その窯が構築された基盤層の下層にある東池尻管

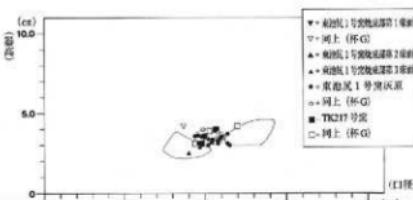


図314 東池尻1号窯の杯身法量

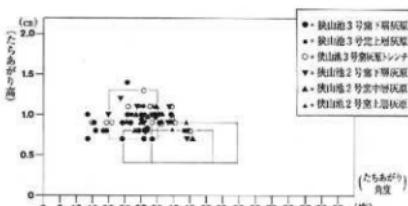


図315 狹山池2号窯・3号窯の杯身たちあがり

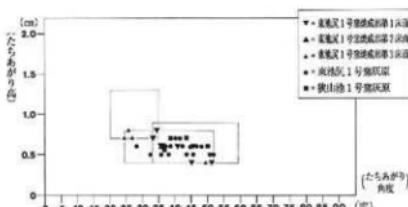


図316 東池尻1号窯の杯身たちあがり

たるあがり  
角度

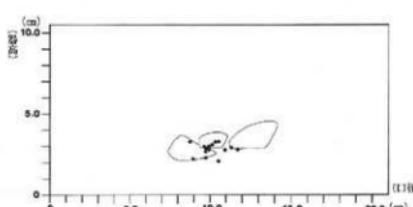


図317 狹山池4号窯の杯身法量

材の伐採年代 A.D.616 年を遡行する操業開始時期を想定できない。また、狹山池 1 号窯が生産した須恵器は型式的なまとまりが高い資料であると評価できる。つまり、TK217 型式の古段階に位置付けられる陶邑窯跡群中の窯跡資料として、狹山池 1 号窯資料は、実年代が判明した有用性の高い基準資料であるといえよう。

ところで、東池尻 1 号窯で生産された須恵器は、狹山池 1 号窯のそれと同一型式に細分類されるものである。狹山池の築造過程の中で考えれば、東池尻 1 号窯は東掘設置と第 1 次堤体築造に先行する可能性がある。しかし、その場合においても、TK217 型式の細分類内におさまる時間差しか考えられないため、狹山池北堤築造に関する一連の工程はきわめて短期間に実行されたと考えられよう。

狹山池 4 号窯から出土した須恵器は、狹山池 1 号窯よりも後出の要素をもった資料である。狹山池の北堤斜面に窯を造営したのち、狹山池の築造工事が完了していたであろう時期（おそらく 7 世紀中葉）に、池内の最高水位以上に位置する斜面において、なおも窯を造営していたのである。

#### 注)

①陶邑窯跡群中の基準資料については、下記の文献を参照した。

田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ研究論集第 10 号 1968

田辺昭三『須恵器大成』1981

中村浩『陶邑 II』大阪府文化財調査報告書第 29 集 1979

野上文助『陶邑 V』大阪府文化財調査報告書第 33 集 1982

②大阪狭山市教育委員会『ひつ池西窯』大阪狭山市文化財報告書 10 1993

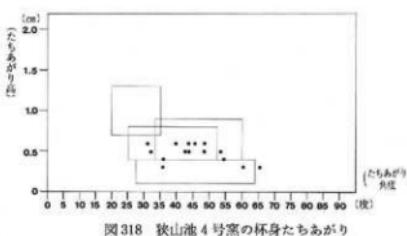


図 318 狹山池 4 号窯の杯身たちあがり

## 第5節 狹山池出土の樋の復元と系譜

狹山池調査事務所 市川秀之

### 1 樋の形態と類型

狹山池からは多くの樋が出土している。その詳細は第2章において報告した通りであるが、本節ではそれらの復元を行うとともに、樋の系譜をたどり狹山池の樋をわが国の農業上木史のなかに位置づける作業を行いたい。

樋は堤、洪水吐(除)とともに溜池の根幹をなす施設である。現在の溜池においては近年の改修工事の結果、樋はコンクリート管や金属管に伏せ替えられ、また取水部もハンドル式のものが大半となっているが、少し以前までの溜池では伝統的な樋が利用されていた。以下、最近まで残存していた溜池の樋や、発掘事例、文献からの知見などを合わせて樋の類型をまず設定したい。

樋は取水部、樋管、排水部から構成される。このうち発掘によって出土するのは大半が樋管の部分であり、他の部分が発掘されることはまれである。この点、取水部が多く出土している狹山池の事例は貴重である。取水部は大きく、一段だけの底樋型のものと、樋管に堅樋(斜樋)を取り付け、堅樋にいくつかの樋穴を設けた尺八型のものに分けられる。底樋型の場合、樋穴は樋管の上部にあけられそこに男柱がささる型式のもののがもっとも多い。男柱は鳥居型のもので支持されるのでこれは鳥居建と呼ばれている。このほか前面に水門を持つものもみられる。尺八樋は堅樋にあけた穴に栓をするものがよくみられるが、狹山池の近世の尺八樋はこの栓を水門式にしたものである。この型式のものは狹山池をはじめ万濃池など大きな溜池に多い。なお堤を開削して水門を設置する型式のものは韓国溜池では碧骨堤などでみられ、またわが国においても湖堤や河川堤防などにおいては存在するが、溜池においてはほとんどみられない。なお取水部は大半が木製であるが、鳥居建の竿木(男柱を支える横方向の木)を石で造ることが多く、また尺八の斜樋を石や土管などで造ることがある。<sup>①</sup> 狹山池の中樋造構から出土した石樋は取水部を石で造ったものである。

樋管は木製のものが大半で、U字型、O字型、箱型の3つの型式がある。東樋下層造構でみられたものは典型的なU字型の樋管で、丸太材を断面の上から3分の2程度のところで割り、内部をえぐってU字管状にしたものに、板材による蓋材をかぶせたものである。また丸太を半切し双方の内部をえぐって再び併せて樋管としたものは、最近まで多くの溜池で利用されており、今回の調査でも池尻城跡で出土している。この形態をO字型と呼びたい。この型式は材木を半切したものだけでなく、上管などで造ったものもある。文献にも「土樋」<sup>②</sup>、「石樋」<sup>③</sup>などの表現がみられる。量的に圧倒的に多かったのはやはり木製の樋管であったと思われる。次に板材を組み合わせて釘などで接合したものを箱型と呼びたい。材の組み合わせ方にはさまざまな類型がある。狹山池では東樋上層造構、中樋造構、西樋造構などの樋管が箱型である。

排水部は池の中から樋を通じて放出される水の圧力を弱めるために樹型の形態を持つものが多い。狹山池の東樋下層造構ではこの樹型がみられる。また樋の出口と水路のあいだに高低差がある場合には滝のように水が吹き出することになる。昭和の工事以前の狹山池中樋や、香川の万濃池では吹き出す水で虹ができたほどである。しかしながら検出例も少なく類型化するにはいたっていない。

## 2 狹山池出土の樋の復元

狹山池から出土した樋の復元案について、時代の古いものから順に述べることとした。

### ① 東樋下層造構

東樋下層造構の樋管部分の材木は616年に伐採されたことが年輪年代法によって明らかにされており、堤との層位関係からみても狹山池築造時に埋設された樋管であることが確実である。残念ながら樋管2の上流側先端部は切断されており、そこに奈良時代に樋管1が接続されているために、この時期の樋の取水部を復元することはできない。ただ他の出土例や奈良時代の東樋下層造構と比較すれば、底樋型で鳥居建ての構造であったことは間違いないだろう。この時期の堤防の高さは中樋地点では74.4m程度であり、水面はそれより約1m低く73.4m程度であったと考えられる(第6節参照)。東樋下層造構の樋管の上端の標高は約70.5mであり、男柱の長さは最低でも3m以上は必要であったことになる。樋管は先に述べた通りU字型で、蓋板はほとんどの部分で長い板材を利用している。また樋管どうしは、上流側の材が上にくるように双方を加工して接続している。場所によっては接続部の両側に柱状に材木をたてている。蓋材も同様に2材がかみあうように加工している。排水部には樹型が設置してあるが樋管との落差はほとんどない。

### ② 東樋下層造構(奈良時代)

東樋下層造構は奈良時代の天平宝字6年(762)に池側に拡張し、新たに取水部を設けている。取水部は図319のように土留と上部構造、下部構造に分類できる。土留は樋管の両側に建つ計8本の丸太柱と取水部の周縁をコの字型にとりまく板材からなる。柱は樋の拡張工事を実施する際、池内に堆積していた土が樋の方に流入するのを防ぐ目的のものと思われ、当初は柱の間に板材が置かれていたと考えられる。樋の完成後、板材は撤去されたが、柱はそのまま残され堤の土がその上に盛られたと思われる。コの字型に置かれた板材のうち堤防側のものはおそらく堤体の土が取水部に流入するのを防ぐ目的で設置されたものであろう。つまりこの板材の箇所まで堤体の土が被覆していたと考えたい。また側面の板材は溜池の堆積物が取水部に流れてくるのを防ぐ目的のもので、樋の使用時の状況を意識して設置されたものであろう。上部構造および下部構造が取水部の心臓部である。樋管の先端のえぐりはやや小さくなっている。この部分から取水した可能性が考えられないわけではないが、底樋において前方から取水すれば樋管はまたたく間に土砂によって詰まるのが普通であるので、やはり上方にあけられた穴から水を入れたと考えておきたい。この場合、樋穴の上には男柱が設置されなければならないが、問題はこの男柱の長さである。中樋地点の堤体断面調査によればこの時期の堤防の標高は78.5m程度であり、水面の高さはこれより1.8m低く76.7m程度であることが推定される(第6節

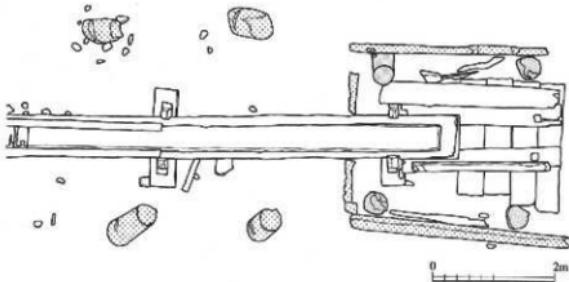


図319 東樋下層造構取水部  
(細かいトーン：上部構造・相いトーン；土留・トーンなし；下部構造)

参照)。東橋下層遺構の樋管上端の標高は 70.5m であるから、男柱の先端を水面上に出すためには、最低でも 6.2m 以上の長さの男柱が必要となる。通常よくみられる 2 本柱の鳥居建ではこのように長大な男柱を支持するのは困難であるため、復元案としては樋管の先端部に残存していた 4 本の柱に注目して図320、図321のようなものを考えている。樋管の蓋板の止め方については残存部分の形状から、短い材を利用してそれを 2 本の角材で押さえ、さらにそれを横方向の板材で押さえる型式であったと思われる。この蓋材に穴をあけたのである。ただ上部構造の高さが随分高いために水に潜らずに男柱の上下をするのは困難であったことが予想される。復元案では点線で示しておいたが、中间付近にもうひとつ梁を設置すれば、男柱は左右せず、上下できる。ただしこれには何の根拠もない。この復元案を採用した場合、樋管の先端よりさらに前方に 2 本の板材が伸びることとなるが、これは中樋や西樋など近世の樋でもみられたハの字型の材と同じく、水流を制御する目的のものであろう。

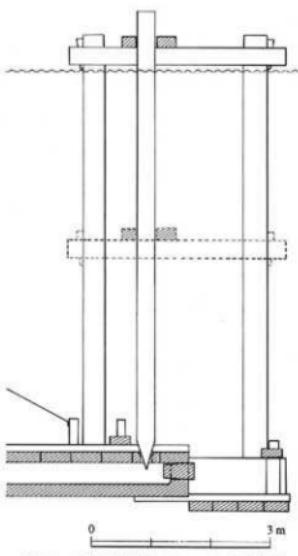


図 320 東橋下層遺構(奈良時代)取水部復元図(全体)

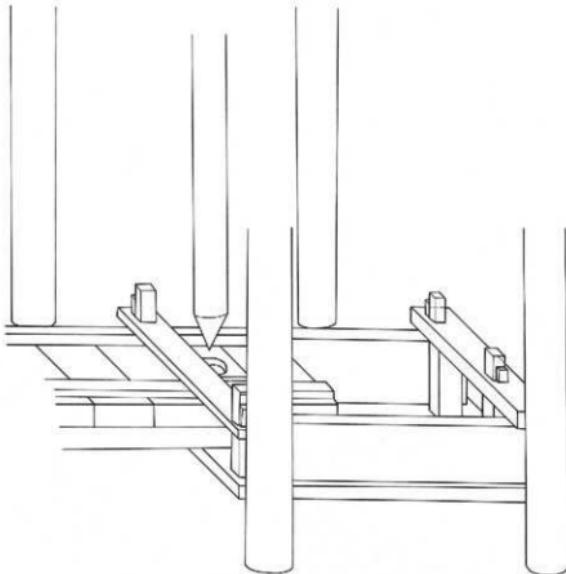


図 321 東橋下層遺構(奈良時代)取水部復元図(部分)

### ③中樋造構（鎌倉時代）

中樋造構から出土した石棺群は僧重源が建仁2年(1202)に狹山池を改修した際に伏せた石樋であると考えられる。また昭和改修の時には堤防の下流側で計6基の石棺および1基の石材が出土しているが、これも重源の石樋の一部としてよいだろう(石棺Aだけは樋管に沿った上流側の箇所において出土している)。『南無阿弥陀物作善集』には重源の改修について「臥石樋事六段云々」という記載がある。六段の「段」とはこの場合長さを示す単位と考えられる。1段は6間であるから6段は約65mということになる。この長さは現在の狹山池の堤の基底幅には等しく根拠のない数字とはいえない。しかしながら現在狹山池から出土している石棺をすべて主軸方向に連結しても全長は33m程度にしかならない。もちろん後世持ち去られたり、破壊されたりした可能性もあり、検出数がそのまま当初のものとは限らないが、建仁改修当時に樋の全長すべてが石棺からなっていたとは考えにくい状況である。このように主として出土した石棺の数の問題からここでは特に水圧を受けやすい樋の取水部および排水部付近だけに石棺を利用し、真ん中は木製の樋を利用したと考えたい。このように考えれば、昭和の改修時に排水部付近において出土した石棺、あるいは今回の上流側で出土した石棺は、もちろん慶長改修などで多少の移動はあるとしても、ある程度重源改修時の原位置を保ったものであると考えられる。石棺はおのおの3~5トンの重量を持ち、長距離の移動は現在でも困難をきわめるという物理的な事情も先の推論の前提にある。以下の考察では重源の改修時においても、取水部付近で検出されたものは取水部で、また排水部付近で検出されたものは排水部で利用されていたということを前提としたい。

昭和改修時には末永雅雄氏が「石造物発見図」を作成し、この図は『狹山池改修誌』『池の文化』などに掲載されている。<sup>④</sup> この図には木製の樋管は描かれず、石棺のみを描いたものとなっているが、

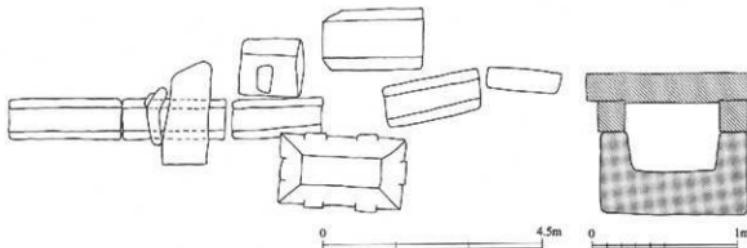


図322 「石造物発見図」(『狹山池改修誌』より)

図323 「樋管実測図」  
(『狹山池改修誌』より)



写真106 石棺 7

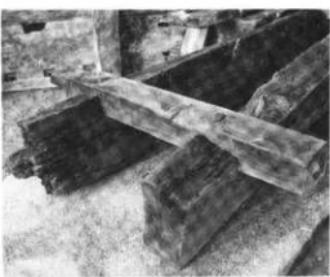


写真107 石棺 10

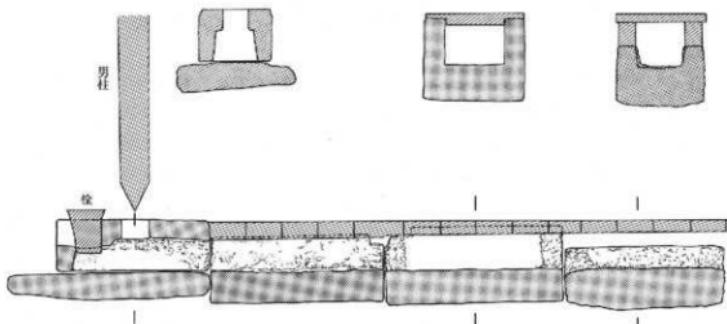


図324 中世石樋復元図

『池の文化』などに掲載されている写真や断面図と照合すると、石樋は中樋造構樋管の下流側先端部において底板、側板の代替として用いられていたようであり、木製樋管の断面との高さの差は蓋板との間に板材を挟むことによって調整していたようである。また石樋のうらいくつかは蓋板の重しとしても利用されていたことが写真などからうかがわれる。このような状況は慶長の改修で生じたものと考えられるが、石樋をあたかも先述のU字型の樋管のように利用する方法はおそらく重源の改修時のものと踏襲したのであろう。さてそれならば建仁の改修時に石樋はどのようにして配列され石樋として再利用されたのであろうか。石樋そのものは慶長の改修時に移動しており、発掘による知見からそれを復元することは困難である。ただ石樋7のみは底部に二つの丸い穴があけられていることから、現在の樋との比較によって、これが樋の上流側先端に上下さかさまの状態で置かれ、この穴に上から男柱がささる状態であったことが推定できる。二つの穴のうち一方は小口にまで穴が拡張しており、清掃用にあけられたものである可能性が強い。普段は栓などが入れられていたことが推測できる。普段使用されていたのは底部中央の穴であろう。また中樋造構の基礎として地面に敷かれていた石樋10は他の家型石樋とは異なり、まったく扁平な板石であるが、この石は重源改修時においても近世と同様に樋の基礎としての役割を果たしていたと考えたい。それ以外の機能がこの形態からは考えにくいかである。そして石樋10のうえに石樋7が上下逆さまの状態で置かれたものを、重源改修時の「石樋」の取水部の復元案としたい。鎌倉時代の段階では尺八樋の存在は想定しがたく、とすればこの石の樋管の上には男柱が立ち、またそれをささえる鳥居状、あるいは樋状のものが存在したはずである。中樋地点の堤体断面調査の結果から、重源の改修時には堤体の高さは標高79.2m程度、また水面の標高はそれより2m低い77.2mと考えられる。重源の改修時の「石樋」の上面のレベルはもちろん不明であるが仮に近世の中樋造構の樋管の上面と同じ(69.0m)とすると、先端が水面上に出るためには、男柱は最低で8.2m以上の長さであったこととなる。石樋を用いた樋管の埋設と同様、この上部構造の建設も相当な大工事であったと考えられる。重源狭山池改修碑には物部為里など当時一流の大工

表31 狹山池出土石樋の法量

	長さ	幅	内高	内幅
石樋1	(201.5)	(127)	?	89
石樋2	227.0	122.0	42~45	69
石樋3	222.0	130.0	51	70.5
石樋4	226.0	113.0	43.5	70.5
石樋5	198.0	109.5	24.8	55.5
石樋6	(134.0)	138.0	36.9	75.0
石樋7	199.5	98.0	39.0	54.0
石樋8	244.0	119.5	43.5	57.0
石樋9	263.0	128.0	49.5	61.5
(石樋10)	259.0	160.0		
石樋A	214	102	13.5	66
石樋B	223	135	12.6	58.5
石樋C	186	102	30	55~57
石樋D	158	102	30	45~50
石樋E	167	75	24	50
石樋F	180	112	20	53~63
石樋G	?	?	?	?

工事に参加したことが記されている。彼らの技量を考えればこのような上部構造の建設は不可能ではなかったと思われる。

石樋取水部の構造を先のように復元すると、石棺7の内高(39cm)と内幅(54cm)がこの時代の樋管の標準的な通水断面ということになる。他の部分においてはこの断面より内高や内幅が大きくなることはあっても、小さくなることは考えにくい。断面が小さくなつた部分では水の流れが阻害され、樋管の破損を招くからである。以上のように前提条件を設定すれば石棺1においては右棺1、石棺5、石棺6以外のものは樋管として使用されていた可能性が強いといえる。石棺1および6は現状での破損が大きく重複改修時には樋管としての条件を満たしていた可能性があるが、石棺6は内面の掘りこみが極端に浅く、木などによって鋼板を嵩上げしないかぎり樋管としての使用は困難であったと思われる。今回中樋遺構において検出された石棺は大半が家型石棺の身の部分であり、その小口の部分がくり抜かれていた。その形態から考えてこれらの石棺はU字型樋管であるとすれば、当然その上に蓋板が載るはずである。蓋と思われる石材は中樋遺構からは検出されておらず、取水部付近の蓋板には木材が使用されていたと考えざるをえない。また石材どうしを組み合わせるよりも、材木と石材を組み合わせるほうが水密のためには有効であろう。蓋としては東樋下層遺構で検出されているような長い板材のものも想定できるが、この型式のものは時代が下がるほど少なくなるため、ここでは短い板材を横方向に並べた型式の復元案としている。先述の通り石棺7の内高である39cmを樋管断面の高さであると仮定すると、他の石棺の内高とは10cm前後の差が生じる。蓋板の形態は石棺の上に載る形であったと思われるが、近世の中樋遺構の蓋板のように、その一部が少し削り残されて石棺の内部にはまる形のものを想定すると、この部分において石棺の内高の差を調整できることとなる。また石棺の内底面を一列にあわせた場合、石棺の底部は相当凸凹になることが想定される。おそらくは基盤の土のレベルを切り盛りしてこの起伏を調整したものと考えられる。なお図325で示した復元案のうち石棺7および10以外の配列の順序については、なんら根拠はない。破損が小さく特色的な石棺を任意に配列しただけのものである。石棺同上、あるいは石棺と材木の接合部においては当然水漏れが予想される。石棺には漆喰の痕跡などは一切みられなかったので、外周に粘土などを巻いて水漏れを防いだものと考えたい。

排水部の石棺についてはいずれも内高が先に述べた石棺7の39cmよりもはるかに小さく。単独の石棺では樋管としての機能を果たしえなかつたことが明らかである。末永雅雄氏は『狹山池改修誌』のなかで家型石棺の蓋は、石樋(右樋)の上に載せられて使用されていたという考え方を述べているが、石棺Cをほぼ内幅の等しい石棺Cの上に載せた場合、内高は約42cmとなり、先に基準とした39cmの内高にはほ近似することとなる。末永雅雄氏の記載によるとこの工事の時には破壊された石棺もあったようであり、これも含めると排水部においては3~4組の石棺の身と蓋(あるいはそれに替わるもの)の組合せによって樋管が構成されていたと考えられる。また取水部と排水部にはさまれた樋管の部分については、木製であったと推定されることを先に述べたが、この部分については遺物が残存しない以上復元は不可能である。ただ中世の溜池樋管の一般的な形態を考えると、U字型の樋管の上に、短い板材の蓋板を横並べにした形態のものであった可能性が高いだろう。

#### ④中樋遺構・西樋遺構(近世)

今回の調査で出土した中樋遺構・西樋遺構はともに昭和改修の際に撤去を免れた八八樋の最下段であるが、中樋は上部が破損しており、西樋は後部が破損していた。近世には度々西樋、東樋の改修が行われたこともあって、いくつかの近世文書には樋の材料などが記載されている。特に享和3(1803)年7月に作成された「狹山池明細書」(田中家文書)は、樋の全体の状況がうかがえる好史料である。こ

表32 尺八櫛法量の比較

部材		「秋山池明細書」 (亨和3年・1803)	「河州佐山櫛之帳」 (寛永4年・1627)	出土遺構
西 櫛 管	内法(上口)	内法 2尺2寸2分	内法 3尺	内法 2尺3寸3分(70cm)
	座敷板		長さ3間半 巾 2尺3寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺5寸3分(56cm) 厚さ 7寸3分(22cm)
	側板		長さ2間 巾 2尺7寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 2尺3寸3分(70cm) 厚さ 6寸(18cm)
	砂 薬		長さ 4尺5寸 巾 5尺 厚さ 7寸	長さ 3尺8分(114cm)
中 櫛	指柱	長さ1間2尺5寸 巾 1尺4寸5分 厚さ 7寸	長さ2間 巾 1尺4寸 厚さ 6寸5分	
	先柱(おきの柱)	長さ2間2尺5寸 7寸5分角	長さ2間 巾 8寸 厚さ 7寸5分	長さ1間4尺7寸(322cm) 巾 5寸(15cm) 厚さ 3寸7分(11cm)
	長押		長さ1間半 6寸5分角	不明
	前壁板	長さ 6尺 巾 1尺 厚さ 3寸	9枚	長さ 4尺5寸3分(136cm) 巾平均 1尺5寸(45cm) 厚さ 2寸(6cm)
東 櫛	壁板	長さ 9尺 巾 1尺 厚さ 3寸	9枚	長さ 不明 巾平均 1尺8寸7分(56cm) 厚さ 2寸(6cm)
	全長		長さ2間	
	内法(上口)	内法 2尺2寸2分 板厚 9寸5分	内法 3尺	内法 1尺6寸(48cm)
	底敷板		長さ3間 巾 2尺6寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺5寸(45cm) 厚さ 4寸5分(13.5cm)
中 櫛	側板		長さ2間 巾 2尺7寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺3寸(39cm) 6寸(18cm)
	砂 薬		長さ 4尺5寸 巾 5尺 厚さ 7寸	長さ 2尺7寸5分(82.5cm) 巾 不明 厚さ 不明
	振り柱	長さ2間2尺 巾 1尺4寸5分 厚さ 7寸	長さ2間 巾 1尺4寸 厚さ 2寸5分	長さ 不明 巾 1尺 5分(31.5cm) 厚さ 5寸(15cm)
	先柱(おきの柱)	長さ2間2尺 7寸5分角	長さ2間 巾 8寸 厚さ 7寸5分	巾 9寸(27cm) 厚さ 4寸(12cm)
東 櫛	長押	長さ 9寸5尺 厚さ 6寸角		不明
	前壁板	長さ 6尺 巾 1尺 厚さ 3寸	9枚	長さ 3尺2寸5分(97.5cm) 巾 不明 厚さ 不明
	壁板	長さ 9尺 巾 1尺 厚さ 3寸	9枚	長さ 6尺(180cm) 巾 1尺(30cm) 枚数不明 厚さ 4寸5分(13.5cm)

の史料と、「狹山池樋之図」(田中家文書、図326・327)を参照して作成したのが図328の西樋復元図である。尺八樋は上の樋から順に水を入れていくために、提高の高い溜池で多く用いられた樋である。「狹山池明細帳」などでは慶長改修の際に小和田懸右衛門・同久兵衛親子によって考案されたと記載されている。その真否は判断しがたいが、狹山池と同様に尺八樋が使われている万濃池のものは寛永3年(1626)、尾張の人鹿池のものは寛永10年(1633)に築造されており、文献であきらかな尺八樋としては狹山池のものがもっとも古いと思われる。出土した樋は破損が大きかったが部分的にはサイズのわかる箇所もあった。そこで遺構と「狹山池明細書」および近世前期の史料である「河州狹山樋之帳」(寛永4年・1627)の四番樋の比較を試みたのが



写真 108 西樋復元模型

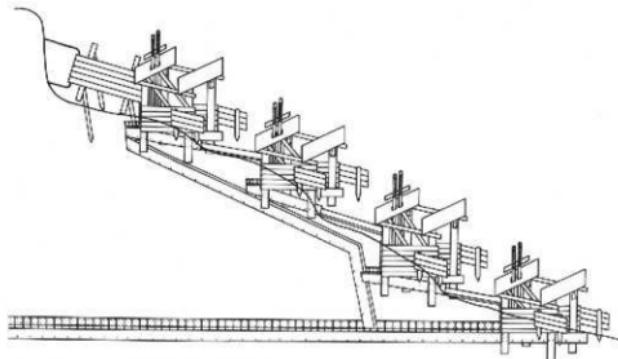


図 325 「河内国丹南郡狹山池東樋絵図」(田中家文書) トレース図(東樋は中樋のこと)

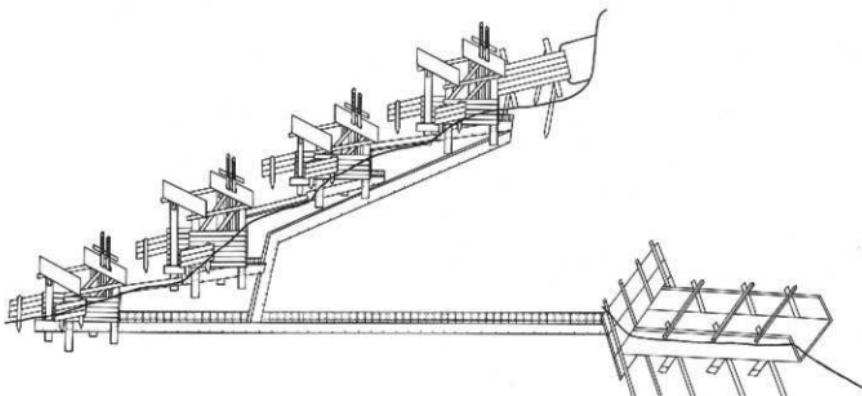


図 326 「河内国丹南郡西樋絵図」(田中家文書) トレース図

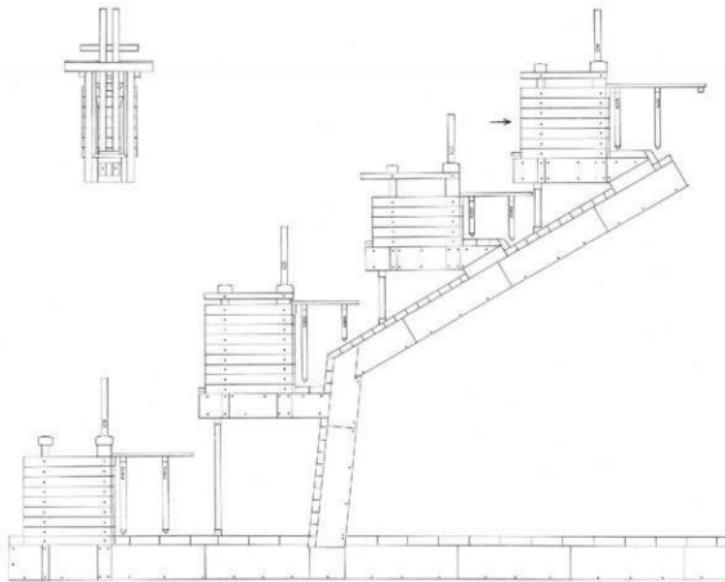


図327 西堀復元図 (S=1/150)

表33である。

これをみるとごく一部の数値を除いて、両史料よりも西堀、中堀とともに遺構のはうが随分と小さく、これらの史料の通りに改修されたわけでないことは確実である。4段目の堀については慶長改修時に築造されたものが継続的に使用されたものと考えられよう。ただし3段目よりも上の取水部については近世に度々改修されたことが多くの史料に記載されているので、ここで参照した史料の数値はそれらの改修の結果を加味した数値と思われる。

#### ⑤東堀上層遺構（近世）

東堀上層遺構については、取水部、堀管、排水部のすべてがほぼ完全な形で出土しておりほとんど復元の必要はない。東堀上層遺構は西堀、中堀が尺八堀であるのに対して一段だけの底堀型であるために取水部の構造は両堀とは少し異なる。最大の差は西堀、東堀は後側の2本の柱の間に樋蓋がはまる形式であったのに、東堀では前の2本の間に樋蓋が入っている。このために東堀では取水部の内部まで樋管が伸びており、その砂蓋の上面に樋穴があけられている。またこれとも関連するが、西堀においては取水部の前面にも壁板が張られ、また中堀でも遺構には残存していないものの近世文書の記載によれば同様の状況であったと思われるのに対して、東堀では前面には壁板は張られていない。

#### ⑥取水塔

昭和の改修で中堀、西堀など近世に造られた木製の尺八堀はすべて撤去されて、西堀の場所にはハンドル式の堀が、また中堀の場所には取水塔形式の堀が新たに設置された。『狭山池改修誌』にはこの工事の設計図面が掲載されているが、縮尺が大きく、詳細の説解は困難であったが、大阪狭山市役所所蔵の資料の中に青焼きの図面があったため、これをトレースしたものを作成しておいた。取水塔

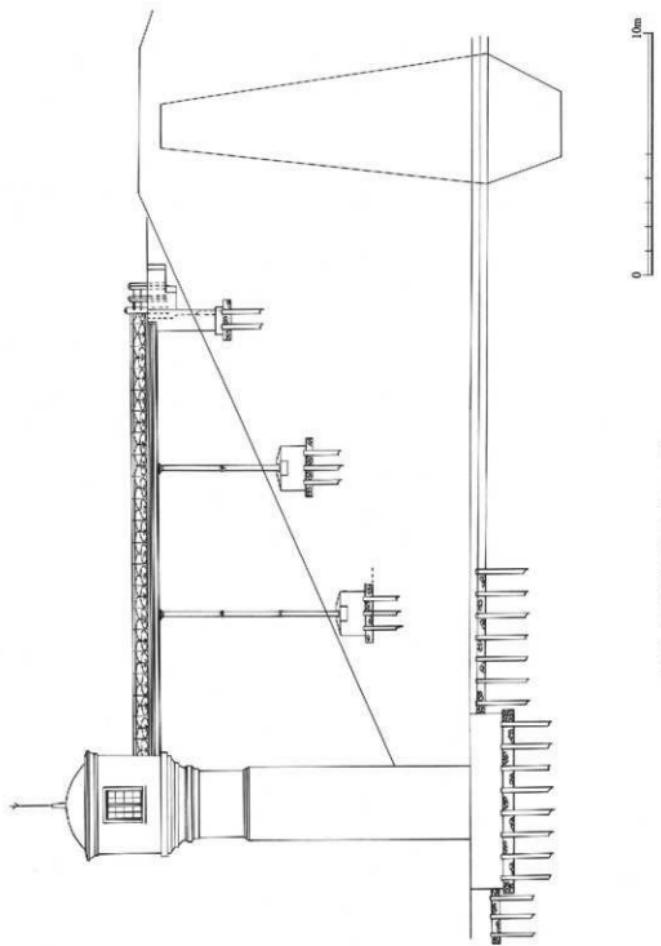


図328 「黒金玉山古墳」トレース図

黒金玉山古墳  
トレース図



写真 109 取水塔全景



写真 110 取水塔の橋

は今回の平成の大改修まで多くの人々に狭山池のシンボルとして親しまれてきたが、ダム工事に際しては撤去されることとなった。しかし景観的に狭山池と一緒にものであり、また近代の土木遺産としても重要なものであるため保存することとなつた。1994年に取水塔をワイヤーソウで3つに切断して取り上げ池内に仮置きし、1998年中には(仮称)狭山池ダム資料館内に搬入して原型に復して、将来的には中樋造構などと一緒に展示する予定である。

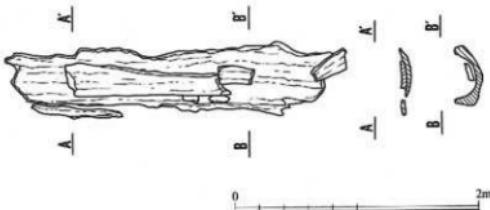


図 329 山賀遺跡出土の樋(『山賀』その2より)

### 3 樋の系譜

#### ①溜め池に先行する樋

狭山池からは以上のように各時代の樋が出土している。これを他の発掘成果と照合しながら、溜池の樋の系譜を考え、狭山池の樋をわが国の農業土木の歴史の中に位置づける作業を行ないたい。

わが国の灌溉施設では溜池の誕生以前から木樋が利用されている。管見の範囲ではもっとも古い樋の出土例は大阪府山賀遺跡で検出された弥生時代前期の木樋である。<sup>⑤</sup> この樋は河川の自然堤防を掘削して設置されたもので、樋管は半裁した丸太を割り貫いたもの、蓋は板材である。ただし両者とも土圧で相当な破損を受けている。樋管はU字型か、O字型か判断が困難だが、蓋が板材であったことを考えればU字型の可能性が高い。弥生時代の遺跡からはこの他にも十数例の木樋の検出例がある。多くは自然河川から水路への引水、あるいは水路から水田への引水の機能をもって設置されている。大阪府池島・福万寺遺跡の木樋の場合<sup>⑥</sup>は、自然河川にともなう自然堤防に溝を設置し、その中にヤナギとアカガシの丸太を割り貫いた樋管を設置したもので、構造としては山賀遺跡の木樋と類似している。この樋管は設置後ほどなく砂つまりのために廃絶したようで、その後は素掘りの溝から引水している。この例からもわかるように弥生時代の木樋は自然河川や水路からの引水に使用されており、機能としては素掘りの溝を補強するものであった。岸部が自然堤防などで深い掘削が必要な場合に、単なる素掘り溝では崩壊の可能性が大きく木樋が用いられたと思われる。この意味で原始的な木樋の機能は今日のU字溝と同様であり、掘削が大きい場合にはそれを埋め戻す必要が生じ、樋に蓋が設けられたと考えられる。この段階の樋の取水方法は前面の水をそのまま樋の中に飲み込む方法で

あった。

### ②初期の溜池

大規模な堤と樋をそなえた溜池としては現在のところ狹山池が最古のものであるが、古墳時代中期以降には小規模な溜池が登場し、木樋も検出されている。近年あいついで発見されたこれらの遺構については祭祀遺跡やトイレとしての性格も考えられており、必ずしも灌漑施設の範疇でとらえられるものでもないが、樋の技術的な系譜を考える上では無視できない。奈良県南郷遺跡からは谷川をせきとめた小規模な池とそこから引水する3本の木樋が検出されている。<sup>⑤</sup> 樋は堤の下に埋め込まれたものではなく池からあふれた水を導くようになっており、いわば余水吐の機能を担っている。したがつて蓋もなかったようである。2本目の木樋には沈殿槽のような掘りこみがあり、また覆屋状の遺構の存在も想定されるため調査担当者はこの遺構全体の性格を水を用いた祭祀と考えている。時代的には5世紀中葉のものである。木樋こそ検出されていないが、同種の遺構としては弥生時代のものとして福岡県の三苦永浦遺跡の池状遺構があり、南郷遺跡とはほぼ同時期のものとして東大阪市西ノ辻遺跡で検出された池状遺構がある。これはやはり谷川から水を引き、5m四方、深さ0~80cmの池を上下に4つ並べてつくり互いを木樋で連続したものである。樋はやはりオーバーフローする水だけを導くものであり、たまたま水全体を利用できる構造ではない。また藤井寺市の狼塚古墳からは木樋を形どった埴輪が出土している。この樋のまわりには壁が回っており、南郷大東遺跡などの性格を考える上で示唆に富む。発掘担当者はこれを淨水のための施設で用いられた樋と考えている。

これらの諸遺構で出土した木樋の性格は現在のところ不明確といわざるを得ない。ただ樋の設置技術や堤との関係においては、狹山池や益田池のような樋と堤を備えた本格的な溜池とは大きな差を認めておくべきであろう。

### ③本格的溜池の誕生

以上のように木樋を設置する技術は弥生中期に既にみられ、本格的な溜池誕生のむしろ前提となる技術であるといえよう。溜池の誕生は弥生時代以来の樋の制作技術と古墳時代になってはじめてわが国に導入された堤を築造する技術の結合として評価すべきである。狹山池において実施した北堤断面の観察調査では合計12回の盛土の痕跡が観察されているが、築造期の堤から奈良時代の堤までは土を10~15cm程度盛土したのち土の表面に枝についたままの葉を一面に敷きならべる敷葉工法がみられる。また築造期の堤防では土を植物質のものでくるんだ土嚢状のブロックを斜面などに並べる技術も

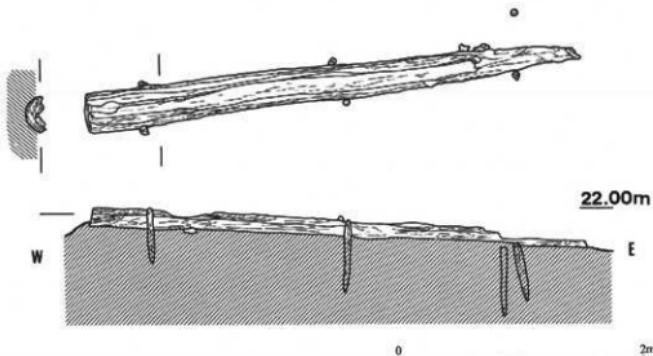


図330 鶴田池東遺跡出土木樋（西浦編・鶴田池東遺跡発掘調査概要より）

観察されている。前者の敷葉工法については大阪府八尾市の龜井遺跡、北九州の水城でも検出されている。工楽普通氏はこの工法が中國や朝鮮半島でもみられることから、これを渡来系の人びとによってわが国にもたらされた技術と評価している。<sup>5</sup> このような新しい築堤技術に、弥生時代以来はぐくまれてきた木工技術が結びついて初めて巨大な溜池の築造が可能となったのである。

狭山池が7世紀の始めに築造されたことはこれまで本書で何度も述べてきた通りであるが、7世紀以降溜池は少しずつわが国の風土に腰をおろしはじめ出土例も増加する。飛鳥時代の事例としては飛

鳥の鳥宮遺跡で検出された石組の園池にともなう木樋がある。<sup>6</sup> この池は7世紀前半のもので日本書紀推古34年条にみえる蘇我馬子邸の池に対応する遺跡と考えられるが、樋はU字型の樋管と板材の蓋を持つ。蓋の端部には樋穴があけられており、また樋をはさむように2本の柱が建ち、先に説明した鳥居建による取水施設が伴っていたようである。狭山池東樋下層遺構も規模の差こそあれは同様の構造を持つ。奈良時代の溜池に伴う木樋の事例としては大阪府鶴田池東遺跡、兵庫県宅原遺跡、愛知県室遺跡のものなどが知られている。鶴田池東遺跡の樋管は丸太を割り貫いた樋管の上に板材の蓋をのせたものであるが、陶製の取水部の一部が検出されているのが注目される。8世紀中葉から9世紀にかけて設置されたと考えられる。<sup>7</sup> 宅原遺跡では樋だけではなく余水吐、堤などが一体的に調査されているが、築造時の樋はヒノキ材の丸太を割り貫いたもので、その上にやはりヒノキ材の蓋板がかぶせられている。奈良時代前期に築造された溜池である。<sup>8</sup> また室遺跡からは何本かの大型の木樋が出土している。<sup>9</sup> 小規模な溜池状の遺構にともなうものとみられるが、古いものは8世紀に設置されている。ヒノキ材の丸太を割り貫いて樋管が作られているが蓋は検出されていない。狭山池東樋下層遺構の先端部も奈良時代のものであるが、やはりヒノキ材の丸太を割り貫いた樋管をもっている。

以上のように飛鳥・奈良時代の溜池の樋は、狭山池東樋下層遺構をはじめとして、いずれもU字型の樋管をもつ。木樋は先述の通り弥生時代に素掘り溝の強化を目的に発生したと考えられるが、古代の樋にU字型のものが多いのもその技術的な伝統を引くためであろう。

古代の樋のうち、まったく例外的な存在は福岡県太宰府市の水城で確認されている樋である。<sup>10</sup> 水

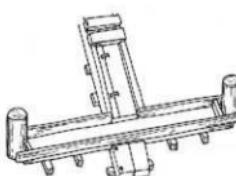


図331 水城取水口復元図  
(『特別史跡水城』より)

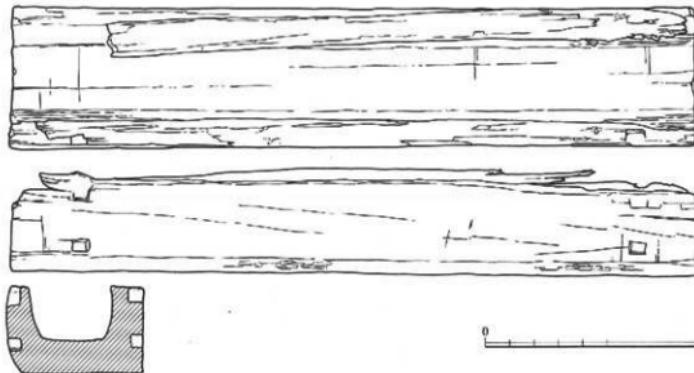


図332 益田出土木樋（泉森鉄「益田池の考古学的調査」より）

城は『日本書紀』天智3年条に築造記事がみられる防衛用の堤であるが、これまでの発掘調査の結果、図331のような取水部の復元案が示されている。樋管は板材を組み合わせて、カスガイなどで留めたもので先に述べた箱形の構造をしている。最近発掘された春日市の小水城でも同様の樋管が出土している。水城の築造には百济系の渡米人が関係したことが『日本書紀』などに記されているが、技術的な先進性にはその強い影響がみられるのだろうか。

#### ④池槽の画期

溜池の築造技術には古代・中世を通じてそれほどの変化はみられない。狹山池では鎌倉時代に重源によって石製の樋管が設置されているが、他の事例と比較するとこれは異端に属する事例といえるだろう。ただしこの事例においても材質面での特異性はみられるが、樋管の構造はU字型であり、同時期的一般的な形態を踏襲している。益田池は弘仁13年(822)に築造されたことが「大和州益田池碑銘並序」などの史料によって知られているが、その樋管と思われるものが検出されている。この樋管の剥り賣き部は内幅60cmにも及び、狹山池東樋下槽構造を凌ぐ規模である。注目されるのは樋管以外にも樋管どうしの繩手材や蓋板と思われる材が出土していることで、泉森鉄氏はこれらの史料から図333のようにこの樋管の復元案を作成している。<sup>9)</sup> この復元案は狹山池東樋下槽構造の両端部で検出されたものとほぼ等しく、奈良～平安期の大型溜池の樋の標準を示すものといえる。樋管の形態は基本的にU字型で、小規模なものは蓋板として長い板材を使用したと思われるが、狹山池や益田池のように大型のものでは短い板材を並べて蓋板としたのであろう。

狹山池においても全国的にも溜池築造技術に大きな画期が訪れるのは近世初頭を行たねばならない。戦国時代に発達した鉱山開発や、建築、造船などの多様な技術がこの時期の灌漑施設に大きな影響を与えており、狹山池で慶長の改修が行われ、長く荒廃していた讃岐の満濃池が改修されたのもこの時期である。統一政権の誕生に伴ってこのような大型の灌漑施設が全国に続々と築造されていった。題に絞って考えても、狹山池ではこの時期はじめて板材を組み合わせて巨大な釘によって固定した箱型の樋管(中樋造構、西樋造構、東樋上槽造構)や、八八型の取水部(中樋造構、西樋造構)が登場する。これらは明らかに専門職人の手による仕事であり、この時期に灌漑施設の建設に従事する樋大工、黒鍛などの専門職人が誕生したことを見せていている。狹山池の樋では船材の再利用や舟釘、マキナワ技法の応用など明らかに船大工が樋作りに関与した痕跡がみられる。箱型の樋管の導入によって長大な樋の築造が可能となり、溜池の規模は一挙に巨大化した。戦国時代に発展した諸技術が統一政権の誕生や鎖国の影響もあって内陸に転じたのがこの時期であるといえる。もちろん溜池築造技術の進歩は、

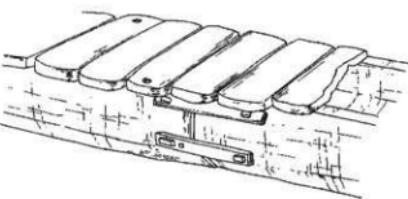


図333 益田池出土木樋復元図  
(泉森鉄氏「益田池の考古学的調査」より)

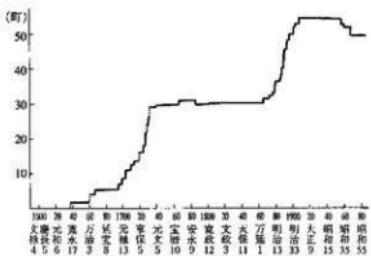


図334 田原本町における溜池面積の推移  
(宮本誠「奈良盆地の水土史」より)

表33 岩室村の溜池築造年代

池名	築造年代
湯り池	明忠7(1498)
北池	天正11(1583)
尻屋池	慶長6(1601)
上池	承志1(1652)
すっぽ池	不明
芦池	寛文1(1661)
水谷池	正保2(1645)
見取池	貞享3(1686)

近世における爆発的な耕地の増大の前提となるものであった。

近世初頭には灌漑施設の大型化だけではなくその量的な普及もみられた。大型の溜池が築造されていく反面で、谷間に小規模な溜池が多く築かれていたのもこの時期である。表33は狭山池にすぐ東接する大阪狭山市岩室の溜池の築造年代一覧であるが、近世前期に主な溜池が成立していることがわかる。<sup>⑨</sup>また平野部には四周を堤防で囲んだ皿池がよく見られるが、このような皿池の起源こそ中世にさかのぼるもの、その多くが造られたのはやはり中世末から近世のことと思われる。図334は宮本誠氏によって明らかにされた奈良盆地の中央に位置する田原本町内の溜池面積の推移である。<sup>⑩</sup>元禄～享保期に多くの溜池が造られていることがわかるが、狭山池の灌漑範囲である南河内においては築造時期のピークはこれよりも若干古くなると思われる。

樋管の設置技術からみると古代から中世に至るまではU字型樋管が主流であるが、近世に入ると箱型樋管が採用されるだけではなく、小規模な溜池では丸太を半切して内側をえぐり再び組み合わせたO字型の樋管が多く用いられるようになる。箱型樋管はその技術的な高さから船大工や建築大工などの系譜を引く専門職人(船大工)によって作られたと考えられるが、O型樋管はそれほどの技術を要するわけでもなく農民が自ら設置することが可能であったとみられる。近世初頭の溜池の大型化に対応する技術として箱型樋管や尺八樋が、また同時期の溜池の地域的・階層的普及に対応する技術としてO型樋管が誕生したと考えたい。狭山池のすぐ北側の池尻城跡でも近世のものと思われるO型の樋管が出土している(第2章第5節参照)。

## ⑤小 結

狭山池から出土した樋は年代的にもわが国の溜池の樋の歴史の全体をほぼカバーするものであり、また溜池の規模の巨大さから考えて、同時代の技術の中でも最先端を示すものと考えられる。以上の小論においては狭山池出土の樋の現時点での復元案と、樋の系譜について考えてみたが、樋をめぐつてはさらに検討すべき事項が多く残されている。本論ではほとんど触れることができなかったが、木工技術が樋の築造技術に与えた影響には大きなものがあると考えられる。たとえば箱型樋管の誕生には、カンナや大鋸の存在が当然のことながら前提となるだろう。これらのことについては遺物の詳細な観察が必要であるが、現在、遺物は保存処理中であり果たせなかつた。また東樋上層遺構では板に番号が書き入れられており、樋を造った職人集団の組織の存在が想定できるが、これらの樋築造の実際の扱い手の問題は、文献の検討も含めて今後の課題である。幸いにも狭山池出土の樋は保存処理の後、(仮称)狭山池ダム資料館において展示される予定である。今後、モノに即した研究の進展がさらに期待できよう。

## 注)

①九州地方にこの例が多い

②『住吉大社司解』にみえる

③『大和國弘福寺文書目録』にみえる

④『狭山池改修記』1931・末永雅雄『池の文化』創元社 1947

⑤西口陽一他『山賀 その2』大阪文化財センター 1983

⑥寺川史郎他『池島・福島跡遺跡発掘調査概要』Ⅶ、大阪文化財センター 1992

⑦坂 靖『古墳時代の導水施設と祭祀』(『考古学ジャーナル』No.398 1995)

⑧T.桑吾道『日本古代の一土木技術に関する予察』(『奈良国立文化財研究所創設40周年記念論文集』1998)

⑨秋山山出雄『飛鳥島庄の菟池遺構』(『佛教藝術』109号 1974)

⑩芝野生之助他『西浦橋・鶴田池東跡遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1979

- ⑪須藤宏他『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- ⑫都築暢也「木橋を伴った漁港施設について」『室遺跡愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第49集 1994)
- ⑬『特別史跡水城跡』太宰府市教育委員会 1994
- ⑭泉森胶「益田池の考古学調査」『櫛原市千塚資料館報』1 1978)
- ⑮『大坂狭山市史』民俗編 1997より
- ⑯宮本誠『奈良盆地の水土史』農山漁村文化協会 1994

## 第6節 発掘成果からみた各時代の狭山池

狹山池調査事務所 市川秀之

### 1はじめに

本報告書の第2章で報告した通り1987年の狹山池調査事務所設立以来、狹山池内外の発掘調査は継続的に実施されてきた。個々の発掘調査は工事の進捗にあわせて、年度ごとに調査区を設定して実施したために、その成果には注目すべきものが多かったものの、概要を個別に報告するだけでは狹山池の歴史の全体像を表現しえないという問題がある。発掘調査成果を統合し、さらに同時に進められてきた文献史料の調査や、自然科学の調査の成果とも照合していく作業が、狹山池の全体像の理解には不可欠である。本項においては、報告書のまとめの意味もこめて、発掘調査からみた各時代の狹山池の復元作業を、下流の開発史とも関連づけながら行うこととした。

### 2各時代の狹山池の規模

各時代の狹山池の規模を復元するためにはいくつかのデータが必要であるが、特に重要なのは各時代の北堤の高さであろう。この問題については北堤断面の調査によって、時代ごとの堤体の高さがほぼ明らかになっている。しかしながらさらに詳細に池の規模を復元するためには、狹山池築造以前の地表面の状況と、各時代の水面の標高を知る必要がある。前者については三田村宗樹氏が工事用に実施された膨大な数のボーリングデータを集成、解析して図335のような等高線図を作成している。<sup>①</sup>この等高線図はダム工事以前の池底の標高から池による堆積物を除去した数値を出して作成されたものである。この図は狹山池築造以前、あるいは拡張過程の狹山池の復元にとって非常に有効な情報を

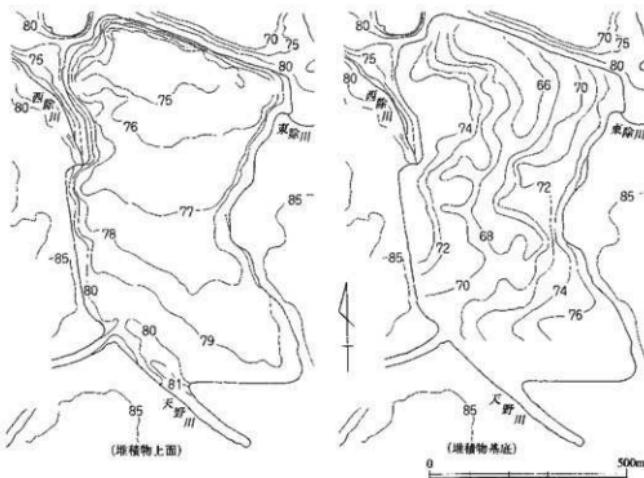


図335 狹山池内の等高線図  
(三田村宗樹「既存ボーリング資料のデータベース化と狹山池堆積物の分布状況」より)

与えてくれる。また各時代の池の水位については、堤防の高さからある程度の推定が可能であるが、厳密な復元を行うためには池の洪水吐(除)の標高を知る必要がある。除は堤とは異なり、災害や改修を重ねるたびに前時代のものが破壊されていくので、発掘調査では情報を得ることは困難である。そこで本項においては、各時代の除の標高を考える資料として、現在の大坂狭山市とその周辺の溜池の堤体天端の高さと、余裕高(堤体天端の標高から除の標高を引いた数値)を調べ、堤体の高さを横軸に余裕高を縦軸に図336のようなグラフを作成した。溜池を造る場合、可能な限り最大限の水を貯めようとするのは当然であるが、除の高さをあまり高くすると、洪水時に甚大な被害をもたらす懼れがある。度重なる災害の歴史の中で、堤防の高さと余裕高には経験的に一定の関係が生じることが考えられる。図336をみると両者にはおおむね直線で示したような相関関係があり、この関係は溜池の性格が歴史的に不变である以上、過去の溜池にも適応できると考えたい。なお大阪府の耕地課では、風による波が1m以内の溜池の場合、次のような式で溜池の余裕高を計算している。

$$\text{余裕高}(h_0) = 0.05H_1 + 1.0 \text{m} \quad (5 \text{ m} \text{ 以内単位以下切り上げ}) \quad H_1: \text{最高水深}$$

最高水深は堆積物がないときには堤防の高さ( $h_1$ )から余裕高を引いた数字になるので、上記の式は次のように書き替えられる。

$$h_2 = 0.05(h_1 - h_0) + 1.0 \text{m} \quad h_2 = 0.0476h_1 + 0.952$$

この一次関数式で求められる直線を図336には点線で示しておいた。これをみると天端高が7m以上

の溜池においては数値

で求められる余裕高よりも随分安全をみて除の高さを設定していることがわかる。大型の溜池では災害時の被害も大きいためであろう。以上のように堤体の高さと余裕高想定値の関係が明らかになったので、狭山池についても各時代の堤防の高さが決まればグラフと照合することによって余裕高が求められることとなる。除の標高も同時に明らかになるので、その標高を先の図の等高線図で追い掛ければある程度各時代の狭山池の規模を明らかにすることが可能となる。もちろん池底についても人工的な開削が想定

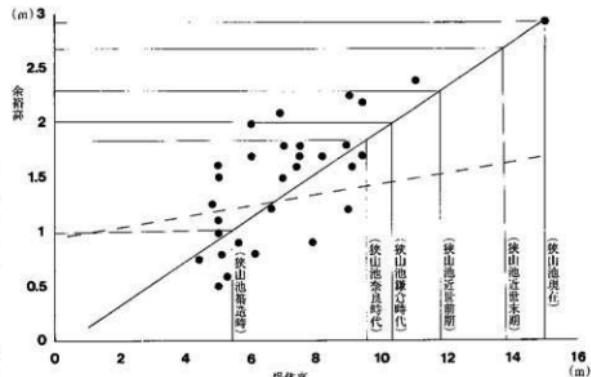


図 336 堤体高と余裕高の関係

表 34 各時代の狭山池

	天端高 標高(基盤高)	余裕高	當時 満水位	発掘文献で確認できる施設		下流の動向
				橋	除け	
築造前						小規模な水田
6世紀	74.4(5.4)	1.0	73.4	東橋下層構造	(東)除	沖積平野の開発
奈良時代	78.5(9.5)	1.8	76.7	東下層構造		太淵池・段丘開発
鎌倉時代	79.2(10.2)	2.0	77.2	中橋石橋		西除左岸の開発
近世初頭	80.8(11.8)	2.3	78.5	中橋道構 西橋道構 東橋上層構造	西除 東除	水路網の整備
近世末期	82.8(13.8)	2.7	80.1	中橋・西橋	西除・東除	水ド村の離脱

できるが、この点は各時代の条件を考慮する必要がある。

以下の考察においては、発掘調査以前に発表されている日下雅義氏の研究<sup>⑤</sup>や、調査と同時期に発表された木村昌弘氏らの研究<sup>⑥</sup>を参照しながら、発掘調査で堤や橋などの様子が明らかになっている、狭山池築造時（6世紀）、奈良時代、鎌倉時代、近世初頭、近世末期および狭山池築造以前の様子を可能な限り復元することに努めたい。

### 3 狹山池築造以前

狭山池の築造以前には、旧天野川と三津屋川は現在の狭山池内において合流し、北流していたことは間違いない。日下雅義氏は航空写真の判読や、ハンドオーガーによる地質の調査によって北堤以北の旧河道の流路を図337のルート1のように復元している。<sup>⑦</sup> 今回の調査で狭山池の北側で行った調査としては池尻遺跡(1)、(2)の調査があるが、これらの調査の結果によると、池尻遺跡(1)では図337のB調査区より西において厚い砂層が確認されているので日下氏のこの部分の復元はほぼ正確であるといえる。ただB調査区の箇所については狭山池築造直前には河川には埋まり水田が造られている。またC調査区においては庄内期の遺構が検出されておりしかも砂層はみられなかったので、川幅は復元よりもやや細かったと思われる。また北堤の直下にあたる池尻遺跡(2)においては①の地点よりも東において砂層が観察できた。①の地点はちょうど日下氏が復元された河川の西端にあたる。また東池尻1号窯の箇所ではこのような厚い砂層はみられなかったので、この箇所においても概ね日下氏の復元は正確であるといえる。ただこのような沖積地では河道は何度も変更していることが予想される。狭山池内部の掘削工事では中権の箇所よりも西側において旧河道が検出されているので時期によれば図にルート2として示したように、現在の蓮池の場所を通って北流する河川が存在した可能性がある。そして河川の東西に池尻遺跡(2)あるいは池尻遺跡(1)のC調査区・B調査区のような小区画の水田が河川の周辺に点在する風景を狭山池築造直前のものとして推定できる。

近世初頭に狭山池の灌漑範囲に含まれていた範囲を示したのが、図338である。この時期に狭山池の灌漑範囲はもっとも広くなっている。狭山池と下流の開発動向を考える時にはひとまずはこの範囲が考察の対象となろう。またこの地域のうち旧丹南郡については鈴木俊夫による詳細な遺跡分布論が出されている<sup>⑧</sup>ので、これらの研究や大阪府教育委員会、大阪府文化財調査研究センター、各市町村教育委員会から出されている報告書類を参照しながら、当該地域の開発の状況を考えていきたい。

7世紀初頭の狭山池築造以前にもこの地域においては、黒姫山古墳を始めとするいくつかの古墳や、須恵器窯、埴輪窯などの生産遺跡などが見られるが、集落遺跡に限定するとその数は東側の石川流域や、西側の石津川流域と比較して非常に少ない。西除川流域の弥生時代の大規模な集落としては、弥生後期の水田が多く出土している上田町遺跡があり、また古墳時代の遺跡としては5世紀初頭から



図 337 北堤以北の旧流域  
(日下雅義『歴史時代の地形地図』所載図に加筆)

大規模な集落がみられる大和川今池遺跡がある。ともに狭山池からははるか北側の遺跡であり、また旧天野川が形成した氾濫原や沖積段丘上に展開する遺跡である。さらに流域の南側では河川の東西に中位段丘が広がっているが、この地域においては狭山池築造以前の集落遺跡としては6世紀末以降に集落が展開する太井遺跡・平尾遺跡がわずかにあげられるだけである。以上のことからも明らかなように、7世紀初頭の狭山池築造以前においては、北部の氾濫原や沖積平野においては集落や水田が営まれていたものの、南部の中位段丘においてはほとんど開発は進んでおらず、谷地形や氾濫原を利用して小規模な水田や集落が営まれていたという状況がうかがえる。狭山池の築造はこの地域の開発にとって非常に大きなできごとであった。

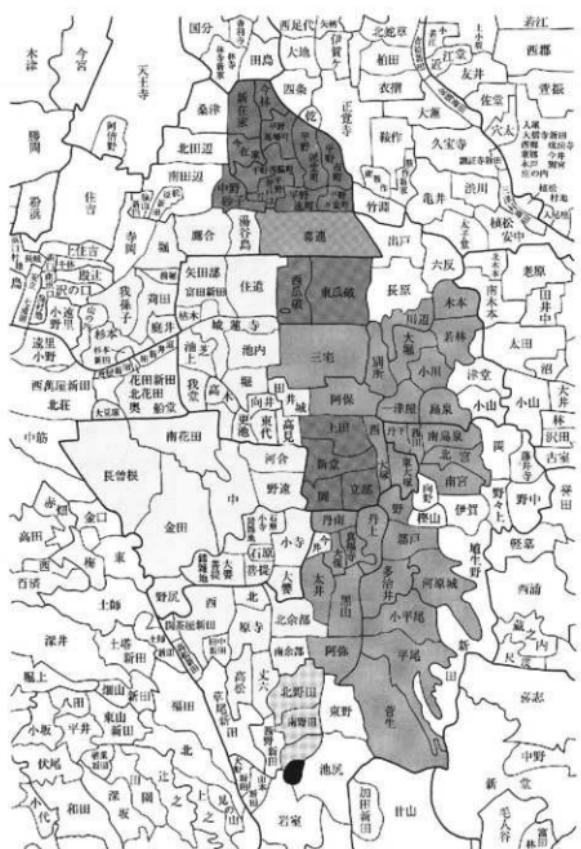


図338 慶長期の狭山池灌漑範囲 (薄: 西側掘り・流: 中側掘り・点: 手山池太溝池直法)

#### 4 築造時の狭山池

狭山池の築造時の造構として検出されているのは東柵下層造構および北堤断面の12層である。北堤のレベルから当時の水面は73.4m程度と推定される。図335に示された等高線を追い掛け、西除、東除付近のように後世に人为的に掘削が行われた部分についてはその影響を考慮して作成したのが図339である。この時期の柵のうち発掘調査で確認されているのは東柵下層造構だけであるが、谷底平野の一番低い箇所である中柵付近にも、底水を取るために当然柵が存在したと思われる。問題は西柵が存在したかどうかであるが、考古学的には判断できない。ただこの時期の堤防の規模は、東西の段丘面よりも低いことを考慮すれば柵から出た水を現在の西除川方面に流すことは困難であり、西柵が存在したとしても堤の北側の谷底平野に落とすしかない。仮に中柵が存在したとすれば灌漑の面でこ

れは余り意味のない樋である。よってこの時期には東樋および中樋の二つだけが存在したと考えたい。

また築造時から除は当然存在したと思われるが、その場所についても不明である。工事の中で現在の除の北側において御庭池方面にむかって伸びる溝状の掘りこみ検出されたが、この掘りこみの底部は約73mであり、先に推定した常時溝水位には等しい。もちろんこの掘りこみの性格については後世の掘削や災害の痕跡である可能性があるが、ここではそのレベルを重視して築造当初の除と考えたい。この除の水は現在の御庭池を通じて北堤より400m北側で谷底平野に流れこみ東樋からの水路と合流していたと思われる。西側の除についてはその存在を裏付ける根拠はないが、存在した可能性が高い。

築造直後の狭山池の規模、施設については以上のように推定しているが、その築造方法についても少し考えてみたい。溜池築造以前には先にも述べたように谷底平野を河川が北流していたが、溜池を造る際には、この河川をどう制御するかがまず問題となる。

ここでは東岸部の調査で出土している大溝を工事のために河川をつかかえたバイパス水路の痕跡と考えた。この水路は現在の狭山池の東岸に沿って北流し、東樋遺構付近

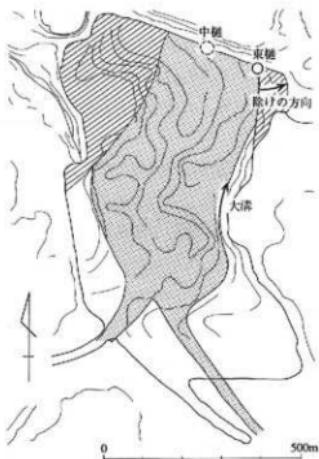


図339 築造時の狭山池  
(斜線部は近世の人工 挖削箇所)

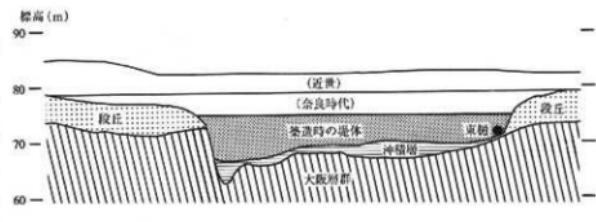


図340 堤体の高さと周辺地形

に至っていたと思われる。東樋下層遺構はこのバイパス水路を利用して敷設された可能性があろう。このようにして河川を東側に付け替え、その間に中樋を設置し、その後に再び河川を戻して、今度は東樋を設置したのち堤防の築造に移ったものと思われる。堤防の築造方法は北堤断面の項で述べた通りであるが、堤防の長さは図339の通りであるとすれば約300mとなる。

次に狭山池築造の下流への影響を考えたい。狭山池はもちろん狭山池より下流側の農業用水の確保のために築造された溜池であるが、築造当初の灌漑範囲はどの範囲であったのであろうか。その際に狭山池が北側の沖積地の灌漑を目的としたものか、あるいはその東西に広がる段丘面まで灌漑範囲としていたのかがまず問題となろう。沖積平野については池尻遺跡(1)・池尻遺跡(2)の項で述べたように狭山池築造以前から小規模な水田は谷底平野の各所に存在しており、狭山池がてきてはじめてこの地域に水田が造られたと考える必要はない。むしろ沖積地の開発については狭山池の築造によって、点的な開発が面的に拡大し、またその安定性を増したものとして評価されよう。池尻遺跡(1)のC調査区においては狭山池築造前には、不整形の小区画水田が存在していたが、7世紀には整然と北西方に向を向いた畦をもつ水田が形成されている。また北堤の直下に位置する池尻遺跡(2)の水田は狭山池築造に伴って廃棄されている。狭山池の築造によって、北側の沖積地においては大規模な区画、水利の

再編成が行なわれたことが想定できる。また狹山池の築造についてはこれまで段丘上の開発と関連して論じられることが多かったが、段丘面の高さにまで達していない堤防の規模を考えると、この段階の狹山池が東西の段丘面に水を送る可能性は少ないだろう。狹山池の築造はまず沖積平野の開発を第一義的な目標としてなされたものと考えられる。

### 5 奈良時代の狹山池

奈良時代には文献で知られている改修として、天平3年(731)の行基の改修と天平宝字6年(762)の改修がある。これらの改修の痕跡は今回の北堤断面調査でも確認されている。また東側下層遺構が上流側に延長されているのも天平宝字6年の工事に伴うものと考えられる。特に天平宝字6年の改修は大規模なもので狹山池の堤防はこの段階で初めて東西の段丘上面の標高に達している。それに伴って汀線は南側に拡大したものと思われる。この時期の堤は基本的には前代のものを改修して利用しているので、中樋および東樋が存在したと思われる。またこの時代には堤防が段丘面の高さまで達したために、段丘面を大規模に掘削して除を設けることが可能となった。もちろん除の場所を特定することはできないが、いくつかの候補地は考えられる。日下雅義氏は行基の改修のころまでに池の西側の段丘面を掘削して現在の西堤→副池の方向に西除が設けられた可能性を述べておられるが、除としては日下氏の想定ルート以外にも、現在の池尻新池付近の谷などが考えられる。また先に述べた東側の除については底面のレベルが約73mと低いためこの時期には放棄された可能性が強い。

また狹山池に関連する奈良時代の動向として重要なのが『続日本紀』に記された天平4年(732)の狹山下池の築造である。この狹山下池は狹山池よりも約1km北側に所在する太満池のこととしてほぼ間違いがない。太満池は狹山池と同様に南河内の開発にとって大きな意味をもつ溜池である。それは太満池が丹南郡の条里地割の南限となっていることからもうかがわれる。現在の狹山池の堤防は東北→南西方向を向いており、この方向は築造以来変化がないことが調査の結果明らかになっているが、これに対して太満池の堤防は正しく東西方向を向いている。このことは太満池が、この地域の条里制の施工と一緒にになって築造されたことを示している。図341は狹山池周辺の谷底平野の底部および東側の段丘面の高さを示した模式図である。この図をみれば築造当初の狹山池の堤防は段丘面まで達せず、奈良時代になってようやく堤防がその高さに至ったことが読み取れる。また狹山池の水を段丘上面に導くためには相当な距離の水路が必要であることもわかる。次に太満池に注目すると太満池の箇所において沖積地の底面レベルと段丘面のレベルの差が非常に小さくなっていることが明らかである。この立地から考えても太満池は東側の段丘面上に水をあげる目的で築造された溜池であることがうかがわれるが、現在の水利形態をみても太満池はこの機能を果たしている。太満池の三つある堰のうちもっとも東にある牢樋から出た水は段丘崖にそって流れ、美原町の平尾、菅生よりも北においては段丘上の水田に水を供給している。以上のことから考えて奈良時代の狹山池改修および下流の太満池の築造は南河内の段丘面上の開発を大きな目標としたものであったと思われる。この時期の下流遺跡の動向をみても、観音寺遺跡、真福寺遺跡、太井遺跡、日置庄遺跡、丹上遺跡など狹山池の灌漑範囲で



図341 狹山池・太満池堤体の段丘の標高

あったと思われる中位段丘上の遺跡において、8世紀を契機として集落が營まれるようになってくる。狹山池が築造された7世紀初頭にまでさかのぼる集落遺跡は、清堂遺跡や新金岡更池遺跡などその数も少なくまた狹山池からも北側にずいぶん離れた遺跡であることを考えれば、8世紀が旧天野川流域の開発にとって一つの画期をなすことは明らかであろう。奈良時代の狹山池改修と太満池の築造によってこの地域の段丘上の開発はようやく本格化したのである。

## 6 鎌倉時代の狹山池

鎌倉時代の狹山池の状況についてはきわめて情報が少ない。中樋造構から出土した石樋や重源狹山池改修碑によって重源の手で中樋が改修されたことが確実であるが、考古学的な遺構からはそれ以外のことは読み取れない。

重源狹山池改修碑文の中で当時の灌漑範囲に多少とも関連するのは「摂津河内和泉之人民之誘引」によって重源が改修に乗り出したという部分である。狹山池が荒廃したので、これらの地域の人々が重源に工事を依頼したという内容からは、少なくとも当時の灌漑範囲が摂河泉の三ヶ国にまたがっていたことが推定できる。狹山池が所在する河内が狹山池の灌漑範囲であるのは当然であるが、摂津や和泉がその灌漑範囲となるためにはいくつかの前提が必要である。摂津については狹山池の灌漑範囲がもっとも広かったと思われる慶長17年(1612)に平野郷・喜連村・廣谷村・湯谷嶋村・我孫子村・庭井村など摂津の村落に狹山池の水が供給されている(図338参照)。これらの村のうち平野村の一部と喜連村以外は、西樋→西除川のルートをたどって、西除川に設置された各村の井堰から取水している。また同様に和泉については慶長17年の段階では人豆塚村が狹山池の灌漑範囲に含まれているが、この村も西樋→西除川のルートで水を引き入れている。したがって摂津や和泉の村落に水を送るために西除川に水を落とす樋の存在が前提となる。慶長改修以降はこの機能を西樋が担うこととなるが、鎌倉時代の段階でこの西樋に替わる樋が存在したとみるのか、あるいは樋は中樋が唯一の樋で太満池において東西への分水がなされていたのかは現在のところ判断できない。ただ重源の工事がほぼ中樋周辺に限られていたことからここでは一応後者の立場を取っておきたい。しかしながら鍋柄氏の研究においては、鎌倉時代以後西除川左岸の遺跡が飛躍的に増加したことが明らかにされている。このような下流遺跡の動向が重源の改修のみによるものとは思えないが、この時期を画期として西除川が狹山池の主要水路としての機能を担うようになり、左岸の開発が大きく進展したことは指摘できよう。重源の改修よりも約1世紀後には西除川に沿って、池尻城や野田城・大豐城が出現する。これはもちろん南北朝期の政治状況に対応したものであるが、これらがいずれも西除川に沿った水利の重要な地点に立地していることは、狹山池とその水利の掌握が当時の地域権力にとっても重要な課題であったことを示している。

## 7 慶長改修時以降の狹山池

慶長の改修時の汀線は近世の絵図などからある程度復元が可能であるが、いくつか解決すべき問題点がある。図342に実線で示したのは、「狹山池法下耕地整理地区及び之隣接スル土地現形並予定図」(狹山池土地改良区蔵)などから復元した昭和の改修以前の汀線である。現在と比較すると、東除の南側に2ヶ所入江状の地形があり、また西側にも2ヶ所同様の入江状の地形がみられる。いずれも東西の段丘に刻まれた開析谷の影響を受けたものである。また南岸には現在南堤があり直線的なものとなっているが、かつては小規模なデルタ地形を示していた。北堤および東岸については近世を通じて、この昭和改修以前の汀線のままであったと思われるが、南岸の河川の流入状況および西除の場所につ

いては近世の中でも時代によって変化がみられる。南岸については慶長改修当時の状況を復元した図343に示した通り大きく南に広がっていた。この部分は河川の流入口に近いために土砂の流入が激しく、ことに上流で新田開発がさかんに行われるようになつた元禄時代以降は堆積物が池を埋め、ほとんど水が溜まらなくなつた。そのためこの部分は埋め立てられて田畠となり、池内新開と呼ばれた。この部分については点線で表示してある。池尻新開ができる以降は天野川も現在の流路よりも少し東側を流れていることがいくつかの絵図に描かれている。天野川の付け替えの時期は史料的に明らかではないが、明治6年(1873)に作成された「河内国丹南郡狭山池図面」(田中家文書)などではすでに現在の位置に付け替えられているので近世後期の改修で流路が変更されたことがわかる。西除の位置

についてはさらに複雑である。図152に示した「狭山池西除ケ略図」(田中家文書)には黒い太線で堤が印されているが、これの堤が直線部からはみでた場所はかつて西除が存在した場所に残された腕堤であると思われる。この絵図をみると限ても4回程度西除が改修され、その位置も少しづつ南側に移動していることが読み取れる。昭和の改修においては西除の場所自体は移動しておらず、現在の場所に西除けが設置されたのは安政の改修の時と考えられる。図343には近世の絵図や古文書から推定される各時代の西除の場所を示しておいた。天明期以降には西樋の西南に小池という小さな池が存在するが、天和3年(1683)「狭山池巡見絵図」(田中家文書)にはちょうどこの小池のあたりに西除が描かれている。近世には西除がたびたび決壊したことが多くの近世史料に記されているが、おそらく慶長の改修の時には小池の場所に除が築かれ、決壊と改修の連続によって除の場所が南に移動したため、元の除の場所に小池が造られたものと思われる。

慶長改修では中樋・西樋・東樋の三つの樋と東西二つの除が造られている。ダム工事前のボーリング調査や、工事中の観察によれば、図339の斜線の部分は大阪層群が池底にはほとんど露出していた。この場所にも元来は段丘層がのっていたはずであるので、西樋の位置を考えると慶長の工事の時にこの部分の掘削がなされた可能性が大きい。ただし先にも述べたように中世段階での狭山池の様相は重源の中樋の改修以外はほとんど不明であるため、この部分が慶長以前に掘削されていた可能性も否定はできない。また東除については狭山池から池尻新池北側までの間の東除川は慶長改修の時はじめ



図342 昭和改修前の狭山池

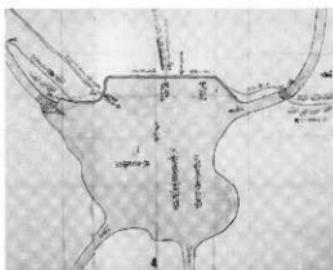


写真 111 狹山池巡見絵図  
(天和 3 年・1683・田中家文書)

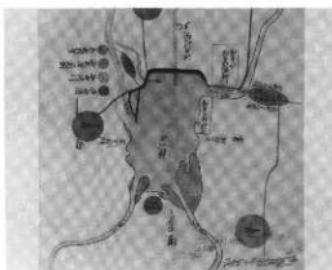


写真 112 衛巡見御改狭山池絵図  
(天明 8 年・1778・田中家文書)

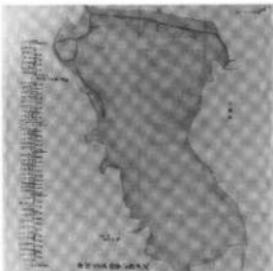


写真 113 河内国丹南郡狭山池圖面  
(明治 6 年・1873・田中家文書)

て掘削されたことが正保期に作成された「河内国絵図」(内閣文庫蔵)などの史料によって明らかである。東除が現在の位置に設置されたのも慶長改修時であろう。現在の東除は段丘崖よりもさらに東に存在するので図339の斜線の部分が慶長改修に際して掘削されたと思われる。また三つの樋については今回の調査すべてその遺構を発掘することができた。中樋と西樋については割賦帳などの史料によってその灌漑範囲が明らかであるが、東樋については近世初期に既に廃絶していることもあって灌漑範囲は明瞭ではない。東樋は1段であり、規模の点で他の樋とは大きな差があり、狹山池と太満池の間の谷底平野の東半分を潤したものと考えられる。慶長の改修が下流に与えた大きな影響については既にいくつかの研究がある。朝尾直弘氏の研究によって更池村(現松原市)では新たに溜池が造られ、また耕地の間の水路が整備されより生産制が高まったことが明らかにされている。<sup>⑤</sup> 三宅村(現松原市)の大海池や深淵池のような大型の溜池が慶長期に築造されているように、<sup>⑥</sup> 狹山池の改修は下流の水路網、溜池網の再整備を随伴現象としてひきおこし、結果として近世初期のこの地域の生産性は飛躍的に高まったといえる。これら下流の水利に関する研究については本報告について刊行される『狹山池』論考編にいくつかが掲載される予定である。

近世に狹山池では度重なる改修が行なわれており、それを示す多くの史料も残されている。狹山池調査事務所ではこれらの狹山池関係の古文書、絵図の調査にも取り組みすでに『狹山池』史料編を刊行している。同書巻末の年表には知りうる限りの狹山池の改修を掲載しているが、同書の刊行後、さらに新史料の発見が相次いでいる。近世の度重なる改修の原因となったのはやはり災害であった。慶長元年(1595)の大地震が狹山池の慶長改修の一つの原因となったことは、地質学者の共同研究によつて明らかにされているが、このほかにも宝永4年(1707)の地震でも狹山池が被害を受けたことが「中林池日記」(中林家文書)などに記されている。また東樋が放棄されたのも元和6年(1620)の台風が直接の契機であったと思われる。近世を通じて北堤が災害の被害を受けた例は比較的少ないが、西除についてはたびたび洪水によって崩壊している。このような災害と改修の繰り返しは明治以後も継続してみられる。明治39年(1906)に完成した工事で初めてコンクリートが使用され、また昭和初期の大改修が実施されることによって、ようやく災害と改修の繰り返しから脱却することができたのである。

## 8 小 結

狹山池から出土した遺物、遺構のものも情報量は果てしなく大きい。行基や重源、片桐且元、小堀遠州ら各時代の著名人物が改修にかかわっていることもあり、狹山池を縦軸にわが国の農業土木史の縦軸を構成することも不可能ではないだろう。また狹山池調査事務所では豊富に残された文献史料の分析や、下流で行なっていた水利慣行調査を実施しており、多くの研究者の手によって堤体や池内堆積物の自然科学的な分析も進められている。発掘調査の成果に加えて、これら多くの分野の成果を参照できたことが、狹山池研究に厚みを加えたのではないかと自負する一方で、あまりに情報が多いためにそれらを十分消化しきれなかったのではないかと畏れている。狹山池からは多くの遺物、遺構が出土しているが、狹山池本体は埋蔵文化財ではない。7世紀から現在に



図343 廉長改修時の狹山池

至るまで、時に災害のために荒廃することはあっても、そのたびに多くの人々の手で改修がなされ使い続けられてきた生きた文化財である。そしてその使命は今回のダム工事の後も変わることはないだろう。災害と改修の歴史に象徴されるように溜池は自然と文化の接点に位置する存在である。溜池の歴史の探求は、自然と人間の関係性についての考察に連続していく。工事を終えて、装いを新たにした狹山池が、自然と人間、環境と開発の関係を見つめなおす場となれば幸いである。

### 注)

- ①三田村宗樹 「既存ボーリング資料のデータベース化と狹山池堆積物の分布状況」(『狹山池調査事務所平成元年度調査報告書』狹山池調査事務所 1990)
- ②日下雅義 「歴史時代の地形環境」 古今書院 1980
- ③企盛弥・古澤裕・木村昌弘・西園憲次 「狹山池ダム・古代の堤体が語る土木技術史について」(『土木史研究』15 1995)
- ④日下雅義 「歴史時代の地形環境」 古今書院 1980
- ⑤鷲柄俊夫 「中世丹南における職能民の集落遺跡」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 1993)
- ⑥朝尾直弘 「近世封建社会の基礎構造」 御茶の水書房 1967
- ⑦『松原市史』第1巻 1985

## 報告書抄録

書名	『狭山池』埋蔵文化財編					
副書名						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	市川秀之・植田隆司・光谷拓実・渡邊正巳					
編集機関	狭山池調査事務所					
所在地	〒589-8501 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1 TEL0723-66-0011					
発行年月日	西暦 1998年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
狭山池	大阪府大阪狭山市 岩室	27231	34度30分 15秒	135度33分 45秒	198810～ 199612	狭山池ダム化工事 ともなう埋蔵文化 財調査
東池尻1号窯	東池尻	27231	34度30分 15秒	135度33分 30秒	199209～ 199303	
池尻遺跡	池尻	27231	34度30分 0秒	135度33分 45秒	199109～ 199303	
池尻城跡	池尻	27231	34度30分 15秒	135度33分 45秒	198810～ 199210	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
狭山池	溜池	7世紀～現代				
北堤		江戸時代	堤防 護岸	須恵器・土師器 磁器		
木製枠工		江戸時代	樋	甕・桶取水部		
中樋遺構		江戸時代	樋	樋管		
東側上層遺構		江戸時代	樋	樋管		
東側下層遺構		7世紀	樋	桶取水部		
西側遺構		江戸時代	樋	須恵器		
東岸部		古墳時代後期	大溝・建物	須恵器		
1号窯	窯	古墳時代後期	須恵器窯	須恵器		
2号窯		古墳時代後期	須恵器窯	須恵器		
3号窯		古墳時代後期	須恵器窯	須恵器		
4号窯		古墳時代後期	須恵器窯	須恵器		
東池尻1号窯	窯	古墳時代後期	須恵器窯	須恵器		
池尻遺跡		古墳時代初期 ～鎌倉時代	水田・屋敷	須恵器・瓦器・土師器		
池尻城跡		近世	溜池			



# 図 版

図版1

狭山池の景観



1 狹山池の全景 北から・1985年



2 狹山池の全景 北から・1990年



1 東 除 (1989年)



2 西 除 (1989年)



3 龍神祠 (1989年)



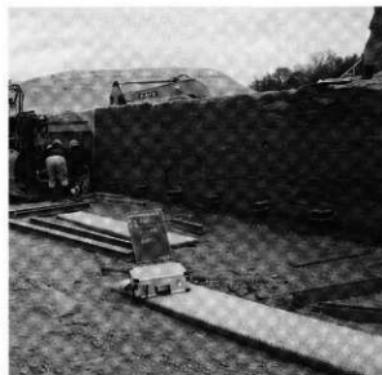
1 堤体保存箇所（中樋地点）



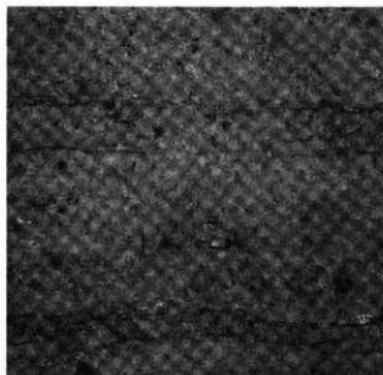
2 中樋地点西側断面



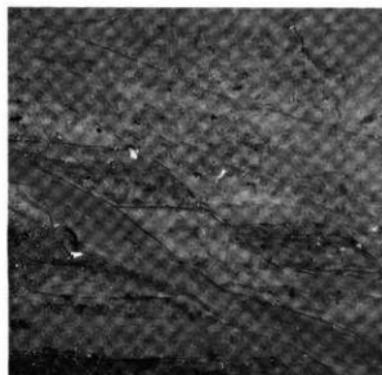
3 断面の整形作業



4 H鋼の挿入作業



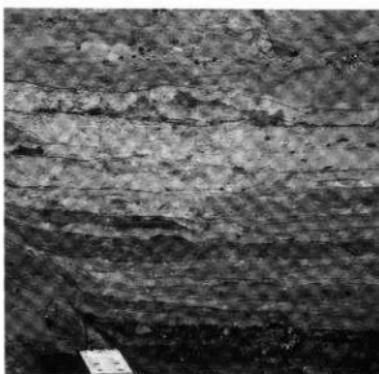
5 第8層の液状化の跡



6 第8層の滑り痕



7 第10層灰土層の広がり



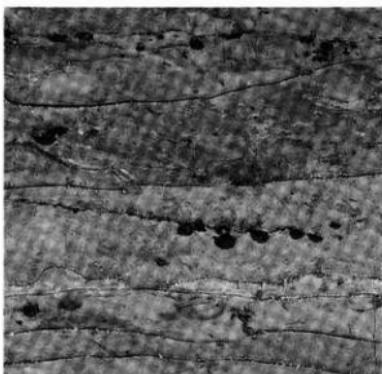
8 第10層灰土層断面



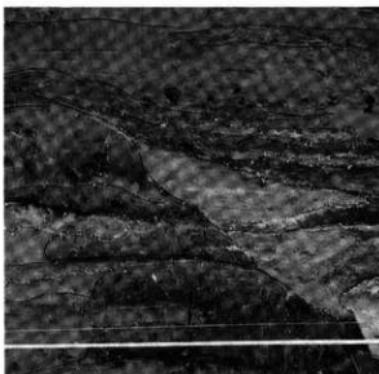
9 第10層灰土層遺物出土状況



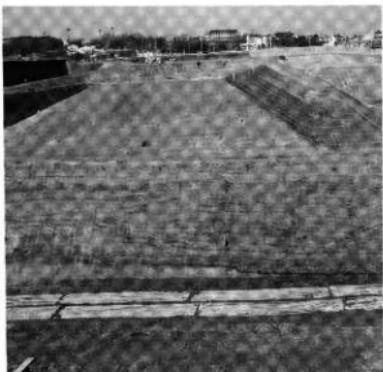
10 第10層敷葉



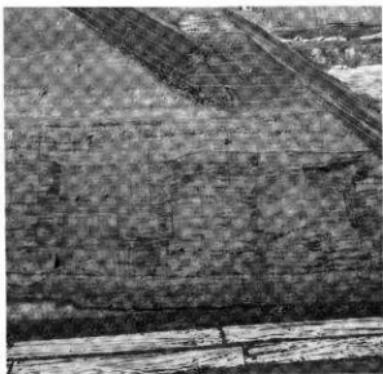
11 第10層敷葉



12 第12層土質積み（斜面部分）



13 東極地点西側断面



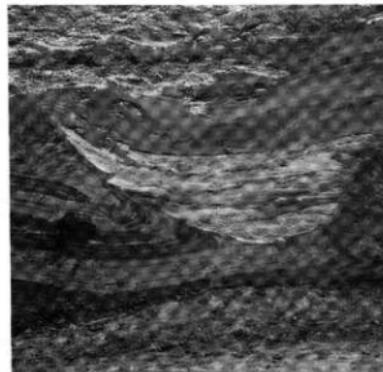
14 東極地点西側断面土臺積み



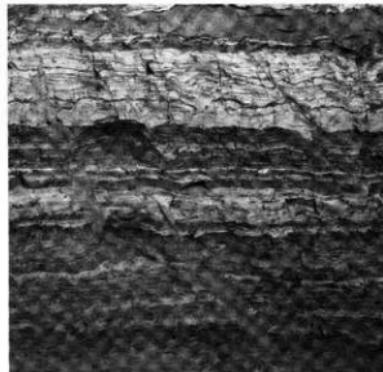
15 東極地点東側断面



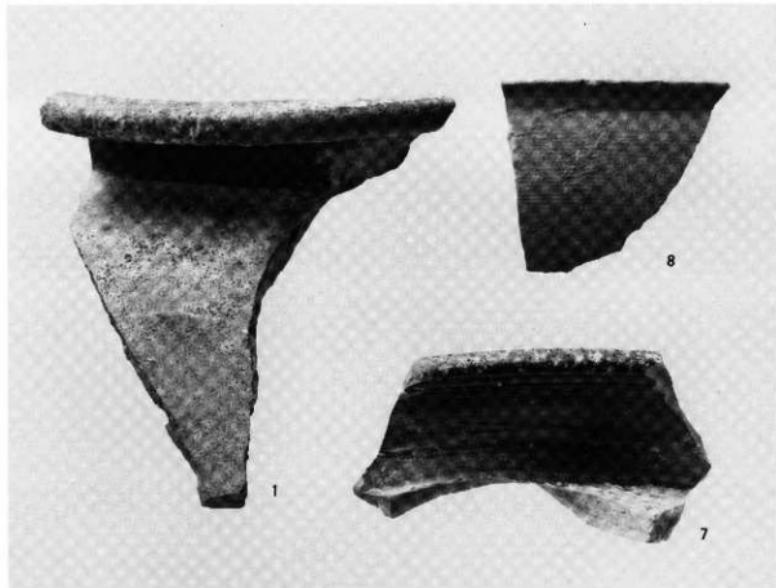
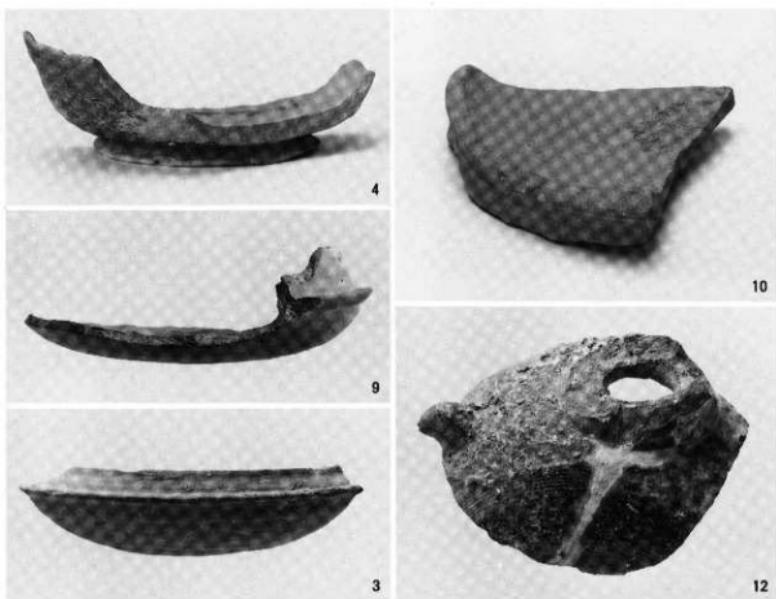
16 堤体の滑り痕（池内）

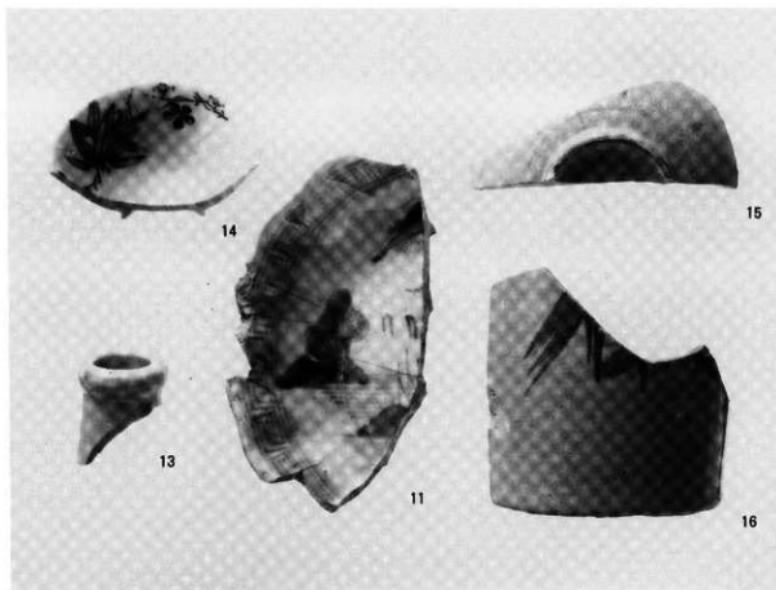
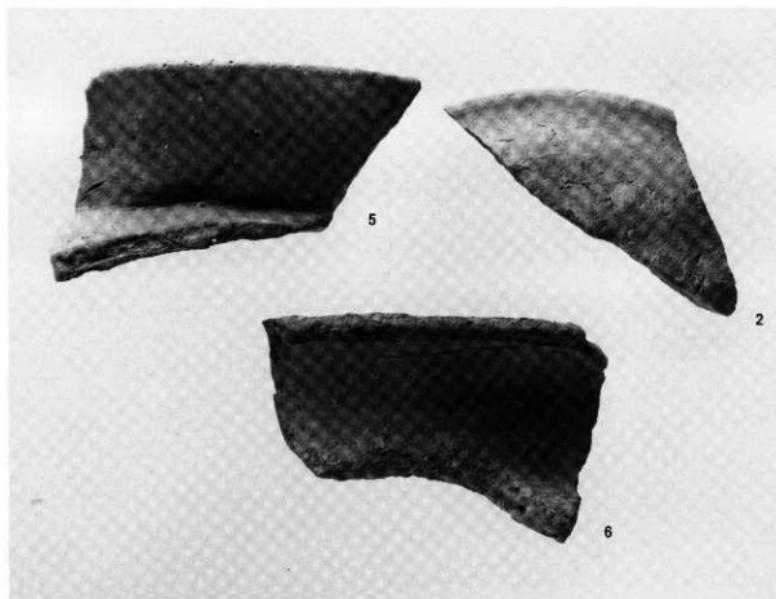


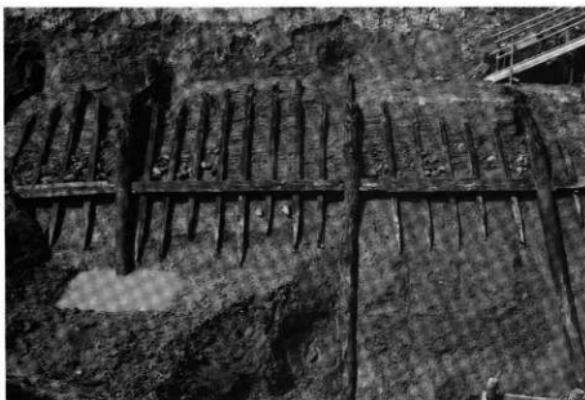
17 池内の砂層



18 堆植物の液状化の跡



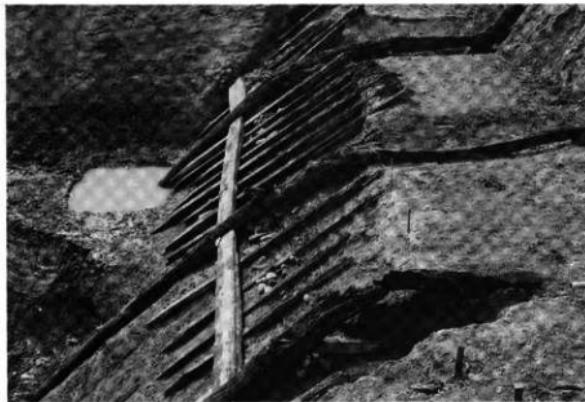




1 土中に埋め込まれた丸太材



2 杣材と竹



3 東側断面



4 後方丸太材と梁の接続（西から）



5 後方丸太材と梁の接続（東から）



6 前方丸太材と梁の接続



7 横板どうしの接続



8 横板切断部



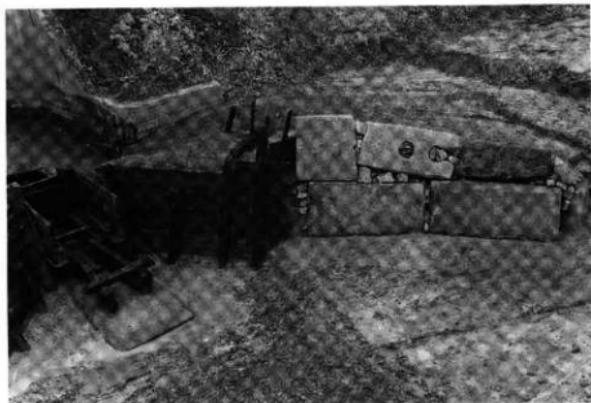
9 横板の鋸痕



1 中樋造構全景（上から）



2 中樋造構（西側）



3 中樋造構（東側）



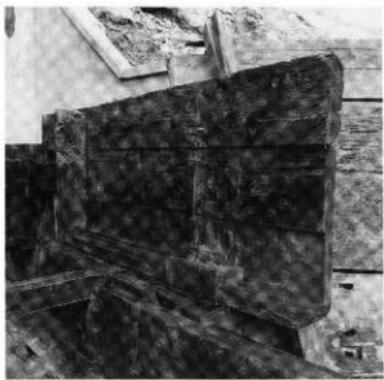
4 桁本体（上から）



5 桁本体（切断された柱）



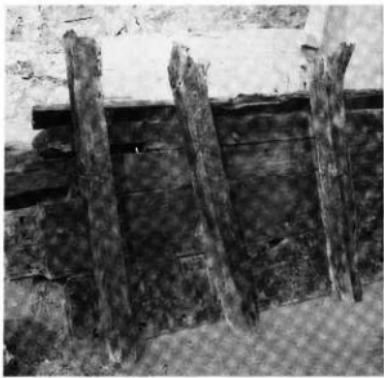
6 桁本体（側板間の梁）



7 桿本体西側壁板



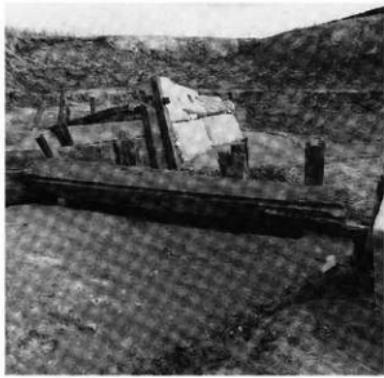
8 桿本体東側壁板



9 西側扁板



10 東側扁板



11 西側扁板（背後から）



12 東側扁板（背後から）



13 西側石組



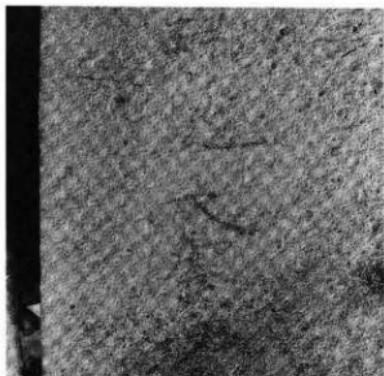
14 東側石組



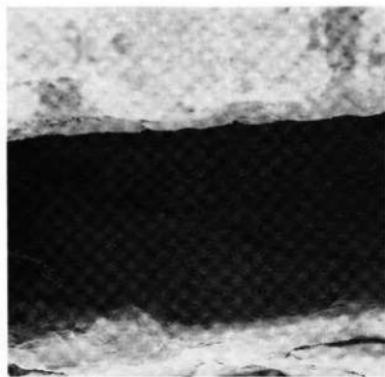
15 東側石組の裏込め石



16 西側石組の裏込め石



17 石棺に残された墨書



18 重源改修碑の状況



19 重源改修碑取り上げ作業



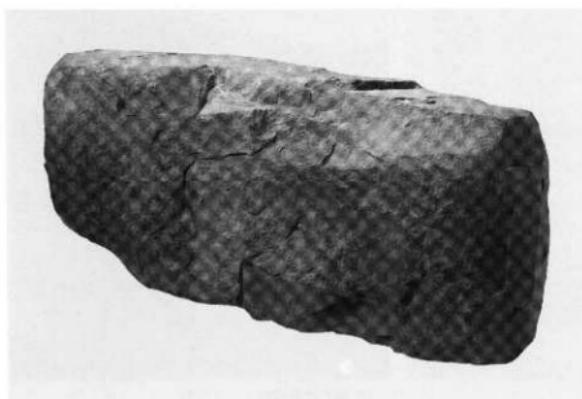
20 石棺取り上げ作業



21 石棺仮置き状況



1 碑 文



2 側 面



3 側 面



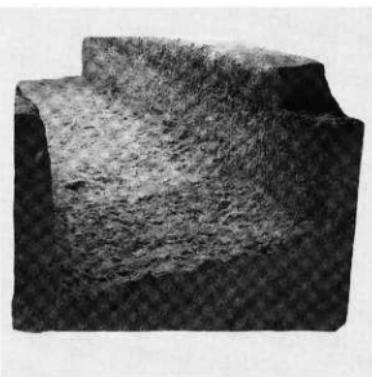
4 石棺 1 (上面)



5 石棺 1 (斜めから)



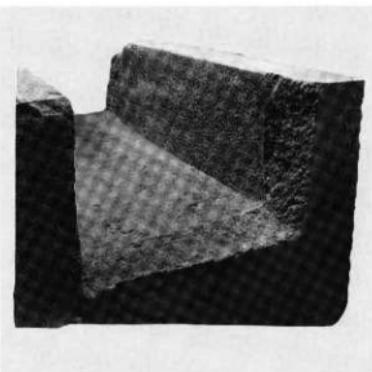
6 石棺 2 (斜めから)



7 石棺 2 (小口)



8 石棺 3 (斜めから)



9 石棺 3 (小口)



10 石棺 3 (主軸方向から)



11 石棺 3 (墨書き)



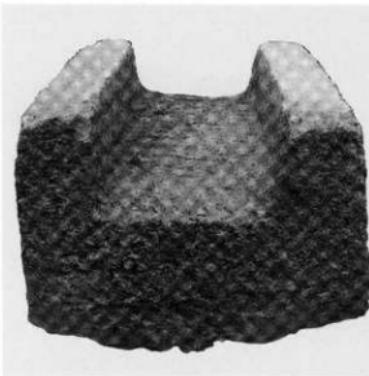
12 石棺 4 (斜めから)



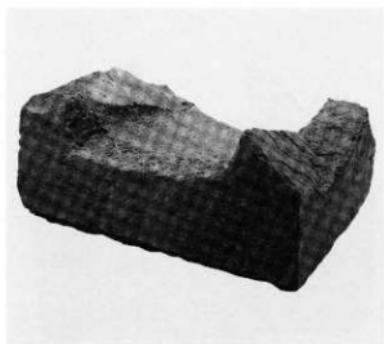
13 石棺 4 (主軸方向から)



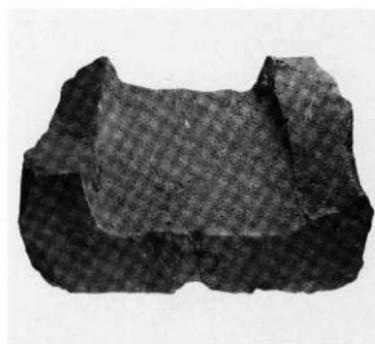
14 石棺 5 (斜めから)



15 石棺 5 (主軸方向から)



16 石棺 6 (斜めから)



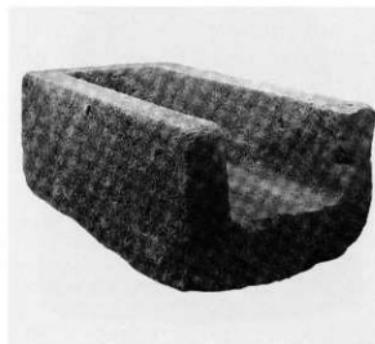
17 石棺 6 (主軸方向から)



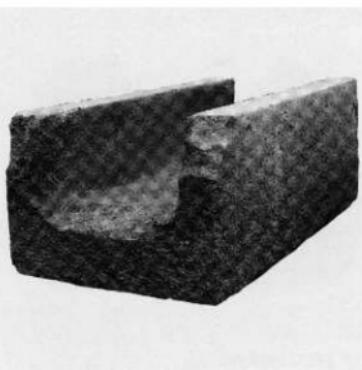
18 石棺 7 (主軸方向から)



19 石棺 7 (小口)



20 石棺 7 (斜めから)



21 石棺 8 (斜めから)



22 石棺 8 (主軸方向から)



23 石棺 9 (主軸方向から)



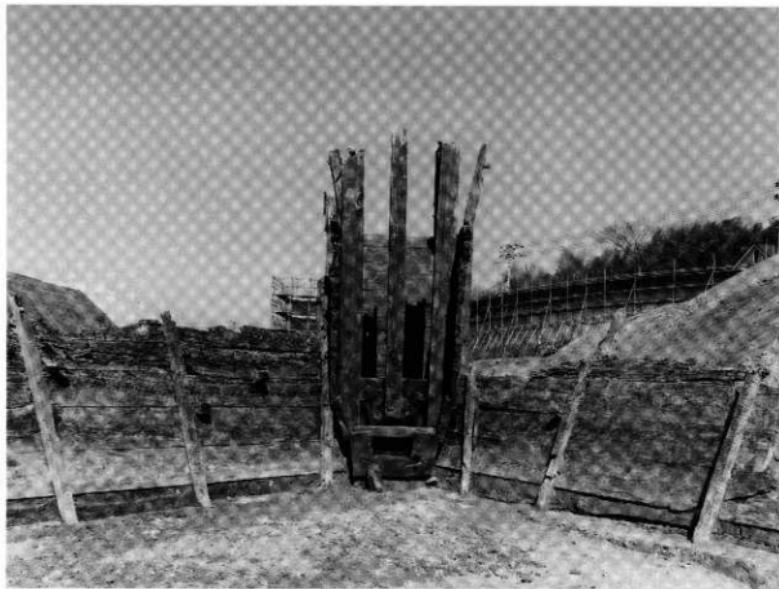
24 石棺 9 (斜めから)



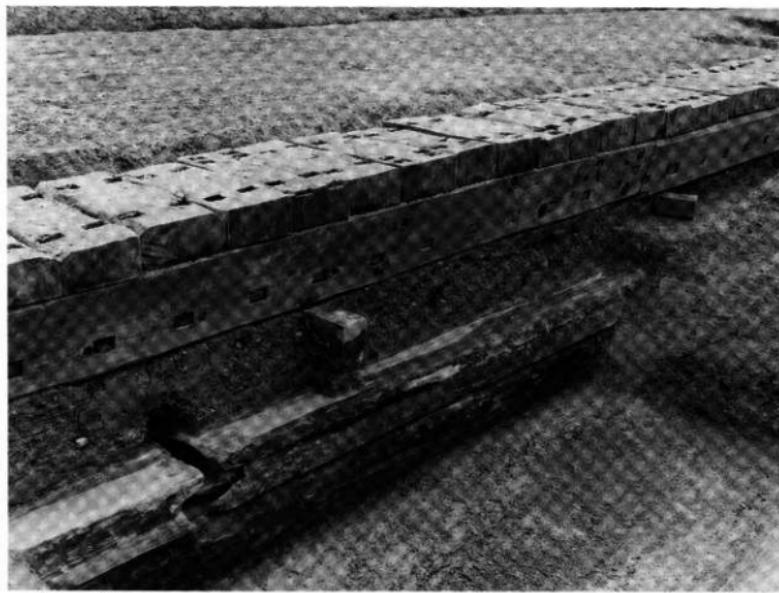
25 石棺 10 (主軸方向から)



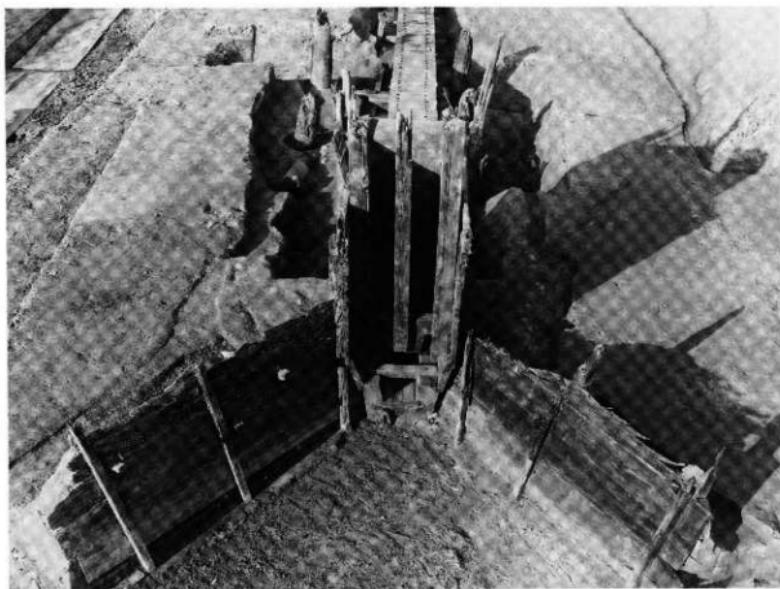
26 石棺 10 (斜めから)



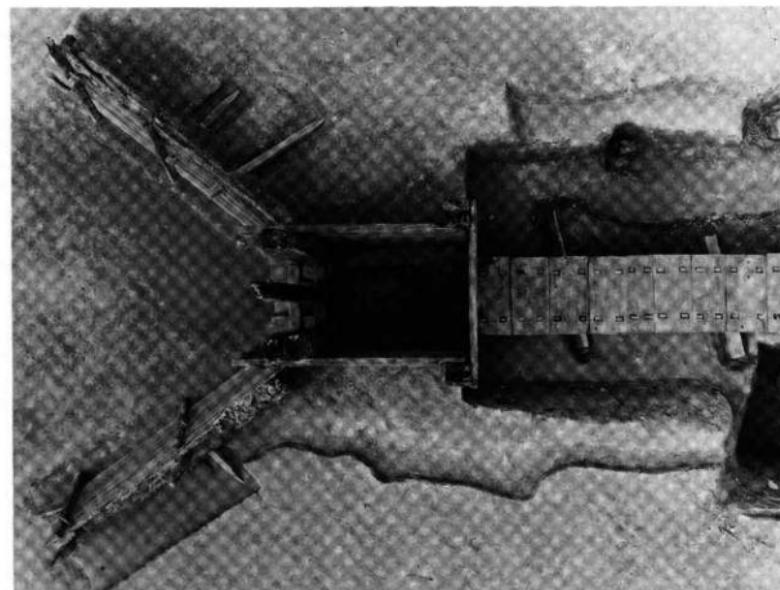
1 取水部正面



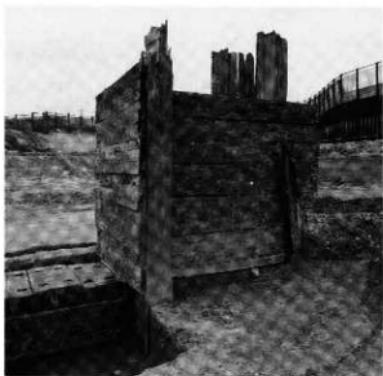
2 上層・下層の重なり



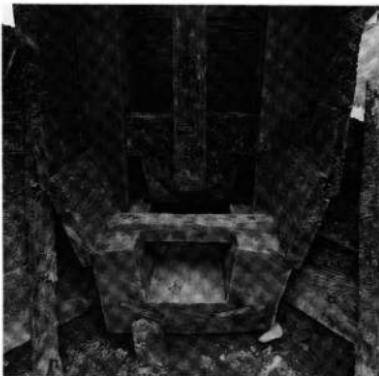
3 取水部（正面上方から）



4 取水部（上から）



5 取水部（西から）



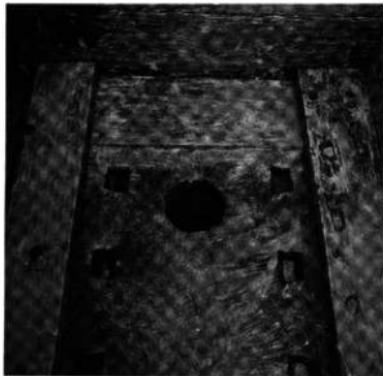
6 取水部樋蓋（前方から）



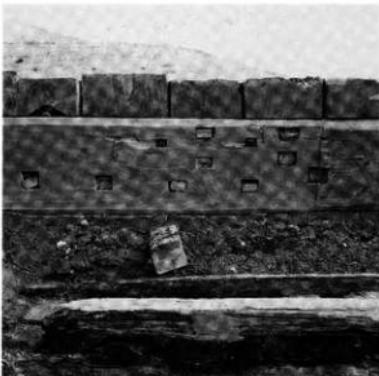
7 取水部（背後から）



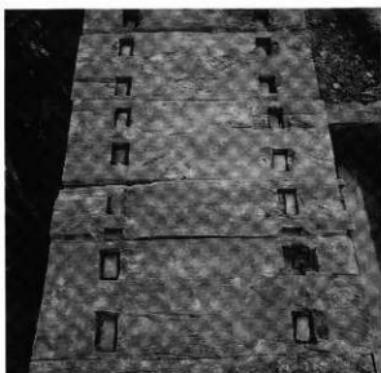
8 取水部樋蓋（背後から）



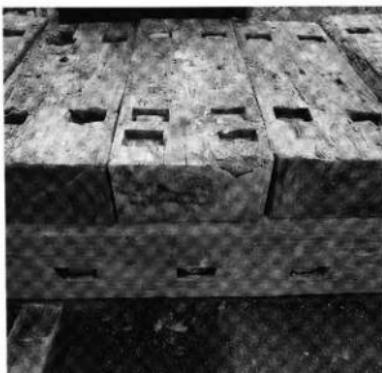
9 取水部樋穴（上から）



10 樋管接続部



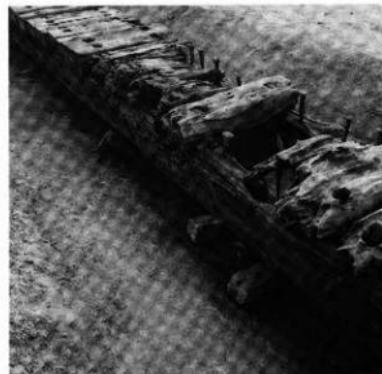
11 種管砂蓋



12 種管砂蓋の釘穴



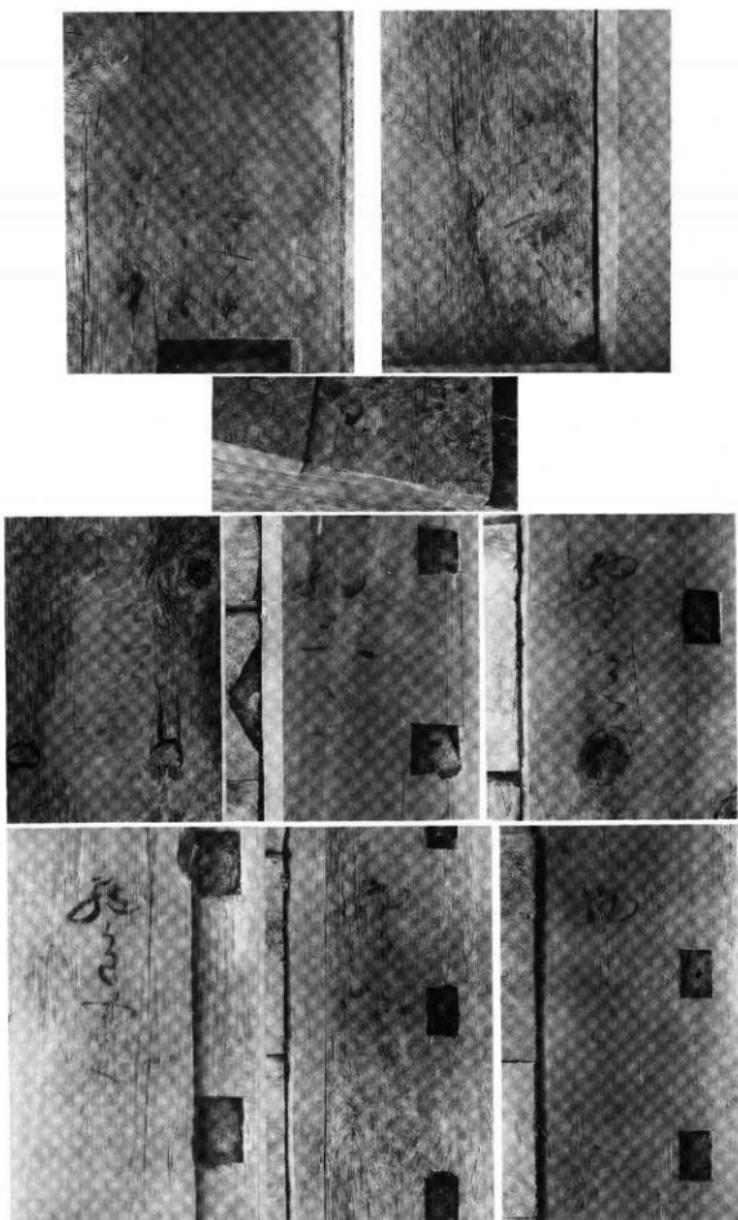
13 種管側板の墨書き

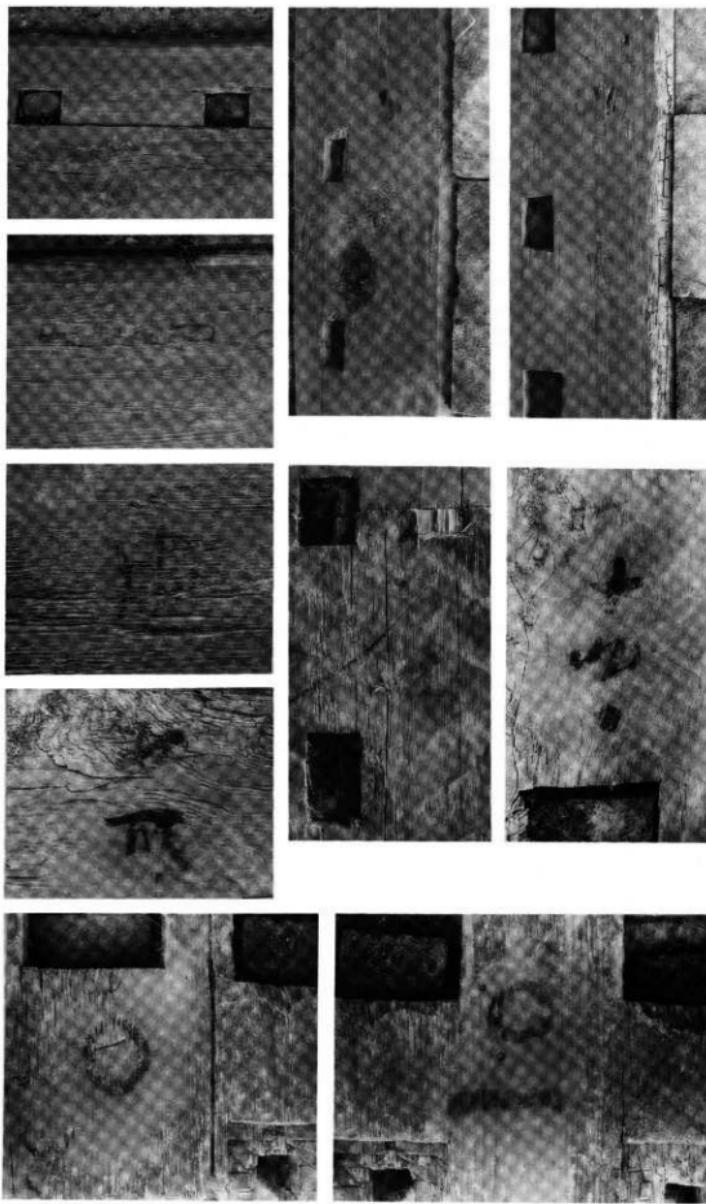


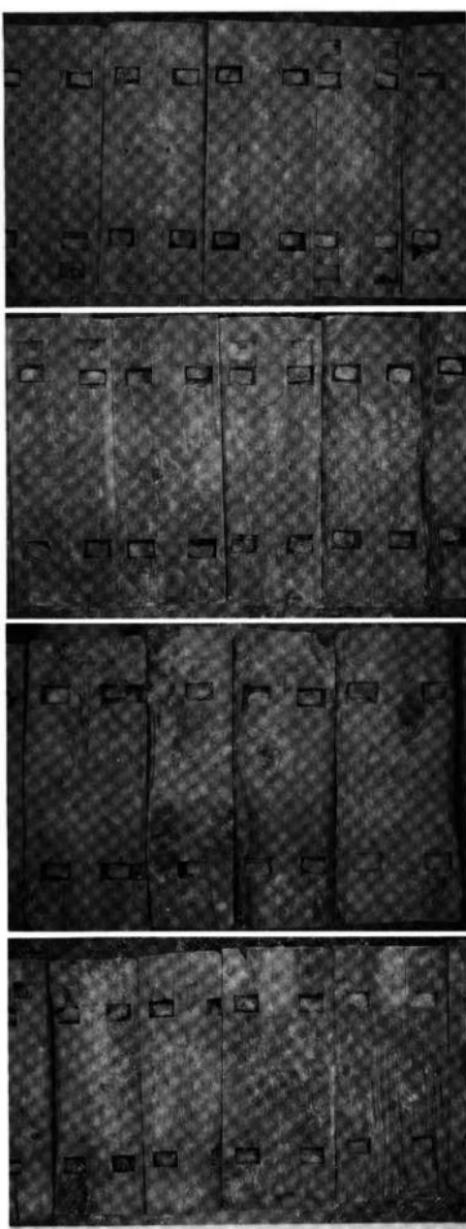
14 種管砂蓋の釘



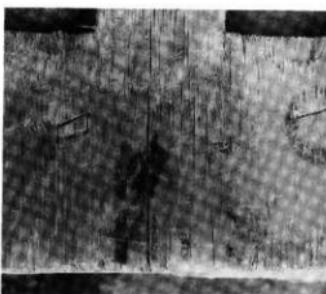
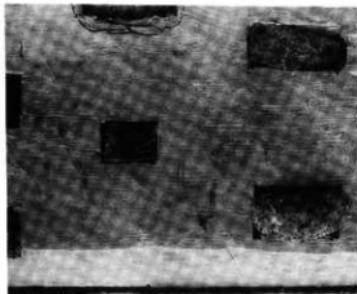
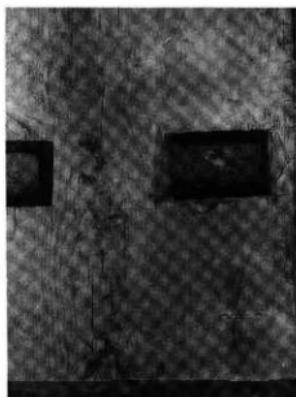
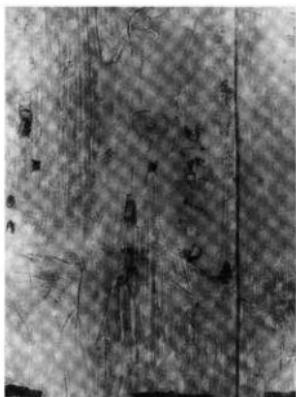
15 排水部（上から）







圖版 27  
東柄上層遺構墨書(4)



図版28 東縄上層遺構刻印(1)

